August 10th 1919.

明治…
大正八年七月三十一日印刷納本
大正八年八月一日發行(毎月一回一日發行)

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

8-1919

八月號

第三十四年第九號　第三百七十三號


染めたと見えぬ
自然の黒髪と全じ色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タツタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗で剝ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 大阪 東京 丹平商會
全國化粧品賣藥店にあり

片上伸氏著

草の芽

本書の收むるところ、自己生命の表現、生活の藝術化、超人の生活、デカダンの解剖、苦痛の歡び、欲望の幻像、自己改革者の心事、自己の補足、白日の恐怖、以下約四十篇、その文藝思想に關するものたると、人生の問題に關するものたるを問はず、いづれも著者が自由に直截に自己の感想を表現せるものにあらざるはなし。これ批評にして且つ或る意味に於いては情抒詩なりとす。若草が年々の春に芽を萠くが如く、著者の心境も亦隨處隨時に自己を拓き來れり。本書はその尊き生育の記錄のなりとす（著者）

現實の生活の絶え間なき流轉の裏にあつて、生活反省と文化批判とを限りなく產み出しゆく心刻々に更改しつゝ永遠に自己教養の路を步まむとする雄々しき態度を持してこの複雜多樣なる實人生の醍醐味に徹到せむと欲するものは來りて本書に就け

現實の生活の韻律、悠久止むことなき遍展を紡ぎ出す靈魂のいみじき妙えなる節奏を聽け。

菊半截版
約三百頁
定價壹圓三十錢
送料拾二錢

井上劍花坊氏著

川柳を作る人に

江戸文學に於いて顯はれたる、都會的生活の情の洗錬と感覺の鋭敏とが產める川柳の辛辣なる機智とユーモアとは吾等に殘されたる唯一の民衆的なる文藝遺產にして、かの絢爛たる德川三百年の文明の精粹たるなり。寸鐵の裏、能く文明批評を容れ、片言の間能く生活觀照を收め、時に政治を罵り、時に人生を刺す、また愛と改造との意欲ならざるはなし。

著者はこれ斯界の宿星にして大權威たるとは世既に知る。『川柳が狂句に墮落したのを古の精神に勉強して、これを藝術的に興起させる』の意を以て著者が多年の蘊蓄と用意とを以て世に頒ちたるものは即ち是れ。

菊半截版
約三百頁
定價壹圓
送料八錢

東京神樂坂通 牛込
（振替口座東京一九四番）
（電話番町九五七番）

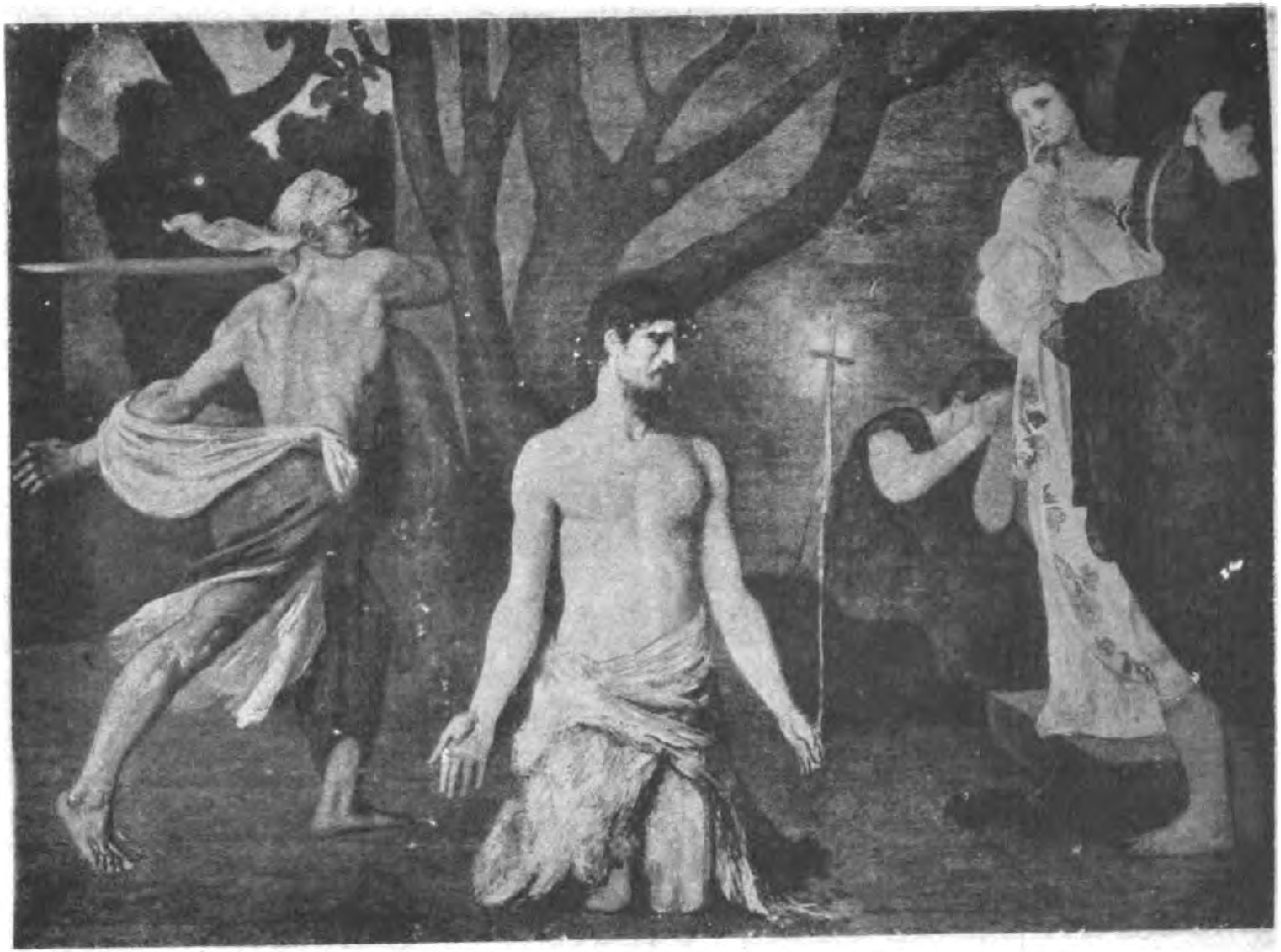
南北社



中央公論第卅四年八月號目次







BEHEADING OF S. JOHN THE BAPTIST.
PUVIS DE CHAVANNES

新興勢力に臨む官僚の態度を難ず

國家に「組織」の必要なることは謂ふまでもない。

然し、所謂「國力の組織」にも二た通りある。一は國内のあらゆる勢力を或る唯一最高の目的のために協戮せしむるの仕組で、他は或るきまつた型にあらゆる勢力を盲從せしめんとするの仕組である。天下の能才に十分の機會を與へ、自由なる發展の便宜を提供せんとするが近代政治の共通理想なるに、寶丹を飲んで腹痛みが癒つた事があるからとて、腹が痛いといふ人の顔さへ見れば寶丹を飲め〳〵と强ゆる底の親切なる政治家は、我が日本に於て今日仍ほ存外に多い。

最近朝鮮人の來京する者頗る多い。警察では密偵をつける。彼等は日本人の誰彼を訪問する。警察は此の日本人を怪しと見ては、爾後其人の行動をも監視する。其間に殆んど玉石を分たない。斯くしてあらゆる朝鮮人を敵とし、又之と交遊する多くの同胞を敵とするの結果を怪まない。

若し眞に朝鮮人を取締り朝鮮統治の平穩なる成功に資せんとならば、朝鮮人と交遊する日本人の智識を利用したら宜いではないか。本當の「組織」の天才ならば、更に一歩つき込んで朝鮮人をも自家の經綸の中に包容すべきである。所謂敵に糧に依るを精神的に行かなくては嘘だ。

之と同じ樣な事は、近頃の勞働運動の取締に就てもいへる。羹に懲りて膾を吹いたり、角を矯めんとして牛を殺したりするばかりが官僚の能でもあるまい。

今の官僚の高唱する所謂「組織」は、國内諸勢力の組織的活用ではない。頑迷なる頭で造つた極めて拙い設計に、活きた人間を無理强いに盲從せしめんとする事である。從つて彼等は忌憚なき批評を欲しない。動もすれば發賣禁止の威嚇を以て臨む所以である。更にまた批評の種を洩さゞらんが爲め、秘密を以て吏道第一の要務と爲す所以である。自分だけ偉いものと自惚れるのは官僚の通弊であるが、自分だけ偉いものとして置く必要上、彼等の施政が常に民を愚にするを厭はざるは是亦隠れもない事實である。

今や世界の波は大に動きつゝある。拙い乍らも僅に設計の能あるに止り而かも全く建築の實際的手腕を缺く官僚に、此上「新日本」の建興を托することが出來るか。政治は子供の遊戯ではない。近時社會の動揺に血迷ふたる官僚界に對し吾人は速に其淺薄なる迷想より覺めんことを求めるものである。

中央公論



第卅四年第九號
八月號
第三百七拾三號

社會改造の哲學と人格的潛力

中澤臨川

一

今日、焦眉の急を要するものとして社會改造の問題が我等にさし迫つてゐる。而して「いかに改造すべきか」、「どんな筋路によつて改造さるべきか」等の諸問題の前に、現在の社會は「なぜ改造を要するか」といふことが、先づ諒解されなければならない。

社會の諸制度、殊にその經濟組織が人間の性格を鑄冶する上に大きな力を有つてゐることは、何人も拒むことのできない事實である。殊に現代は「勞働」といふ巨人の自覺的擡頭によつて、彼の手に未來の新社會の鍵が握られてゐるの

で、改造の第一步は經濟問題の解決から起らねばならない。

現在の狀態にある社會がどの道改造を必要とすることは、近代人に養はれた正義の觀念から言つても、仁義的道念から言つても、殆んど爭ふべからざる眞理のやうに見える。然し今日の社會がどれほど暗黑であらうと、それがどれほど貧困、掠奪、罪惡の堪ゆべからざる巢であらうと、それは我等の久しく住み馴れた家であるからに、重く執念な因習が我等の心に怠惰な愛着を植え附けることにより、我等の新社會への門出はその第一步から鈍らされる。いふべからざる孤獨が我等の足を重くする。況して我等の前途には豫想のできない艱難と迫害がある。我等の道は遠い。されば、我等の良心が單純盲目な正義の感情に指導されるといふだけでは、今日の非常時に處する我等の覺悟としては甚だ物足りない。我等の運び出す足が一步々々どつしりと大地を踏み附けて行く爲めには、我等は先づ明確で合理的な信念を要する。それからその信念から湧き出すところの根强い希望と沈着な勇氣とを要する。我等は感ずると同時に知らねばならない。かやうな意味に於て、わたくしは古來の改造論を批評して見ようと思ふ。

二

「權力」または「主人」の壓迫に對する勞働者の反抗運動は、古代からの歷史が殆んど斷え間なく繰返した出來事である。それが「歷史家」の歷史の隅に小さく葬られてゐるからといつて、決して輕視すべきでない。かやうな運動は、直接には生活の切迫から起り、間接には正義の觀念から起つてゐる。然しこの運動がそれ自ら力と自覺とを得て、漸く顯著な相を帶びるやうになつたのは、十九世紀に入つてからである。産業革命の結果が、資本家と勞働者といふ二階級を相對立させ、一方には大規模の工場組織から來る當然の結果として多數勞働者の集團を促すやうになり、それが廿世紀に近づいてからは、デモクラシイの思想と相呼應して、所謂第四階級の眞の自覺期に這入り、「階級意識」は「階級責務」の思

想を喚び起し、引いては「階級鬪爭」の切迫を招來するやうになつたことは、誰も知るところである。

かやうな運動は、主として生活の必要から起つた。然らば、その「必要」の叫びには正當の道理があるか。今日の社會的不安は、それが滿足さるべきことを要求する充分の權利を有するか。生命の進化の法則はどういふ方向への改造を是認するだらうか。

生物の目的は生長である。生長はその生物獨自の天性の自由の發展を要求する。これが生命の根本法則である。この法則が人間社會の意識に上つたものが、正義及自由の觀念である。されば、正義及自由の理想は、我等の社會にとつては先天的（アプリオリ）の原則でありまた要求である。それが平等の法則と調和して滿足に實現される場合、我等の社會は善くそして正しい。宗教も哲學も科學も實業も乃至は凡らゆる欲望の充足も、第一には自己の「我」の生長を目的とする傍ら、第二には政治を補けて、お互の「我」の生長に便利な社會を造り出す爲めの道に對して献功する任務を有してゐる。

文化の初期に於ては宗教がとりわけこの任務を盡した。宗教の名に値するあらゆる宗教は皆な高尚な情緒の世界から自由、平等の理想を說くものにほかならぬ。一つの宗教は、人間の自由の絕對尊貴であることを說明し、之によつて人間の靈魂に新しい價値と理想とを吹き込むことに成功した場合、初めてその存立が認められる。されば、宗教の社會的使命は貧しき者、虐げられた者に對する慰籍者であり、鼓舞者であることであつた。

かやうな意味から言つて、基督敎の宣傳は歐洲に於ける無產階級（プロレタリア）解放運動の先驅をなした。最初の新約書は――ヘブライ語のそれを除いては――どれもみな其土地の方言で書かれ、新しい歸依者の一團は何處でも最下底の階級から起つたと言はれてゐる。で、基督敎の使命は、それが後世になつてから「慈善」といふ御都合主義の僞りに汚されるまでは、

社會主義的であつた。オーガスチンの言葉にかうある――「お前は飢えたる者にパンを與へる、然し何人も飢える者なくそしてお前が與へる物を持たぬ事の方が更によろしい。お前は裸かの者に衣を着せる、然し凡ての者が衣を持つことによつて、その必要は無くなる。恐らくお前は貧者に親切を盡す場合、彼がお前より賤しいことを望むだらう。彼は缺亡してゐる。お前は投げ與へる。そこでお前の眼には、與へる自分が與へられる彼よりも偉らく見えるわけだ。それよりも、お前と同格である彼を望むべきだ」と。

主として宗教的情緒から發動し、個々の人間の靈の尊貴と自由とを理想とする社會運動は、その根底の精神に於て社會主義的であり、そして最も古くから起つたものである。我等は之に宗教的又は倫理的社會主義と名けよう。プラトンやトーマス・モーア以後、幾人かの描いた「ユートピア」は、これ等の理想の表現である。然しかやうな運動が漸く顯著の形をとつたのは、近代の產業組織が成り立つてからである。それは佛蘭西革命に接踵して起り、そしてその革命の精神を受け繼いだもので、同時に慈愛、憐憫、犧牲等の倫理的情緒をその支柱としてゐる。で、かやうな新運動の開祖として、佛蘭西ではサン・シモンとフーリエが立ち、英國ではロバート・オーウエンが立つたことは人の知るところである。

近代の倫理的社會主義に具體的の內容を與へたものは、矢張產業組織の革命である。この革命の結果として、資本家といふ新しい專制者と勞働者といふ新しい奴隷とを對立促成さした結果、生活の經濟的要素が特に重く視られるやうになつた。或る經濟學者がこの現象に就て次のやうに述べてゐる。

我等に對する十八世紀の使命はかうであつた。曰く「お前はお前を壓迫する貴族と專制者との奴隷であることを免れねばならぬ、お前は自由でそして貴尊である」と。然るに現代の問題はかうである、「いかにも自由でそして貴尊であることは偉きな事に違ひない、然し貴尊なこの俺が屢々餓死に瀕するのはどうしたわけだ、力の源だといは

れてゐる者達が、辛い勞働にも拘らず、屢々生活の必需品に不足するのはどうしたわけだ」と。

かやうな理由からしてサン・シモン等の社會主義が起つた。然し近代の社會不安の原因が生活に最も直接な物質的切迫を意味してゐる限り、之等の倫理的社會主義の基調をなしてゐる情緒本位の正義、自由の觀念だけでは、最早人を滿足さすことが出來なくなつた。彼等の理想は餘りに樂天的で、餘りに人道的で、そして餘りに遁世的であつた。疑ひ深い幻滅の「貴尊」は、もつと刻實で、悲壯で、具體的で、そして復讐的の社會哲學を要求するのであつた。かやうな時に當つて、一方にマルクスやエンゲルスの科學的社會主義が現はれたといふことは少しもあやしむに足らない。

實際、倫理的社會主義の缺點は、その餘りに理想に即する結果、切迫した今の社會の實狀とは餘りに緣遠く、微溫的でそして空疎なユートピアに墮する嫌ひのあることとである。かうした缺點をマルクス一派が何れだけ痛烈にそして誇大に攻擊してゐるかをみよう。「正義、人道、自由などの叫びは幾千回叫ばれたかわからない、然しそれは不可能の事だによつて、決して實現される筈がなく、唯の夢として殘るほかはない」(マルクス)。正義の法則は、昔から幾多のドン・キホーテが試みて、終に乘り切ることのできなかつた山である。事實人類は一千八百年間この訴へを聞いてゐるが、その效果はどうであるか。近代に這入つてからは、英國及佛蘭西に於ける中流階級の革命に際しても、この叫びが一度昂つたきり無效果に消えたではないか。「道德及正義の訴へは我等を科學的に一歩も進めない。經濟學は道德的義憤によつては證明を見出しえない。……詩人の牽起する感情は、それが社會的罪惡を描いたものにしても、或はそれを攻擊したものにしても、乃至はその罪惡の存在を拒みそして時の支配階級の利益の爲めに調和を祝福したものにしても、何れも至極尤もなものであるが、然しそれが實證を供給するといふことに些の效果のないのは、どの時代もかやうな仕事を有り餘るほど有してゐたといふことで知れる」(エンゲルス)。況んや正義の觀念なるものは、斷えず變化する幻影であつて、

我等の社會的正義は羅馬のそれとは全く違つてゐ、封建時代のそれとも違ひ、我等の祖父の懐いたそれとさへ違つてゐるのである。それのみならず一面には、正義の觀念の母であるといふ「基督教は自由と文明の敵であり、人類を奴隷と壓制とで縛つたのはこの教である。寺院と政府とは常に親密に協力して人民を掠奪した。かるが故に基督教と社會主義とは火と水である」ベーベル）。

かやうに極端な攻撃の當をえてゐないことは說明するまでもないが、然し久しい因習に囚はれ長い間權力に馴れた基督教や、中流階級のモツトウとして來た生柔しい十八世紀流の正義の觀念が、何れだけ近代の社會に無能であるかといふことは、マルクス一派のかうした反抗から充分窺ふことができる。從てまたマルクスを始祖とする社會主義がどういふ動機から起り、どういふ氣質（テンペラメント）のものであり、どんな方向に走り過ぎたかといふことも想像するに難くない。

然し倫理的社會主義の一時的無力と、之に對する烈しい反抗とにも拘らず、我等の正義、自由の觀念は儼然として存在する。なぜならそれは生命の生長が要求する根本の理想であり、斷えず我等の意識の奥から我等を覺醒する本然の聲であるから。で、最近には科學的社會主義に對する不滿の聲と同時に、倫理的社會主義が復た復興の氣運に向つてゐる。あの博大の心を有してゐたジョーレスの社會主義は、この系統に屬してゐた。

三

科學的社會主義の發見者はカール・マルクスであり、その聖書は『資本論』と『共產黨宣言』とである。彼の學說の根底をなす二大思想が餘剩價値論と唯物的史觀とであることは、何人（たれ）も首肯する解釋であらう。わたくしは不幸にして經濟學の素人（しろうと）であるので、彼の餘剩價値論が學說として果してどれだけの價値を有するものだかを判斷することができないが、一二三のマルクス批評家の著書から承知するところによれば、それは純學說としては今日成立が出來ないといふことで

ある。唯だ私はかういふことを思ふ。彼の餘剰價値論は學說としての嚴正批判には堪えないにしても、それが前人未知の大膽な發見であり、且つ勞働掠奪が少くとも現社會の動かすべからざる事實である以上、この說が一般社會主義に深い影響を與へる力を有してゐることは、既に倒壞に瀕してゐる彼の唯物的史觀の比でないと。

然し、シムコーヴッチの指摘した通り、マルクスの社會主義はその餘剰價値論とは殆んど關係なく、全く彼の唯物史觀の上に立てられてゐる。その主張の全部は『共產黨宣言』に盡されてゐるが、然もこの書の內容は彼の價値論とは何等の交渉をも有してゐない。それほど彼の二大根本思想は相離れたものである。

マルクスの哲學はヘーゲルの辨證法と當時流行の實證主義とを組合せた畸形兒である。荒削りでそして瑕だらけである。彼の社會觀は目的論的でなくて、機械的宿命說である。況んや彼は徹底した唯物論者である。「私の見るところによれば、觀念とは人間の腦に於て變形された物質にほかならぬ」と。かやうな哲學からして彼の唯物史觀又は經濟史觀が生れる。エンゲルスの說明によれば、マルクスの思想の中核は次の如き命題に盡すことができる。曰く、「一の歷史的時代に行はれる經濟的生產及交換の方法と、それから必然に來る社會組織とは、その時代の依て立つ基礎を形造る。而して、唯だこれ等の事實からのみその時代の政治的及精神的出來事を說明することができる」と。

で、マルクスに由れば、歷史とは經濟的進化又は革命の連鎖である。社會にはいつも二つの相對立する階級があつてその間に「階級鬪爭」が行はれる。希臘の公民と奴隷、羅馬の貴族と平民、中世紀の親方職工と被傭職工といふ風に、一方には壓制者があり、一方には被壓制者が在ることにより、兩者の斷えざる鬪爭の結果、終には經濟組織の革命を招致して新しい社會が築き上げられる。近世の中流階級を主とする社會は、かくして封建制度の破壞の上に建てられた。然らば次に來るものは、現代の中流階級即ち資本家と無產階級即ち勞働者との階級鬪爭の結果が齎す革命を措いて何であ

らう。新世界の發見と移民、西印度との交易、其ほか生産及交換方法の一般進歩は、商工界に曾てなかつた新面目を加へたので、當時の狭い組織では之を包容しきれなくなつて自滅したのが即ち封建制度である。今、現代の資本的社會を見るに、資本家と勞働者との相互の距離及利益は益々遠ざかる傾向を促進してゐる。大産業組織の結果は四方に散在してゐる人口を集中させる一方には、勞働者の生活を益々絶望的境遇に誘致し、更に一方には小資本家を倒して無産階級へ追ひ込むので、勞働者はその數に於て增加し、その團結に於て便宜をえ、更にその反抗的階級意識を强制される顯象を呈しつゝある。また資本家の側を見るに生産過剰から來る競爭の結果、益々商業が不安になり、倒産が相次ぎて起るであらう。かやうに複雑した因果關係から、現代の經濟組織がそれ自ら不安に堪えずして、倒壊に急ぎつゝあることを知ることができる。而して新しく來るべき社會が生産方法の公有の上に建てられるであらうといふことも亦必然の理である。されば新社會の出現は、無産階級にとつては凡てが利益であつて、彼等はその桎梏のほかには失ふべき何物ももたぬ。彼等はユートピアにふける必要がない。また未來の社會の細々しい組織に就ても考へて置く必要がない。時來れば、生産の新しい方法は、それ自らが必然に分配の新しい方法を決めてくれるだらう。要するに彼等の勝利は豫定の運命である。たゞ彼等の心得えて置くべきことは、早晩來るべき大變革即ち避くべからざる階級鬪爭を意識的に受け入れるといふことである。

機械的宿命説を根蔕とした上述の經濟史觀が果して成立つものだらうか。マルクスの謂ふところの「大變革」(Kladderadatsch) は期して俟つべきだらうか。わたくしは之等の詳細に亘つて批評することを避けねばならぬが、要するにマルクスの措いた幾つもの假定即ち工業生産の集中、小規模商工業の滅亡、より小數なる資本家の手に富の集積する傾向、中産階級の落級と第四階級の增加、勞働者の貧困及墮落の促進、階級鬪爭の頻出、生産過剰による商業危機等は、

殆んどその全部が事實の推移と相違してゐることは、忠實なる科學的社會主義者でさへ今日に承認してゐる事實である。要するに人間社會の進化がかやうに單純な機械的因果律を以て片付けることのできないのは分り切つた話である。マルクスはその唯物的史觀に於て科學的ユートピアを描いた。然もそのユートピアは彼の笑つた倫理的社會主義者のユートピア以上にお目出度いものであつた。で、彼を始祖とする科學的社會主義は、ベーベルの死後殆んど行き詰つた形であつて、何等かの改訂を要求してゐるのである。修正派、機會派、サンヂカリズム、「カントに歸れ」の運動は、かやうなところから生れた。

學說としての彼の唯物的史觀が倒れたときに、マルクスに何が殘るか。それは彼の破産を意味するかといふに、さうでない。彼の力強いところは寧ろその否定的、反抗的の態度にある。わたくしは自分の想像にありありと狂熱的先驅者としての彼の面影を描くことが出來る。舊時代の唯心論的煩累、その女々しい人道呼ばりに飽き足らずして立つた彼にとつては、當時流行の科學的實證主義はこの上ない武器であつた。彼は宗教を呪ひ、正義を笑ひ、夢想家とユートピアの作者とを嘲り、飽くまでも冷酷で、不遠慮で、科學的で、幻滅的で、そして破壞的であつた。彼は fantastic positivist であると同時に、虛無主義者（ニヒリスト）であり、偶像破壞者（アイコノクラスト）であつた。彼はまさしく獨逸の「バザロフ」であつた。そして所謂「モダーニスト」のよい典型であつた。彼はどれだけ冷靜な科學の假面の下に隱れてゐても、その峻嚴冷酷にして一毫の假借もない唯物史觀の全體から發する悲痛の空氣や、「大變革」といひ「掠奪」といひ「階級的鬪爭」といふやうな劇しい言葉の齎す意味やは、たゞそれだけで強い刺擊を人に與へずには措かない。それから學說としての不備はあるにしても、「凡ての價値は勞働の造るところで、資本家の富は支拂はれざる勞働即ち掠奪から得た餘剩價値の蓄積である」といふ彼の經濟說は、最も露骨にそして科學的に社會的不正義の事實を言ひ現はした點に於て、近代社會主義に力強い衝動を與へ

たものである。

四

マルクスの唯物的史觀が哲學として至て粗末のものであることは前述べたとほりであるが、之を實践の方面から見るに、その機械的世界觀に於ては凡てが生産の方式から制約されるので、人間の意志はこの間に立つて全然無力である。我等は手を拱いて資本主義の瓦壊と共産社會の出現とを俟てばよいのである。人類は理想に從て目的論的に努力する必要もなければ、その餘地もない。そこは無爲の天地であり、そして怠け者にふさはしい世界である。人類はその饑さを忍んで頭上の菓實の熟して落ちるのを待つ物臭太郎に過ぎない。

然しかやうな推移が實際の狀態であらうか。またそれが我等の堪えうる世界であらうか。人間の意志の活動は社會的に全然無效果のものであらうか。多數の無産階級は未來の革命を樂みに、冷酷な唯物史の法則に從て自分達のより墮落するのを見なければならないのだらうか。社會の事實と人間の意識とは之に對して「否」と答へる。我等の社會の改造は實際上かやうな樂天的無爲を以ては成就されるものでないと同時に、我等の意識はもつと之に對して自覺的に努力せねばならぬことを敎える。換言すれば、人間社會は目的論的であつて、それには倫理的要素が重要の位地を占むべきものである。かやうな意味からして在來の社會主義に倫理的理想を注入して之を改造しようといふ企てが諸方から起つた。然し新たに勃興した倫理的社會主義は、昔のそれの如くユートピア的でなくて、哲學的威容を裝つたものであつた。その唯心論的なものは新カント派の社會主義で、ベルグソンの生命哲學に借家したものはサンヂカリズムである。

カント哲學の根本觀念は「理性」の自律といふことである。彼はこの世界を唯心的のものとなし、我等の純粹理性が自

然界を立法し、實踐理性が道德界を立法すると見做してゐる。即ち我等の實踐理性は「しかあらねばならぬ」行爲の法則を我等に命令する。その命令又は法則は好惡、利害などの執意を含まざる普遍的妥當性のものであつて、同時に必ず服從されなければならない必然性のものである。それは「斷言的命令」である。然るにかやうな命令を發するものは我等の外にあるのでなくて、我等の「人格」が意志して自律するのであるから、人格の價値はそれ自らにある。人格は「道具でなく」、「手段でなく」、「物でなく」、絕對の品位である。人間はかやうな人格の所有者として初めて神聖である、そして自由である。こゝに於てかカントの斷言的命令は次のやうに要約される。曰く、汝自身の人格並びに凡ての他人の人格に於て其の品位と自由とを尊重せよ、人格をば常に目的として用ゐ、決して方便として用ゐるなと。

カントの人格至上說及びその絕對自由說を社會的に應用するとかういふことになる。即ち、自分の人格が尊く自由であると同時に、他人の人格も亦尊く自由である。どんなに貧しい勞働者であつても、「人格」の所有者たることに於ては王侯と差別がない。人間は手段の爲めに用ゆべきものでなく、勞働は貨物ではない。されば社會の最後の目的は、各人の自由と一致する正當にして完全なる市民的組織に到達するといふことである。更にカントの世界觀は倫理的又は目的觀的であつて、我等の庶幾する理想的共同生活は我等の努力によつて必ず實現さるべきものである。

かやうな意味にカントを解することによつて、彼を「社會主義の眞の創設者」と見做し、社會主義を唯物論の自然的牢獄より救ひ出し、之に一定普遍の最高理想を吹き込まうとしたのは、新カント派の哲學者と並びに「カントに歸れ」を叫ぶ修正マルクス派の一團とである。私は今玆に此派の詳しい紹介をする暇をもたない。たゞ僅かに前英國勞働黨首領マグドナルドの言葉を引用するに止めて置く。

社會主義の目的は自由である。その自由とは、各人は彼自らが目的であつて、決して他人の目的の爲めの手段で

はないとカントが宣言した意味での自由である。手段と目的とは不可離である。社會主義は社會の機關の改造を提唱するが、然しそれは人間の自由を擴張する手段としてのみ正しい。社會的組織は個人の自由の條件であつて、その妨害であつてはならない。

思ふに、カントの人格至上說は哲學としては貴重な產物である。然し理性はそれが唯だの法則化した場合には、餘りに冷靜で、消極的で、我等の行爲の直接指導者としては殆んど無力である。されば講壇哲學の調味によつて、現代の社會主義が何れだけの力をうるかは疑問である。況してワイニンゲルの言つた通り、カントの道德は幻滅的思想家の逃れ家にのみ適當した孤獨の道德である。それは欲望や必要から遠く距たつてゐて、遙かに社會的道德を超越する。かやうな世界に住んでゐたケーニツヒベルヒの哲人は決して喧擾を欲しなんだであらう。

それから、カント道德の理想は萬人に普遍の絕對鄕であるが、それがどれだけ尊いにしても、かやうな均一が我等に好ましい自由であるかどうかは疑はしい。

サンチカリズムは實際運動であるが、私がこゝに擧げようとするのはその運動に刺戟されて起つたソレルの社會哲學に就てである。

サンチカリズムの發明者は、不思議にも、巴里の陋巷に貧しい生活をしてゐた肺病やみの一書記パルチエであつた。彼は「世界的同盟罷業」が第四階級を救ふ唯一の有效な武器であるといふ思想に思ひ當つた。それが十九世紀末に至つて行き詰つてゐた社會主義に、意外なほど熾烈な火を與へて、瞬く間に四方に擴がつたのである。ソレルはパルチエの親友として彼の思想を受け繼いだ。そしてその運動に一つの哲學を與へた。

ソレルの哲學はその當時起つた生命主義または行爲主義に系統を導いてゐる。ゲーテの「始めに行爲あり」といふ言葉は、彼の哲學を說明し盡してゐる。彼の敵は安價な政治的デモクラシイと、力弱い人道主義と、それから樂天的のマルクス主義とであつた。進化とな？　それは百科全書派（エンサイクロペヂスト）の貧弱な發明ではないか。然るに科學的社會主義者の總て立つ根本思想はそこにあるのではないか。彼等は進化の理法に一任して無爲に未來の理想郷を待ちつゝある。然も彼等の描く理想郷なるものは、なるべく少なき勞働からなるべく多き快樂をえ、そしてなるべきだけ責任を逃れようといふ事ではないか。「已めよ、汝の下賤な樂天を！」、かうソレルが言ふ。

彼の氣質はおほ根から倫理的であつた。彼は神秘、直觀、行爲を重んじて、極端に理性を卑んだ。彼の考によれば、近代の政治や社會主義の無能、墮落は知識――殊に物質的知識――を過重に見積るところから起つた。彼等の安價な樂天もそこから來てゐる。彼等の文明とは快樂の增進を意味してゐる。然るにソレルにとつては、文明は英雄的（ヒロイズム）行爲の發現にほかならない。

今日の科學的又は物質的墮落から社會を救ひ出す爲めには、第一にその毒の中心たる中流階級を覆すことが必要である。それには今の手温るい國家社會主義に信頼することは無益である。それは第四階級の自發的同盟罷業を俟つて、初めて成就さるべきものだ。然るに、ソレルによれば、同盟罷業は單なる手段でなくして、手段と同時に目的――寧ろそれ自らが目的である。今迄の社會主義は餘りに理知に馳せ過ぎた。然し現代の平凡な社會を覺醒するには理知は無力である。我等は新しい靈的情熱即ち「崇高なる狂信（サブライム・ファナチシズム）」を要する。而してかやうな情熱を今の社會に與へるものは第四階級の大同盟罷業である。「手」は「智」を取押へねばならぬ。で、かやうな行爲は「意識の中に整然としてゐる凡らゆる細目の一つ〳〵に生きた强い色を與へる。之によつて我等は前では完全に言ひ現はしがたい社會主義の直接映象をうる。[illegible]

もそれを凡て直ちに一瞬間の知覺に於てうる」。されば、「社會主義が今の世界に救生を與へるところの高い道德的價値を有する所以は偏にバイオレンスによるのである」。（讀者は之等の言葉の中にベルグソンを想起するであらう）。

ソレルの「同盟罷業」はそれ自らが目的である。それは「崇高をはぐくむところの戰」であり、「今の死にかゝつた世界に一の目標、一の目的、一の理想を與へる唯一の」行爲である。彼は其事の是非に闘するくだくだしい理屈をば恐れない。またかやうな行爲が齎す結果に就て顧慮しようともしない。その行爲それ自らが自足である。同盟罷業は社會主義に關する「ベルグソン哲學の完全な知識」である。

ソレルの哲學は一個の狂信である。それはサンヂカリズムの實際運動とは左程關係がない。かるが故に實際家も、科學派も唯心派も彼を笑ふであらう。然し彼の「神秘」の中に有望な芽のあることを見落してはならない。

五

社會主義は衆團的の運動であるから、從てその成員各自の個性に就て兎角輕く視る傾向に陷り易い。人間の意志を無視し一切を機械的作用に歸するマルクス主義に於てはそれは勿論のことであるが、サンヂカリズムでさへが階級の爲めには個人を度外視する。たまく新カント派社會主義が人格至上說を稱へるを見ても、かやうな個々の「絕對」が相犯さずにどうして集團的に制約されるかといふことに就て、充分の說明が得がたい。然るに近代に於て社會主義と相並んで、デモクラシイの思想が起つてゐる。デモクラシイは各個人の人格及び權利の高唱である。此に於て社會主義とデモクラシイとは相背反した傾向に歩みつゝあるといつてよい。そこで社會的民主々義とか法的社會主義とかいふものが起つて個人を主とした改造論を樹立しようとする。これ等の主義に於ては各個人の權利がその主題である。曰く生きとし生けろ人間には先天的に「人間生存權」がある。言ひ換へれば「生存權」である。少くとも我等は「最少限度の生存」の資料を要求す

る權利があると。また曰く我等には「勞働權」がある。而して勞働の全收入は當然その人の收得すべきものであると。

然らば我等の物質的權利はいかなる理由によつて要求されるか。個人と社會との利益的矛盾はどう解釋さるべきか。これ等の問題は卑近の事のやうであつて、その實徹底を缺いてゐる。わたくしの見るところでは、クロポトキンの「相互補助說」及び「萬人共有論」は之に對する一つの妥當な論證である。

彼は生物界に於ける進化の法則を探究し、生存競爭の顯象と相並んで、相互補助の顯象が重要な因子をなしてゐることを發見した。この說はまた彼の社會觀の基調をなしてゐる。彼によれば、今日の文明社會を建設したものは幾千年に渡る幾百萬の人間の共同努力である。或者は森を切り開いた、或者は沼を干した、又或者は陸に海に道を造つた。我等が今日歐洲で耕すところの肥えた土は幾つかの民族の汗によつて濕らされたものだ。その一坪々々が幾百人かの辛い勞働の歷史を物語らないものはない。一哩の軌條、一ヤードの隧道でもが人間の流した血の分け前を受けずに出來上つたであらうか。更に一つの都市を看よ。その文明、その産業、其特色が今日までどれだけ多人數の協働によつて、徐ろに發達したかを想へ。

思想といひ知識といふも亦さうである。今日我等が誇とする一つの機械でもが、有名無名の幾多の學者、發明家の協力に俟たないものがあらうか。記者、學者、詩人の幾千人かによつて、智識が增され、誤が正されて現代の文化に達したのであるが、それ等の人たちは更に周圍の勞働者や婦人によつて、物質的にも精神的にも助けられた。

サグイン、マイヤー、グローブ等の學者が今日の産業を發達させるに與つて力あつたことは、到底資本家などの及びもつかないところである。然しこれ等の科學の天才だとて、前代の工業及科學が生んだ子であるといふほかはない。例へば熱學の原理が發見されるまでには、幾千の蒸汽機が造られ、そして試驗されねばならなんだ。然もそれが一たん發

見されると、茲にエネルギイの法則が確定されて、熱は光となり、電氣となつた。今日現存する一つの機械でも方法でもみな同じやうに長い協働の歴史を有してゐる。そしてその歴史の多くは眠られぬ長夜の努力、貧困の苦み、嘲笑、囚死などから成り立つてゐるのである。つまり社會はその中に生活したあらゆる人々の持ち出した little nothings の集積から出來たものである。

この社會は持合である。どんな産業でもが絶對獨立を主張しうる理由を有たない。例へば紡織業は他の工業の並存に俟ち、汽車に俟ち、海運業に俟ち、農業に俟ち、勞働者の熟練に俟つのみならず、印度や亞米利加を開拓した無名の人たちの努力に俟ち、間接にはスエズ運河でコレラを病つて死んだ伊太利人にもより少なからず負つてゐる。から考へると、何人がどんな權利によつて、世の中の一微物たりとも、之は自分の所有だ、之はお前の物ではないといふことが出來るか。物價の昂騰は人口増加の力である。鑛山の値打は産業發達の賜である。鐵道は商工業の殷盛のお蔭で無用な古鐵とならずに濟む。今、この鐵道を開拓するために努力し、犧牲となつた幾千人の子孫が襤褸を率いて集り、資本家にパンを要求するとしたらどうだ？…………

クロポトキンの結論はかうである。「産業の機關は人類の共同努力の結果であつて、生産は種屬の公有財産である」。「凡ての物は凡ての人の所有である」。

クロポトキンの主張は相互補助または依存の原理の上に立つてゐるが、これと同系の思想をもつと科學的に言ひ現はしたものは、ブートロオやブウルジョワの「社會的共同責務」の哲學である。

ソリダリテ即ち依存は生命の特色である。生物はその各機關の間に行はれるソリダリテに依らなければ生存することができない。生命の觀念は有機的結合又は依存の觀念と一致する。生命とは種々の力の調和である。この調和は一個の

生物の中に行はれるばかりでなく、また生物同志の間にも行はれる。人間も亦この法則の支配から免れることはできない。かやうな關係によつて人はその家族と、次にはその隣人と、次にはその民族と、更に人類全體と結び附けられる。而してこの關係は物質的にも精神的にも行はれ、微妙にして複雜な調和を成してゐる。一個の人間の各瞬間の狀態は、彼を取卷いてゐる世界無數の人間の狀態の結果である。これが自然の法則としてのソリダリテである。

次に人間社會は自然の必然法に從ふ有機體であるばかりでなく、更に意識によつて努力する有機體である。ここに新しい力が加はり、且つ新しい複雜が生れる。我等はソリダリテの自然法を知るだけで滿足せず、之を社會の目的の爲めに意識的に適用しようとする。即ち我等はソリダリテを意志することによつて、一の社會的理想を造り出す。その理想を我等は正義とよぶ。換言すれば正義は我等が要求し、そしてそれに對して責務を感ずるところの人爲的ソリダリテである。即ち我等は社會の負債者である。

かやうな思想は古來の倫理的正義の觀念に具體的内容を與へ、「放漫」な自由の思想に嚴肅な責務を加へ、「平等」の中に自由の個性を認識するものである。私は今後の社會改造が必ずこの思想を有力な味方とするであらうと思ふ。

わたくしはこれで諸種の社會改造論をひとわたり探究した。私の結論は簡單である。その何れの思想もが完全でなく、その何れを取入れるかは各人の氣質（テンペラメント）によつて決するほかはない。かやうな思想は思想その物に價値を有するのでなくて、それが行爲に現はれて始めて實を結ぶべき性質のものである。その合理的であるといふことが如何に望ましいにせよ、唯だそれだけでは理性の遊戲にとゞまつて了ふ。單なる理性は行爲の野では死物である。我等は一の信念としてそれを生かさねばならぬ。即ちそれは白熱されて、宗教的または神秘的情緒を帶びねばならぬ。マルクスの「大變革（カタクリズム）」にせよ、

カントの「人格」によせ、ソレルの「世界的同盟罷業」にせよ、是等の思想に力を與へるものはその奥に潜む不可思議な「神秘」である。さればこれ等から「神秘」の火を取り去つてみよ。そのあとに殘るものは、第一者に於ては怠惰な夢想者、第二者に於ては瘠せこけた唯心的幽靈、第三者に於ては粗暴な狂人のほか何であるか。社會主義の忠實な批評家シムコウヴイッチがかう言つた。「明瞭に感知しえ且つ明瞭に推理しうるやうな社會的運動は凡てのユートピア中の最も荒唐なるものである。一の社會的運動は、一の信仰が奇蹟なしに活き能はぬ以上に、信仰なしには活き能はぬ」と。

金權者流の利益に偏倚したる現行税法の改革

—財政の根本的整理に關する國民的要望—

法學博士　堀　江　歸　一

財政整理の四要件

財政整理は日露戰爭後より、最近に至る十數年間を通じて、常に我國朝野の一問題なるに拘はらず、毫も解決せられたるの跡なく、枝葉の整理は時に行はれざるに非ずと雖も、根本的整理に至つては、何等認む可きものを求むる能はざるの觀あり。蓋し財政の整理には形式的整理と實質的整理との二樣の別あり。若しも一國の財政に於て經費と收入と適合して、誤まる所なく、國債の發行亦適度を保たんか、即ち形式的整理は之を認む可しと雖も、實質的整理に至つては、自ら問題の異なるものなきを得ず。財政の實質的整理を得るに就ては、收支の適合を收むるは勿論第一經費の國民所得に對する割合適度を得、且つ各種經費の分配正しきを得ること、第二收入適度の中堅たる租税が國民の生活を壓迫し、其企業を攪亂する程度に達するまでに重からざること、第三租税が社會の各階級若しくは各個人に對して、公正に分配せられ、苟も納税力を有する者は其納税力に相當する負擔を與りて、誤まらざること、第四國債の發行高が之に應募し、又は之を所有する國民の資力と相調和し、一方に國債の市價を相當の程度に維持すると共に、他の一方に將來の發行に對して、餘地を存せしむることの諸條件の備はれるものなかる可らず。

我國の財政に形式的整理の存するや、論を俟たずと雖も、實質的整理に至つては、其然るを認むる能はず。余が實質的整理の四條件として、列擧したるものは我國の財政に備はれるや否や。今我國財政の現狀に照應して考察を下すに、第一並に第四の條件は共に、我國現下の財政に於て、重要なる關係ありとする能はず。經費の總額は近年増加しつゝありと雖も、其増加の[illegible]たる、日露戰爭後に於けるが如く急劇ならず、寧ろ[illegible]方に、國民所得は歐洲開戰以來經濟社會に有利なる影[illegible]

て、著しく增進したるを以て、現在の程度に於ける經費の數量を以てしては、國民をして負擔の苦痛を覺へしむるものとする能はざるなり。固より戰時に我國が經濟上に得たる利益に對しては、戰爭の終熄したる今後に於て、反動的趨勢の免かれざるものあることを覺悟せざる可からずと雖も、戰時我國が種々の方面に於て獲得し、又收受したる利益は決して戰時中に全部を擧げて、空費せられたるに非ず、其大部分は貯蓄せられて、個人の資產と爲り、國民の資本と爲り、將來に亘つて、利子收益を產出して、已まざるが故に、納稅力は國民全體に就て、之を見れば、近年增加の著しく、又將來此勢の繼續することを疑はざるなり。

國債の整理は從來我國に於て、一個の難問題を以て、目せられたり。問題の要點は國債の現在高過多にして、國民の放資し、又國民資本の消化する範圍を超過すると、外債に對する元利金支拂の方法確立せざりしとの二者に外ならざりき。殊に後者は我國の財政に重要なる關係を有し、明治四十一二年より數年間の狀況を以てするときは、我國は外債の元利金を決濟する爲めに、更に新外債の發行を必要とし、外債の元金の增加するは勿論利子の負擔亦日に加重するの勢を示したり。然るに歐洲戰爭に際して、我國は外國に多額の債權を收め、一方に外債を償還すると共に、新に外國の發行する公債を買入れ、自ら債務を輕減して、債權を收得するに至れるを以て、將來に於ては特に外債の負擔に就て意を勞するを要せず、內國債は其現在額の大なるものありと雖も、是れ亦今日の如き國力の發展を以てするときは、必ずしも國民に過大の負擔を加ふるものとす可からざるなり。

故に今日經費の金額と公債の處理とは我國の財政に於て、當面の重要問題とす可からず。是れ海軍擴張を目的とする軍事費增加の計畫あり、又官吏增俸を目的とする一般行政費增加の計畫あり、而して一方に公債に對しては、或は減債基金を全廢し、或は同基金に對する歲入の既定繰入高を削減するの說あるも、世間の毫も之を異とせざる所以にして、此事實は近年我國財政の局面に生じたる重要なる一變化として、特に注目を要する所なり。

稅法整理問題の變化

租稅の負擔に就ても亦近年財政の狀況と共に、事情の變化したるものあることを認めざる可からず。蓋し日露戰後我國には一時三惡稅廢止論なるもの主張せられて、屢々時の少數黨に依て、議會の問題に供せられ、論者の意旨は多少世間の觀聽を動かしたるが如し。即ち其要綱に顯はれ、現行稅法に於

三者を惡稅とし、之を廢止せんとするの議論にして、實に減稅論の急先鋒たりき。之に次いで起れる租稅論は營業稅全廢論にして、山本內閣の時代に全國商工業者團體を背景とし、有權者の歡心を繫ぐを唯一の業とする職業的政治家に依て、議會に提案せられたれども、世間に大なる反響を及ぼすに至らず、其勢力に至つても、往年の三惡稅廢止論に追隨するを得ざりき。要するに從來の稅法整理論は廢減稅の一天張にして、全體の租稅制度に於ける負擔の公平、一の租稅と他の租稅との關係、減稅の爲めに生ずる國庫收入上の缺陷若しくは之を塡補する方法の如きは、殆ど顧みる所と爲らざりき。然も今や時勢は著しく變化したり。今日如何なる理由に基ひて、往年の如き廢減稅論を主張する者ありとするも、世人は之に對して賛意を表せず、寧ろ國家にして社會生活に有用なる職務を爲すに就て、經費を要するものならんか、之に應ず可き增稅の負擔は之を辭せざるの覺悟あることを俟う可からず。國家の職務を縮小し、經費を削減して、廢減稅を實行する消極的政策よりも、必要なる增稅は之を斷行し、經費膨脹の下に、有用なる國家職務を擴張する積極的政策の國民に歡迎せらるゝや論を俟たざるなり。

故に廢減稅を主眼とする稅法整理の如きは、我國の現狀に於て、姑く之を閑却して可なり。然も此故を以て稅法の整理の用なしと論斷す可からず。我國の稅法は之を全體の制度に就て見るも、又個々の租稅に就て云ふも、國民に對する負擔極めて不公平にして、租稅負擔の公正に於て、缺くる所極めて大なり。換言すれば納稅力の豐なる者に負擔を輕くして、其乏しき者に之を重くし、納稅力の存せざる所に負擔を強いて、其存する所に之を逸するは、我國租稅制度に於ける弱點中の最大弱點たらずんばある可からず。斯る課稅法は巨額の財產を擁し、高額の所得を收むる者卽ち金權者階級に有利にして、我國に金權政治が行はるればこそ、斯く缺點の著しき租稅制度も今日に至るまで存續して、世人の間に大なる非難を惹起せざるを得ざるものとす可く、政治の形態の一變せざる限り、租稅制度も亦舊時の形態を保つやも知る可からずと雖も、社會改造に關する思潮の次第に我國に勃興せんとしつゝある場合に、租稅制度を從來の儘に放置するが如き、將來に大なる危險を貽す所以にして、苟も社會の平安を維持せんとする以上は、租稅制度に根本的改革を加ふるを必要とす可く、租稅の一變態たる專賣事業や、營利的官業の經營に就ても、革新を要するもの〻大なるを認めざる可からず。

如何に所得稅法を改革するか

現行租稅制度に於て、金權者流の利益に偏倚したるこ

も甚だしき租稅は所得稅と相續稅との二者なり。先づ所得稅に就て立論するに、現行所得稅法が所得を三種に區別し、第一種法人の所得、第二種公債社債の利子、第三種前二種に屬せざる所得としたるは、第一種並に第二種の所得に對して、所得の由て生ずる源泉に就て課稅し、以て脫稅を防抑するの必要に出でたるものなり。而して此區別を設けたる當初に於ては、法人の所得に對しても、公債社債の利子に對しても共に比例稅を賦課しながら、第三種の所得に對しては、獨り累進稅を賦課したるが故に、個人の經營する事業にして相當の所得を收むるものは、第三種所得として、累進稅を賦課せらるゝよりも、法人所得として一率の比例稅を賦課せらるゝ方、負擔の輕き事實を生ずるや、個人は事業經營の方式を一新して、法人とするを常としたり。斯の如きは稅法の規定を以て、國家自ら納稅者に向つて、合法的に脫稅の行はれ得る道を示すものに外ならざるなり。其後斯る弊害を防止する爲め、所得稅法に數次の改正行はれ、合名會社並に合資會社に對しては、千分の四十五より千分の百七十五に累進する稅率を賦課し、株式會社株式合資會社には千分の七十五の比例稅を賦課する一方に、株式會社並に株式合資會社にして、株主又は株主及び社員の數二十人以下を以て組織したるものたるときには、其所得に合名會社並に合資會社の所得に對すると同一の率を以てするとしたり。然も第三種所得に對する稅率は現行法に於て千分の三十より千分の三百に累進する規定なり。例へば個人が事業を經營して、年額五千圓の所得を收めたりとせんか、其第三種所得たるの故を以て、千分の八十五の稅率を課せられざるを得ずと雖も、若しも其個人が事業を法人組織に改めんか、合名會社、合資會社の場合に於ても、稅率は千分の五十五に過ぎず、更に二十人以上の株主又は株主及社員を集めて株式會社又は株式合資會社を組織せんか、稅率は千分の七十五に止まり、孰れの場合に於ても、負擔の輕きを見る可く、殊に株式會社に對しては稅率は所得の多寡に依らず、千分の七十五の一率なるが故に、個人にして所得の大なるものは其大なるに應じ、事業の組織を改造することに依て、負擔の輕きを得べし。

近年我國の富豪資產家が多年個人の名義を以て經營したる事業を改造して、株式會社とするは、如何なる目的に出づるや。固より株式會社の下に、世間公衆に對する會社の責任を有限にし、個人事業に於ける無限責任の危險を脫するの配慮に出づるものある可しと雖も、同時に組織の變更に依て、所得稅法に認められたる合法的脫稅を行ふの意を存することを疑ふ可からず。現に事業家が株式組織に變更しながら、其株式を一般に公

募せず、又取引所の定期賣買にも付せず、纔に自家の使用人を名義上の株主とするに止まるものあるの事實に徴するも、組織の變更が合法的脱税を遂行するの目的に出でたることを疑ふ可からず。所得税法に斯る遺漏の存するは、吾輩の怪訝に堪へさる所なり。

更に現行所得税法に於て、租税の負擔を不公平ならしむるは、第五條に於て所得税を賦課せざる各種の所得を列記するに當り、其第六號に於て「此ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレタル法人ヨリ受クル配當金及剩餘賞與金」なる一項を設けたる事實に胚胎するもの少なしとせず。即ち此規定あるが故に、前記の如く、特に少數の朋友知己若しくは使用人等を名義上の株主として、事業の組織を株式會社に改めたる者が個人として課税せらるゝよりも、遙に輕率なる所得税を賦課せらるゝは勿論株式會社の株主の如きは所得税として殆ど何等の負擔を感ぜざるに至る可し。換言すれば會社は法人として所得に對する千分の七十五の割合を以て、所得税を賦課せらるれども、利益金を個々の株主に配當するに當り、本來の配當金より會社の納付したる所得税金を差引くものに非ず、會社は營業費の内より所得税を納付し、殘額を株主に配當するが故に、株主の配當金として、會社より得る所は必ずしも所得税の賦課に依て、相違する所なきに拘はらず、其株主たる個人の當祖に入れるときには、全然課税せざるが故に、今日會社の株主は事實に於て配當金に對する所得税を免除せられつゝあるものに外ならざるなり。

會社の重役社員等が賞與金として、會社より給與せらるゝ所得に對しても亦然り。近來此種賞與金の金額は頻に增加し、某汽船會社の社長は半季に十數萬圓の賞與金を得たりとか、某砂糖會社の社長は七十萬圓の記念賞與金を收めたりとか、巷説の盛なるものあり。然も斯る賞與金は會社が法人として賦課せらる可き所得税を納付したる殘額の所得より支拂はるゝものなるが故に、之に課税せんか、重複課税たる可きの理由に基き、所得税を免除するが如き、税法自ら求めて租税の負擔を不公平ならしむるの譏を免かるゝ能はざるなり。

納税力の豐富なる、又其强大なる方面に對して、租税の負擔を逸するとの甚だしき、斯の如く爲るに拘はらず、納税力の乏しき者に向つて賦課せらるゝ所得税の負擔は極めて酷烈なるものあり。第一所得税の免税點は明治二十年税法實施當時三百圓なりしものが現行法に於て、五百圓に引上げられたるのみ。然も此三十餘年間に於て、諸物價騰貴し、國民生活程度の上進したるは三に對する五の割合に止まらざるは、明白の事實なるに、免税點の引上の遲々たること右の如く爲る以上は、今日め

所得稅が中流以下の階級に對して大なる負擔を加ふるや、疑を容れず。第二財產所得と勤勞所得とに對する稅率に差別を設け、前者に對するものを重くして、後者に對するものを輕くするは、負擔の均一を得る爲めに必要なるに拘はらず、我國に於ては、兩者の區別は極めて曖昧にして、纔に第三種所得中、俸給、給料、手當、歲費等に對しては、收入豫算年額より其十分の一を控除することを許し、且つ右の方法に依て計算したる所得金額が七百圓以下の場合に百五十圓を、一千圓以下の場合に百圓を控除し、其殘額に課稅して、以て勤勞所得に對する負擔を輕減したりと稱するが如き、兒戲に等しきの觀なき能はず。第三個人の所得中、貯蓄せらるゝ部分に對して、所得稅を免除するは、當然の處置とす可く、英國の所得稅法に於て、個人の所得より支拂はるゝ生命保險料は所得の六分の一を限度として、所得額に計算せさることゝしたるが如き、即ち貯蓄に課稅を免除するの趣意なるに、我國の所得稅法に斯る用意の見る可きものを存せず。第四、所得稅法に於ては、納稅者の一身上の狀況を參酌して、租稅の負擔額を律するの必要あり。斯る斟酌を施してこそ、所得稅をして負擔の公平なる租稅たらしむを得べく、現に英國に於ても、普魯西に於ても、所得稅法中、納稅者の扶養す可き家族親族の數を標準とし、其數の多き者に對して、租稅の負擔を輕くする所以なるに我國の所得稅法には斯る規定の片影すら、之を認むる能はさるなり。

偶爾利得に對する課稅

今日の經濟組織に於ては、所謂不勞利得と稱し、又は偶爾利得と云ひ、人が何等の勞力費用を投ぜさるに拘はらず、尙ほ一種の社會的關係に依て收得せらるゝものあり。斯る利得に對しては、其納稅力の大なるの故を以て、充分の課稅を爲す可きこと明白の事實にして、斯の如くにして始めて租稅負擔の均衡を保つを得るの道理なり。不勞利得として、今日の經濟社會に於て、特に顯著なるものは、相續に依て、人の獲得したる財產なり。親と云ひ、子と云ひ其關係の密接にして、他に之に及ぶものゝ存せさるや、論を俟たずと雖も、其關係の密接なることを社會的に認めたるは親子間に於ける相互的扶養の義務にして、親は子の幼少なる間、之を扶養し、子は親の老後之を扶養するの義務あるは疑を容れず。此以外に親は子に向つて財產を贈與するの義務を負はさると共に、子は親に向つて財產を相續するの權利を有するものに非ず。財產の相續は要するに國家が法制を以て、相續權を保護するが故に生ずるものにして、而して相續權を保護するは、人をして將來に於ける財產の處理に安んじて、財產の蓄積に力を用いしめんとするの理由に出づるもの

なり。故に外なる以上は國家は随時に必需を以て、財政の相續稅に制限を加ふるを得るは勿論相續稅を賦課することに依て、事實相續權を制限するを得べし。況や相續財産は何等の努力資本を費さずして、相續者の掌裡に收められ、不勞利得として最も著しきものなるに於てをや。然るに我國に於て先年日露戰時に當り、財政の急要に應ずる爲めに、相續稅の賦課せられたるは、甚だ可なれども、爾來財政當局者は此相續稅を保護培養して、好箇の一稅目たらしむことに勉めず、却て機會ある每に、稅率に輕減を加ふるを常としたり。其理由とする所は、我國の社會は家族を基礎とし、隨て相續稅の如き、家族の存立を脅威する稅法は我國の根幹を危うするの一事に外ならずと雖も、相續稅に依て脅威せらるゝが如き基礎の微弱なる家族ならんか、到底我國の根幹として依賴するに足らず、斯の如きは財政當局者が一部固陋の意見を持する者の歡心を結ぶ爲めに唱ふる曲說にして、何等の價値を認むる能はず。我國に於て從來屢々相續稅に輕減の行はれたるは、其輕減が樞密院貴族院等に於て財産を所有する少數者、地方の地主、都會の實業家等要するに相續稅に就て直接に負擔を感ずる者の喜ぶ所と爲り、政府亦彼等の意に迎合して、政治上に便用するの私心あるが故なり。隨て我國に於ては相續稅の稅率の低きは勿論財産價格の査定嚴重ならず、相率ひて相續稅の收入を減少せしめ、租稅負擔を公正ならしむるに資する所なきもの亦怪むに足らざるなり。

既に偶爾的利得たるの故を以て、相續財産に課稅するの理由ありとすれば、同じく偶爾的利得たる財産の増價、利得の偶爾的増加に對しても亦或る時期に課稅せざる可からず。英獨兩國に夙に土地増價稅なるもの發起し、土地所有者が土地を賣却して得る代價と最に土地を購入したる際に支拂ひたる代價との差額より、土地の改良に費したる資金を控除し、尚ほ餘れる所を課稅目的物として、相當の稅率を適用する所以なり。既に平時斯る主義の稅法の發達したる一事は今回の戰爭に於て諸國をして容易に超過利得稅なる名稱の下に、戰時利得に課稅するに至らしめたる一原因とす可し。蓋し戰前の利益と開戰後の利益とを比較して、兩者の差額に課稅するは、超過利得稅の要領にして、其主義に於て、土地增價稅と異なる所なければなり。而して土地の增價は平時たると戰時たるとを問はず、常に社會の狀況に依て發生し、隨て土地の增價稅亦平時稅たるを得るが如く、各種事業に於ける超過利得稅も其發生するや、敢て戰時に限るものに非ず、平時に於ても一般商工業の發展しつゝある場合には、各種事業には當業者に於て何等の意を勞し、資本を用ひさるに拘はらず、超過利得の大なるものある可し。斯る利得は自ら偶

時利得の最も著明なるものにして、苟も租稅負擔の公正を維持せんとする以上は、此種の課稅は今日の稅法に於て、之を遺す能はず。政府は當初の規定に從ひ、講和成立の今日、戰時利得稅を廢止するの賢策なるか、何時か之に代る可き同一趣向の稅法を採用せんとするものなるか、吾輩の知る所に非ずと雖も、吾輩は租稅の負擔を公正にするの見地に於て、戰時利得稅に或る修正を施し、超過利得稅として、之を戰後に存續するの必要を主張せざるを得ず。政府が當初の規定に拘泥して、近く之を廢止せんとするが如き、餘りに杓子定木を重しとするの非難を免かれず、更に其廢止に依て、金權者階級の歡心を繫がんとするに至つては、心事極めて陋なりとせざる可からず。

空地稅と超過宅地稅とを起す可し

一兩年來我國の一部に新に奢侈稅を起して、奢侈的消費に課稅するの說を唱ふる者あり。論者は斯る課稅に依て、奢侈を抑制せんとするものなるか、國庫に容易に收入を收めんとするものなるか、將た又兩者の目的を達せんとするものなるか、之を知らず、而して奢侈的消費に課稅するは必ずしも不可ならずと雖も、吾輩は我國の現狀に於て、更に賦課の急を要する租稅あることを認めざる可からず。其一は超過宅地稅（通俗に云へば庭園稅なり）にして、他の一は空地稅是れなり。蓋し今日大都會に於ては人口次第に諸地方より密集し來り、都會の狹隘なる地點を求めて住居を營むが故に、宅地の供給大に缺乏しつゝあることは之を爭ふ可からず。北米合衆國の大都會に於けるが如く、一方に市中到る所に十數階又は二三十階の摩天樓を建築して、市民の住居する所を九天の高きに至らしむる一方に、市中と郊外とを連絡する迅速低廉安全の交通機關を設くるときには、或る程度まで市民の住居問題を解決するを得べしと雖も、我國の如く是等兩者の設備を缺くに於ては、益々市內密住の勢を大ならしむるは勿論にして、今日商工業の繁昌するに隨ひ、東京大阪其他の大都會に於て、所謂住家饑饉の狀態を現出するも、偶然に非ず。而して住家饑饉の原因は或は好景氣の今日建築材料の騰貴が賃銀と共に、頗る不廉と爲り、資本家自ら資本を貸家の建築に投ずるを不利なりとする事實に存す可しと雖も、同時に宅地の供給不足、宅地地代の不廉が貸家の建築を妨げつゝあることを掩ふ可からず。斯る場合に富豪が自己の住宅を廣大ならしむる爲めに數百坪は愚か、數千坪、數萬坪の宅地を擁し、其內の二三百坪は建物の建築に供すれども、他の餘れる所は之を擧げて庭園とし、茶園とし、森林とし、牧場とし、一歩外に出づれば黃塵萬丈の大都會に別天地を劃して、生活するが如き、驕奢の沙汰と云はざる可からず。富豪一個の[illegible]

利は偶ま之を無みす而して唯一人又は少數者が斯る都會生活に不似合の職業を爲すが故に、多數の市民に對する宅地の供給を乏しくし、彼等をして大都會に於て、住宅地なきは勿論住家なき民たらしむるに至つては、社會生活の調和を破るものとして、其罪甚大なりとす。人が宅地として利用す可き土地の面積には自ら制限の存するあり、此制限を超越して、宅地の領域を擴張するが如き、公共の利益を傷けざる場合に於てこそ、之を認容するを得べしと雖も、昨今の如く宅地缺乏の事實の歴然たる場合に於ては、到底之を默過す可からず。人が住家と共に、所有す可き宅地を例へば三百坪とし、之に對して何等の租税を賦課せざるも、此以上に所有する宅地の廣さに隨て、累進税を賦課するの方法に出でんか、茲に一方に宅地不足、家屋饑饉に困苦する市民あるに對して、妄に既設の宅地を取毀ちて、住宅を擴張する富豪あるが如き矛盾を避くるを得べし。

之と同時に吾輩が税法上の問題として、世人の注意を求めんとするは、市中に散在する空地の處分若しくは利用法是れなり。思ふに斯る空地たる、所有者の存するに拘はらず、何等之を利用せず、空地の儘に放置するは、所有者が他日地價の騰貴する時に及んで之を賣却し、以て巨額の利益を博せんとする投機的精神に出づるものなることを疑はず。個人の投機的精神を發揮せんとする者とは、社會の容認する所に非ざるが如しと雖も、斯る精神の發揮に依て、宅地の供給を乏しくし、爲めに住家饑饉を生ずるに至つては、社會は之を默認す可からず。空地の所有者に對しては、特に其宅地たるの故を以て、他日收めらる可き投機的利益を豫測するに足るの重税を課す可きのみ。所有者が此重税に堪へずして、空地を人に賣却し、又は自ら他人に賃貸し、二者孰れの場合に於ても、此空地に家屋の建築せらるゝに至つて、始めて税法上より住家問題を解決するの一助たるを得べきなり。私人の所有する空地に對して、斯る租税の賦課せられて、空地利用の捷徑を促すに至る以上は、御料地の拂下、官有地の處分の如き、當然行はる可き所とせざる可からず。

我國現行地租制度の如き、法定地價を課税の基礎とし、然も法定地價は實際の賣買地價に對して、大なる懸隔を存するに拘はらず、簡單に之を改定する能はざるものを以てしては、租税として伸縮自在の機能を失うの弊大なりとせざるを得ず。之を補足するものは即ち土地增價税、空地税、越過宅地税の新設にして、一方に社會政策上の方便たるを得んか、眞に一擧兩得の改革を以て、之を許すを得べきなり。

餘論

今や歐米諸國に於ては、酒類の禁止若しくは制限の

く世間を風靡せんとするの趣あり。吾輩は直に此種の主張に同ずるものに非ずと雖も、我國に於ても早晩此種の主張に接す可きは、吾輩の今日より之を斷言するに苦しまざる所なり。現に酒税の重率なるが故に、酒價を昂騰せしめつゝあるのみならず、酒の品質を粗惡ならしめて、已まざるが如きを始めとして、織物税中の木綿織物に對する課税、鹽專賣、通行税、並關税中、國民日用消費品に賦課せらるゝもの、砂糖消費税、石油税の如き、何れも其中流以下の社會に負擔を及ぼすの點に於て、財政の事情の之を許す以上は、整理を要する税目たらざるはなし。唯是等の租税が實際の問題に上らざるは、其負擔を切實に感ずる可き階級中、商工業の好景氣に依て、有利の地位に居る者ある一方に、負擔者に團體的運動を起すの結合なく、又選擧權を有すること少なきの故を以てなるのみ。然も是等の理由を以て、我國に消費税反對の運動の起らざることを速斷し、而して從來の如く消費税に偏倚する租税制度を以て、國民に臨むこと我國の如く爲らんか、財政の全體を擧げて甚だしき時代錯誤に陷らしめざれば已まざるなり。

我國消費税若しくは專賣制度を如何に改正す可きやの問題に對しては、之を論ずるの餘白を有せず、唯吾輩をして忌憚なく斷言せしめんか、我國從來の租税制度は餘りに企業者階級の利益を尊重するの一事に偏し、民衆の利害を閑却したる跡の歴々たることを否定す可からず。所得税に、相續税に此傾向あり。而して租税が納税力の存する所に向つて、其負擔を及ぼさず、却て消費税に偏倚するが如き、一として企業政治の支配下に在る租税制度に伴ふ事相たらざるはなし。財政整理に對して、國民の希望する所は企業政治に阿附するの流弊を一掃し、廣く民衆の利害を念とするの一事あるのみ。此要訣を閑却するに於ては、財政整理は如何に之を計畫するも、一片の空言に過ぎざるのみ。然も由來企業と密接するは既成政黨の一病弊たらざるを得ず。政友會内閣が能く國民の要求を容れて、財政の根本的整理を斷行するまでに、時代精神に確乎たる理解を有するに至れるや否や、事實に就て之を檢せざる可からず。單に經費に對して、收入を調達し、以て收支の均衡を得たりとして、之に安んじ、又は收入を得るや、其之を抵抗力の最も微弱なる所に求むるが如き、舊式租税政策は到底國民の滿足する所に非ず、政府は果して斯る型式を打破し、又舊慣に超越したる新政策を提げて、國民に其是非を質する成算ありや否や、政友會出身の閣僚若しくは彼等を圍繞する官僚の平生に徴して、吾輩が心許なく感ずる所なり。

若し夫れ官業の整理に就ては、議す可きもの多々あり。從來

の如く各種專賣事業は勿論鐵道郵便電信電話の如き、社會公益を目的とする官業を舉げて、一切國庫の收入に收むる方便とするは、最も舊式の經營にして、時代精神に背馳する嫌の大なるものあり。頃者英國に炭坑國有論の盛なるものあり。政府亦委員を任命して、調査に當らしめつゝあるが、一部の委員は坑夫を供給權ある國家の傭員とし、炭坑の經營は國家の官吏自ら之に當り、石炭は恰も郵便切手と同じく、一定の價格を以て、國民の需所に分配するの計畫を主張しつゝあるものあるが如き、自ら將來に於ける官業の經營が如何の方針に就かんとするやの一班を暗示するものとす可し。余は今此一事を舉げて、妄に官業を國庫收入の爲めに便用せんとする官僚輩を戒めんとするものなり。

英國の資本的帝國主義亦崩壞せん

鷲尾正五郎

(一)

『昨日衆議員議事堂の附近に於て、復員兵卒と巡査との間に衝突ありしは、我等巡査組合員の甚だ遺憾とする所なり。巡査組合は復員兵卒の示威運動を正義の運動なりと信じて疑はず。

『該衝突の責任者は警視總監にして、巡査組合員の與り識らざる所なる事を茲に我等は組合復員(兵士の組合を指す)及び社會一般に對して聲言す。想ふに議事堂一哩以内に示威運動を許さずとの規定は、從來巡査階級を一般勞働階級より差別視するに到らしめたる幾多の惡劣にして不健全なる規定中の代表的なるものにして、速に廢すべきものなり。

『我等は信ず、此種の衝突の原因を除くべき唯一の方法は、警察力を民主化する事にあり。倫敦警視廳内に潜伏せる軍國主義を剿滅し、巡査組合の權威を認めしめ、巡査階級と勞働階級とを聯結するにあり。

「戰後に我等は復員兵卒及び水夫諸君に謝せんとす、昨日の行動を以つて我等巡査階級を非難する勿れ。眞の責任者は政府當局者、警視總監、軍國主義者にして、巡査組合は極力彼等と戰ひつゝある事を察せられたし。」

ゼー・エチ・エイエス署名
巡査監守組合書記長

・五月二十六日、倫敦ハイド・パークに於て復員兵士失職者の示威運動の大會があつて、彼等は政府より支給せらるる一週二ポンドの手當に滿足せず、「我等は慈善を要せず男らしき職業を要す」と稱へて、そのくせ職業があつてもケチな仕事には決して從事せず、「民主主義の假面を被りて、勞働階級を犧牲とする政府及び資本家を彈劾す」と叫び、一群は遂にハイド・パークより進みて議事堂の附近に迫り、此所に端なくも警官の一體と衝突して、双方に少數の負傷者を出さしめたと云ふ事件があつた。此の事件があつた翌日、巡査側の發表したる宣言書は即ち上記のやうな我々日本人の肝膽を寒からしむるものである。

此の種の示威運動は、毎日倫敦のみならず英國の各都會に於て幾つとなく行はれて居る。印度の暴動が傳へられると、印度側を辯護して英國政府を攻撃する演說會が行はれ、巴里の講和條約が發表せられると、帝國主義の講和條約として之を煽動する有志が各方面に蹶起する、コルチャク政府を承認したと云ふ報告があると、過激派のために氣焔を上げて聯合國を難ずる、議會に關稅同盟を言ふものがあれば、民間は直ちに之に反對の聲を擧げる。如何なる方面から觀ても、英國の政府と人民は互に相敵視してゐる事は明かである。政治的民主主義の假面を被りて、實は資本的帝國主義を實行して來た英國は、今度の戰爭で愈々其假面を剝がれ、今は社會民主主義乃至產業民主主義の革命期に進滑してゐる事は、少したりとも英國社會の實際を目擊した人の感ぜざるを得ない事である。

「巴里講和會議の聲は英國民の聲ではない。」此の言葉は私が倫敦へ來てから、新聞記者、學者、勞働黨の有志、一般人民、其他各方面の人士から親しく幾度となく聞かされた言葉である。

私の親しく交際して居る一新聞記者の言によれば、此次の總選擧には英國は一變すると云ふ。ロイド・ジョージの運命も今期限りで、假令彼が再び寢返を打つて勞働黨に組する氣でも、最早勞働黨の方で彼を受けないと云ふ。英國民は變說改論の政治家を一度は許すが、決して二度とは許さない。誰が次の內閣を組織するか豫想する事は容易でないが、誰がやつても、勞働黨の勢力が中心となる事だけは最早疑ひない事であると云ふのが一般の觀察である。

一巴里の講和會議には英國民の輿論が表れて居らぬ」と云ふのは、英國の社會問題を研究する程如何にも事實である事が判る。英國內で今日輿論の焦點となつて居る問題は、講和會議ではなくして、炭坑國有會議である。次に炭坑國有會議を中心として、英國に起りつゝある社會革命の大勢を述べてみたいと思ふ。

(二)

炭坑國有は、勞働黨の戰爭中既に宣言した事で、休戰以來炭坑夫組合は國有を強請すべく種々の運動をやつて居つたが、遂に本年二月に到り同盟罷工に訴へてもその要求を貫徹すべしと云ふ議一決して、之を政府に迫つた。それは二月三月にかけての事であつた。其頃は單に國有のみならず、勞働時間の減少、賃銀の割增と云ふ事件も含まれてゐた。其頃より坑夫等の要求は炭坑夫組合孤立の要求でなくして、彼等の背後には、鐵道組合、運送(鐵道を除く)組合をも聯結したる所謂三角同盟の陣形が成立して居つて、その總人員百二十五萬餘が擧つて同盟罷工をやると云ふ示威運動であつた。炭坑、鐵道、運送の總罷工は英國の產業全部を麻痺せしむべき勢力なる事は云ふまでもない。大勢の向ふ所政府と雖も牽制するの權威なく、交渉の結果遂に勞働者、資本家、政府三方面の委員より成る調査會を作り、その決議を要求する事になつて斯くして此の委員會を組織してみると、總數十二人の中、三人は資本側、三人は政府側の委員にして、半數の六人は全部勞働側の人である。勞働黨は委員會の組織に於て既に半分の勝利を制して居る。此の委員會議が始まつてから既に二ケ月餘になる。四月の中頃、賃銀の割增、勞働時間の減少に關して、一先づ妥協的解決を遂げたが勞働側は之を以つて滿足せず、國有論を提げて再び戰を挑み、現に進行しつゝあるのが、即ち兩混成委員より成る炭坑國有會議である。私は此の會議にも臨み、また各方面の人の意見をも聞いてみたが、大勢は既に國有論に傾いて居るやうである。たゞ殘る問題は、坑山所有者に對して如何なる程度の賠償をなすべきやといふ問題である。勞働側は設備費に對しては相當の賠償をなすべきも、所有權に對しては賠償するの理由なしと言ふ。之に反し資本家側は所有權を莫大なる價額に見積らんとする。所有權否定の議論は勞働黨の得意とする所で、元來國民の共有物たるべき財產を私有すると云ふ事は不義であるのみならず、假りに私有產業制度に基く特權を認めても、所有權の起源は甚だしく曖昧なものであつて、法律上からも徹底的に之を說明し得る者がない。完全に法律上の書類を提出し得る者もなく、殊に坑山の場合に於ては、財產が地下にあるのであるから、地下所有權の

違する範圍に限定した法律がない以上は、所有權を無限とするか不定とするか、孰れにしても法理に背いた事であると論ずる、常識的には野蠻な議論であるやうに思はれるが、委員會に於て多數を制する勞働側が、坑山所有者の代表者を被告の席に立たしめて、社會主義的論理の裁判を遣る所を見ると、世が變れば常識も變るもの、常識程曖昧なものがないと思はさるを得ない。

巴里の會議には帝國主義者が勝を制し、國內の炭坑國有會議には勞働黨が勝を制して居る、妙な對照である。併しながら此の委員會の勝敗は、要するに形式上の沙汰であつて、委員會決議の運命を決するものは、一方政府及び資本家の暗中飛躍と、他方勞働側の三角同盟を中心とする示威運動との決戰である。此の決戰を境として、資本的帝國主義の鐵鎖が愈々固く鍊へられるか、或は社會革命の洪水が最早堰き止め得ざるまでに汎濫するか、單に英國のみの問題として觀る事を許さない。

數日前陸軍大臣チャーチル氏が議會に於て宣言して曰く、『若し勞働側は愈々總同盟罷工を爲すに於ては、政府は國家の許力と兵力の總動員を行つても、之を破る覺悟なり』と。內亂の宣言が先づ政府側より發表せられるとは、形勢險惡なりと言はさるを得ない。此の宣言があつた翌日、勞働側の新聞紙は、政府は各士官に命令して、軍隊內に組合運動の傾向ありや否やを調査させて居ると云ふ事をすつぱ拔いた。私は現職の大佐にして、愈々決戰となれば、勞働側に投ずべしと言ふ人を知つて居る。チャーチル氏の宣言は不幸な宣言であつたと評せさるを得ない。此の宣言があつてから、社會黨は各所に會合を催し、公然と革命を叫び、三角同盟に聲援を與へ、今日まで立憲主義を固守して來た勞働黨の首領連までが、革命の必ずしも不可ならさる事を公言する程の形勢となつて居る。英國の事であるから、政府側にしても、勞働側にしても、示威運動は遣つても、實際暴力に訴へるやうな事はあるまいが、チャーチル氏のやうな人があつては問題がむづかしくなる。その結果現內閣瓦解の運命を早めるやうた事になりはしないと思はれる。

(三)

炭坑國有論が、炭坑のみに限られて居る一局部の問題であるならばさまで大事なりとする程の事でないが、此の問題は總て全般の社會問題を解決する鍵であつて、炭坑の國有が成れば、他の私有産業も、その例に從つて一齊に崩れてくる。三角同盟は元々その目的で聯結した陣形である。炭坑國有に次いで起るものは、鐵道國有、其他運送機關の國有である。聞く所によれば、紡績職工組合も、既に紡績國有の運動計劃を立てゝ居ると

ずより土地國有問題會も早くから成立して居る。近頃其の運動が三角同盟の聲援を得て一層烈しくなつたやうである。併し炭坑國有運動の感化力は、單に此等各種の私有財産國有運動を喚起するに止まらずして、外交問題にまでも及ばんとして居る。此の運動に直接携はり、また之に聲援を與へて居る人々は、孰も講和條件を非難し、帝國主義の對外政策を排する人々である。此等の人々の意見に徴すれば、講和條件は獨逸が受けると受けぬに拘らず、孰にしても失敗である。たゞに講和條件が失敗であるのみならず、國際聯盟も失敗であつて、早晩撤廢せられ、之に代るものは寧ろ獨逸側の提議に近き、勞働勢力を本位としたる敵、味方、中立國を平等に抱擁する國際聯盟でなければならぬと言ふ。マンチエスターの自由黨は既に此種の對外政見を發表して居る。露國の過激派に對しても、獨逸に對しても、英國現政府の態度と英國民の輿論とは殆ど正反對である。勞働側の新聞通信記者の一人にして近頃獨逸から歸つて來た人の言ふ所によれば、聯合國の講和條件は既に全文獨逸に於て發表せられて居るが、條件の一つに『獨逸は乳牛十四萬頭を聯合國に提供すべし』と云ふ驚くべきものがあると言ふ。それでなくても獨逸の幼兒は營養不足で死ぬのが多い。母子の悲慘なる狀態を目撃したものは英國の水夫でさへも、經濟封鎖を經驗する氣にならぬと云ふ。然るに聯合國の政治家は現在の獨逸を責め拔いてまだ飽き足らず、將來の獨逸を作るべき小兒の生命までも奪はんとする。舊獨逸と雖此程の殘忍な事はしなかつた。英國の勞働黨及び社會主義者は好んで聯合國の此種殘虐行爲を曝いて、獨露の過激派に同情を寄せる。之に反し政府及び資本家側の新聞紙は、獨逸は少しも改心して居らぬとか、舊軍閥の勢力が依然として殘つて居るとか云ふ事のみを傳へ、露西亞の過激派に對しても、革命の落武者を買收して、レーニン、ツロツキーの殘虐行爲を誇張若しくば僞造して報告させて居る。日本の讀者は此種の新聞電報を傳へられるがまゝに信じてはならぬ、況して巴里講和會議に表れたる外交關係を觀て、それが世界の大勢があると思つては大なる誤りである。私は巴里講和會議に於ける英米の帝國主義的野心を憤り、英國へ行つたら少しは日本の立場を辯護してみたいと云ふやうな子供らしい考を有つたが、來てみればたゞたゞ慚愧の至りである。人道の辯護は英國民自身が一層徹底的に遣つて居る、僕等のやうな者は、その靴の紐を解くにも足りない。

數日前炭坑國有會議に於ける勞働側の委員長スマイリー氏が、國有の外に左の四ヶ條を提議した。

一　鑛山より撤兵すべき事

二　對獨封鎖を解く事
三　徴兵令を撤廢する事
四　平和論者を放獄する事

スマイリー氏は更に揚言して曰く『以上の提議を貫徹するため、炭坑組合は同盟罷工の手段に訴へる事を避けず』と。其後、四ケ條は三角同盟の決議となり、其他の勞働組合も之に應呼して同様の決議を毎日のやうに發表して居る。スマイリー氏の提議があつて以來、流石の政府も青くなつたと見えて、目下四ケ條について、ボナロー氏と勞働黨の議會委員との間に秘密交渉が進行中である。然るに勞働側は議會委員の態度を不徹底なりとして、交渉議事の公開を迫つて居る。他方民間にもまた講和條件を呪咀する公開演説が各所に行はれると云ふ有様である。勞働組合が對外政策に就て同盟罷工を宣言したのは、恐らく今度が初めてであらう。英國勞働黨の對外人道主義は斯の如くに徹底して居る。日本の人道主義者などの容喙すべき餘地が何所にあらうぞ。

（四）

鐵道を國有として居る日本人は、炭坑國有と聞いたからとて、格別驚く事もないと思ふかも知れないが、國有と云ふ字は同じであつても意義は全然違つて居る。英國の國有論は勞働者の運動であつて、勞働者が產業自治をやらうと云ふ方針で進む運動である。明かに產業制度の革命である。全然勞働者の自治と云ふ事は當分覺束無い事であらうが、政府側の委員と勞働者側の委員との混成委員會で經營して行かうと云ふ程度までは現に進んで居る。而已ならず一般有識者の意見に徴すれば、斯る混成委員會が組織せられるとして、其中心勢力となるものは孰かと言へば、勞働側の方であらうと見る人が多い。であるから國有に反對する人は、國有は勞働階級の專制であるとか、勞働階級には未だ經營の才能が發達してゐないとか云ふ事を以つてする。勞働側は之に答へて、今日の勞働組合運動は、單に手足の勞働者のみならず、頭の勞働者をも含んで居ると言ふ。頭の勞働階級即ち月給取の階級が、各方面に組合を組織して居る事は事實である。また學界から勞働運動に投じた人々は、此等二階級の勞働勢力を打つて一丸とせんと務め、他方手足の勞働者も教育の必要を叫び、現に勞働運動の士官養成のために、勞働者の大學を經營して居る例もある。Central Labor Collegeと云ふのが即ちそれである。私は炭坑國有會議に提出せらるる勞働側の調査報告を見て居るが、その調査の科學的にして精細なるは敬服せざるを得ない。而已ならず、英國の出版界を觀ても、目星しい出版物は大抵勞働側若しくば勞働運動に同情ある人々の筆に成つ

て居る、之に反し資本家の仕事は其の性質上秘密であつて、公平に發表して社會の輿論に問へば、頗る非科學的なる事は言ふまでもない。人才は資本家側にあつて、勞働側に無いなどと云ふ議論は、英國では最早成立しない議論である。

五

英國の勞働者は、最早單に賃金の割増とか、勞働時間の減少と云ふやうな、物質的方面のみの要求を以つて滿足せず、自ら産業の經營に携はらんとする氣勢を舉げつゝある事は我々の特に注目すべき現象である。此の氣勢は英米の勞働組合運動の方針を一變し、勞働運動の全部に新しき活氣を注入し、一般勞働者と社會主義者其他の社會改造論者との意向を接近せしむるものなる事は言ふまでもない。英國の勞働運動を理解するには、此間の消息が最も大切であるから、次にその概觀だけを述べてみる。

私は嘗て英米の資本的帝國主義を評して、ツレード・ユニオンも、少くとも對外的には資本的帝國主義を是認せざるまでも反對せざるものであると說いた事がある。此の說は主として米國のツレード・ユニオンの首領ゴンパース氏の態度に照して立てた意見であつて、英ツレード・ユニオン幹部の人々の精神から觀れば、今も尙取消すべき必要を感じないが、今日はツレード・ユニオン幹部の中に革命が起つて居る。米國に於てもゴンパースは勞働者の中に甚だ受けが善くない。彼が今日迄成功すべき同盟罷工を、資本家側に與つて抑へて來た例が幾つあるか知れない。であるから、自覺して居る勞働者の中にはゴンパースの名は禁物である。先づ彼を槍玉に舉げよと叫ぶ聲さへも聞かれる。米國に於てはまだまだ此の氣運は微々たるものであるが、英國に於てはツレード・ユニオン改革の運動は既に大きな實際運動となつて居る。

學問的の言葉で言へば、勞働組合にはCraft unionismと云ふものとindustrial unionismと云ふものとの二種類ある。craft unionismと云ふのは職工の技術的分業を標準として區別したる組織である。であるから、一つの造船所にも、鍛冶屋がある、木工職がある、リベツト打專門の職人があると云ふ風に幾つもの組合がある、そして其等の組合が一つの造船所で相互に利害衝突をやつて居る。また一つの組合にしても、組合員は仕事の種類は同一であるが、勤めて居る工場が違ふために、散亂して働かねばならぬ、其結果は事ある時に統一が出來ないと云ふ事になる。資本家にとつては頗る都合の好い組織で、同盟罷工などの場所には、敵を以つて敵を制し、或は敵の連絡を裂いて、各部分を孤立無援の境遇に陷れる事も出來る。更に組合の

幹部の方でも一つに結束した組合員に接すると云ふ機會は殆どない。從つて事件のある毎に組合員に交涉するよりも先づ資本家に交涉すると云ふ事になる。其結果自ら資本家の買收策に陷り、積弊の致す所遂に幹部は資本家の手先となり了るのである。英國には此種のユニオンは二千以上もある。纏つた運動が出來やう筈がない。幹部が腐敗するのも自然である。併しながら十數年前より、殊に戰爭中から、之に對する反動が起り、各種の craft unions が產業の種類別によりて合同せんとする運動が盛んに現れ、現に合同が成つて强大なる組織を作つて居るものが幾つもある。前に言つた三角同盟の如きは其優なるものである。產業の種類別によりて組織せられる組合運動を稱して industrial unionism と云ふ。併しながら industrial unionism の理想は單に產業の種類別によりて勞働を組織するのみならず、勞働階級全部を一つに組織せんとする事、則ち勞働者の政府を建設せんとするにある。

英國の勞働運動は、勞働者の政府を建設せんとするやうな極端な方向には流れて居らぬが、舊來の craft unionism が衰へて、industrial unionism が勃興しつゝある事は明かである。そして此の運動を遣つて居る人は、舊來のツレード・ユニオンの名士ではなくして、職工同盟と競爭とが主で、之に將來のツレード・ユニオンの地方幹事中から數多の反逆者が加はつて居る。クライドの造船所、コベントの鐵工所などで戰爭中同盟罷工を企てゝ世間を騷がした有名なる shop steward movement と云ふの[illegible]は此等反逆者の起した運動である。此種實際運動の首領連はイングランド人には少くして、スコツトランド人、アイルランド人に多い事は注目すべき現象である。此の運動には暴行が伴ひ易く勞働者以外の一般人民からは兎もすれば危險視されるにも拘はらず、學者が同情を寄せて居ると云ふ事も注意すべき事である。

學者は理論を與へて此の運動を善導せんとする。學者の與へる理論とは、言ふまでもなく產業自治の理想論である。學者が勞働運動のプロパガンダを行ひ、また實際勞働者に主義理想を與へて、彼等の欲求を精神的ならしめて居る事は疑ひない事である。學者の感化は實際である。學者を引出した序に、近頃學說として名高き Guild Socialism につきて一言して置く。英國勞働運動の精神を說くには、どうしても此の學說を紹介して置く必要がある。

六

學說と云へば高遠なる事のやうに聞へるけれども、此は極めて簡單なるので、而もその或る部分は實際運動として現れて居

る。私が今迄述べて來た炭抗國有と、之に伴ふ炭抗經營方針も、此の學說を具體化する運動である。否、寧ろ斯る實際運動があるから、學說が生れて來たと言つた方が適當である。Guild Socialism の眼目は產業自治である。生產事業は、種類別を標準として區別し、各種類每に其の種類に屬する勞働者（手働、腦働を含む）の自治的經營に委すより外に方法がなからう、またそれが最も成績の擧る遣り方であらう。官營にしては、勞働者が無責任になり易く、官吏に腐敗が起り易く、凡てが規則づくめになつて實績が擧らず、進歩が止る。而已ならず官營は稍もすれば、政府を資本家にして、舊來の私有資本制度の罪惡を繰り返へさせると云ふ恐れがある。此の意味に於て はGuild Socialism はマルクス正系の社會主義に反對して、寧ろシンヂカリズムに接近して居る。私自身はマルクス正系の社會主義にそんな弊害が伴ふものとは必ずしも考へないが、兎も角も Guild Socialism を主張する人はこう云ふ風に考へるのである。此が學說の第一段で、第二段は政治論である。生產事業は國家社會の仕事の全部ではない。生產事業は勞働者の手に渡しても、國家は、教育、衞生と云ふやうな幾多の仕事を有つて居る。而已ならず各產業相互の關係を國民全般の綜合的目的から調節すべき責任がある。特に消費者階級の利害を擁護すべき任務がある。政治家の仕事は成るべく少くする程よいが、民間の各利害を統一して行くだけの權能は與へて置かなければならないと云ふのが Guild Socialism の政治論である。統一の權能と云ふのは程度の問題で、頗る徹底しない議論であるが、妥協精神に富み、常識の發達したる英國人には、此の程度問題が容易に解決せられる問題であるかも知れない。それは別問題として、消費階級と云ふ事が特に私の注意を惹く。生產權が組織的勞働勢力で固められる以上は、消費者側も亦之を牽制し得るだけの組織を要する。組織的勢力の後援なくして、徒らに政府の好意的調節に賴るは、資本家の政黨政治に善政を求めると同樣、失望すべきは知れ切つた事である。

英國の將來は Guild Socialism の方向に傾いて居る事は明である。そして Guild Socialism が成立するならば、どうしても消費階級の組織運動が現れねばならぬ。私は兼ねて、日本の如き社會に於ては、勞働運動を組織するよりも、先づ一般消費階級を組織する方が時代の要求に適した方針であらうと考へて居るので、特に英國消費階級の運動に注意して居るが、英國にはまだ此の種の組織的運動が現れてゐない。近頃は People's League などと稱へて、組織の必要を絶叫する議員もあるが、實際團體としては未だ觀るべきものがない。勿論購買組合の發展は著

に歸くべきものであるが、私の言ふ消費階級の組織とは、購買組合のやうな局部的實際取引事業を指すのではなくして、政府の經濟政策を指導或は牽制すべき、一般消費階級の輿論勢力の組織統一である。私は其の組織方法に就て多少の意見を抱いて居るが、今は之を發表すべき機會ではない。

七

以上の描寫に於て、私は遠慮こそすれ、誇張した點は決して無い事を誓言する。戰勝國の英國にしてさへ、斯の如し、況んや歐州大陸の事、推して識るべし。巴里の講和會議は、燃え盡きんとする帝國主義の最後の焰である。此の焰の反映を眺めて世界の大勢を觀た氣でゐてはならない。

『英國の狀態は誠にお氣毒なものである、物價は高し、食物は不味し、旅館の設備は舊式で、洗濯を賴んでも十日以上もかゝる。勞働者は働く氣でなし、グラスゴーの職工は金が余り過ぎて飲む酒が不足だと云ふので、土曜日の夕方などには鐵槌を提げて市中を横行する。それのみか昔紳士國と云はれた英國に、今何の紳士的體面があらうか、ピカデリーの繁盛はどうだ、ハイド・パークの光景はどうだ、晝日中に男と女が抱き合つて離れない組が幾千あるか。何所を見ても惰氣滿々、如何にも古い國民であらう、古い生命であると思はせる。此國に最早何の覇氣があらう、何の新生命があらうぞ。』かう云ふ感想を私は紐育に居た時、屢々英國から歸つて來る邦人の口から聞かされたものである。英國には新社會建設を目的とする勞働運動があると云ふ事を忘れて、資本的帝國主義の文明に親んだ目で觀れば、如何にも英國はお氣毒である。强がりの日本人が『英國最早恐るるに足らず、恐るべきものは米國である』と云ふ信念を抱いて歸るのも一應は最もである。如何に巴里の外交に成功しても、領土が增えても、本家本元の内が此の態では、英國の運命も窮せりと云ふべきである。印度に暴動が起れば、勞働黨は之に應呼して政府を彈劾すると云ふ有樣、一葉落ちて天下の秋を知る、英國の帝國主義の内部から瓦解すべき運命に迫つて居る。英國政治家が如何に對内自由主義、對外保守主義の兩刀の使ひ分けに巧みでも、此の國民を率ゐて、帝國主義に益々成功すべしとは、如何としても考へられない事である。『英國最早恐るるに足らず』日本の强がり連中は得たり賢しと思つて居るかも知れないが、英國の虛に乘じて、日本はまだ帝國主義で成功する見込があると思つたならば、それこそそれこそ時代の大勢を履き違へた意見である。

若し日本がそんな考で進むならば、英國の資本家や帝國主義者よりも、勞働者が猛然として起ち、武器を取つて日本に當る事

をも避けない。昨年英國勞働黨の宣言した所謂「勞働憲法」なるものを讀んでみると、其序言の一節に、大隈侯の言を證して、日本は今次の大戰を以つて歐州文明の破滅であると心得て居るやうであるが、如何にも今次の大戰は資本主義文明の破滅を語るものである、此の意味に於て歐州大陸も英國もよろしく破滅すべきであるが、英國の虚に乘じて、日本の如き國が帝國主義政策を以つて立ち得ると思つたならば、途方もない心得違ひであると云ふ意味を暗示して居る。英國の帝國主義が破滅するとすればそれは、自覺的破滅であつて、軈て新文明の起る前提である。社會問題に惱む英國の弱味を悔つて、竊に漁夫の利を想ふやうな心驕しい日本人の心こそ戒しむべきものである。英米の帝國主義に對して、敵愾心を起す日本の許容は、英米勞に於の勞働黨は日本を世界唯一の唯一の帝國主義乃至資本主義の國家として呪つて居る事を忘れてはならない。勞働黨や社會主義者の日本を憎んで居ることは、實に私の豫想以上である。日本は資本的帝國主義の國家から孤立さゝれるやうな恐れは少いが、若し大戰の結果として歐洲列强が社會主義化すれば、世界に於て第一に排斥せられる國は日本であらう。兎も角も、日本は、世界に横溢せる社會民主主義乃至産業民主主義の大勢を直向に觀て、日本の國情に應じ、國際關係に鑑みて、適宜に之に順應すべき方針を立てなければならない。民の愚なるを奇貨として國是を定めては誤りである。五日廿八日稿

世界の二大勢力より脅かさるゝ日本

永井柳太郎

(一)

今日の世界を支配する二大勢力がある。一はアングロサクソニズムとも云ふべきもので、英米兩英語國の文明を以て世界を指導せんとする運動である。二はボルシエヴイズムで、全世界を通じたる勞働者の革命に因り、全世界の社會組織を改造せんとする運動である。英米兩英語國の文明を以て全世界を指導せんとするの精神は、巴里講和會議の進行中に於ても、亦具體的に編成せられたる國際聯盟の規約中に於ても、極めて明白に之

を認識する事が出來る。例へば山東問題に關して日支兩國の全權が爭ふに方つても、英米兩國全權は寧ろ團結して支那全權を援け、日本の勢力を東洋より驅逐するといふ事に協力した。唯フユメの問題に關して米國全權ウイルソンと伊太利全權オルランドと意見を異にし、米國全權ウイルソンがフユメを伊太利の領土と爲さんとするはオルランド個人の意見にして伊太利國民の要求と認めずと稱するや、オルランドは非常に憤慨し、余の要求が果して國民の要求にあらざるや否やを確かめんと叫んで、決然巴里を去り伊太利に歸つた。當時豫て米國全權の橫暴に憤懣たる歐洲諸國の新聞紙は、ウイルソンを脅喝する意味に於て、啻にオルランドに同情するのみならず、日本全權も遂に山東問題に關する要求の容れられざるを憤り同じく巴里を去るべしと論ずるやうになつたので、米國自身よりも英國が大に驚き、非單獨講和條約の調印者たる日・英・佛・伊四ケ國の內、日、伊兩國が脫退するに於ては、講和條約の成立不可能となる事を恐れて、英國全權中の一人バルフオア氏が非常に憂慮し、斡旋して遂に山東問題に關する日本の要求を假承認する事に決定したのである。併しロイド・ジョージ首相に至つては最初よりウイルソン大統領に同情し、毫も日本全權の主張を支持せざりしのみならず、[illegible]

ける侵略主義を攻擊せしめたる事實がある。

其他人種問題に於ても英米兩國は斷乎として日本の主張に反對し、四月十日の國際聯盟委員會に於て、日本の主張が幸にも曾て日本移民の煩ひを受けたる事無き多數小國の援助を得て、反對六票に對し贊成十一票を收めたる時の如きも、時の委員長ウイルソンは前日の會議に於て國際聯盟の首府を議したる時、ウイルソン自身の主張なるゼネヴアが贊成十二、反對六の割合なりしに拘らず之を通過可決と認めた事實があるのに、日本の要求は之を否決と宣言した。當時日本全權は其矛盾を指摘し確かに多數を制したる日本の要求が否決と宣告せられたる不合理を爭はざりしが故、有邪無邪の內に日本の要求主張は消滅したのである。兎に角此等の事實に徵しても、英米兩國の間には確かに意思の疏通ありて、世界を指導せんとする默契ある事を察するに足る。

固より英米兩國の利害關係が何時まで一致するかは疑問である。米國は戰前世界貿易の十分の一を占めたるが、戰後は五分の一に增進し、已に英國を凌駕する大貿易國となつた。英國が講和會議の劈頭に於て獨逸に課すべき講和條件を議し、先づ獨領植民地の占領を確實にせんと欲したる際も、米國が國際聯盟[illegible]

盟の所有權に移す事としたので、英國は纔かに其委任統治權を得るに止まつた。又最近米國が戰時中其港灣に逃入したる獨逸の船舶六十五萬四千五十噸を其儘押收する事を宣言したが、此莫大なる船舶を米國が押收するに於ては英國の海運業は大打撃を受けるのであるから、英國民は之に熱烈に反對し、私の滯在中英國議會は、第一に米國の港灣に獨逸の船舶が逃入したるは英國海軍が之を壓迫したるが爲めなり第二に戰時中に於ける米國船舶の損害は僅かに二十五萬八千噸なるに反し、英國船舶の損害は七百六十三萬噸を越えたり故に獨逸の船舶は之を英國に於て押收するを至當とすと主張した程であつて、英米の利害關係は今日に於てすら必ずしも一致しない。殊に米國が自ら歐洲の政治に干渉しながら、國際聯盟規約に於て公然モンロー・ドクトリンを承認せしめたるが如きは、最も英人の感情を損ふたやうであるけれども、併し英米兩國の識者は英米兩國の團結によつて世界を支配することが、兩國相爭ふよりも遙かに相互の利益なりといふ事を自覺して居るのであるから、當分英米兩英語國が世界の外交に號令するといふ大勢を動す事は出來ないであらう。

（二）

唯此處に日本の憂とすべきは、此世界に號令せんとする英米兩英語國の日本に對する反感が非常に强烈なる事である。昨年七月米國に於て日本の西伯利出兵を必要とするや否やに就て盛んに論議せられたる時の如きも、「ワシントン・タイムス」紙の如きは、獨逸が武斷政治なるが如く日本も武斷政治なり、獨逸が侵略主義なる如く日本も侵略主義の國なり。故に日本をして獨逸を驅逐せしむるも、其結果は毒を以て毒に代ふるのみ、寧ろ獨逸人は人種に於ても、亦宗教に於ても、日本よりは我等に近き丈け意思疏通の途ありといふが如き事さへも書いた。加ふるに巴里講和會議に於ける支那全權の活動は益々日本に對する誤解を深からしめたのみならず、ハースト系の諸新聞は依然として排日思想を鼓吹し、昨年末米國の元老院の出版物取調委員會が偶然に發見したる書類中には、ハーストが其經營せるハースト系の諸新聞の主筆に對し、「諸君は目下米人が獨逸に對して有する反感を日本に向けしむる事に努力すべし」と命じたる書類があつた程である。最近米國共和黨首領ロッヂ氏が元老院に於て、日本にして其支那に對する侵略主義を放棄するに非ずんば、寧ろ米國は國際的正義の爲めに日本と鬪はんのみと演說せるに徵するも、如何に米國民の日本に對する反感が深刻であるかを想像し得る。

日本は日英同盟と云ふ空名に縛られて、今尙ほ英[illegible]

て居るけれども、今日英國民は殆ど日本と同盟國である事を忘れて居るのみならず、寧ろ日本を以て東洋に於ける英國の發達を阻害する第二の獨逸なるが如くに考へて居る。今春ベルンに於ける萬國社會黨大會に於て前英國勞働黨代議士なるフイリップス・スノードンの夫人が演説をして、「所謂五大國の中唯一國世界を指導する資格なきものあり、其國たるや國內に於て今尙ほ階級政治を行ひ、多數の勞働者は選擧權を有せず、斯くの如き國家が如何にしてデモクラシーに基く世界改造を目的とする講和會議に於て他の文明國を率ゆる資格あらんや」と唱へたのである。而して此思想は又多數の進歩せる英人の思想であつて、かの人種的差別撤廢案が講和會議の議題となつた時も、英國新聞紙中には日本政府自ら其國內に於て或る者には選擧權を與へ、或る者には選擧權を與へず、其國民に差別的待遇を爲しつゝあるに非ずや、而して他國に向ひて自國民の平等なる待遇を要求するが如きは矛盾に非ずして何ぞや、日本にして眞に各人種の平等を信ずるならば、先づ日本自ら其國民を平等に待遇すべしと論じたのである。從つて英人は大體に於て日本を目して武斷政治の國、侵略主義の國と認むる事米國と大差無く、東洋に於ける日本の跋扈を制し、其戰時中に侵略せられたる貿易の販路を回復する點より見ても、米國と共同して日本に當るを得策と考へて居るのである。日本人中には日本も亦英米兩國の仲間入りを爲し日・英・米三國の共同に因つて世界の平和を保障すべしと主張する者もあるが、英米兩國民より之を觀れば、恰も[illegible]かい、い胡麻の蝿と道中を俱にせよと云はるゝ如く迷惑千萬の事であつ[illegible]て、日本の如き軍閥專制・侵略主義の國あればこそ英米兩國民の提携が必要なりと答ふるであらう。

兎に角これが如何なる程度まで誤解であり、如何なる程度まで正解であるかは別問題として、英米兩英語國が共に日本の武斷政治及び侵略政治を危險なりと爲し、出來得る限り之を壓迫して、兩國の力に依つて東洋に於ける日本の活動を拘束せんとする方針を取れる事は爭ひ難き事實である。

（三）

次にはボルシエヴイズムの勢力がある。ボルシエヴイズムの學術上の性質に就ては、學者の間に種々なる意見の相違はあるけれども、其根本思想がカール・マアクス及びフリイドリッヒ・エンゲルス等の唱へた階級戰爭に存する事は明白である。一世紀前那翁戰爭に於て、英吉利・普魯西・墺太利及び露西亞等の諸國は幸に那翁の軍隊を征服し得たれども、而かも其征服せられたる佛蘭西の思想家なるルソー及びヴオルテア等が點火したる主權在民の思想に基く政治革命の運動に對しては如何ともする

事態はず、政治革命の風潮は殆ど全歐を風靡した。當時專制主義の政治家は如何にもして主權在民の思想を打破し自由革命の思想を抑壓せんとして、恰かも今日の日本政府の如く新聞紙の論說を檢束し、佛蘭西文學の輸入を禁じ、大學教授の講義を監督し、學生の集會を解散し、遂に墺太利の宰相メッテルニッヒの如きは自由革命思想の撲滅には各專制國政府の聯合的努力を必要とすと信じて有名なる神聖同盟を組織した程である。それにも拘はらず自由革命の風潮は愈々猖獗を極め、遂に那翁をウオタールーの戰場に於て征服し得たるウエリントン將軍さへも、一八三二年の英國議院改革運動に於ては民衆の前に屈服して、佛蘭西より出でたる革命思想の爲めに其政治的生命を奪はれた。

政治革命と經濟革命との相違はあるが、世界戰後の今日に於て殆ど同じ事實が繰返へされんとして居る事は頗る興味ある事實である。聯合諸國はカイゼルの獨逸軍隊を征服し得たれども、獨逸の思想家たるマアクス及びエンゲルス等より出でたる階級戰爭の觀念を撲滅する能はず、其思想觀念が先づ露西亞に入り多年官僚軍閥及び貴族の專制に惱みたる露西亞人の不平に結び着いて經濟革命の大噴火となつた。而して今や燎原の火の勢ひを以て洪牙利を陷れ、墺太利を動し、獨逸に於ては故カール・リープクネヒト及び故ローザー・ルクセンブルグ等の率ひたスパルタカス・グルッペの急進社會主義者と相通じて、其經濟組織を根柢より顚覆せんと努めて居る。英國に於ても曾てジョセフ・チエンバレンが或る集會に於て、「佛蘭西革命の時多數の窮民が時の大臣フウロンに對し食糧の缺乏を愬へるや、フーロンは傲然として汝等食ふもの無くんば草を食へと罵つた。此處に於て追の窮民も大に激昂し、直ちにフーロンを木に架けて其口に草を詰めて殺した事がある。然るに我が英國では十九世紀中葉の饑饉に際しノルフオール公所有の土地に働く小作人が其窮乏を愬うるや、ノルフオール公は汝等食ふもの無くんば水にカレー粉を投じて之を啜むべしと叱咤したに拘らず遂に何等の反抗を爲し得なかつた程、我等英人は大陸の諸國民に比して神經遲鈍なり」と嘆じた事があるが、此くの如く嘆ぜられた神經遲鈍の英人も、今日は過激派の思想の宣傳に動かさるる事甚だしく、殊に軍器軍需品工場の俄然たる縮少と戰場より歸還したる軍隊の解散とに伴ふて多數の失業者を生じ、生活困難の爲めに苦しむ者多數なので、其思想の宣傳は甚だ有効である。殊に最近起つた "Shop Stewards Movement" は、凡ての工場の經營は勞働者自身の選出したる委員に依つて經營すべきであると云ふ思想が勢力を得つゝあるのみならず、既設の勞働組合も次第に其內容を變じて、「かのロバート・スマイリーが率ゆる炭

夫同盟（會員八十萬）、ロバート・ウイリヤムの率ゆる海運勞働者同盟（會員三十萬）、及びジエー・エッチ・トーマスの卒ゆる鐵道勞働組合（會員四十萬）の如きは所謂三角同盟と稱するものを組織し、鑛山、船舶及び鐵道國有とし、之を勞働組合の經營に委任せしむる事を目的とし、三者中の一が同盟罷工を爲す場合には、他は必ず之を應じて其目的を遂ぐる計畫を以て活動しつつある。元來英國の勞働組合は最初は賃銀制度を認める穩健なものであつたが、一八八九年の有名なるドック・ストライキに際して獨立勞働黨及びフエビアン社會主義者等と提携したる結果として、始めてソーシアリズムの色彩を帶び、次いで一九一一年及び一九一二年に至つて有名なるトム・マンの組織に因り佛蘭西のサンヂカリズムの思想を吸收し、殊に著しく急進的となつたのであるが、最近又ボルシエヴィズムの思想の宣傳に依つて、愈々共度を強めたのである。今や英國勞働者中には過激派じ勞働者なる露國の職工・農民等が社會改造の試みを爲しつゝあるを防害する能はずと云ふ理由により、徵兵に應ぜず、政府も亦之を強制せんとすれば國內に騷亂を見んと云ふ危險に瀕して居るのであつて、如何に過激派の思想の蔓延しつゝあるかを想像し得られる。米國に於てはサムエル・ゴムパースの率ゆる穩健なる米國勞働聯盟が約四百萬の會員を有し、賃銀制度を認め、比較的に穩健なる態度を持して、資本家と勞働者との中間に於ける緩衝地帶として働いて居るが爲めと、政府及び新聞紙の過激派に對する對抗的思想の宣傳が旺盛なのとで、歐洲に於けるが如く十分に活動はして居ないけれども、兎に角戰前に比して勞働者の思想が一體に過激になつた事は爭はれぬ。

（四）

此ボルシエヴィズムの思想は今や種々なる思想宣傳の方法に依つて日本をも動かさんとしつゝある。その日本社會に對する壓迫力は、之を外交上に於けるアングロサクソニズムの壓迫に比べて優るとも更に劣る所を見ない。斯くの如く日本は今や世界に横溢しつゝある所のアングロサクソニズム及びボルシエヴィズムの二大勢力の壓迫を受けつゝあるのであるが、日本官民の間に於て此二大勢力の本質に對する理解が普及して居ない事は迂闊且つ危險である。日本國內を觀れば今尚ほ軍閥官僚及び貴族の少數專制が繼續して、依然として世界の大勢に通ぜず、國民の生活とは沒交涉なるが如き政治家が、世界の大勢より孤立し國民の生活に沒交涉なる政治を繼續して居る。私は曾て有名なる英國小說家の書いた「帝國の臣民」と云ふ短篇を讀んだ。一人の失業せる勞働者が毎日職業を求めて得ず、疲勞と

困憊とに堪へ兼ねて家に歸り、覺えず椅子に依りかゝつて不圖机上の新聞に眼を着けた。讀み行く内に英國皇帝の戴冠式に關する記事があつた。其處には印度、キヤナダ、濠洲、南亞弗利加等の各地方の代表者が皇帝に祝詞を奉る事を叙して、「今日の英帝國に昔日の羅馬に優る光榮ある帝國なり」とあるに至つて、彼は覺えず其新聞を床上に投げつけて、「一人の勞働者の空腹をだに充たす能はざる帝國が何の光榮ぞ」と叫んだといふのである。實に此一勞働者の叫びの如く、幾度内閣が更迭するも、それが國民の生活に沒交渉なものなら、國民の經濟生活上に何等の改善も進歩をも意味せざるが如きものであるなら、内閣の更迭何の意味かある。假令朝鮮、臺灣、滿洲に亙る大帝國を建設するも、其利益が單に南滿洲鐵道とか東洋拓殖會社といふが如き會社の少數株主のみに壟斷せられるならば、領土の擴張何の尚きぞ。今や日本國民も物價の暴騰と極端なる生活難の爲め、動もすれば自暴自棄の暴擧にさへも出でんとするの形勢あることは、昨年の米騷動によつても明白である。此際日本に最も緊急なる事は、貴族軍閥及び官僚の少數專制を打破し、眞に日本國民の生活を以て自己の生活と爲す政府を組織し、食糧問題に就ても、勞働問題に就いても、又貿易問題に就いても、眞に日本國民の痛切なる欲求に一致する、徹底したる政策を斷行し、眞正なる意味に於ける國民的内閣を作るべきである。日本が其政治組織の上に於ても、又經濟組織の上に於ても、生れ甦る一大努力を爲さざる限り、英米兩英語國の壓迫と露獨兩社會主義國の脅迫とは益々激烈になつて、それが國内に於ける國民の不平に結び付いた時には、復々昨年の米騷動や或は米騷動以上の椿事が出來しないとも限らない。封建日本が世界の壓迫によつて開國進取の國是を餘儀なくせられた如く、專制日本も亦再び世界の大勢に壓迫せられて、第二の開國進取を餘儀なくせられて居る。

カイゼル審判問題

カイゼル處分問題

文學博士 三宅雪嶺

（一）

戰勝者に於て獨逸前カイゼル以下百數十名を召喚し、審問しようと云ふのでいろ／＼の議論がある。或は斯かる事の有り得べきでないとし、若し審問するならば、原告たる聯合國側に於てせず、中立國に委任すべきであると說くが、將來は格別、從來の狀態にて國家と國家と開戰する場合、互に自ら原告と裁判官とを兼ね、戰捷の曉に宣告しようと待構へて居るのである。中立國に裁判を仰ぐ程ならば、初めから開戰に成るべきでなく、開戰と成つては戰勝者の意のまゝと承知せねばならぬ。戰勝者が勢に乘じて橫暴を逞しうするか、又は正義人道を顧みて遠慮する所あるかは、其時の當事者の心理狀態如何による。豫め定[illegible]なく、何を以て裁判するかと云ふのも、國際戰役に當て嵌まるべきでない。後には國際聯盟又は其他の事情で、國際裁判に適する法律の成立するであらうが、其成立せぬ間は戰捷者の最も適當とする所に據つて決定するの外は無い。法律なければ處罰すべきでないと云ふのは、斯く決定した範圍內の事であつて、其範圍外にも適用するのは、獨逸本國人に對すると、其阿弗利加植民地の黑奴に對すると同一に處分すべしと云ふに同じい。何にしても戰役は力を以て決定するものと諦め、戰勝者に成るべく道理に據つて貰ひたいと希望するに止まるべきである。

（二）

世界戰役と云ひ、名からして前例無く、戰後處分に就いて前例無い事を敢てするの避くべくもない。勝敗が決せねば夫れまでのことで、既に決した[illegible]する所に[illegible]

ぬ。責任者を審問すると成つては、召喚さるゝまゝに出席せねばならぬ。若し召喚さるゝのが恥辱であるならば、夫れ相應の覺悟を要する。が、召喚さるゝこと共事は名譽でなければ、恥辱でもない。是を是とし非を非とすると云ふのであつて、自ら是と信じて居るならば、思ふ存分に法廷で陳辯すべきである。是れ實に世界の判斷を竢む所以のものである。裁判は初めて公開するであらうから、其處で是非曲直を論ずるのは、直ちに世界に反響する。兵力を以て爭つたものが、此處に言論を以ての爭となる。兵力で破れて言論で勝たぬと限らぬ。法廷に出づるのを好まぬのは、自ら適當の理由無きを信ずるが故と認めねばならぬ。自ら適當の理由あると信せば、進んで裁判を要求すべきでないか。原告が裁判官となり、勝手な宣告を下すならば、世界の非難を免るる事が出來ぬ。聯合國側の有力者は聖賢でないにせよ、甚だしく物の分曉らぬ方ではない。多數が道理とする所に出ようとするであらう。召喚される者は振つて出廷すべきである。

(三)

他人の出廷は可いとし、前カイゼルを除外しようとするのも當らぬ。ベートマン・ホルウェッヒやヒンデンブルグや、カイゼルの代りに自ら責任に當らうとし、皇子が父の身代りにならうとするのは、尤もと云ふ事が出來ぬ。代つて責任に當らうとする連中は當然召喚せらるべき者であつて、代るも代らぬもない。カイゼルと共々に處分せらるべき者に屬する。當然處分せらるべき者がカイゼルに代らうなど、虫の好い話とせねばならぬ。多寡の知れたホルウェッヒ一彊がカイゼルに代らうなど、分に過ぎた言分でないか。カイゼルは法廷に出る程ならば自殺すると云ふた由に傳ふるが、眞逆さういふ事も有るまい。國内の法廷に出づるのは恥辱であらう。君主を以て臣民の裁判を受ける事になる。君主の位置を重んずる者が之を拒むのは理由がある。國際法廷に出づるは、君主の位置を傷ける惧がない。君主は臣民と結婚せず、他國の君系と結婚するが如く、自身と同格の人の前に出づるに恥づべき事がない。況んやカイゼルは既に退位し、ホーヘンツオルレルン伯として和蘭に逃げ込み、最早君主も何もあつたものではない。今更ら法廷に出るのが恥辱であると云へた義理でない。噂の如く多藝多能であり、辯舌にも長じて居るならば、進んで獨逸及與國の全責任を負ひ、我一人を處分せよと申出すのが可い。裁判官は一人を處分するのか、或は他の多くを處分するのか、裁判の經過を見ねば分らぬが、曾て世に鳴り響いたカイゼルとして、責任を避けず振つて之に當るが順當であるまいか。獨逸とて全く理由が無いでは

から。何故に國家を賭して四年半も七轉八倒したか。已むを得ざる事情あつてのことである事を充分に陳べ立てるならば、今更らのやうに人に覺らす所ないとせぬ。前カイゼル以下夫れ夫れ裁判せられると云ふのは、其人に取つて幸とすべきでないか。カイゼルが評判程の才能あるならば、詳かに事情及び理由を開陳し、戰勝國をして藪蛇の觀あらしむるを得べきである。アドミレーヴル・クライトンに比べられた多才の人、之れ位の事が出來なくて何うするか。

（四）

夫れは夫れとして、法廷で着々審問し、罪に應じて處分する事にならうが、何と云つても強い者が勝つ。其上獨逸側に無理が有り、白耳義の中立を破つたり、潜水艇で無暗に商船を襲つたり、何とも申譯の無い事がある。獨逸側に言分があるとして、召喚さるる者の多數は有罪たるを免かれまい。其處で如何なる處分になるか、責任を問ひ糺す段、隨分さまざまの事があり、處分も一通り二通りでない。ナポレオン一世を島流しにしてネイ元帥を死刑に處したやうに、死刑に處するのがあるかも知れぬ。白耳義の難儀した民から觀れば、何人か死刑を値する者が居らう。唯自分一個の利益の爲めにしたのでなく、普通の罪人を取扱ふのと違はねばならぬ。カイゼルが最も責任あるか何うか。前にカイゼルが獨斷擅行、首相を秘書扱ひにして居つた所から觀れば、最も責任あるとせねばならぬが、實は夫れ程力あるのでなく、官僚及び軍閥に動かされた所多く、情状の酌量すべきものあると見るやうにならぬと限らぬ。前皇太子は荐りに父の責任無い事を主張して居るやうである。其處は法廷で明白に成るべきものとする。如何にしても前カイゼルは全く責任を遁るる事が出來ず、矢張第一の責任者と認められるであらう。第一の責任者としてナポレオン一世のやうに島流しにすべきであるか。假りにカイゼルが噂通りに才能あるとし、如何に贔負眼に見ても、ナポレオン程の才能及び精力が無い。國民に於ける信望も無い。ナポレオンはエルバから脱して來て全國を風靡した。カイゼルは自ら和蘭に逃れ、國へ歸つても何を爲す事も出來まい。ナポレオンのやうに遠く島流しするに及ばぬ。捨てて置いても差支へなからう。

（五）

けれども七百萬人が戰死した程の大戰役の第一の責任者として、平氣で有り得るとするのも道理を得て居らぬ。何の事情あるにせよ、處罰すべきである。刑罰として自由を制限するのが最も穩當である。ナポレオンのやうに復活するの慮れなくても、世界に大騷ぎを起させた責任者として多少拘束せねばなら

ぬ。先づ無期限に自國及び與國に入るを禁じ、又中立國に居住を定めないやうにすべきである。國内に復辟運動もあり、或は何等かの方法にて講和條件を中途に遁げるやうになるとの憂慮もある。其處で初め三年間聯合國中最も遠方の日本に居住する事になし、三年間の樣子を察し、何事も無いと見極めた所で意のまゝに、聯合國二十四ケ國内、何處へでも行ける事にすべきである。日本に居るならば密かに逃げ出す事あつても、中途に抑へる事が出來る。平生間接に監視し、旅行も自由にさせて可い。前カイゼルは隨分我儘者であり、幾許か自由を制限するだけで十分に制裁となるう。戰役で最も苦痛を蒙つた白耳義など、自國に拘禁して嬲り者にしたいであらう。佛國でも巴里に置いて嬲り者にしたからう。然し裁判官に於て斯かる事を慘酷とし、成るべく刑を寛かにしようとするであらうし、簡にして要を得るには聯合國で最も遠い日本に居住させるのが可い。ナポレオンなればこそ太西洋の一孤島に生涯を終らしめたれ、ウキルヘルム二世は之れ位で可い。千古の英傑と成り得ぬ代り、比較的生活に安樂を覺えさすべきである。

カイゼル處分問題

室伏高信

（一）

『普通の犯罪には制裁がある。帝王の犯罪にも制裁のあるのが當然である。』ロイド・ヂョーヂはこう述べてゐる。それは昨年末（一九一八年十一月二十九日）彼れがニューカツスルにおいて述べた演說の一節である。その演說によつて、カイゼル處分問題なるものは、世界の驚異のうちに、ロイド・ヂョーヂによつて提唱せられるに至つたのである。彼れがこの問題を提唱して以來の經過については公表されない事實であるから權威ある材料をうることができないにしても、講和會議における戰爭責任委員會においてこの問題の議せられたことも明白であり、またロイド・ヂョーヂが講和豫備會議においてこの問題を力說し、ウキルソンの反對にもかゝわらず、遂に處罰に決したものである

ことも、最近タイムス紙上におけるチロルの寄書によつて明らかにされたようである。從つてこの問題についての首唱者であり、また主なる責任者であるものがロイド・ヂョーヂであることもチロルの右寄書においていつてゐるとほりである。先づロイド・ヂョーヂのカイゼル處分論の根據について見るに、彼れは三つの理由を述べてゐる。その一つは開戰の責任者としてのカイゼルの罪を問はんとするにある。次の一つは國際法の違反者としてのカイゼルの責任を問はんとすることにある。最後の一つはこの責任者を處罰することによつて將來に國際法の威嚴を維持し且つ世界平和に貢獻しようとする政策的の意味である。この三點は彼れのニューカッスルの演説において明らかにされてゐる。彼れが最近(七月三日)英國下院で述べたところも略々これと同様であるらしい。從つてカイゼル處分問題を論ずることは主としてこの三點になくてはならない。

(二)

第一に考へなくてはならないことは、カイゼルはこの戰爭開始の責任者であるかどうかの問題である。私はこの問題を肯定するものである。カイゼルがこの戰爭開始の一方の責任を擔ふべきものであることだけは何人にも異議のないところであらうと思はれる。否、彼れは現に一方の責任者であるといふばかりではない。もつと重要な責任の負擔者であるべきである。サラジェヴォの事件について彼れと墺洪國首腦者との間に如何なる默契のあつたかを問はなくとも、またロシアが獨逸國境に對して總動員をなしたこと(一九一四年七月三十一日)がこの大戰の開始にどれだけの重要味をもつものであるかの問題をどう考へるにしても、それはカイゼルがこの世界大戰についての重要なる責任者の一人であることを否認するの理由となるものではない。就中リヒノウスキー公の手記(Lichnowsky, My Mission to London 英譯)は獨逸の戰爭責任を明白にしたる權威ある文書であるといふことができる。さうしてその獨逸の開戰は、攻撃戰爭の場合には憲法上聯邦議會(ブンデスラート)の同意を要するものであつたにもかゝわらず、カイゼルは單獨の責任において開戰を決行したものであるからカイゼルが開戰の責任を免れることのできないことは明白である。勿論この開戰は開戰後において兩院の協贊をうけてゐるし、社會民主黨さへもこれを支持してゐるから、カルル・リーブクネヒト一人を除きてはそれ等の人々もみな戰爭の責任を辭することはできない。この點はベルンに開かれた國際社會黨大會(本年二月三日)においてもフランスの代表者アルベール・トーマによつて提案せられ、獨逸側でもカウツキーやアイスネルなぞはそれに贊成してゐる位ひである。ま

た事實に至つては當時の宰相ベートマン・ホルヴエッヒがカイゼルの身代りとならんことを申出でたと傳へられてゐるのであるが、獨逸――舊獨逸憲法による時はカイゼルは政治上法律上最高の責任者であるから、この大戰の責任者としてカイゼルが指摘されるのは決して不當なことではない。けれども開戰の責任者であるかないかの問題は直にそれが罰すべきか否かの問題となるものではない。今日までの世界の歴史のうちにおいては、國と國との戰は無數にあつた。平和會議の創設された後においても、國際法が規定されてから後においても、國と國との間における戰爭は屢々戰はれてゐる。それ等には何れも開戰の責任者の存在すべき筈であるにかゝわらず、今日までこれ等のことは決して一々問題にされてゐたのではないのである。ロイド・ヂョーヂが南阿戰爭の當時に論じたところによれば英國は侵略戰爭を不幸なる南阿の人民に對して行つたのである。そのような侵略戰爭は今日まで屢々あつた。否、今日までの凡ての戰爭が何れかの側において、または相方において、侵略戰爭であつたといはなくてはならない。だから今回の大戰においても何れかの側または双方の側において侵略主義があり、從つて開戰の責任があるにしても、それはたゞ今日までの他の戰爭におけると何の異るところもない。その異るところは、寧ろ南阿戰爭の場合における英國の侵略主義に比べて、今回の戰爭における獨逸の侵略主義が明瞭にされないといふことと位ひである。それゆゑにカイゼルをもつて開戰の責任者としてこれを處罰せんとすることはこの意味において先づ理由のないものである。

（三）

次に考へらるべきことは、開戰の責任者がカイゼル一人であるか――獨逸一國であるかといふの問題である。先づこの大戰の最初に遡つて考へて見るに、問題はセルビアと墺洪國との間に起された。それが直に墺露の問題となり、また直に露獨の問題となつた。問題はかくのごとくに展開された。獨逸とロシアとはこの戰爭を世界大戰となすべき最初の對立として現はれたのである。この二つの國の、何れが先きに動員をなし、何れが先きに宣戰の布告をなしたにしても、われ等はその双方の側において、侵略主義の存在するものであることを疑ふほど無感覺であることはできない。歴史はこの二つの國が侵略的の國家であつたことを證據立てゝゐる。二つの侵略慾が相衝突したところに、露獨の戰爭が成立するに至つたのである。だからカイゼルが開戰の責任者であつたとすれば、ザールもまた開戰の責任者であつたといはなくてはならない。またこの戰爭は露獨の關係から同時に獨佛の關係となり、また同時に英獨の關係となつ

た。さうして遂に同盟側と協商側との對立において世界大戰と化するに至つたのである。この協商側と同盟側との對立においては、同盟側就中獨逸が協商側就中佛國に對して好戰的であつたことの事實を否認するものではないにしても、如何なる國家が好戰的また挑戰的 aggressive であつたかの問題はたゞその戰爭開始當時の關係によつてのみ論ぜらるべきことではない。一例をとつていへば、普佛戰爭の場合には、ナポレオン三世は最初に宣戰の布告をなした。この事實のためにエンゲルスのやうな卓越した眼識の人であつてさへ、尙ほそのマルクスへの手紙(一八七〇年七月二十一日)のうちで、この戰爭が佛國の側において侵略的、挑戰的であることを主張してゐる。けれどもこれ等の見解は戰爭の責任についてのその人の短見を物語つてゐるに過ぎない。戰爭の責任を論ずるためには、もつと進んで歷史的の事情、外交、または交戰國の凡ての態度についての總括的批判を試みなくてはならぬ。ナポレオン三世がビスマークの詭計にかゝつて、その最も不利益なる狀態において、彼れより先きに宣戰の布告をなしたにしたところで、ビスマークが普佛戰爭の責任者であつたことの事實を否認すべき何等の理由ともならないがごとくに、ある一國が開戰當時に好戰的態度を示したと否との問題は、その國が戰爭の責任者であるかないかの理由となるものではないのである。

（四）

最近の世界歷史を、虛心坦懷に見るものにとつては、それは英國の商業的覇權と獨逸の軍事的覇權との爭ひであつた。英國の商國主義、獨逸の軍國主義、この二つのものは今日までの世界を二分したる勢力であつた。世界のあらゆるものがこの二つの勢力に捲きこまれるか、或はその影響をうけずにはならなかつた。モロッコ問題にしても、前後二回の巴爾幹戰爭にしても、またはサラジエヴオの事件にしても、英獨の對抗は、歐洲外交上の表面裏面を縫ふてきた二大原動力であつた。だからこの世界大戰が、最初は巴爾幹の一角に起されたにもかゝわらず、また英國は稍や後れてこの戰爭に參加したものであるにもかゝわらず、この大戰が遂に英獨戰爭としての性質を發展せしめたことは素より自然の運命であつたのである。いふまでもなく、私はこの戰爭の原因と目的のうちに、民主主義の大勢力の伏在し、または表現されてゐることを主張するものであるの點において、私はこの世界大戰爭に重要なる意味を發見せんとするものである。けれどもこれを國家と國家との關係からいへば、英國の商國主義と獨逸の軍國主義とは、この戰爭の二大原因であつたのである。英國に於ても公平なる批評家はこの

點を拒むものではない。カアペンタアのごときはその熱心なる主張者である。それゆえにこの大戰において獨逸に戰爭の責任の存在するごとく英國にもまたその戰爭の責任が存在することは明白である。カイゼルにして所罰すべきものであるとすれば、英國の政治家もまた何等かの制裁をうけなくてはならないことの論理となるのである。

（五）

けれどももう一歩進めて考へて見れば、英國の商國主義も獨逸の軍國主義も、みなともに世界精神の一表徴である。彼等が世界に反逆したのではなくして彼等は世界のうへに彼等自らを組織したのである。世界に最も適するものとして獨逸的軍國主義の勃興があり、また英國的商國主義の勃興があつたのである。この二つのものは現代――現代といふよりは大戰によつて代表されたる今日までの世界を表徴すべき二大精神であつたのである。凡ての國家が何れかの程度において軍國主義的であつたことは、それ等の國家が軍隊を有し、艦隊を有し、軍備の擴張のために國家の重要なる精力を失ひつゝあつたことによつても證據立てられてゐたところである。またそれとともに多くの諸國家は等しく商國主義的であり、從つてブルジョアの國家であつた。エンゲルスは既にその晩年において、英國の資本主義が獨逸に入り、フランスに入り、和蘭に入つたことを認めたが、その資本主義は大戰前においてあらゆる世界の國家に浸潤してゐたのである。獨り英國だけが資本主義の國家であつたのではない。また獨り英米だけが資本的侵略主義の國家であるのではない。世界の殆んどあらゆる國家がこの目的のために競爭してきたのである。新興國としての日本のごときもまた素よりその例にもれない。獨逸は一方に軍國主義の代表的國家であるとともにその軍國主義はまた同時に資本主義である。資本的侵略主義である。獨り英米のみをもつて資本主義の國家、または資本的侵略主義の國家であるとなすことのごときは、この世界の現前における如實の精神と組織とを無視したる僻論であるに過ぎない。即ち獨逸の軍國主義及び英國主義はたゞ今日までの世界の組織と精神とを代表したる二大對抗であつたといふべきである。私はさう考へてゐる。また事實はさう展開されてゐる。世界が軍國主義の世界、日本もまた軍國主義の日本であることを忘れて、獨り獨逸の軍國主義を排斥することの愚なるがごとく、凡ての今日までの世界、或は現前の日本が厳然たる資本主義の國家であることを忘れて、英米の資本主義を攻撃し、またはその政體をもつて大發見、大識見なるがごとくに喝采する人々は、彼れの屬する世界、彼れの屬する日本について一切盲目なる人々で

あると申さなくてはならない。もつと具體的にいへば、今日までの世界は、權力均衡、武裝的平和の世界であつた。この世界において活躍するものは秘密外交である。この世界において優勝者となるものは、經濟的及び軍事的優越者である。その世界においては、名は武裝的平和である。けれども武裝的平和の名において、軍備の擴張、戰爭の準備、さうして戰爭の準備と準備との均衡が行はれてゐたのに過ぎない。均衡はその破れることが本則である。その均衡の名のもとに、ある國民は生長する。ある國民は萎縮する。またある國民は多年壓迫せられてきてゐるのである。その關係においては、強きものは勝ち、弱きものが壓迫せられるのは當然である。強きものは自由に壓迫することができた。弱きものは自由に壓迫せられることができた。世界は國際的にアナーキーの世界であつたのである。そのアナーキーの世界の破滅的の事件として世界大戰が生れた。今日までの世界は、この大戰を生むべく急いできたのである。獨逸然り、英國然り、佛國然り、みな然りであつたのである。何となれば世界はみな戰爭の準備をして來たからである。資本的侵略主義といひ、また軍備の擴張といひ、みな然らさるはなかつたのである。眞實に戰爭を避けようと努力してきたものはたゞ勞働階級主義の主張者だけであつたといふことができるのである。それゆゑに今回の世界大戰の責任は世界の凡ての國家、その凡ての國家の、凡ての支配階級がこれを負はなくてはならぬ。獨りカイゼルだけの責任ではない。獨り英國だけの責任ではない。世界の凡ての支配階級はみなその責任を負はなくてはならぬ。それにもかゝらはず、たゞカイゼルのみを責任者として處罰せんとすることは、モーニングポストの批評のとほり笑ふに堪えたることでなくてはならぬ。こゝにおいてか基督の言葉は眞理である。『汝等のうち罪なきものは打て。』

（六）

そこで第二の問題、國際法違反者としてのカイゼルの責任問題となるが、私はこの點においてもカイゼルの責任を認めるものである。『必要は法律を知らず』として白耳義の中立、ルクセンブルヒの中立を破壞し、無制限潜航艇戰を續行した獨逸の最高機關が國際法違反者としての責任を免れることのできないのは勿論である。けれども國家の完全なる對立を前提としてきた國際法なるものは、それが法律であるか否かゞ既に問題である。國家は主權者である。その國家以外には何ものもこれを審判すべきものはない筈である。これが今日までの世界――國際的アナアキーの世界であつたではないか。アナアキーのもとにおいては、何ものも、自己以外のものを審判することはできな

い。暴力のみよく自巳以外のものを審判する。私は國際法の違反者としてのカイゼル處分には賛成することはできない。最後に考へらるべきことは、國際法の權威を維持し世界平和に貢献するための政策上の意味においてカイゼル處分を可とするか否かの問題である。この問題は極めて簡單である。即ちカイゼル一人をもつて、或は獨逸一國をもつて戰爭責任者とすることができない限り、またカイゼルをもつて國際法の違反者として罰することの不當である限り、カイゼルを處分するとも、卉は國際法の威嚴の問題または世界平和の問題として論ずるの餘地がないからである。

(七)

カイゼル處分問題は一場の滑稽劇である。ロイド・ヂョーヂが、戰爭熱に中毒したる、或は愛國心に醉ひたる國民の人氣取りの一手段となしたに過ぎない。彼れが初めてこの問題を英國民に約束したのは、丁度、狂熱のうちに大戰が終了したる瞬間に行はれた總選擧戰の眞最中であつたではないか。われ等は英國政治家の人氣取り政策に雷同するの必要を見ない。われ等の必要をするのは世界組織の改造である。然り、カイゼル處分ではなくして新世界組織の開造である。われ等はコオペレエシヨンの世界を求める。さうして國際的民主主義の機關としての眞實なる國民同盟を求める。われ等の求めるところは、國際聯盟を排斥することに『眞正のデモクラシー』を發見することではなくして、正眞のデモクラシーのうへに國民同盟(リーグ、オブ、ネーションス)を組織することである。(六日二十日夜)

前獨帝の審判と帝の餘生

煙山專太郎

巴里媾和會議に於て獨帝の戰爭責任問題が彌々事實となり獨逸に對する媾和條約第七節は、獨帝其他に關する責任を問ふべき旨を規定するに至つた。昨今新聞紙の報ずる處に依れば和蘭政府は彌々獨帝を聯合國の手に引渡す事となつたらしい。後れ馳せの觀はあるがその責任問題に就いて並に今後の獨帝に付て少し觀察してみたいと思ふ。

英國宰相、ロイド、ジョーヂは獨逸との休戰條約締結後英國の總選擧に臨ぜんため各地を遊說して歩いたが彼はその所々に於ける演說に於て世界戰爭に對する獨帝の責任を三個條に分けて述べてをる。卽ち

一、世界戰爭は獨帝の故意にたくらみしものにして彼は自己の野心を充す爲前古未曾有の大戰爭を起し多の人類を今日の苦しみに陷れたり故に元兇として其責任を免るゝを得ず。

二、列國が神聖なる條約に於て堅く誓へる白耳義の中立を破りて憐れなる小國民に非常なる苦痛を與へたり。國際の嚴肅なる誓約を破りたる彼たる者は重大なる責任を免るゝこと能はざるなり。

三、潛水艇政策てふ野蠻なる政策を以て婦人小兒の如き多數の非戰鬪員を容赦なく虐殺したり。其罪看過すべからざるものあり。

以上の三個條を擧げて獨帝の戰爭に對する責任を問ふべしと說いてをる。獨帝の責任を問ふべしとは主として英佛の主張な樣である。これまで世界に度々戰爭はあつたが今度の戰爭の樣に、戰勝國より課せられたる辛い負擔に服さなければならぬ戰敗國の元首に對し、更に敗戰に伴ふ國內の動搖に依りあらゆる名譽、權力を一擲にしてなげうたなければならない窮境に陷つた君主に對し、なほも驅逐の手を伸べ、是を中立國ならで戰勝國自ら其局に當る所の國際裁判に引き出して刑罰を課すると云ふことはあまり例のない現象である。英、佛は同じ交戰國の中でも最も直接に戰爭の慘禍を蒙つた國民であるから彼等が敵國を惡み從て其君主を惡むに至つたその心理は幾分諒察の出來ない事はないが、日本の如きは同じ交戰國でも歐羅巴列國よりは大分戰局に遠ざかつてをるのであつて、斯くの如き問題に對しては割合に冷靜な批判が加へられ得るのである。又最早戰局も終りを告げて平和克復後の今日であるから、何人でも出來得る丈戰時的氣分から脫却して感情を第二にし理性的に總ての問題に對する事が必要である故に第三者として此の點に對する吾人の冷靜なる觀察を率直に述べんこと必しも徒爾ではあるまい。

近頃獨逸の或ポンチ雜誌に、聯合列國の人民が大騷ぎで世界戰爭の本當の責任者を探し歩き、結局、之を探しあてた處、其處にはビスマーク公の大銅像の巍然として樹つて居つた所を描いた繪があつた。之は單純な諷刺畫に過ぎないけれども、其中に含まれてる眞理は、之をものせるものの敵國人たるの理由を以て否むべきではない。戰爭の責任を理想的に論じやうとするならば、其懸り合ひは決して現在の獨逸國民若しくは皇帝に於て止る筈のものではなくて、歷史的に過ぎ去つた獨逸國民若し

くは其指導者に迄も及ぼさるべきものである。否、獨り一の獨逸に止まらず、獨逸と相並んで國際政局に轡を並べて驅逐しつゝあつた獨逸の競爭國に迄も及ぶべきものである。世界戰爭の抑々の起りを云ふならば、歐羅巴第一流の强大國より後れて國際政局の競爭舞臺に現れ出でた獨逸が、其國民を擧げての組織的の努力に依り、世界第一流の大國たるに愧ぢざる富を作り、武力を編成し、斯くの如くにして自國の最大の競爭者である處の英國と云ふ大國の地位を壓迫してあはよくば之を凌駕し樣とし之に對して英國が獨逸東西の隣國露、佛と結んで何處迄も獨逸の進路を邪魔し樣とした結果に外ならぬのである。勿論、獨逸の國力は英、露、佛、三國協商の包圍政策のありしにも係らず、年を追うて著しく發展しつゝあつたが、最近三四十年間に於て世界に類稀な力の發達を遂げ聊か自惚氣味を生じて自國を以て世界の第一位を占むべきものであるかの樣に考ふるに至つた。獨逸國民は、斯くの如き間緩い進歩に滿足せず、非常手段にて世界現在の情勢を打破して、自國に最も都合の好い新しい形勢を造らんことを欲したのである。軍國的なる獨逸人の所謂非常手段とは戰爭に外ならぬ。彼等は獨逸の國民的生存と發達とを保障する爲には、戰爭は止むを得ない手段と考へたのである。もつとも局外から冷靜に觀れば、獨逸當時の情態は彼等の

煩悶に煩悶し、あせりにあせるほど、切迫してをつたかどうかは疑問である。併し人各々見込みが違ふから英佛の國民には、その恐怖心は誇張せられて居ると見へても、局に當つて居る獨逸人そのものは殆んど危急存亡の境に臨んで居るかの樣に感じたのであらう。それ故に最近三四十年の歐羅巴に於ては、獨逸を中心とする三國同盟と、英國を相手をする三國協商との二つの大なる國家の團體が睨み合つてをつて、この二大系統間に何時平和が破れるか測り知られぬ形勢であつた。殊に日露戰爭以後危險が刻々加はつて來て遂に一九一四年に至つてもち切れずして破れたのである。今日の時勢は列國が立憲政體を採用して國民個々の實力を充分發揮させる樣な世の中であるから、總て個々の人々の力の充實は總體として國家の力を膨脹せしむると云ふことになり、従て國際の政局に於て、それ〲に一つの單位をなす所の國家間の政治上なり經濟上なり文教上なりの競爭は、昔の歷史に觀ない激しさを有する樣になつたのである。従て或新しい國が他の國を凌いで立とうとすれば、歷史的に地位なり勢力なりを以て威張つてをつた古い國は色々な方法で生意氣な成上りの若い國の頭を抑へつけ、此野心を遂げる事の出來ぬ樣にし、ひたすらに、己の地位を擁護せんとする。かかる場合に當國が成り上りの國に對して採る所の政策は、即ち勢力平均の政

策である。今回の大戰爭の結果、戰爭を豫防すべく、國際聯盟なるもの丶成立を見るには至つたけれども、此國際聯盟が果して今後の世界に於て遺憾なく舊國と新しい元氣な國との權利利益を調和し、充分に双方に滿足を與ふることが出來るかどうかは疑問である。しかも況んやこれ迄の世界では、斯くの如き種類の聯盟なるものの成立存在もなくて、力のある者が無力な者を制して大局を維持して行くの外、なかつたのであるから、平和を攪亂し樣とする不都合な國があれば、此强暴に應ずるの道を立てると云ふ事が平和を維持する所以の唯一の道だつたのである。獨逸　自ら以て國際的に其の國力に適應した地位を許されてをらぬと考へて煩悶してをる事、年久しかつた。この煩悶が或ひはモロツコ事件となり或ひはボスニア、ヘルツエゴビナ事件となつて屢々歐羅巴の平和を危地に陷れたのであつた、それ故英國に於ても佛國に於ても、苟も大局に目の有る者には、獨逸の禍心を包藏してをる事を見抜いて之に對抗すべき積極的の政策を立せん事を熱心に論じてをるものも少くはなかつた。佛國に於ては、之が爲に共和政を止めて王政を恢復せねばならぬと言つた人もあつた。英國にては彼のロバーツ卿の如きは徴兵制度の必要を痛論してをつたし、牛津大學のスペンサー、ウイルキンソン敎授等、同意見であつた。然るに佛國の當局者も英國の當局者もこの獨逸の禍を防ぐ爲の何等思ひ切つた新政策を採用しなかつた。若し英國のグレー外務大官にして英國一流の煮え切らぬ態度を止めて、斷然三國協商を一變して三國同盟とする丈の決心を持つてをつたならば、獨逸の矛先は其爲躊躇挫けたであらう。英國が若し之に加ふるに徴兵令を布いて獨逸が大陸に於て露、佛とに對して戰爭を挑む場合に際し、露佛兩國を援くべく、イギリス海峽を越えて數百萬の陸軍を大陸に送る事が出來たならば、如何に無謀な獨逸でも、初めから勝算のない事の明かな今度の戰爭を始ると云ふ樣な事がなかつたかも知れない。完全なる國際組織の實現せられたる時代ならば之が破壞をたくらんだものの、平和紊亂の責任は火を觀るよりも明だから、戰亂のために損害を彼つたる他の列國たるもの、一齊に鼓を鳴らして、兇暴なる國の罪を問はんこと、固より其所ではあるが、均勢の政策によりて辛うじて、國際平命を保持することとを得るに過ぎない時代に於て、一の軍國的國家が大膽に戰爭を挑發するに至つたからとて、平和攪亂の一切の責任を之になすりつけ、自分ばかり、良い兒で居らうと云ふのは、蟲がよすぎると云はねばなるまい。何となれば、平和攪亂者の禍心のありありと見へて居つたに拘らず、之を防止し得べき萬全の策を事前に講ずることをなさず、之をしてその不退の志を遂行

せんことを決するに至らしめたる責任は、列國の負はなければならぬ所であるからである。

さは云へ、こちらは幸にも勝利を制し得たのだから、勝に乘じて惡さも憎い戰敗國を猶ほ此上にも打ち懲してやろうと云ふのだろう。獨帝其他の國際裁判廷引き出しは、戰時に於ける對敵憎惡心の餘炎の熄まぬ獰猛なる復讐熱の現れであると云うべく、英佛の兩國はこれで腹癒せが出來ると滿足して居るだろうが、此の如きは、斷じて日本の武士道の忍び得る所ではない。米國のある記者をしてこれ實に產業的死刑の宣告なりと述懷せしめたほどの苛重なる復舊賠償の負擔を負はしめたること、これ既に兇暴なる獨逸にとつて大なる刑罰である。戰爭は獨逸國民の國民を擧げて行つたる罪惡であるとは、聯合列國の兼てよりの聲明で、其媾和條件のナポレオンの佛國に對するものよりも、比べもののない程に重かりしも、一にこれがためであつた。今や此國民戰爭に獨逸當局者のあてがからりと外れてしまつて、彼等はその祖國をして一朝にして殆んど亡國の淵に陷沒せしめんとして居る。カイゼルはその帝位を失つて外國に亡命しホーヘンツオーレルン家は永遠に獨逸及普魯西と絕緣することになつてしまつた。凡そ一國の君主に對する制裁として之に加ふるの苛き制裁あらんや。道路傳うる所によれば米國大統領ウイルソンは、死刑に處せざるを條件として獨逸前帝の裁判に同意したと云うことだが、我等は武士道の精神を體得せる我が全權が輕々に英佛の該提議に雷同するが如きことなかりしならんを信ずるものである。

我等は帝位を退いて和蘭の田舍に引ん込んだ獨逸前帝の今後の余生をば最多大なる興味を以て觀察せんことを欲するものである。最繁劇なる生活、最華やかにして或點に於ては最光榮ありし生活からして、最閑散なる、最じみにして淋しい隱者的生活に移つたる獨逸前帝に、獨り之を一大國家の元首たりし彼としてのみならず、一の私人としても、全く生活上の大革命に遭逢したものと言はなければならぬ。世界的帝國の建設を以て畢生の目標としたりし彼はその目標に望を斷たねはならぬ境遇に陷れる今後の生活をばいかに暮して行かうとするであろうか。その問題よりも先きに考へねばならぬことは彼のこれからの余命が果して相當の長さに持續され得るであろうかである。總じて人生の經歷に於て、政治家の壽命ほど、その世俗的經歷の波瀾に動かされるものはない樣である。藝術家とか學者とか云ふものに在ては壽命の存せん限り、大體に於て經歷も存續すると申しても大した差支へがない樣だがその功業の最現實的世俗的なる政治家に在つては、その昂上的であつた經歷の壁

蹟が最多くの場合に於て、同時に又その壽命の終極點なのである。最も政治家の中で此程物故せられた板垣伯の様に、政治家としての經歴の絕たれたるに拘らず、清貧の中に八十餘歳の長壽を保たれると云ふ様な偉人も居られる。これ思ふに故伯清高の人格が物質や俗世的名聞の外に、超然として居られたからであらう。大隈伯の場合は寧ろ故板垣伯と最著しき對照をなす所の事例に屬する。隈伯には沸くが如きの功名心、物質慾がある。彼が此心、此慾は驚くべきほどに強烈で、壯士の爆彈も、憲政黨內閣の醜體も、學校騷動も之をいかんともすることが出來ぬ程なのである。彼が八十を踰へても常に問題の人であり、二十餘歳、國事に志して維新政府の要路に占據してから今日に至る半世紀以上の間、其經歴の飽くまでも向上的（敢て之を進歩的なりとは言はざるも）なのは、一は此超人的の自我主義の致す所である。其經歴の進路からして之を見れば、ギゾーなども、やはり板垣伯の類型に屬するものと言ふべきだらうか、時代の變遷を見拔くことが出來ずして、佛國二月の革命に宰相の地位を顚覆せられ、その政治的經歴に止めを刺されたる彼が爾來二十有六年も生き延びて政治界には、死んだけれども思想界では生きて居つたと云ふ様な事は、當局者に精神的の悟りがなければ到底不可能の業であると言はねばならぬ。ギゾーと同時に政界から失脚し、その四十年蟠居の墺國宰相の職と歐洲に於ける反動主義の總支配人たる地位とを抛たなければならなかつたメッテルニヒは亡命の後、十年強の餘生を保持し得るに過ぎなかつた。ビスマルクは、隈伯型の現實家的政治家の最も錚々たるものだが、きかぬ氣の彼、其機關新聞で以てウイルヘルム二世の新方針に忌憚なき批評を加へ、皇帝をして聊かその辛辣さ加減に苦笑せざるを得ざらしめた彼ですらも、その最多忙なる宰相の職を離れてから八年間生き延びたに過ぎなかつた。

政治家の生活は實行を以てその第一義とする。その主張を公表し、之を社會に實現すべく奔命、席暖まるに遑あらざるは彼等の平常である。かゝる繁忙の生活に始終した彼等は、若し彼等に、その急激なる一身上の變動に順應し、その俄なる閑人的生活に適合すべき精神的餘裕のない場合に於て、その新奇なる生活を統制すべき心理的調整の行はれざりし結果そが不良の影響の直に生理上にまでも及び來るべきは、止むべからざる所であらう。獅子も自由の天地を彷徨すればこそ百獸の王としてその天壽を完うし得るけれども、動物園の檻の中に禁閉せられては最期である。ビスマルクが獨逸の宮廷に睨まれて居ながら、勝手な放言して、世を終ることの出來たのは、彼の口が箝せられなかつたからである。隈伯の長壽とても、同然である。

彼にして若し醫者に禁止せられて客と接することの機會を絶たれてしまはんか、不具なる彼の健康は忽にして衰へてしまうだろう。

政治上の經歷の頓挫は古來多くの政治家の壽命をまでも終熄せしめ、少くとも、之を短縮した。ナポレオン一世の樣に、何の慰めも樂みもない絶海の孤島に流され、彼が不倶戴天の敵であると呪うて止まなかつた英人の嚴重なる監視の下に約六年間も生き延びたと云ふ樣な事は、稀有の現象に屬し、會々ナポレオンその人の生に對する執着のいかに强かつたかを、示すものでなければならぬ。彼の姪なる三世の如きは、元來、その健康が傾いて居つたとは云うものの、セダンの開城からして二年半とたゝぬ中に此世を辭してしまうた。ゴルチヤコフも、高齡ではあつたけれども、伯林公會に於けるビスマルクに對し、チスレーリに對する外交敗北の恨みは綿々として盡きず、正式に外相を辭してからは、一年とたゝぬ中に悶死してしまうたし、プーランジエーも、國を逐はれてから忽にして自殺したし、我が木戶孝允も政治的失意の地位に陷ると共に亡くなつた。墨西哥の前大統領チアスも、一朝、革命のために西班牙に亡命するに及び、間もなく逝去した。我大浦子爵も同斷であつた。

獨逸前帝の今後はいかゞであらうか。彼は一八五九年の一月生れで今年漸く還暦となつたばかりだから、ナポレオンがセント・ヘレナに流された年から十有四年も長く生き延びて居る譯であるとは云うものの、ビスマルクやゴルチヤコフの退隱の年までには、まだ大分距離がある。ナポレオン三世の敗亡の年よりも三年若いのである。孔子の語を藉りて之を言へば、所謂耳順にして益々、圓滿無礙の「より大なる」生活に向上發展し得べき年である。順當に行くならば、元來、虛弱であるとは聞かぬ彼は假令、祖父老帝の長壽とまでは行かなくとも、まだ〳〵生きて居なければならぬ筈である。しかも彼にして若し今後餘り永く生き殘らなかつたとするならば、これ我等のさきに述べた樣な精神的餘裕、不幸にして彼には缺乏したるがためであると見るより外ないし、又之に反して、幽囚裡にありてあらゆる自由を束縛されて居る彼にしてナポレオン一世が餘生の記錄よりも生き延び、十年に及び、二十年に及ぶと云ふ樣なことにでもなつたとなれば、これ實に聰明なる彼がその薄運なる新境遇を迎へて之に順應し、悟を開いて悠々自適するに至れるを何よりも能く證示するものであると言はねばならぬ。

我等は、維廉二世の末路をば彼のハプスブルグ家中興の祖として十六世紀に時めきしカール五世に比べて見たい。カール五世の大帝國は維廉二世の帝國ほどにその領土の上に大なる打擊

をば被らなかつたけれども、帝の翳せし加特力教劃一の大政策は根底からして覆へされ、原則として、新教信仰の自由を認むるの止むなきに至り、元來、敬虔の情篤かりし帝は憂悶、終ひに出家の決心を固め、幾くなくして病死するに至つたのたである。戰爭の結果の物質的に慘憺たりし點に於ては、カール五世の大帝國も到底、維廉二世の獨逸帝國に比べ得べくもないけれども、兩帝に及ぼせる精神上の打撃には甲乙がない。カール五世はユステの僧庵に退隱して念佛三昧にその晩年の一兩年を送り、兄弟に對して悌であり、友人故舊に對して情深かつた彼は死して殁も多く骨肉及近臣から痛惜せられた。これ彼が亡くなつて間もなく、彼の二人の兄弟が哀傷のあまり年を同うじて彼の後を追うた事實を見ても譯る。維廉二世もナポレオン一世の樣な唯物主義者ではないから、獨逸の國民は今日の敗殘に沈淪しながらも、英佛を咀ひこそすれ、彼等が憎想の的を前帝に向くると云ふ樣なことはない樣である。彼の愈々國際裁判廷に引き出さるゝことの決せらるゝや、彼の子息や、ベートマンホルウエヒや、ヒンデンブルグが爭ふて己の身を以て前帝に代らんことを申し出でつゝあること、これ決して彼等が義理一偏の體裁からせられたものではなくして、前帝に對する忠愛の至情から發せられたものたるに相違ない。此意味に於ては維廉二世は敗れたりとは雖、カール五世と同じく幸福の人である。

維廉二世の餘生は彼が自傳の編纂に消了せらるることだろう、近着によればルーデンドルフ將軍も、目下大戰史の著述中だと云ふことだが大戰爭に直接の關係を有する有力なる政治家軍人の此の如き種類の著述はビスマルク公やビウロー公の著書以上に我等の興味を喚起せしめねばならぬ。況やこれがカイゼルその人の手に成れるものたるに於てをや。我等は今後の維廉二世をばこれから政治の舞臺に成り上る　くの政治家に對すると同じ、否、或はそれよりも一層に大なる注意を以て見ようと思うからである。

カイゼル處罰問題

杉森孝次郎

カイゼルを處罰するといふ運動に、多少の倫理的意義があり得るとしたら、それはその運動が今後の世界の安全、及びカイゼル自身の安全を目的とするからであらねばならぬ。倫理的意義といふ語に興味を持たぬ人のためには、政治的意義と言つて置く。政治の根本義は、他のあらゆる人間の活動がさうである通りに、倫理に存するからである。

實は、カイゼル を處罰するといふ用語が、邦語に於てのみならず、西洋語の場合に於ても、科學的精確を闕く。處罰を論ずる者の多くは、これに法律的意義を附してをるやうである。しかしながら、戰爭を、たとひその責任者即ち創造者が明白であつてさへも、特殊の個人若しくは團體に對する處罰の理由とする法律は、まだ世界に出來てゐない。ヘーグ會議の結果の國際法に、その法律らしいものが發見し得られると假定しても、國際法そのものが嚴密な意味に於ては法律でない。何となれば、法律には、制裁力が必要だからである。道德的制裁力でなく、強制的制裁力が、法律の缺くべからざる條件だからである。國內の警察力に相當する制度が、國際的に確設されてゐないならば、謂はゆる國際法は、吾人が今日普通に解釋する意義に於ての法律ではない。窃盜をも、强盜をも、殺人をも、放火をも、家宅侵入をも、それを理由としてその責任者を處罰する法律はある。しかしながら、或人または人々が戰爭を起したからといつて、その責任者を處罰する法律は、將來は知らず、現在までにはない。將來は知らずと言つたが、大事を取つて言へば、將來には、必ずそれが出來るであらう。國際聯盟が、すでにその徵候である。否な、ヘーグの規約が、すでに〳〵その徵候であつた。けれども、法律は過去に溯らずといふ原則を破棄しない限りに於て、敢て將來と言はず、此際直ちに創戰者處罰の法律を國際的に新設すると假定しても、それを適用してカイゼルをどうすることも出來ない。

人或は言はん、今度の戰爭の如きは、到底常軌を以て律すべ

からざる、歴史上の大事件である。だから、新例を開いて、法律をして過去に溯らしめて然るべしと。哲學的に一理ある言である。けれども、問題は、首者に果たして、それほどの根本的變革を正當に主張するに足るほどの、過去の事件に對する批評と、將來の世界に對する理想があるか、どうかである。

例を英國に取るならば、カイゼルを處罰する說の出處は決して聰明なる少數者ではなく、盲動する大多數民であつた。大多數者は、戰爭の責任者を正解する頭がない。一も二もなく、カイゼルがそれであると信じ込んでをる。なさけない話でないか。また餘りにカイゼルといふ一個人を買ひ上げて、爾餘の世界の人々を見下げた話ではないか。カイゼルが唯一の、また最大の責任者では決してない。國際間に、協力も競爭も可能となり現實となつたに拘はらず、そのやうな生活の實際に應當する制度が、國際間に發達してゐないことが、今度の戰爭の最大原因である。國際的公權を有する制度なくして國際的私利のまにまに形成せらるゝ協力あり。こゝに於てか露佛の間には、歷山第三が獨逸を差し渡しにしたよりも長い手を伸べて、佛と結托するあり、一九〇四年には海峽を越えて、エドワード第七の攻擊が、同じく佛と握手するあり。また列國の必要と能力とを公平に滿たし、伸ばすことを目的として、國際間の競爭に節度制限を附與する制度もない。こゝに於てか、遅れて馳參した獨逸は、モロッコに延び、メソポテミアに擴がらうとしても、英國の大海軍が、さうはさせないと立ちはだかる。一八七九年に於ける、ベセマー製鋼方の適用以來獨逸は從來の農業本位の國是を捨てて、商工業本位の國是を取り始めた。原料と、食料をさへも幾分は輸入して、製品を輸出する國となつて來た。すると、すくなくとも英國對等の海軍力を準備しないでは、その輸出入路を斷たれる虞れが、英國と交戰すればすぐに事實となる。また人口の增加率が強い。勤勉にして組織に長じてをるために、產業が急速に發達する。移住の目的地、放資企業の目的地、自然資源の供給地を欲する理由が、近代の獨逸には、英佛露にまさりて多大である。しかも、地球上の、日あたりのよい場處は、概ね老强國の英その他の先進國の有に歸してをる。今から旗を樹てる新領域といへば、どうせ海路で往來する處である阿弗利加とか、東洋とか、南洋とか南米とかである。即ち植民地の獲得及び保護のためにも、大海軍なしでは英國の麾下一喝の下に慴伏して白旗を揭げるほかない。世紀の移り目に、カイゼルの大海軍案が、實行に着手する段取りになつたこと、獨逸としては當然の事であつた。けれども、英國の目には獨逸の膨脹及び海軍の發達が、危惧と不安を醸す原因として映するのみであつた。國防の自覺をさへも喚起

された。一九一四年六月二十八日に於けるセラジエヴの變が機會となつて、墺塞間の國交が破れ、急轉直下して世界を焼く戰火となつたのであるが、同年の七月中に、カイゼルに直接の戰意があつたとは想はれない。皇太子及び軍閥その他一部の強がり貴族の間には多少それがあつたらう。カイゼルの責任は、平素の行動にある。即ち性格にある。即位すれば議會よりも先きに軍隊へむかつて演説し、南阿の反英者クリーゲルへ神經過敏の祝電を打ち、ウィルリー、ニツキーの、小供じみた渾名を交換して悦に入り、膠州灣を取つては武裝した拳固を叫び、二た言めには、帝國の將來は水の上にありと豪語する。人がよすぎる。只勇なく、平氣で惡事をなすには及ばぬが、大事をなす度胸がない。政事家たるよりは役者である。常に舞臺面の白熾光を滿浴して立ち且つ動きたがる。ナポレオンの天才なくして、しかもフリードリヒ大王の隱忍枉屈を學ぶことを好ます。兎もすれば、高飛車に出で、タンカを切り、サーベルをガチヤつかす。損な性分なり。僞惡といふのであらう。臆病と呼ばれるのが何よりもつらい。聰明は手の內のものと思つて割合に安心してをる。勇氣と腕力とには自信がない。ビスマルクを逐つたのは、強者を理想とする弱者の奮發であつた。二十年間歐洲の平和を維持するに苦心したカイゼルが、いよ／＼劍を拂ひ、しかも拂ひそこねたのは、世がデモクラティックになり行くにも拘らず、依然としてホーヘンツオレルン天來降りの御宣託を繰返したる不聰明に主原因を有すれども、彼れの虛榮心と卑怯とにも因る。強がりのカイゼルは實は弱いんだと、周圍の猪勇連から囃立てられるのが、人知れず見え坊の寸魂を痛刻しつゝあつた矢先の、墺塞間の出來事、それが導火となつての露佛英の、カイゼルの、內兜を見透かさん企てと見たる、殺到せる四邊の鋸行きなり。未熟の覺悟で、半狂亂に應戰したること、性格が齎らす運命であつたのである。大戰はカイゼルの意思の結果ではなく、直接には無意思若しくは弱意思の結果であつた。そして間接にはカラ威張りする性格の、或は品性の結果であつた。しかも法律は意思の有無を問ふ。性格はその問ふところに非ず。

カイゼルのホーヘンツォレルン萬能主義は、たしかに道德界の犯罪であつた。何となれは、世界の道德的中心は、ホーヘンツオレルンにも、ロマノフにも曾て存せずして、各個人の自覺に存するからである。英才が特殊の家系に出現しても、それは家系の功績ではない。赤裸々の品性才能及びそれに基づく功績が價値の眞實物である。出生門地の如きは偶然的價値に過ぎない。孟子の謂はゆる天爵に對する人爵に過ぎない。カイゼルが本質的價値と偶然的價値とに對する一隻眼を、行動的にも、また政治

的にも示し得なかつたのは、いかにも處罰に値ひする。けれども、聯合國はこれを處罰する資格も權利も更にない。何となれば、露も、佛も、英も、日も、以も、米も、カイゼルの誤れる專制主義を敵として開戰し、參戰したわけではないからである。聯合諸國の開戰參戰の目的と動機とは、實質に於て防禦的及び發展的帝國主義にほかならなかつたからである。露國宣戰の動機が、オートクラシイに反抗するためのデモクラシイにあつたとは何人か强說し得るものぞ。オートクラシイに對するデモクラシイの十字軍であるならば、なぜ佛英は當時の露西亞をも敵としなかつたのであるか。參戰の動機が、最も純粹にデモクラシイ保護に存したかの如くに見える米國でさへも、その實質は主として帝國主義であつたことは、否定すべからざる事實である。一九一七年の一月二十二日に、上院に於て、無勝利の講和」を說き、正邪は英獨共に五分々々なりと斷言したウイルソン大統領が、その年の四月二日に、獨は討伐に値ひし、英佛は援助に値ひすと演說するに至つた徑路を調べて見て、何人か充分なる是認理由を發見し得るものぞ。亞米利加參戰の動機は、最後まで中立を守り通ほしては、マキァエリも警告した通り、勝つた方からはお前のお蔭で勝つたのではないと言つて威張り散らされ負けた方からは、あれほど頼んだのに助けて呉れなかつたと言つて怨まれる。戰後の大改造期に、いやそれよりも先きに巴里の會議に、發言權が持てない。一九一六年の七月に結ばれたる日露協商は、旭日旗が英露その他の歐洲强國の旗と聯翻してゐる光景を、ます〱不快に米國をして思はしめた。太平洋上の爭霸戰に備ふる兵力を創造するはこの機會にあり。佛蘭西に對しては、ラーフェーイェット以來の情誼あり。戰時禁輸品の目錄を勝手に增大して、中立國の顏に泥を塗つた憎い英國ではあるけれども、一九一六年の十二月に、ロイド・ジョージが英佛以の采配を採るやうになつて以來、形勢は頓に一變せり。一と押し押せば、一と肩入れゝば、勝つであらう。況んや、一九一七年の三月一日には、否でも、應でも、商船武裝案が議會で通過せねばならぬ實情になつた。獨逸が、英國を封鎖する目的で無條件的潜航水雷艇活動を名實共に開始したからである。商船を武裝しないでは、亞米利加の資本と物資とが、歐洲即ち英佛以に市場を見出だす見込が絕えて無くなる。武裝はすでに宣戰の第一步なり。時もあれ、同じ三月一日には、墨其西哥駐在の獨公使に宛てた獨外相の密書が曝露された。その內容は、墨國と組み、また墨國を介して、日本と組み、反米運動を企てるといふ、實に愚にも附かぬ窮策餘技のやうなものであつた。そも〱米國が、その參戰前英佛に輸出し投資したのは、英佛を選んだ

わけでは毫頭なかつた。獨墺へは、輸送したくも英海軍の封鎖あつて不可能だからにほかならなかつた。戰爭の結果は露國の專制主義倒れ、獨墺の民主政治となつた。或はすくなくとも歐洲に於ける專制主義の敗亡を急がすことになつた。しかしながら、法律が既往に溯ることを吾人が許してならぬならば、結果の善惡を以て、動機の價値を評定することに吾人は反抗せねばならぬ。聯合列國は、帝國主義のために參戰し宣戰したり。カイゼルがデモクラシイの信者でなかつたことを理由として、そして戰爭の目的は、聯合國に取つては、ウイルソン大統領の言を借りて、「世界をデモクラシイのために安全な場處にする」にあつたことを理由として、カイゼルを處罰するならば、それは無根據な暴擧である。眞の道徳と、またそれを基礎とし生命とする眞の常識と政治とは、斯くの如き暴擧をこそ處罰の目的對象とすべきである。

英國に就いて言ふならば、ロイド・ジョージあたりは目があいてをる。カイゼルの處罰などに興味を持つ彼れではない。ところが民衆はいかにも低能である。知識的に低能である。カイゼルが元兇だと信じて、その信念の熱烈なること、敬虔なる基督教徒が、その主宰神と預言者とを信ずるにも優る。汝の敵を愛せよ。我が目の上の梁材を無視して、他が眼中の一塵を苦に

する勿れなどの教理は實行とは由來無關係なり。カイゼルを生け捕りにし、檻に入れて國内を曳き摺り廻し、最後に倫敦塔に幽閉して、磔にすべしといつた勢ひである。ロイド・ジョージは二三回の演說の際に、聽衆の中から、カイゼル處罰の意思如何を問はれ、もつと急務があると逃げを打つたのが、意外に民意を離反する原因となつたのを發見して、去年の十一月及び十二月初期の選擧運動演說に於て、利害に敏なること、相場師が市場の形勢に對するが如き英宰相は、カイゼルの處罰を政府黨の方針の大要目の殆ど隨一に算へ、また刷り物にカイゼル處罰を特筆してそれを國内に總蒔きし、取り返へしの付かぬ言質を民衆にむかつて與へたり。思へば奇しき現象ならずや。ロイド・ジョージと、カイゼルと、洗つて見て、どちらが餘計に戰爭の責任者であるかは、決して簡單明瞭な問題でない。勝てば官軍、負くれば賊の浮き世かな。和蘭陀はアメロンゲンのベンテインク伯の城內に、配處の月をわぶる當代稀れに見たる快男子的才人と、歐米頭の政界を專制君主の如くに低氣壓にも、高氣壓にもする魔力を自由に發揮しつつある平民上がりの英雄兒と、官服處を異にしたらば、實質に於てどれほどの差があらう。ただ不幸にして、また幸にして、一方は退潮の形式的貴族主義の家に生れ、他方は進潮の形式的平民主義の閲歷を有す。自發的天才質

はウエールスの天一坊の方が一日だけ上は手なり。多能辯は閑と錢とのあつたホーヘンツオレルンの最終の驕兒の方が俗眼を射る。氣を付けないと、ロイド・ジョージも最後を善くすまい。妄りに衆愚に恐れて、今日の識者が、明日の衆愚となるの理を忘るること勿れ。私は耶蘇の信者ではないが、汝等の中罪なき者石を投げよとか、杖を上げよとか言つたのは、熱烈な基督信者と言ひ囃されるロイド・ジョージ氏が此際守るべき訓言である。强國の尻馬に乘つて參戰した弱國の如きは、時に臨んで道義的に恥づるところあるを要す。天下の正善を自己の正善とし、天下の邪惡を自己の邪惡として、不偏不黨、ただ眞理に與みするの態度を、カイゼル處罰問題にも、機會を見て發揮すべし。世界のため及びカイゼル自身のために、その安全を目的として、彼れをして、靜かに餘生を送らしめよ。彼れ自身をして、ホーヘンツオレルン萬能主義の非を、心から悟らしめば、自他の倖慶と稱すべきのみ。戰爭の責任者は、各國の識者階級、指導階級を以て任ずる者の上に、一般的にある。厚薄の差は、眞に五十步百步のみ。立つて戰爭そのものが、如何に不聰明なる意思の所産であるかを、先づ自己にむかつて、然る後自國民にむかつて、それから列國諸民にむかつて說得することが急務であらう。戰爭責任者の處罰問題は、カイゼルから始めずに自己から始めるを至當とする。

獨逸前皇帝の裁判

法學博士　吉野作造

對獨講和條約は獨逸前皇帝並びに其政策を承けて今度の戰爭の遂行を共にしたと認むべき數十名の官吏軍人を國際裁判に附すべきを決し、而して又最近の報道に據れば前皇帝引渡の要求に對して和蘭政府は已に承諾の旨を答へたとある。果して然らば遠からず元のウイルヘルム二世の法廷の前に立つを見ると云ふ未だ曾て前例なき新事象を見ることとならう。如何なる法廷により、如何なる點を如何に裁判するかは今の所よく分らないが、何れにしても是に依つて從來の政治法律の學問が不動の金科玉條として居つた「國君は法（自國並びに外國の）の上に超然たり」との原則は玆に一大鐵槌を下さるることになつた。國

君と雖も場合に依つて國際法と國際道德との前に嚴峻なる裁判を受けねばならぬとは他所事ながら一面に於て一種悲痛の感を催すと共に、他面に於て我々は又肅然として正義の力強くして到らざるなき事を今更ながら惕れざるを得ない。

獨逸前帝の裁判は何の目的の爲になさるるのか。之は單に一片の報復の爲でない。講和條約が敗者に向つて戰爭中其行つたいろ／＼の不法行爲に對して大いなる報復條件を掲ぐることは從來の例である。然し未だ曾て主權者の處分を其條件の一つとしたものはない。今度の戰爭は特別以上のものであり、從つて國民自身が已に其國君を處分した程であると云へ所謂報復と認むべきものは講和條約中に盡されて雖る。否、講和條約は此點に於て一階に過ぎはせぬかとさへ考へられて居るではないか。人に依つては物質的方面の報復は之でいゝ、更に精神的に報復する爲に國君の處分を必要とすると云ふものがあらう。併し乍ら精神的方面は之を將來の歴史に一任するを以て足れりとすべきである。斯く考へて見れば前皇帝の審問處罰は何處迄も彼が正義の要求を蹂躙したと云ふ事になければならない。正義を破り國際の平和を蹂躙して省みざる者を斯く迄追求すると云ふ所に、今日歐米の民心が如何に國際正義の觀念に動いて居るかと云ふことが分る。但し前獨帝の審問が正義の要求から起つたと云ふ事は必ずしも審問其事が正義の要求に合して居ると云ふことを意味しない。親に孝行せんが爲に身を苦界に沈めると云ふ事も原因が好くとも遣り方の正しくない例は世間に幾らもあるが、獨帝審問の如きも亦此類ひではあるまいか。何となれば正義の要求を蹂躙したものは獨り敵國に於てのみ之を見るにあらず、假令獨帝が其最も著しき元兇なりしにもせよ、之のみを追窮するは片手落の嫌がある。若し總ての不屆者を漏れなく處分すると云ふ事が事實不可能ならば、獨帝の處分に就いても此か斟酌の余地ありとすべきである。而して其程度の制裁ならば敗戰退位等に依つて已に十分加へられて居る。其上態々裁判に迄引出すのは蛇足ではあるまいか。將來再び同じやうな事の起らざらしむる爲めと云ふ功利的目的から云つても、此上の審問處罰は其必要を認めない。而して特に我々日本國民の感情から見て此事に特別の不快を感ずるは云ふまでもない。

又實際の必要から云つても此上獨帝を審窮するの理由はない。昔那翁は之を萬國共同の敵としてセントヘレナに流した[illegible]併しあの頃は一般の民心尚未だ今日の如く開明せず、殊に佛人の間には那翁に對する英雄崇拜熱なかなか盛にして、彼と其の

まゝ歐洲大陸附近に止むるは恰も虎を野に放つの概があつた。捲に重來再び風雲を捲き起すの懸念が甚だ多い。どうしても之を遠くへ離隔するの必要はあつた。併し今日は其必要は毫頭ない。

ウイルヘルム二世の民望は一部の間には實に素晴らしいものがある。去年十一月始めの日附で獨逸の友人の手紙が七月の廿日屆いたが、之に依つて見ると皇帝に對する忠誠愛着の念がまだなか／＼盛んなやうだ。併し乍ら之は先づ普魯西人の一部に限ると見なければならない。獨逸の人口の一半を占むる普魯西亞以外の民衆は素より格別の熱情を皇帝に對して有つて居ないのみなず今日の一般獨逸人は素より百年前の佛蘭西人とは大い。に國家社會に關する觀念を異にする。支那ですら復辟の不可能なる今日、獨逸に於てカイゼルの倦土重來は殆ど想像することが出來ない。果して然らば歐洲將來の平和を確保するといふ點から見ても、前獨帝を其故國に置いて安全に晩年を送らしむるも何等怖るべき點はないやうに思ふ。無暗に獨逸の再興を怖れて英米との同盟まで作つた佛蘭西を外にしては、獨帝審問など云ふ事に熱中するものがなかりさうに思ふのに、現に此事あるのは頗る怪むべきである。

余輩の考ふる所では眞に將來の平和維持の爲に懸念すべきものありとすれば、それは前獨帝及び獨逸人に非ずして佛伊兩國に於ける一部のショーヴィニストではあるまいか。余輩は寧ろ獨逸に於て、來るべき新時代の趨勢に最も明白に通曉せる民族を認むるものである。從つて又假令獨帝の處罰と云ふ亂暴な事をしたからとて獨逸人民中却つて反感を起すものがあるだらうと云ふ風にも見ない。



ユウトオピア物語（中）

——見れども飽きぬ永劫の夢、人間共同の長夜の夢——

井箆節三

第四　ユウトオピア

これは四百四年以前に、イギリスの大官サアトマス、モアが書いたもので、ユウトオピアとして代表的なものです。作者の小傳は本篇の終りに書添へて置きました。

＊

イギリス國王ヘンリ八世陛下には、夙に天資英明に渡らせられ、即位の後は不屈不撓の國君として、威名を四隣に振はれたが、玆に陛下とカスチルの太守チャルス殿下との間に、二三の紛議を生じたので、乃ち余が使節として、フランダアスに簡派せられ、談判に從事せしめられた。余は數名の隨員と偕に、フランダアスに出張し、大守の使節と會見して、再三交渉を重ねたが、談判容易に落着せず、大守の使節も中途にして、大守の御意を奉伺するため、一旦ブラッセルに引取つたので、余も此の間を利用して、アントウエルプに赴いた。

アントウエルプに滯在中は、種々の人々の訪問を受けたが、余が最も敬愛したのは、ピタア・ギルスといふ青年紳士であつた。これは當市の名門で、市民の間に重望あり、市の重職に推されて居たが、博學達識なるに拘はらず、極めて溫藉恭謙で、些の虛飾も衒氣もなく、深切で快活な人物であつた。余も本國に妻子を殘し、海外に淹留すること四箇月に及んだが、ピタアと親交を結んだお蔭で、故國を戀ふることも忘れ、眞に愉快な

月日を送つた。

一日、余は聖マリア（これは當市第一の寺院）の集會から旅館へ歸る途上、ふと彼のピタアが一人の男と、何か語り合つて居るのを認めた。男は生涯の盛りも過ぎたか、聊か疲れた其の顔は、赧く日に燒けて、髭は長く伸び、外套を無造作に引掛けて居る。余は一見して此の男を船乘であらうと鑑定した。ピタアも亦た余を認めて、余が傍に急いで來たが、一應の挨拶を交換すると、彼の男を指した。

「あの男を御存知ですか。實は只今あの男を連れて參上しやうとしたところで。」

「それはどうも有り難う。」

「いや、あの男も欣ぶでせう。しかしあの男ぐらゐ珍らしい國々の事情に精しい人間は、世界に二人とありますまい。あなたも是非是非逢つて御覽なさい。」

「それでは、やはり想つた通り、あの人は船乘ですね。」

「ところが、それは間違で、あの男は船乘ではありますが、寧ろ一種の探檢家として、或は一種の哲學者として、諸方へ旅行したのです。名前はラファエル・ハイトロデエと謂つて、ラテン語にも暗くありませんが、殊に哲學が好きなところから、善くギリシア語に通じて居ます。生れはポルトガルですが、若い時から旅行が好きで、財産は兄弟に分けてしまひ、先年コロムブスがアメリカを發見した時にも、その乘組に加はり、コロムブスが歸國する場合には、五人の同志を語らつて、アメリカに踏留まり、其後今日まで十數年間、杳として其の消息を聞かず、如何したことかと思つて居ましたが、色々な國々を探險し、運好くセイロンに辿り着き、カルカッタからポルトガルの商船で歸つて來たのです。」

余はピタアが深切にも、さういふ珍らしい人物を紹介して與れる好意を感謝し、彼のラファエルと初對面の挨拶を取替はせた上に、三人打連れて余が旅宿に赴き、庭に設けた卓を圍んで歡談に耽つたのであつた。

ラファエルの語るところに依れば、彼は二三の同志と共に、コロムブスが一行に分れ、暫くニウカスチルに滯在したが、其後何等の危難もなく、段々土人と懇意になつて、遂には酋長の知遇を受け、其後の旅行をつゞけるに就いても、酋長は種々の便宜を與へ、一人の深切な案内者を附けて、陸を行くときは車を備へ、海を渡るときには舟を貸し、また行く先き／＼の酋長へも、懇切に紹介して與れた。かくて色々な都邑を訪ひ、また様々な國々を通つたが、いづれも善く治まつて居た。やがて赤道の直下へ進むと、そこには大きな沙漠があつて、野獸や毒蛇の棲處であ

つたが、之も無難に通過して、更に一層南へ進むと、氣候も次第に温和になり、幾多の都邑が開けて來た。之等の地方では不思議なことには、近所同志では交易せず、唯だ遠國とのみ交易する。また此の地方では造船の技術も相當に進歩して居り、天文や航海も發達して居たが、まだ磁石には無知であつた。さればラファエルが此の地方で、羅針盤のことを紹介すると、彼は非常な評判を取つた。

余はラファエルの談話を聞いて、甚だ珍らしいものに思ひ、尚ほ様々に質問したが、ラファエルも亦た欣んで一々それに說明を與へた。尤も余がラファエルに尋ねたのは、怪物とか惡獸とかいふやうなもの丶有無に就いてではない。世人は珍らしい旅行者に逢ふと、よくさういふことを尋ねるが、余には此様なことは珍らしくない。余が第一に聞きたいのは、何處かに政治の善く行はれた國はなかつたかといふことである。ところがラファエルの談話に依ると、世界にはユウトオピアといふ國があつて、理想の政治を行つて居る。余は今ラファエルの談話で知つたユウトオピアのことを語らうと思ふが、その前に一言して置くのは、どうして私がラファエルから、取り分けユウトオピアのことを悉しく聞くに至つたかといふ、前後の事情に就いてである。ラファエルは色々な國々の政治や習慣を語る場合に、その可否得失に言及して、種々の批評を加へたが、それが頗[illegible]も適切で、余をして感服に堪へざらしめた。ピタァも亦た余と同じく深く感動したもの丶如く、ラファエルの談話が終つたとき、彼に向つて斯う尋ねた。

「時に君にお尋ねするが、君は何故何處かの國王に仕へて、政治に關係しないのだ。今日君程政治に就いて立派な見識を持つて居るのは、恐らく世界に二人とあるまい。若し君のやうな人物を國政に登用して、種々な改革を行つたならば、立派な政治の出來ることは、一點疑ひのないことだ。これは國君に取つても有益であるが、また君自身に取つても、眞に幸福なことではないか。また君の一族にしても、最も希望するところだらう。」

「一族の者へは、私がまだ若くて、道樂もして見たい盛りに、財産を分配してまつたのですから、もうこれで澤山だと思ひます。大抵の人間は年を取つて、財產など持つて居たところが、格別愉快でなくても、容易に財産を讓らないものです。それを私は思ひ切つて、疾うの昔に分配したのですから、此上彼等が希望すればとて、何處の王様の奴隷になつて、苦勞をするほどの義理はないです。」

「さう惡く取つては困る。私は何も國王の奴隷になれと言ふのではない。國政の顧問にでもなつたら、非常に有益だらうと思

ふので。」

「奴隷といつても、顧問といつても、それは言葉を換へただけで、實際は同じことではありませんか。」

「それは或はさうとしても、君のやうな人が社會に對して有益になるにも、また君自身の眞の幸福を計るにしても、その外に方法も無いではないか。」

「あなたは幸福とおつしやるが、自分が何より嫌ひなことをして、それで幸福になれますか。私は現に好きなことをして、誰の干渉も受けません。それが何より幸福ですもの。」

余も兩人の問答を聞いて、フフアエルの言ふことに感心したが、傍から喙を容れて、尚もラフアエルに質問した。

「ラフアエルさん、どうもあなたが富貴とか功名とかに恬淡なのは、私も實に贊成ぢや。世界でどんなに豪い人より、私はさういふ人が好きぢや。しかしあなたのやうな人を、一人でも世間に多くするには、あなたのやうな人が奮發して、多少は骨も折れようが、自分の理想を世に行ふ、さうしてそれには有力な國君の政治に參與して、まづ國君から感化するのが、第一に必要ぢや。上の好むところには、下も亦た之に從ふ。すべて世間の風俗が、善くなるのも、惡くなるのも、國君が其の源ぢや。またあなたのやうな卓見の士が、それだけの決心をすれば、世界にはそれを採用する國君も必ず有る筈ぢや。」

「モアさん、切角のお言葉ですが、それも少し間違つて居ます。第一、あなたは私を高尚な豪い者と誤解して居なさる。それは私にしても幾分か取柄も無いではないでせうが、とかく世間の國君は、何かと言へば戰爭です、戰爭に勝れた者でなくては、國君は歡迎いたしません、ところが戰爭のことになると、私は全く無學です。他人の國を掠めるより、自分の國を治めるといふのが、大體私の意見ですが、世間は私と反對です。それから宰相などといふものも、自分を非常に豪いと思つて、とても私なぞの意見を、聽かうとはいたしません。よーんば物好に聞いたところが、採用する氣遣はありません。少しでも新しいことを言へば、在來の慣例に反るとか、頑固なことばかり申します。何處の國でもさうですが、殊にイギリスでは極端です。」

「あなたはイギリスへも行きましたか。」

「はい、暫く逗留しましたが、丁度西部に一揆が起つて、窮民が多勢かあいさうに、國王から虐殺せられた頃のことです。私は大僧正で大法官を兼ねたジョン・モルトンさんの世話を受けましたが、或る日此のお方と食事をして居ますと、食卓に列つた一人の裁判官が、盗賊の話しを始めまして、近頃は非常に盗賊が多くて、時々一つの絞臺で二十人の盗賊を死刑に處する

とがある、政府でも随分努力して、飽くまで検挙するけれども、どうしても世間に盗賊が絶えない。斯ういふことを申しますから私も大僧正の前をも憚からず、それは何も不思議ではない、一體盗賊をさういふ具合に處罰するのが間違であつて、如何に刑罰を厳重にしても、それでは結局無効である。實際貧苦に迫られて、軽い盗みをしたくらいで、死刑にまで處せられては、人間も随分かわいさうです。盗まれるやうな餘裕があるなら、一層分配を公平にして、盗むべき必要もなく、盗まれる危険もなく双方安全にしたらどうですと、氣焔を吐いたことがありますがいや其の點には充分に注意してあるのだから、どんなに貧乏でも、仕事に精を出し、暮らしをさへ儉くすれば、決して盗みなぞをする必要はないのだと申しますから、近頃のやうに戦争が多くて、若い者は兵士に取られ、たとへ戦争からは歸つて來ても相當に年を取つてから、改めて職業を見習ふことも出來ない。ましてや肝腎な働手に戦死せられたり、負傷せられたりした、家族の困窮するのは當然です。仮に戦争は已むを得ないとして平時のことを考へて見ても、随分多勢の貴族があつて、雄蜂のやうに毎日々々惰懶な生活に耽りながら、贅澤の有りたけを盡して、苛斂誅求を事とする。百性はぎりぎり結着まで身を切詰めて租税を納める。おまけに貴族の周圍には、無數の怠者が寄生して居る。當主の貴族が亡くなつて、跡継が相続した場合にそのお氣に入らないと、忽ち職を離れてしまふ。元來自分の力業で稼ぐといふことを知らないから、困るのは當然であるが、これまで怠惰や贅澤に身を持崩したのであるから、今更卑しい職業に就けない。そこで悪事を働くことになる。なるほど百姓や町人では、いざ戦争といふ場合に、武士の勤めは出來ないから、平生武士を養成して置く必要もないではないでせうが、さうすると武士は必要だ、さうして武士が堕落して盗賊になるのは已むを得ない、かういふ結局になるのである。これはイギリスに限らないが、茲にイギリス特有の弊害といふべきは、貴族が百姓の利害を無視し、濫りに狩場を擴張して、肝腎の田畑を取上げることです。百姓には力業が必要ですから、自然家族も多勢である。それが田畑を取上げられる。已むを得ず僅かな持物を賣るが、それも一時を凌ぐに過ぎない。乞食をするか盗みをするか、それより外に途はなくなる。役人は彼等を目して浮浪として監獄へ打込む。また一方では田畑が減ると、自然穀物は高くなる。たとひ田畑は持つて居ても、段々生活は困難になる。成るほど狩場を擴張すれば、鹿なぞは繁殖するであらうが、それは貴族の獨占で、一般の人民には無關係である。それから今一つの悪いことは、貴族が贅澤に耽るために、商人や百姓が

でがそれを眞似して、身分不相當のことをする。尊くない遊戯が流行する。卑しい商賣が繁昌する。いくら金があつても足りない。そこで生活には困らぬ者まで、詐僞や盗賊を働くやうになる。政府は何故命令を發して、斯ういふ悪風を取締り、貴族の横暴を制裁して、怠惰な生活を禁遏し、働く者には土地を與へ、敢て盗みなぞを働く必要のないやうにしないか。これをしも敢てせずして、徒らに盗人の檢擧に努力したとて、それは畢竟徒勞である。寧ろ現在の狀態では、一方に盗賊を獎勵しながら、一方に處罰するやうなものである。……」

ラファエルは雄辯滔々として、尚も語り續けたが、その言ふところ悉く肯綮に當り、一々時弊に的中する。殊に余が感心するのは、その現在の政治に對する批評が痛切であるよりは、寧ろ其の改革に關する意見の甚だ卓抜にして、人の意表に出でることである。されば余も斯くの如き卓見の士を放棄して、空しく草莽の裡に老いしめるの、天下に不幸なるを惜み、再び前言を繰返して、然るべき人君を求め、廟堂に立つて、其の志を天下に行はんことを、切に慫慂したのである。

「只今お話しの僧正は、實に私には恩人で、私は幼少の時分から、僧正の手許で成長したのです。それゆへお話しを承はると私もどうやら青年時代に再び返つた心持で、寔に其のお話しが懐かしい。それにしてもラファエルさん、私は思ふに、あなたには、やはり然るべき人君を求めて、經綸を實行して貰ひたい。あなたはプラトオンを好むといふが、そのプラトオンの意見では、若しも國王が哲學者であつたら、人民は最も幸福であらう、しかるに哲學者は國政に參與することを好まない、それだから善政が行はれず、人民が塗炭に苦しむのだ。」

「哲學者とて必ずしも政治を厭ふのではありません、ただ權力に訴へて、それを行はうとしないだけで、自分の意見を書物に著はし、世人に忠告を與へるのです。プラトオンの申しました言葉に、人間は誰でも哲學者になれるが、國王だけは例外である、これは生れ落ちてからの境遇の然らしめるところだと、かういふことを申しましたが、眞にその通りだと思ひます。たとへば私があなた方の忠告に從つて、何處かの國王に仕へると想像して御覽なさい。國王からの注文は、どうしたら戰爭に勝てやうとか、どうしたら外國を取れやうとか、さもなければ、どうしたら財政が豐かにならうとか、大抵相場が極つて居ります。ところが之等の問題に對する、私の意見はどうかと言ふと、只今も申した調子です。世間に人君も多いですが、とても私の申すやうなことを、採納するものはありますまい。」

「左様、一體かういふ話しは、吾々同志の談話としては、既に

愉快なものですが、さて朝廷へ持出すとなると、問題が頗る容易でない。」

「そこです、私が言はうとしたのは。宮廷には哲學の入る餘地がない。」

「全く餘地が無いでもないが、少くとも眞の哲學は入らぬ。入るのは僞の哲學だけで。」

「ところが私の哲學と來ては、特に最も入りにくいので。何分私の意見では、社會に財産といふものがあつて、金錢が萬事の目安になるやうでは、眞の善政は行はれない。何故かといふに、必要なものより無用なもの丶生産が增加して、必要なものを壓迫する。さうして生産したものも、少數い人間が獨占して、多數は段々貧窮する。而も其の少數の人間すら、眞に幸福なのではない。しかるに私が實見して來たユウトオピアの政治を見ると善人は當然の報酬を受け、些も不公平といふことがない、而も人民は一人殘らず、衣食には少しも事を缺かない。法律や制度も簡短至極で、それで充分に治まつて行く。他の國々では後から後から、どしどし法律を製造するが、それが餘り有效でもない、法律に違反した事件は殆ど無數に發生する。元來法律は國民各自の利益を擁護するためであるのに、國民の權利が不平等で、各自の利害が衝突するから、都合の善い法律もあれば、都合の悪い法律もある、そこで法律に違反するといふ奇怪な現象が起るのです。ですからプラトオンは申しました、國民を平等にしなければ、法律は完全に行はれない。而も國民の平等は、財産の私有を認める間は、完全を期することが出來ない。何故かといふに、社會の富が次第に少數に集中して、多數は貧窮の狀態に陷る。ところが、前者は怠惰であるのに、後者は勤勉であるのですから、殆ど地位を轉倒して居ります。之を改革したならば、多數の人間を壓迫する重荷は非常に輕くなります、けれどもそれが容易でない。之を完全に改革するには、是非とも私有制度の根本に一大斧鉞を加へなくてはならない。しかるに世の爲政者は、一般に斯かる勇斷を缺き、病氣の根本を取除かうとはしないで、法律や命令を濫發して、注射や劑藥で攻め立てる。若し私有制度を撤廢して、共有制度を確立し、各人に必要な土地と財産とを分配し、制限以上に所有することを嚴禁さへしたならば、政治上、社會上一切の弊害は、宛も春の雪の如く釋然として解けてしまふ。」

「それは果して如何でせうか。一體人間が勞働するのも、種々の事業を計畫するのも、みな其の結果を私有することが出來るからではありませんか。憪けて居れば貧乏する、だから人間は働くので、國民が財産を共有にして、幾ら働いても他人より

多く所有することも出來ねば、働かなくても他人と同樣格別衣食に困らぬとなれば、誰も骨折つて働きますまい。さすれば社會全體が忽ち貧乏になつてしまつて、自然箇人も貧乏になる。」

「さういふお考へも御尤もですが、それは私が餘り簡短に要領だけを申したからで、もしあなたがユウトオピアへ行つて、四五年實地を御覽になれば、必ず私と同じ意見にお成りだらうと存じます。」

「或はさうであるでせう。しかし態々ユウイオピアへ渡航することも出來兼ねますから、あなたに願つて悉しいことをお說明して戴くより方法はない。どうです、一層兩人のために悉しく說明して下さつては。」

「それはお易い御用です。しかし中々時間を取るでせうから、會食でも濟ませまして、暫く休息しましてから、ゆる／＼話すといたしませう。」

そこで余はラファエルとピタアとを誘つて食堂に行き、暫く休息した後で、再び以前の場所に返り、下僕に命じて誰が來ても決して案内させぬことにした。ラファエルは吾等兩人の熱心な態度を欣んで、悠然として倚子に憑り、暫く談話を運ぶべき順序を沈思默想して居たが、やがて滔々と語り出した。その要領は下の如くである。

（一）地理　ユウトオピアは半月形の大きな島で、中央の一番幅の廣い部分は約二百マイル、島の長さは五百マイルに上り、兩端は深く彎曲して、兩端の距離は九マイルほどである。されば其の灣内は浪が極めて靜かで、實に世界無比の良港である。港の入口には中央に一大岩石が屹立して、其の上に望樓を設け、砲兵が之を守護して居る。

島内には五十四箇の都市があつて、その位置は最初から適當に設計したもので、凡そ十里ほどづゝを隔てゝ、配置してある。首府アルモテは島の中央に位し、その華麗なことは到底ロンドンなどの如き、不秩序、不衛生、貧弱、亂雜な都會と日を同じうして語ることは出來ない。各市は毎年見識經驗に富む長老三人づゝを選拔して首府に送り、議院で國事を協議させる。また各市を中心とする各縣は、面積が大抵平均して居て、之に附屬する土地や家屋は國民の共有となり、一定の期限を定めて、人民は各自交替に土地を耕し、家屋に居住するのである。家族一戶に給與せられる土地には、四十人以上の男女が農耕に從ふことが出來る。一村は三十家族となり、各村には村長が居る。この四十人中、二十人は二ヶ年間田園生活をすると、都市の男女と交替する。新たに來た二十人は、前から居た二十人に指導

られるが、翌年になると、前から居た二十人は都會生活に移り、新たに二十人が都會から來るから、今度は之を指導する番になり、その翌年には都會に歸る。

年々國内で消費する農産物の總額を正確に調査して、その二倍を生産し、一半は外國に輸出して、必要な物品と交換する。田園で生産せられるものと、都會で生産せられるものとは、一々交換するまでもなく、役人に申告すれば必要に應じて、何でも直に給與せられる。故に休日には田舎から必要なものを受取るために、都會へ上る人々が多い。

(二)政治　十村を統轄するのが郡長で、其の上には全縣を支配する知事がある。知事は人民の公選で、一縣を東西南北の四區に分割し、各區一人の候補者を出し、二百名の村長が村民を代表して、無記名投票で一人を選ぶ。知事は人民の彈劾を受けることさへなければ、終身その地位に居ることが出來るが、其外の役人は一年交替、但し再選せられることは出來る。

郡長は三日毎に縣廳に參集して、知事と公務を協議する。國事は凡べて三日間議院に於て審議せられ、若し議院以外に於て之を論ずる者は、叛逆罪に問はれるが、これは大官の陰謀を阻止せんがためである。

(三)職業　ユウトオピアで最も重要な職業は農業で、之には男女の區別を問はず、必ず從事するのである。されば農業は學理に於ても、實際に於ても、驚くべき程度に發達し、決して天候の如何によつて豐凶を左右せられるが如き危險なく、毎年確實に收穫する。農業以外の職業にも、飽くまで科學を應用する。さうして此の國では、學問と實際との間に格別の距離がなく、職業は即ち學問である。例へば紡織、裁縫、建築、鍛冶の如きは、いづれも職業であつて同時に學問である。

勞働は一日六時間と定め、午前に三時間働いて、正午から二時間休息し、午後に更に三時間働く。決して我がヨオロツパ諸國に於けるが如く、朝早くから夜晩くまで、人間を機械のやうに働かせるといふが如き、野蠻なことは、此國では夢にも見られないことである。これは勞働の時間が短いのと、貧富の區別が無くて、誰でも勞働に從事することになり、一人として徒食する者はないから、勞働は苦しいことでも卑しいことでもなく寧ろ愉快なことである。ましてや勞働の餘暇に於ては、一同讀書とか談話とか音樂とか遊戯とか、すべてのことに自由に享樂することが出來るから、勞働が多少苦痛でも、敢て之を厭ふ者は無い。また勞働は一日六時間に過ぎないが、それでも農産物の如きは、必要の二倍を生産する。これは婦人とか僧侶とか貴族とか隣人とかいふ類の遊民といふものが皆無で、各自が勞

するからである。最も學術其他の方面に特別の才能を有するために、官選又は公選によつて、勞働に從事しない者もあるが、それは極めて少數で、一日五六時間の勞働は、此種の職業にも妨げとならない。

（四）家族　婦人は相當の年頃になると、他の家族へ嫁いで行くが、男子は子々孫々悉く一家に住んで家長に仕へる。但し人口が餘り增加するとか、或は特別の事情のために、人口が著しく減少するとかといふことを防止するために、特別の注意が施してあつて、一縣の戶數は六千に限り、一家の人口は十人以上十六人以下に制限する。尤も小兒は此の限りにあらず。これは子供の多い家族をして、子供の少い家族に對して、子供を融通させるためである。これと同じやうなことは、人口の增加の多い縣と少い縣との間にも行はれる。もし全國の人口が制限を超過する場合には、相當の人員を選拔して、附近の地方に移住させる。さうして其の移住した地方に、相當な人口があれば、之を迎へて自己の社會に加入させるが、之に加入した人民は、忽ちユウトオピアに感化せられて、之を欣ぶやうになる。萬一之等の人民が、之を拒絕する場合には、ユウトオピアの人民は、干戈に訴へて之を放逐する。蓋し自然の開拓を怠り、適當な努力をしない者に對しては、之に代つて其の土地を利用することこそ、人間自然の權利であると考へて居るからである。かくて植民地の人口は、萬一本國の人口が著しく減少する場合の、豫備として增殖せられるのであつて、本國の必要に應じては、必要だけの人員を植民地から召還して、人口を補充するのである。

家庭生活の狀態を語れば、家長は前にも述べた如く、一家を總管するのであるが、其他の者でも凡べて年下の者は年長の者に從順である。都會は四區に區分せられ、その中央に市場があつて、凡百の品物を集散する。但し金錢といふものはなく、すべて政府の許可により、各自の必要な品物を無代で交換するのである。前にも述べた如く生産は充分豐富である上に、各自は實際必要なるものは何時でも受取ることが出來るから、必要以上を要求するといふが如きことをしない、故に供給が不足するとか、需要が充たされないといふが如き虞れは毫もないのである。

一體動物の社會では、食物の供給が不足すると、牙を鳴らせ爪を尖らせて、獲物を爭ふのが常態であるが、人間の社會に至つては、たとひ品物が不足せずとも、各自が虛榮の觀念から、無用のものまで慾張るので、社會には充分に品物があるのに、禽獸同樣の爭ひをする。しかるにユウトオピアの人民には、[illegible]えてさういふことがない。

都會の住宅は一町内に三十一戸づゝ建てられて、中央の一戸には町長が住む。町長には賄方があつて、毎日一定の時間になると、市場へ必要品を受取りに行く。但し之等の品物は、まづ最上のものを病院に供給し、次には知事と高僧と郡長と外國からの公使及び滞在外人に供給し、其の次に人民に分配する。食事の時刻には銅羅としてラツパの音が鳴り渡り、之を相圖に三十の家族が町長の食堂に集まる。尤も特別の事情があれば、自宅で食事することも出來る。しかし共同の食堂では立派な食事が出來るのに、自宅で料理する場合には、少からざる手數を要し、且つ立派なものも出來ないから、よく〳〵の事情でもなければ、好んで自宅で料理して食事するやうな人間はない。食卓は中央のに町長の家族、その次に僧侶の家族、その周圍に其他の家族が整然と坐席する習慣で、食卓の兩端には家長夫妻、その中間には老弱男女が交互に著席するのであるが、これは年寄が若い者を監督し、また若い者が年寄に仕へるやうにするためで、特別の料理が出るときには、まづ之を老人に供へ、老人が若い者に分配する。すべて食事の場合には、快い音樂を聞きながら、老弱男女が代る代る樂しい談話を交換する。

序に婚姻のことを語れば、男子は二十二歳以上、女子は十八歳以上を以て、結婚適齡と定めてあつて、此の制限に背く者は、嚴重に處罰せられ、知事の特許を得なければ、生涯結婚することが出來ない。しかし斯ういふことが起ると、それは家長が監督を怠つた責任となるのであるから、家長も充分此點に注意し失態を出さぬやうに努める。男子が妻を選ぶには、奇妙な風俗が行はれる。これは吾々から見ると如何にも馬鹿々々しいのであるが、彼等には相當に根據のある理由があつてのことである。まづ婦人が嫁がうとすると、たとへ處女でも寡婦でも、嚴格な夫妻を仲人に選んで、その立合の下に其の婦人を、花聟の面前で裸體にする。また花聟も同樣に、仲人を立合にして花嫁の面前で裸體になるのである。これは如何にも笑ふべき野蠻な風俗のやうであるが、彼等は吾々とは反對に、吾々が一匹の馬を買ふにも、鞍も轡も外してしまつて、體を一々檢査するのに、一生連添ふ妻を選ぶのに、唯だ面立を見るだけで、體にどんな缺點があるやら、そんなことには平氣なのを見て、隨分馬鹿な習慣だといふ。斯樣に結婚する前に、相手の性質や肉體を充分に檢査するのであるから、一旦結婚した後で、不平を起すといふことがなく、自然離婚とか姦通とか、忌はしい現象が起らない。萬一結婚した後で、夫婦が相談した上で、他の男女と結婚しやうと思へば、特に元老の許可を經て、一旦離婚することが出來るが、その手續は簡單でない。

これからユウトオピアの經濟や、法律や、軍事や宗教のことを語らうと思ふが、その前に尙ほ此の國の風俗の一斑を示すために、此の國の旅行の話しをして置かう。此の國では近い處へでも、遠い處へでも、旅行がしたいと思ふときには、格別差支さへなければ、町長又は村長が直に許可を與へて呉れる。それのみならず旅行者には、役場から馬車を貸して呉れるし、金錢とか食物とかいふものは少しも携帶する必要がなく、行く先き先きで必要なものは自由に取ることも出來るし、何處へ行つても自宅同樣、何等の不便を感じない。さる代り一處に二日以上滯留しやうとする場合には、宿つた家の人々と共に、相當な仕事に從事して、決してノラクラして居ない。第一此の國には何處へ行つても、卑しい商賣とか惡い場處とか、さういふものが皆無であるから、よしノラクラしやうにも、そんなことをする餘地がなく、結局人々と一緒になつて、相當の仕事をすることが、何より愉快なわけである。

(五)經濟　斯樣に此の國の人間は、何處へ行つても自宅同樣自宅とか役所とかを區別せず、忠實に勞働する。これは此の國の人民は一國が一大家族であつて、萬事が共通だからであつて、人間が斯ういふ精神で、勞働を少しも苦痛とせず、愉快に働くのであるから、從つて生産も非常に豐富で、各自が裕福に生活しながら、半分以上は剩るのである。そこで毎年町村から各々三名づゝの總代を首府アルモチに上京させ、各々町村の需要供給を精細に上申する。政府は之等の報告によつて、今後二箇年分づゝの準備の出來る程度に於て、毎年の生産を削減する。さうして生産の一半は、外國に輸出するのであるが、之は外國から輸入する必要な物品と交換するためで、而も國内の生産が極めて豐富潤澤であるから、外國から輸入する必要は決してそんなに多くはない。故に輸出の七割は外國の貧者に寄附することにし、殘る三割の品物も極めて低價で賣拂ふ。それでも賣拂つた品物の代金が年々增加して、國庫に充滿する有樣であるから、代金の支拂も催促せず、どしどし貸貸にするのである。

それから最も奇妙なことで、他國ではとても想像の出來ない現象といふのは、此の國では金錢は一切通用しないから、品物の値段を定めるにも、金錢で見積るのではなく、品物の必要な程度によつて公平に評價するのである。故に此の國では金銀よりも銅鐵が遙かに高價である。天は人間に深切で、實際人間に必要なものは之を豐富に供給し、餘り必要のないものは少ししか與へないのである。しかるに人間は愚かにも、金銀は産額が少いからとて、銅鐵よりも尊重する。金剛石や眞珠なども、此の國には澤山發見せられるが、誰しもそんなものを珍重は

い。各々それを拾つて來ても、子供の裝飾にするだけで、大人が寳石を飾るなどとは、狂人でもしないことである。

或時アネモリアと云ふ國から公使がユウトオピアへ來たことがあつたが、其時の滑稽な印象は、未だに私の頭を去らない。一體ユウトオピアの隣近の國では、ユウトオピアの風俗を知つて居るから、此の國へ公使が來る場合には、決して立派な服裝を著けず絹服などは絶對に著ない。しかるにアネモリアは遠國であつてユウトオピアの内情を知らないから、公使は麗々しく著飾つて威風堂々と乘込んで來た。公使は大官が三名に、從者が總計百人であつたが、いづれも綺羅びやかな絹服を著け、帽の頂から靴の先まで、金銀珠玉で固めて居た。ところがユウトオピアではどうかといふに、斯かるけばけばしい服裝をして、金銀なぞを飾るのは、奴隷か子供のすることである。しかるに公使の一行は、ユウトオピアの人間が一般に質素な服裝をして居るのを見て、さてさて此の國は餘程貧乏な國に違ひないと思つて、愈々高慢な態度になる。またユウトオピアの人民は、あれが公使だといふが、公使が奴隷の眞似をするとは、さても奇態な國柄だと、お互に輕蔑し合つて居る。だからユウトオピアの小兒は母親の袖を引き、アネモリアの大使を指しながら、「お母さんどうしたのあの人は。子供のやうに、あんな眞似をして。馬鹿なんでせうか。」小兒の母も之に答へて、「あれはね、お前、大使のお伴をして來た道化役者なんだよ、きつと。」しかし公使の一行はも、一二日滯在する間に、善く此の國の風俗を見ると、萬事が[illegible]非常に豐かであつて、金銀も決して乏しくないが、それを一向珍重せず、つまらぬ什器などに使用し、殊に小兒や奴隷に限つて金銀を著飾つて居るのを見て、始めて此の國の見識を悟り、急に狼狽赤面して、質素な衣裳と取換へた。實際ユウトオピアの人間は、若しピカピカするものが好きなら、太陽もあれば月星もあるのに、何故他所の國の人間は、金銀なぞをあのやうに、珍重するのか氣が知れない、第一人間そのもの丶人格如何を問はずして、著て居るもので人間の價値を定めるといふが如きは全く不可解な現象だといふ。如何にもユウトオピアの人間から見ると、人間が金錢なぞといつて、小さな金屬を神のやうに崇め、人間がその奴隷になつて、之を得れば非常に喜び、之を失へば非常に悲しみ、人格の如何に拘はらず、之に富む者は尊重し之に富まぬ者は輕蔑する、如何がはしい人物であることが世間周知の事實であるのに、金銀を澤山持つて居るとて、種々な名譽を授けるなぞとは、實に驚くべきことである。

(六)教育　ユウトオピアの風俗が、他國と違つて斯くの如く善良なのは、第一に制度の然らしめる結果であるが、また此の國

の教育も此の制度に關聯して、斯かる風俗を鼓吹するやう、充分に整頓せられて居る。一體此の國では特別に推選せられた人々に限つて、學問を專門にするのであるが、これも極めて少數で人民は一般に男女を問はず、少時から勞働に從事する。しかし勞働は大人でも一日六時間に過ぎない上に、有害無益に時間を消すといのが如き惡風がなく、餘暇には充分に讀書する。故に格別學校もないのに、教育は充分に普及して居る。また諸種の學問も、敢て他國の學説などを盛んに輸入しないのに、ギリシアに劣らぬ發達を遂げ、殊に天文の研究は驚くべき進歩を示し、氣象の觀測に至つては最も巧妙を極めて居る。

道徳の研究に關しては、肉體と精神との關係とか、道徳と快樂との關係とか、さういふことが問題になるのは、やはり吾々と同一であるが、殊に彼等の重きを置くのは、個人と社會との關係である。さうして之等の問題を考察するには、決して理屈のみに依頼せず、宗教の方面からも討究する。蓋し宗教を度外して、人間の幸福を追求すると、必ず缺陷を生ずるからである。

彼等は人間の靈魂が不滅であると信ずるが、これは必ずしも現世の不幸が來世で報ひられるといふのではなく、現世でも善良で正直であれば、そのこと自身が幸福である、人間は自然に關聯して、神の目的を成就するために、現世に生れて來たのであるから、自然の意思に從つて神を喜び愛するのが、最大の幸福であると信ずる。また彼等の信念では、人間は理性の力によつて情欲を正當に指導して、自己と萬人との幸福を、全く一致させるやうに、努力してこそ幸福である。それゆへ彼等は決して他人を害して自己の幸福を計らうとはせぬが、さればとて他人を害せざる限り、充分に幸福を享受するのを、決して罪惡とは考へない。

さればユウトオピアの人民は、甚だ快活な性質であつて、遊戯娛樂を好むのであるが、しかし狩獵とか鬪犬とかいふ如きものは、彼等には殘忍でもあり苦痛でもあつて、之を娛樂とは考へない。彼等の愛する娛樂といへば、例へば學理を研究して有益なことを發見するとか、或は理想的な料理を賞美するとか、音樂を嗜むとかいふことであるが、殊に第一の娛樂としては、適當に勞働することによつて、身體を强壯にすることであつて、これさへあれば他の娛樂は必ずしも有るを要しないといふ。

彼等が學問の研究を如何に愛するかの一例を擧ぐれば、私は或時ギリシヤ語の一部を彼等に教授したが、彼等は非常な興味を以て忽ち之を習得した。尤も此の國の言語は元來ペルシアの系統を引くやうであるが、太古にはギリシヤの影響をも幾分か受けたものと見えて、ユウトオピアの個所にはギリシアの[illegible]

を引いたものが決して少くないのである。

（七）法律　ユウトオピアにも法律はあるが、それは極めて單簡で、人民が過つて罪を冒しても、直ぐに役人に自白する、役人は亦た人民に對して宛も慈父の如くであるから、成るべく人民に刑罰などを與へない方針を取つて居る。實際また人民も生活が至極安樂で、強いて罪などを冒すべき必要が殆ど皆無である。且つ法律も簡單で、複雑な法律などはないから、法律に觸れるなどゝいふ事例も甚だ稀である。辯護士などといふ職業もなく、さういふものこそ寧ろ却つて事件を複雑にするものである、自分の爲した行爲であるから、自分で明白に自告する、それが最上の辯護であるといふのが彼等の觀念である。實際法律が簡單であつて、人民は一般に法律の全部を暗記して居るから、法律の解釋を專門にするやうな職業の必要がない。

また外交のことに就いても、外國とは交際するけれども、條約とか同盟とかいふやうなことは言はない。男子も女子も一般に軍事の訓練は受けるけれども、これは不法な外國が、自國又は隣國に對して、侵略を敢てする場合の、防禦に備へるに過ぎないので、此種の事態の起らぬ限りは、容易に干戈を動かさない。殊に隣國が正當の理由で援助を求むれば、隨分應援もするのであるが、元來自國の商品を強いて他國へ輸出するとか、販路を海外に擴張するとか、さういふ必要に乏しいから、從つて自國の海外に於ける利益を擁護するために、法文で國際の關係を束縛するやうなことはしない。ユウトオピアでは外人を隣人又は友人と呼んで、非常に親密に交際する。けれども條約や同盟には決して重きを措かうとしない。蓋し人民と人民とが温情を以て相結ばなくては、條約は一片の空文だからである。

彼等は最も戰爭を憎む、蓋し最大の惡事であつて、禽獸ならばいざ知らず、決して人間の好んでなすべき行爲でないが故である。されば戰爭に勝つたからとて、それを光榮なぞとは考へないから、兵力に愬へるといふが如き場合も極めて稀である。

（八）宗教　信仰は國民の自由であつて、或は太陽を崇めるあり、或は月を祀るあり、人々によつて様々であるが、しかし大多數の人間は、唯一の神を信ずるので、之を天地の父と呼び、自然と人生との一切は、その主宰するところと信じて居る。吾々がキリストの生涯を語り、その教理を傳へると、彼等は之を眞理と認め、歸依する者も少くなかつた。蓋し初代の使徒の生活なり、またキリストの精神なりが、全くユウトオピアの人民の思想及び生活と一致するからである。しかし如何なる宗教でも、決して他宗を攻撃しない。これは善良な宗教は自然に繁昌するであらうし、缺點のある宗教は自然に陶汰せられるから、

人爲を以て左右するのは有害無益と認めるからである。

寺は一縣に三十づゝで、それに僧侶が一人づゝ居るが、僧侶は人民の公選であつて、一般に徳望に富んで居る。少年少女の教育は僧侶の役目に屬するが、僧侶は決して彼等に對して不自然な教育を授くることなく、自然の美はしい性情を助長することに努力する。信者が惡いことをしても、僧侶は決して罰しないで、神と當人の良心との審判に一任して置くことにする、

毎月初日と末日とは一國の祭日と定められ、人民は寺院に參集して、或は過去の一箇月の成績を神に感謝したり、或は今後の一箇月の加護を神に祈つたりする。

●

まづユウトオピアの國情は、大體こんなものですが、私はこれこそ廣い世界で唯一の政治だと考へます。他の國々では、人間は口にこそ社會とか國家とかいつても、實は私欲ばかりを目的にして居ますが、此の國には財産の私有がないから、かういふ矛盾は絶無であつて、如何に國家が繁昌しても、自分が貧乏では駄目だ、なぞと言ふ觀念が起らない。第一貧窮とか金儲とかさういふ心配は毛頭なく、子々孫々相傳へて、一般の人々と同等に、愉快に勞働さへすれば、必要なものは立地に得られ、何等營々たるべき必要がない。即ち唯だ正義であれば、其他に何の必要もない。しかるに他國ではどうかといふに、第一正義なぞといつても、その實は甚だ怪しいもので、貴族とか金貸とかいふものが、何もせずに遊んで居て、贅澤な生活をするのに、大工や百姓は奴隷のやうに汗水を垂らして働きながら、それで年中貧乏して居る。鳥や獸でも朝から夜まで、こんなにしてまで働かない、一定の時間だけ餌を漁れば、あとは愉快に遊んで居るのに、他の國々では人間が却つて禽獸にも劣つて居る。

一體他の國々の政府では、紳士とか金貸とか、或は又た之に阿諛する人間を保護して、怠惰な人々を優遇しながら、國家には是非とも必要な勞働をする人間を、斯くも虐待冷遇するとは、隨分不法ではありませんか。元來勞働する人間の賃銀が恐ろしく低いのに、偶々彼等が不平を唱へて、收入を増加しやうなどすれば政府は貴族に加擔して、法律で人民を壓制する。これも隨分亂暴です。貴族が國家の安寧とか、社會の幸福とかを口實にして、自家の利欲を保護するなどは寧ろ一種の憎むべき詐僞です。

かういふことは何故起るか、それは人間の價値よりも金錢を尊重するからです。強盜、殺人、姦淫、訴訟、おお、あらゆる惡徳も金錢のためです。いくら法律を嚴重にしても、いくら道德を奬勵しても、それは皆目無效です。たとへば世に貨幣が無

つて、何千といふ人々が餓死した後で、富者の倉庫には充分な穀物が積上げてあることを發見したら如何でせう。金錢は品物の交換を媒介するための手段だといひます。しかるに金錢を認めるために、品物の分配が停滯して、充分に行渡らないぞといふのは、何たる馬鹿々々しいことですか。恐らく貴族でも富者でも、こんなことは熟知して居る。彼等も人間である以上は、一生金錢の奴隷になつて、他人からは怨望せられ、不快な境遇に跼蹐するより、一層財産などは潔く貧民に分配してしまつて、安穩な自分にもなりたいでせうが、またそれこそキリストが明かに命令するところですが、彼等の決心を鈍らせるのは、何かといふと、虛榮(プライド)です。一體虛榮といふものは、他人が貧乏して居ないと、餘り榮えないものですから、金持は未練を殘すのです。

私はユウトオピアの制度を見て、その善政に感服しました。若し〻世界の國々が之を模倣したならば如何でせう、國家は永久に安泰です。現にユウトオピアの如きは、その國內の豐かなために、隣國が往々にして野心を起し、之を侵略しやうとしもしましたが、國民の團結が堅固なため、到底その目的を達する能はず、今日では最早如何なる國家もユウトオピアを覬覦いたしません。

＊

ラファエルが語り終つたとき、余は其の談話に様々な疑惑を抱いたのであつたが、殊に財産を共有にし、金錢を皆無にする如きは、極端も亦た甚だしい。余は尚ほ之等の諸點に就いて逐一問質さうと欲したが、ラファエルの疲勞したのを認め、談話は一旦中止して、立つてラファエルが腕を取り、再び食堂に伴つた。余はラファエルに提議して、尚ほ一層精細な說明を聞くことを約束したから、其內約束を果たさうと思ふが、余をして正直に言はしむれば、ラファエルは立派な學者ではあるが、どうも其の言ふところには、悉く贊成することは出來ない。只だユウトオピアにも色々の長處のあることは確かであるから、我國に於ても其の長を取り、以て其の短を補はんことを、切に希望する次第である。

＊

作者サア・トマス・モアはロンドンの富裕な辯護士の長子で、一四八〇年に生れ、幼少から當時カンタベリの大僧正を以てイギリスの大法官を兼ねたジョン・モルトンに教育を委託せられ、最初は法律を修めました。當時モルトンはイギリス第一の政客として有力な人物でありましたが、深くトマスの天才を愛し、客ある毎にトマスを指さして、イギリス第一の麒麟兒を見よ

と、頻りに自慢したといふことです。

一五〇四年にモアは二十五歳にして、ロンドンから國會議員に選ばれ、下院議長に推されましたが、此時國王ヘンリ七世は、皇子の成年式及び皇女の結婚式の經費十一萬三千ポンドの支出を國會に要求し、モアが之を不當として、三萬ポンドに削減するや、烈火の如く憤り、モアが父を捕縛してロンドン塔に幽閉しました。

しかしモアは天性溫雅、玲瓏玉の如き人物で、毫も政界に野心がなく、寧ろ哲學や文學を最も愛好しましたから、斷然公職を辭して閑地に就き、專ら學界の名士と交遊しました。當時は中世の暗黑時代を終つて、新代の曙光を迎へんとする氣運の澎湃たる時代で、コロムブスがアメリカを發見したのも、ルテルが宗教改革の烽火を擧げたのも此の頃です。さればモアも亦た此の氣運に乘じて、「新學」の鼓吹に努力しました。

しかるに一五〇九年、ヘンリ八世が即位するに及び、從前モアと親交あり、モアが再三辭退するのを、强いて說得して登廟し一五一五年にはモアに「サア」の爵位を授け、一五二七年にはモアを大法官に拔擢しました。

モアが「ユウトオピア」を著いたのは、一五一五年即ち三十六歲の時で、其後モアは「ユウトオピア」で發表した胸中の經綸[illegible]を實地に應用せんと志しましたが、此時イギリスでは舊教と新教との爭ひが起り、結局一五三四年に及んで、新教が國教と公認せられ、モアは之に反對したので、不幸にも反逆の罪に問はれ、刑場の露と消えました。

モアは「ユウトオピア」の中で、人間が宗教の相異のために爭ふの非理を鳴らしましたが、それに拘はらず、かれ自身が曾々宗教の爭ひのために、その犧牲となつて刑死しました。かれに取つては矛盾ですが、しかしモアの最後に就いては、天下悉く同情し、當時ヨオロッパに盛名を走せた碩學エラスマスの如きはモアの悲慘な最後を聞いて、聲を放つて慟哭しました。

一五〇七年にコロムブスの航海記事が出版せられ、學界を刺戟しましたが、モアも之に感動して、ラファエル・ヘイトロデエといふ一人の旅人を想像して、之に滿腔の經綸を托しました。「ヘイトロデエ」はギリシア語で「物識」の意味で、此の男はコロムブスが最後の航海に加はりましたが、一行が歸國する場合に、二三の同志と語らつて、暫くアメリカに踏留まり、尙も旅行を繼續した結果、南アメリカの方面で、ユウトオピアを發見しました。「ユウトオピア」とはギリシヤ語で「何處にも無い」といふ意味です。即ち OU(無)TOPOS(處)です。

モアに曾て公使としてブラッセルに駐剳しましたが、其の頃ユ

ウトオピアで想像した理想の社會を標準にして、ヨオロッパ殊にイギリスの政治を諷刺したのです。此の書は一五一六年に、當時高名な學者であつたエラスマスの監輯で、ルウバンで出版せられました。元來イギリスの國政を諷刺したものですから、ヘンリ八世の治世には、誤解を怖れて、モアが祖國であるところのイギリスでは出版しませんでした。モアは諷刺家で哲學者でしたが、しかし社會の實務も決して迂遠でなかつたと見えて、エラスマスの傳へる所によれば、アントウエルプの市長の如きは非常にユウトオピアを愛讀して、遂には暗誦したといふことです。またエラスマスは一五一七年に、市長に特に手紙を送つて一切の政策を改革するには、是非とも此の書を一讀せよと、熱心に慫慂したといふことです。

最初は當時の習慣として、ラテン語で書かれたものですが、其後種々の飜譯が出ました。

第五　新アトランチス

吾等はペリウに滯在すること一年許りで、更に一箇年分の糧食を貯へ、此度は航路を南洋に取つて、支那と日本とに向つて出帆した。最初五箇月程の間は、穩かな順風が東から吹いたが、其後は風が西に變つて、船は遲々として進まず、却つて後へ押戻される。とかくする内に今度はまた風が更に南へ廻つて、吾等は必死に努力したが、船は北へ北へと推され、北上此時糧食は盡きる。もうかうなつては、從容として死を待つ外に方法はない。けれども吾等は心を勵まし、我等の不運を憐れむ神に向つて助けを祈つた。さうして我等の哀叫が果して天に屆いたと見え、その翌日の夕方になつて、吾等は遙か北に當つて、一抹の黑雲とも見える一座の陸地を發見した。勿論、それは島か大陸か定かには知ることが出來ない。けれども吾等は勇氣を得て終夜その方面に向つて船を進め、漸く翌日の明方になつて、それが平坦な島であつて、黑雲の如く見えたのは、陸上に鬱蒼と繁茂した森林であることを確めた。

やがて一時間半ばかりで、船は或る美しい港に入つた。港の上に立つて居る市街は餘り大きくはないが、如何にも立派に建てられて、港から眺望も見事である。吾等は取るものも取りあえず、急いで上陸せようとすると、前面に潜水夫達が現はれて、何かしきりに相圖する。吾等は一向要領を得ず、どうしたものかと思つて居ると、八人ばかり乘込んだ小舟が一隻漕寄せて、其中の一人が吾等の船中へ上つて來た。けれども彼は吾等に對して格別不審な樣子もなく、吾等の中の一人に羊皮の卷物を手渡した。その卷物を開いて見ると、ヘブライ語とギリシア

語とラテン語とスペイン語とで斯う書いてある。「此島へは決して上陸を許さぬ。十六日以内に立去りなされ。但し糧食や飲水は必要なだけ進上する。また病人に對しては相當の手當をして進ぜる。」

この命令を傳へると、彼等は下僕一人を殘して、市中に向つて引揚げた。吾等は一同當惑したが、一種の望みは彼等とも言葉が通じるといふことと、彼等が如何にも深切げに見えるといふことである。殊に彼等の書面にも十字の神號が書いてあるから、彼等も吾等と同じやうにキリストを信奉するのであらう。そこで吾等も協議して、スペイン語で返事を認めた。「吾等の船には故障はないが、船中には多くの病人があつて、若し上陸が出來なければ、とても充分の療養が出來ず、命を落す者が出來る。また船中には若干の商品があるが、諸君の希望如何によつては、厄介を掛ける報酬として全部進上したいと思ふ。」それから下僕へはピストルを、役人には丼ロウドを贈らうとしたが、下僕はそれを受取らず、返事だけを持つて立去つた。

三時間程たつて、二隻の小舟が漕着せた。一隻には僧侶かと思はれる立派な服裝をした一人が、四名の從者と乘込んで居り、一隻には其の護衛として二十人程乘込んで居る。吾等の船に近づくと、僧侶かと見える一人が、吾等に向つて相圖をして、代表者を小舟でよこせといふ。吾等も重立つた五人を選んで小舟に乘せて遣はすと、僧侶は再び相圖をして、餘り近くへは來るなといふ。吾等の小舟が進みを留めると、僧侶はスペイン語で大音に「君等はキリスト信徒か」といふ。「さうだ」と吾等が答へると僧侶は突然右手を擧げて、遙かに天を指して、徐かに其手を接吻した。これは彼等が神に向つて感謝する場合の仕艸（ゼスチュア）である。さうして曰ふには、若しも君等がキリストの御名によつて君等が海賊でないことゝ、過ぐる四十日間に刀傷をしなかつたといふことを、一人殘らず誓ふならば、上陸の許可を與へやうとのこと。そこで一同は引取つたが、やがて一人の使者が來て、明朝六時に一同は上陸して、外國人の館に迎へられ、充分の待遇が受けられるといふ。吾等は一同安心して、その使者の勞に報いるために、再びピルトルを持出すと、使者はニッコリ微笑して、「二つの仕事に報酬を二つといふことはないでせう」といふ。つまり使者には相當な月給がチャンと與へてあるのだから其上に報酬を受けるのは、報酬の二重取りと言つて、此國では非常に擯斥する。

さて翌朝になると吾等一同は打揃つて上陸したが、外國人の館に行くまで、途の兩側には大勢の市民が群衆して吾等を迎へる。彼等は不思議にも吾等に對して異様な眼を向けるのでな

極めて眞面目な面持で、吾等に向つて挨拶する。外國人の館に入ると、如何にも立派なものである。吾等は何だか貧家の子供が貴族の招待でも受けた心持で、一同密かに申合せて、成るべく行儀を善くすること、疾しいことはしないことにした。

吾等の一行は五十人、其中十七人は病氣であつたが、病人には特別の居室を與へ、また我等にも身に餘つた懇切な待遇が與へられた。殊に昨日來た坊さんは、吾等を接伴する役目を引受け、毎日我等を訪問して、慈愛の溢れるやうな言語動作で、色々と吾等を慰めた。その話しに依れば、此の島には六週間滯在することを許されたが、しかし必ずしも六週間と嚴格に限られたのではない、吾等の都合次第では期限を延ばすことも出來る。吾等は二三日滯在する間に、此の坊さんから聞くところに依れば、此の島は其の名をベンサレムと云ひ、極めて廣大な大陸であるが、世界には更に知られない。けれども國内は非常によく整頓して、實に地上の天國である。我等は坊さんの話を聞いて、色々不審を起したが、殊に不審に思つたのは、此の國が一切外國と交際をしないといふに拘はらず、此の國の人々が外國の事情に精通し、諸國の言葉をも理會することである。しかるに坊さんの說明に依れば、それには立派な理由がある。——今から二千年前には、即ち太古のギリシア人やアラビア人が、盛んに貿易した頃には、世界の交通は頗る盛大で、近頃はコロムブスがアメリカを發見したとか、ヴスコダガマがアフリカを廻航したとか、吾々はそれを餘程の大事業、大進歩のやうに考へて居るが、太古の航海全盛時代には、世界の端から端までも航海が發達して、まだ〳〵吾々の知らないやうな樣々な國々と交通した。然るに一千九百年前に、世界に一大地震が起つて世界は殆ど泥海と化した。爾來世界の交通は全く衰微してしまつた。其後三百年程經て、丁度キリストが昇天せられて二十年目のことであつたが、此國の或る港の海上に、或る夜大きな火柱が立つて、その頂上には金色の十字架が耿々と耀いた。港の人々は大いに驚き、小舟を出して其正體を見極めようとしたが、不思議にも小舟は更に進まない。やがて其の火柱は消え失せたが、小舟の中には一冊の書物と二三の卷物とがあつた。その卷物の一つには、「我は神の僕バルトロミウであつて、イエスキリストの使徒である。茲に汝等のために新しい福音を傳へる次第である。」さうして一冊の書物は舊約聖書、他の卷物は新約全書の初の方の部分であつた。そこで此の國の人々は、此の福音に基づいて、一切の制度を改革した。制度に就いて悉しいことはいづれゆる〳〵お話しもし、また實地に就いて御覽も願ふが、とにかく此の國では外國と貿易をしたり戰爭をするより、此の

國だけを充分に改良することの必要を認め、外國とは一切交際しないが、しかし十二年毎に諸國へ人々を派遣して、外國の進歩を視察させ、必要な制度や機械だけは費用を惜まず輸入する。此の點に於て我が國は支那とは趣きを異にする。支那は徒らに尊大に構へて、自國以外を夷狄と呼び、而も其の國の商人は世界各國に行商して、自國に必要と否とを問はず、寧ろ無用な品物を自國へ輸入するばかりで、眞に自國に必要な外國の制度を學ばうとしない。かういふ事情で此の國は、外國と交際しないのに、善く外國の事情に通じて居る。

もしそれ此の國の文明が如何に發達して居るかは、單に我等の宿所になつた建物だけを見ても分る。殊に其の食物の善美にして料理の巧妙を極めたことは、到底ヨオロツパでは味ふことが出來ない。かくて數日滯在する間に、我等は市中をも見物して、様々な人々とも知合になり、或時は食事にも招待せられたが、老若男女の關係が如何にも禮儀正しくして而も和氣の藹々たるは、寔に地上の天國である。

或日、此の町のソロモンの館の教父の一人が巡廻をした。この「ソロモンの館」といふのは、此の國を改革したソロモンを祀る神聖な館であつて、教父が市中へ現はれることは非常に珍らしいことで、今度は十二年目である。吾等も其日は打揃つてその莊嚴な行列を見たが、その後三日経て意外にも、教父が吾等の滯在を聞いて、一同を引見するとのことで、吾等の中から一人を選んで、教父と對話することも出來るといふ。私は一同を代表して教父と言葉を交える光榮を荷つたので、一同が謁見を終つて退席すると、一人居殘つて教父に側近く席を賜はつた。言葉はスペイン語であつたが、對談と言つても、私は始終謹んで教父のお話を承はるばかりで、格別何も語らなかつたが、教父のお話の大體は、………

「善うこそお訪ね下された。就いてはそなたへ贈物として、私が持つて居る寶玉で一番善いのをそなたへ進ぜる。それは此のソロモンの館に昔から大切にしてある掟である。この掟こそ全世界の何物にも優つた寶物である。その掟をそなたに授けて進ぜる。まづ第一は此の館の制度の目的である。第二は此の館の人々の研究の方法である。第三は此の館の色々な役人の仕事である。第四は此の館の法令と儀式との大體である。

「そこで此の館の制度の目的は、飽くまで知識を尊重して、因果の關係を明かにし、それに依つて人間の活動の範圍を擴めることである。此の目的を達するために、此の館には種々の設備がある。例へば所々に非常に深い大きな穴を掘つて、之を冷藏庫に當てる。病人も其下で自然に健康を回復する。また長生を

希望する者は其中で生活する。また所々に非常に高い塔を建て、これは天氣の觀測に充て、また冷藏庫にも利用する。また鹹水と淡水と二種の大きな湖を造つて、魚類を繁殖させる外に水中に保存すべきものは此の湖水に保存する。また湯を設けて水力を利用し、或は蒸氣を應用する。また特別の家を建て、その内部の空氣を純粹にし、その溫度を適當にして、自然に病氣を全快させる。また花園や菜園を設け、人工で果物や野菜を作る。公園には種々の禽獸を飼ひ、之に種々の試驗をして、人體の營養の參考にする。また禽獸にも人工を施し、種々の變種を作り出す。食物や飲物の製造に就いては、恐しいことは語らないが、かく知識の應用によつて、その種類は極めて多く、その製法も極めて巧妙である。また藥屋へ行つて藥を買ふにも、ヨオロッパなどで得られるより、遙かに上等なものが直に出來る。織物や紙類を製造するには種々な發明を應用する。また種々な方法で天然の熱心を利用して、それを動力に使用する。また遠近法を應用して、光線の作用を研究し、之を色彩の配合に利用する。また人工を以てガラス其他種々の寶石を製造する。香料や香薫の研究にも各自獨特の設備がある。蒸氣の利用は頗る盛大で、之を應用して空中を飛行したり、水中を潜航する機械もある。

「之等の仕事をするためには、種々の役人が置いてある。第一は外國へ出張して諸々の文明を視察するが、表面に商人の體裁で行くので、之を文明商人といふ。第二に種々の書物から必要なことを調作する、之を翻譯人といふ。第三は種々の發明を利用して之を應用する役人で、之を魔法使といふ。第四は之等を實際に應用するための役人で、之を開拓者又は山師といふ。此外、之等を綜合して文書に記錄する役人を編輯人、之等の仕事に特別の盡力を與へる役人を保護者といふ。

「以上の制度を總管する役所には二つの部分があつて、一つには種々の發明の標本を陳列し、一つには種々の發明家や發見者の彫像が悉く陳列してある。例へばアメリカを發見したコロムブスの肖像もあれば、船を發明したモンクの肖像もある。其外火藥、音樂、文字、印刷、天文、煉金、硝子、生糸、パン、砂糖などの發明者の肖像もあつて、その傳記の詳細は諸君が知つて居るよりも遙かに精細に調査してある。」

教父は一々說明して、話しが終ると席を立つた。私も丁寧に敬禮すると、教父は右手を私の頭に乘せて、「願はくば神、我等を祝福したまへ。私は特にそなたに言ふ、私がそなたに語つたことは、そなたは之を普に示はして諸國の人々に我が國の隱れた幸を頒つが善い。」かういつて教父は立去るとき、我等のために

金貨二千デュカを與へたが、かゝる大金を與へることも、此の國の教父には寧ろ常例であるといふ。〔此書は以下未完稿である〕

●

作者フランシス・ベエコンは、有名な哲學者ですから、その傳記は略して置きます。「新アトランチス」もラテン語の著作で出板せられたのは一六二九年ですが、ベエコンが之を書いたのは、それより數年以前でせう。ベエコンは一六二六年に歿したのですから、此の書はベエコンの遺作です。

プラトオンは「理想國」の姉妹篇として「チマイオス」を著はし、その中にヨオロッパの西海にアトランチスの大陸があるといふことを想像しましたが、果して十六世紀の初年に至つてコロムブスがアメリカを發見しました。そこでベエコンは太平洋にも一大々陸のあることを想像して、この「新アトランチス」を書いたのです。

ベエコンの言葉に、「自然を征服するには、自然に服從するの一途あるのみ」。ベエコンは人間が自然の壓迫を脱して、理想の社會を建設するには、科學的智識を利用して、合理的社會を組織する以外に方法はないと考へました。

第六　ボストン未來記

[illegible]諸君、僕は今から百四十三年前に、此のボストンで生れました「馬鹿なことを。いや全くです」御冗談ばかりおつしやつて。あなたはお見受け申したところ、まだ三十位いでいらつしやる。」さうです、僕は今年三十ですが、僕が母の胎内を出て此のアメリカのボストンで、始めて浮世の光を見たのは、たしかに百四十三年前です。思ひ回せば古い話ですが、ざつと其の頃のことを申しますと、諸君も能く御承知の通り、其の頃にはとても今日のやうな立派な文明はありません。何しろ其の頃の社會といへば、何處の國でも、一つの社會が四つの階級に分れて居まして、一方には富者の階級がある、一方には貧者の階級がある、一方には知識階級がある、一方には無知階級がある。文明が進めば進むほど、その區別が甚だしくなつて、一つの國でも其の實は四つの國に分れて居る。その頃は今日と違ひまして國と國とはお互に仇同志のやうに思つて、鯱鉾反目して居たのですが、そのまた國の內部に於ては更に四つの階級が、お互に仇同志の關係で、鯱鉾反目して居るのです。僕などは相當の教育もありかなり財寶も持つて居ましたから、まづ當時の人間としては、最も幸福な一人でした。ですから勞働などは少しもしないで、成るべく愉快に世の中を渡ることばかり考へて、贅澤な生活をして居たものです。しかし之は僕ばかりではないた

僕と同じやうな境遇の人間は、誰でも一般にさうなのです。祖父の代にも、父の代にも、僕の代にもさうですから、僕の子や孫の時代にも、やはり同じことだらうとしか考へませんでしたが、しかし今日から考へると、随分妙な話です。自分は一向勞働しないで、他人が贅澤をさせて呉れる。その贅澤をさせて呉れる他人は、それではどうかと言ふと、贅澤どころの沙汰ではない、牛馬よりもひどい勞働をして、牛馬よりも劣つた生活をして居る。

成程僕は先祖から相當な財産を貰つたのですが、それとてもたいしたものではない。とても二代も三代も、遊んで贅澤に耽るなぞといふ、そんな莫大なものではなかつたのですが、それで居て、いくら使つても、決して財産は無くならない。却つて殖えるばかりですから、まるで魔法のやうなものです。

しかし之れも其の實は、決して魔法でも何でもない。當時は財産を持つて遊んで居るのを、當時の言葉で「放資」といつてつまり財産は資本だから、資本を生産に融通すると、生産に從事する人間から、自分が欲しいと思ふだけ、税金を取立てることが出來る。そこで生産に從事して、本當に勞働する人間には生産して得た利益の中から、精々食つて行けるだけの「賃銀」といふものを支拂ひ、餘分は資本を出した者が全部獨占してしまふ。

尤もズツと大昔は、利子を取るのは不正だとか、たとへば利子を取るにしても、ごく少額にしなければならぬとか、識者は唱へたものですが、どうも當時の社會組織では、到底それが行はれない。

當時の社會を例へて見ると、ステキに大きな大八車を、人夫が多勢で運んで行く。それも滑かな平地ではない、磽确の亢々した阪道である。おまけに人夫は空腹で、疲れ切つて居るのであるが、辨當を使ふことも出來ない。車の歩みは非常に鈍い。ところが車の上を見ると、お客が一盃乘つて居て、人夫がどんなに難儀しても、一人でも降りやうとはしない。坐席は恐ろしく贅澤に出來て居て、お客は始終愉快さうに、四方の景色を賞美したり、どの人夫は勤勉だとか、人夫の批評をしたりして居る。ところが、お客の境遇も決して絶對安穩ではない。時々車が動搖すると、うつかり轉がり落ちることがある。而も一旦轉がり落ちると、二度と坐席へは戻られない。今度は人夫の仲間に入つて、車の後押をしなければならない。

「どうしてそんな馬鹿なことを。一體車に乘る者も、また車を曳く者も、同じ人間ではないか。同胞兄弟姉妹ではないか。兄弟にそんな難儀をさせて、自分はそんな贅澤をして居る。一體

當時の人間には同情といふやうなものは無かつたのか。」それは無いではありませんが、餘り彼等に同情すると、結局自分も車から降りて、人夫の仲間に入らなければならない。だから成るべく同情はしない。人夫も時々絶望して、自然自棄になることもありますが、さういふ時には、お客の方でも、人夫に亂暴せられてはならないから、甘言を以て籠絡する。「君等が此世で難儀するのは、元來前世の約束だ。しかし此世で一生懸命正直に難儀をして置けば、來世では安樂な身分になれる。」

「何たる非人道なことだ。」けれども當時の人間は、社會には勞働者といふものがあつて、それが難儀を忍ばなければ、社會全體が進歩しない。それは勞働者には氣の毒だが、何とも仕方のないことだ、また資本家といふものは、勞働者に難儀をさせたとて、それは資本家の責任ではない、資本家が贅澤をしたればとて、それは資本家の權利なのだ、斯ういふやうに考へて居ました。今日の社會から考へますと、とても信用の出來ないことですが、現に斯くいふ僕の如きも、その車に乘つて居た一人です。僕は丁度三十の年に、さる資産家の令孃で、やはり「お客」の一人でしたが、優しい美人と婚約しました。

「それは君の奥さんなら、さぞ美人でしたでせう。しかしお客の一人だとすると、それで優しいと言はれますか。隨分冷刻ではありませんか。」たしかにさうです。しかし、とにかく僕は婚約をいたしまして、早速普請を始めました。ところが色々の故障が起つて、段々結婚が延びました。故障といふのは外でもありません、その頃しきりにストライキが始まつて、どうも勞働者が働かない。何しろ勞働者と資本家との軋轢が段々烈しくなつて、資本家は何とかして勞働者を懷柔しやうと骨折りましたが、勞働者は賃銀を増して與れとか、勞働時間を短かくしろとか、住宅を改良して欲しいとか、勞働者にも充分の教育を與へろとか、色々なことを注文する、資本家がそれを承諾しないと彼等は最後の武器として、ストライキを利用するのです。

＊

毎年五月の三十日は、戰勝紀念の祭日でしたが、エディスの實兄も戰死者で、エディスの一家の人達は、戰死者の遺族として、祭典に招待せられました。僕も一族に加はつて、祭典に列席しましたが、その晩自宅へ歸りまして、何氣なく夕刊を讀んで見ますと、又ぞろ大工のストライキです。これでは新宅の出來上るのも、果して何時のことか分らない。おまけにストライキの流行は、ヨオロツパでは一層猛烈で、世界の資本階級は戰々兢々たる有様です。僕も内々心配して、斯う無政府主義や社會主義が跋扈しては、吾々の前途も危險だから、一層何處へか

逃げ出さうかと、考へて居たくらゐです。しかしまた考へて見るとグリンランドか支那へでも行かねば、別に行く所とてもありません。

そこで僕も決心して、とにかく結婚を急ぐことにして、結婚したらエディスと二人で、何處へでも逃げて歩かうと思つて、いよいよ吉日を選びました。それから數日過ぎまして、丁度結婚の前夜です。僕は寢室へ入りましたが、例の持病で眠られません。僕は大變な不眠症で、地下に堅固な寢室を設けて、一切音響の聞えないやうにして、そこで寢ることにして居ましたが、その夜はどうも眠られないので、ピルスパリ博士を招きまして、催眠術を掛けて貰ひました。ところが大變なことが起りました。

僕は明朝九時になつたら、起すやうに下男に言ひつけました が、その晩ボストンに騷動が起つて、僕の家は燒けてしまふ、家族は殘らず生死不明、その外には僕が地下室で寢ることを知つて居る者とては、ピルスパリ博士だけですが、これも行衞不明です。

しかし僕はそんなことが地上に起つたとは知らないで、グウグウ眠つて居りましたが、それから百十四年目に、地下から發掘せられました。幸ひ身體の健康には格別故障もありませんが精神は全く顛倒しました。おゝ、一族はどうしたらう、最愛のエディスはどうなつたか。それからそれへと昔のことを、心に思ひ浮べますと、頭は混亂するばかり。

しかし僕を發掘したドクトル・リイトといふ紳士は、非常に深切な老人で、夫人令孃諸共に、僕の不思議な運命に、實に深い同情を寄せ、懇切に慰めて呉れました。殊に不思議でならないのは、その令孃が僕の許嫁と同じくエディスと言ふ名前で、而も容貌性行まで、まるで當人其儘です。さう思ふと、僕は何だか百十三年も地下に眠つて居たのは嘘言で、實は何時の間にか許嫁の家へ遊びに來たやうな心地もして、餘程心も安まりました。

●

それにしても、百十三年の間地下に埋沒して居たのだから、その間には世の中も餘程變つたことであらう、僕は當分リイト博士のお宅で厄介になることになりましたが、どうも頭の調子が取れないで、やはり百年以前の積りで、トンチンカンなことを言ふものですから、夫人も令孃も變な顔をして、氣の毒さうに笑ひます。成程、博士の邸宅から、ボストンの市街を眺めますと、大體の地勢は昔の通りで、たしかにボストンに相違ありませんが、市街は餘程變つて居ます。その夜は博士からゆるゆ

ると、百十三年間に起つた變化の大體を承はることにしましたが、聞けば聞くほど大變な變化で、如何にも僕の言ふことが、一一をかしく聞えるわけです。

博士の説明に依りますと、僕が眠つた共の晩に、ボストンに起つた騷動に續いて、騷動は方々に勃發する、勞働問題や社會問題は、ますますやかましくなりましたが、結局經濟を國營にして、問題が圓滿に解決しました。これまで經濟は大體に於て國民の私營でありましたが、經濟が發達すればするほど、小資本家は大資本家に次第に併呑せられてしまふ。實際事業は小規模で經營するより、大規模で經營するほど利益です。そこでツラストやシンヂケエトが段々發達しましたが、どうせ大袈裟に經營するなら、寧ろ一切の經濟を一つに合同してしまつて、國營にしては如何かといふので、結局之を實行しました。一體これまで政治のことは政府の事業にして置きながら、經濟のことだけは私人に任せる、これが大體間違つて居た。それで經濟を國有にすると、一般國民に必要なものは、國家が責任を以て生產する。さる代り無益な贅澤品は一切生產しないことにする。それに贅澤をして遊んで居る人間といふものが無くなつて、國民は一齊に勞働する。また國民は一人殘らず、高等な敎育を受けて才能を研き、品格を高めて居りますから、階級の區別などはありません。每年十月三十日が入營祭になつて居ります。入營祭と申しましても兵隊に行くのではありません。昔は外國を敵だと思つて、戰爭をしたものですが、今日では本當の敵といふのは、貧乏のことを謂ふのです。それで男でも女でも、二十一歲になりますと、勞働軍に入營する。現役は二十五年ですから、四十六歲になりますと、豫備に編入せられますが、これは萬一に備へるだけで、四十六歲以上の老人と、二十歲以下の少壯とは勞働を免除せられます。

斯樣に經濟を國營にしたら、國事が非常に複雜になつて、政府の仕事が增加したかといふに、事實は共の反對でして、政府は無いも同樣です。戰爭の必要がないのですから、陸軍も海軍もありません。惡いことをする人間がないから、警察も監獄もありません。議會といふものもありますが、政黨といふものはありません、國民の利害が完全に一致調和して居りますから、國民が二派にも三派にも分れて、利害を爭ふ必要がありません。野心家や煽動家が現はれて、國民を誘惑するといふやうな餘地も皆無になりました。役人も相當に殖えましたが、しかし今日では役人とか人民とかいふ區別はない、國民悉くが役人です。昔は役人が不正を働く、さういふこともありましたが、今日では惡いことをする必要が全くないのですから、いくら役人に仕[illegible]

を任せても、多々益々辨ずるのみで、利益こそあれ、弊害などは起すべき道理がないのです。

僕はその夜は意外にも、愉快に眠ることが出來たが、翌朝早く眼が醒めると、萬感交々胸に湧いて、無限の哀愁を身に覺えた。時計を見れば、まだ五時だ。人々はまだ眠つて居る。僕は急いで着物を著て、ボストンの市中に現はれた。昨日一見しただけでは、まだ左程にも思はなかつたが、かうして市中を散步して見ると、おお、これは何たる變化だ。唯だ一軒でも昔のままに、僕の記憶する家屋はない。ただ其の町名の表札を見て、やはりボストンだと思ふのみだ。生れて直に外國へ行つて、五六十年目に歸つて來ても、決して僕程は驚くまい。何故かといふに其人は、五六十年經つたことを、チヤンと知つて居るからだ。しかるに僕はどうであるか。百年以上の歲月が夢の間に過ぎてしまつたのだ。世界に人間は多いけれども、僕には唯の一人として家族もなければ知人もない。僕は孤獨の感に堪えず、悄然として部屋に歸り、寢臺の上に身を投げて、思はず悲嘆の聲を放つた。すると衣擦(きぬずれ)の音がして、令孃エディスが入つて來た。

「どう遊ばしたの、ウエストさん。」

僕は令孃の美しい、同情に溢れた容貌を見ると、地獄で天女に逢つたやうに、ハツと心を取直した。

「いや、どうも有り難う。僕は氣が狂ふところでした。」

僕が辛うじてこれだけ言ふと、令孃はハラハラと涙を流した。

「ほんとに濟みませんでしたこと。あなたを一人ぽつちにして。どんなにお寂しいでせう。私は昨晩心配で、少しも眠られませんでしたの。ですけど父が申しますには、あなたも嘸かしお疲れですから、ゆるゆるお休みを願ふやうにと、かう申しますものですから。決してあなたを私達が疎略にしたのではないのですから。」

やがて食堂に案内せられ、一同食卓を圍んだとき、僕は博士に質問した。

「今朝ほど散步しました附近には、以前は商店や銀行が軒を並べて居たものです。それが一軒も無くなつたのは、一體どうしたわけですか。例の無政府黨でも亂暴して、破壞してしまつたのですか。」

「さういふわけではないのです。今日では金錢といふものがないのですから、銀行も商店も無いのです。尤も金錢はありませんが、その代りに切符を發行して、國民に平等に分配する。市

内には所々に賣店があつて、そこへ切符を持つて行けば、必要な品物と引換へて與れます。」

「しかし切符を平等にしては、お互に懶けはしませんか。勞働時間は平等としても、人によつて能力の秀でた者と劣つた者と相當に差別があるでせう。」

「それは勿論ありますが、しかし誰でも全力を盡す點では平等です。それに人間といふものは、自分の天賦の能力を飽くまで發揮することが、何より愉快なことですから、各自が眞面目に働きます。昔は財産といふものがないと、生活が誠に不安ですから、成るべく多くの財産を造らうと努力したものですが、今日では生活の心配といふものが全然ありませんから、よし如何ほどの能力があつても、そのため無用の報酬を受取る必要がないのです。假に餘計な報酬を受取つても、むやみに贅澤なことをして他人に威張らうとする餘地がない。とにかく口先の說明では實際が善く分らない。今日はエディスが買物に出掛けることになつて居ますから、一緒に行つて御覽なさい。」

●

「先刻あなたのお話では、昔は此邊には商店や銀行が並んで居たといふことですが、どうしてそんなに商店が澤山設けてあつたのですか。」

「此邊ばかりではありません、ボストンの市中の大部分は商店で一杯になつて居ました。」

「まあ、どうしてそれが必要でせう。そんなに品物が多かつたのですか。」

「さういふのではないのですが、同じやうな品物を賣る店が無數にあつたのです。」

「どうして同じ品物を何軒もで賣ることにしたのでせう。」

「それは店々によつて幾何か品物に特色があるからです。」

「それで自分が欲しいと思ふ品物はどうして買ふのですか。」

「それは大體の見當を附けて、あの店ならばと思ふ店で、氣に入つた品を買ふのですが、若し氣に入つた品がなければ、何軒でも探して歩くのです。尤も商店では大金を出して、盛んに廣告しますけれど、その廣告も信用が出來ない。」

やがて商品陳列場へ行くと、そこには各種の商品の見本が整然として陳列してある。令孃は其の中から必要な品物の番號を書いて、それを係りの役人に渡すと、それで買物は濟んだのである。

歸つて談話室で休息すると、主人夫妻も現はれて、音樂は如何ですといふから、音樂は好物ですといふと、夫人は立つて一方のボタンを一つ押しました。すると何處からか音樂が聞え出し

て聞えます。これは市街の中央に大きな樂堂が設けてあつて、そこで終日奏樂して居る。何處の家でもボタンを押すと、音樂が電線を傳つて來て、いくらでも無料で聞くことが出來る。

●

かくて數日逗留する間に、僕は公共食堂や、工場や學校や圖書館や、種々の設備に案內せられたが、その善く整頓して居ることは無論、而も食事も教育も切符又は無料で得られる。僕は自分が永い間、木良乃のやうに眠つて居た、地下の寢室から、百十四年前の新聞を持つて來て、家族の人々と讀んで見ては、之を今日と比較して、益々今日の社會組織が完全圓滿なことを悟り、これでこそ地上の樂園だと思つた。しかし僕の胸中に一つ不安に感ずるのは、リイトの一家は他族にも優つて僕に深切だが、しかし他人の僕として、さう何時までも便々と厄介になつては居られない。ところが僕は今日の教育は全く受けて居ない、社會の事情にはまだ暗い。今は自分の才能を愉快に發揮さへすれば、幸福な生活が出來るといふが、僕の才能はゼロである、僕は様々に煩悶したが、扨別名案も浮ばないので、遂に博士に打明けて、身の行く末を相談した。ところが博士は深切にも、僕が百年以前の事情に悉しいことを取柄にして、歷史の教師に推薦した。

これで僕も安心しまして、尚ほ色々の方面に亘つて、社會の事情を見聞しました。段々友達も出來ました。ところが一つ不可思議なことは、昔と違つて今の婦人は、性格が全く一變した。無論男子も變りましたが、殊に婦人が甚だしい。最初僕はエヂイスさんの、如何にも快活で、深切で、愛嬌の多いのに感心して、珍らしい婦人だと思ひましたが、その後多くの婦人を見ると、どの婦人でも皆さうです。だから僕は思ひました、これは家事が公營になつて、家庭の仕事が少くなつたから、婦人は別に爲すこともなく、毎日表情の稽古にでも浮身を寠して居るのだらう。それでなくては、あのやうに、表情が發達する道理がない。

しかし詳く詳く聞いて見ると、決してさういふ次第ではない。如何にも婦人の家庭に於ける仕事は著しく少くなつたが、これは食事でも裁縫でも、一々家庭でするよりは、公共の設備に任せた方が、遙かに經濟だからである。されば婦人は家庭でこそ、昔のやうには働かないが、現役年齡に在る間は、男子と同じく勞働する。勿論、男子と婦人とは自ら仕事を異にする。また勞働の時間も少い。これは女子には產兒とか、育兒とかいふ特別の責任があるばかりではない、婦人の優しい性情と、美しい表情とは、男子に無上の慰藉である。故に男子は婦人に對

して、相當の特典を與へるので、婦人も天職を自覺して、自己の教養に努力する。

●

僕が發掘せられたのは、丁度月曜日のことであつたが、とかくする間に六日を經て、いよいよ最初の日曜が來た。そこで今日は何よりも教會へ案内して貰はうと思つて、そのことを博士に申出ると、博士はまたも打笑つて、教會へは行く必要がない、今は最早昔のやうに澤山教會があるのではない。ごく少數の教會で立派な牧師が説教をすると、それが音樂と同じ設備で、各戸に傳達せられるから、各自は自宅に坐つて居て、説教を聽くことが出來る。なるほど午前十時になると、博士の一家は一室に集まつて、各自祈禱を捧げた上、ボタンを押して待つて居ると、やがて讃美歌の奏樂が始まる。一同が之に和して歌ふ。次いで音吐朗々として、牧師パアトン氏の説教が聞える。

説教は長いものでしたが、僕は始終熱心に、一語も漏らさず傾聽しました。恐らく當日の説教を最も熱心に謹聽して、而も最も感動したのは、この僕だらうと思ひます。牧師は今週此の世界に、不思議な事情で、百年以前の前世界の人間が現はれた。それに就いても思ふのは、當時の社會に比較して、今日の社會が幸福である。當時もキリスト教は行はれた、しかし、それは名ばかりで、キリストの精神は地を拂つた。貧者と富者との區別が出來て、人間は非常に不幸であつた。しかるに今やキリストの精神が地上に確立した。吾々は光明の中に生き、吾々は光明の中に歩む。かういふやうな意味でしたが、僕は此の説教を聞きますと、ああ、僕の肉體も精神も、あの厭ふべき前代の穢濁な社會の遺物である。今や現代の人々は、みなキリストの使徒の如く、清く氣高い精神を以て輝く生活をして居るのだ。おお、僕は恥かしい。僕は多くの人々から、見せ物の如く見られるであらう。それは何たる恥かしいことだ。

「どう遊ばして。大層沈んでいらつしやるのね。」

「今の説教を聞きまして、また氣が少し變になりました。」

「ですからお止し遊ばせと申したのに。」

けれども僕は令孃や博士夫妻の慰藉を受けて、とにかく心を慰めた。一體僕は令孃を一目見たときから戀して居たが、令孃の同情が加はるに連れて、僕の戀は益々募る。しかるに茲に奇妙なことには、段々系圖を調べて見ると、この令孃は外でもない、僕が前世の許嫁エディス・パアトレットの曾孫であつた。

●

「もし、旦那樣、旦那樣、もうお申し付けの時刻より、少し過ぎましてござります。」

僕は呼ばれて眼を醒ますと、枕頭には老僕サウヤアとピルスベリ博士とが立つて居る。僕は目をパチクリさせて、室の中を眺め回した。

「やつぱり元の地下室だ。」

「どうかなさいましたか、旦那様。」

「いや、馬鹿に面白い夢を見た。」

全く面白い夢でした。僕は常の如く衣物を着て、食卓の前に坐りました。下男が差出す新聞を取つて、見ると「一八八七年五月三十一日」とある。さうなくてはならない筈だ、僕が寝たのは一八八七年五月三十日でしたから。それを僕は二〇〇〇年十九世紀の末年の積りで夢を見て居ました。それから新聞の冒頭にある重要記事の目次を見ると――

「外報――獨佛の戰爭危急。佛國政府新軍事費を要求す。全歐戰禍に投ぜんとす。ロンドン失業者の騒擾甚し。大示威運動開始されん。白國の大騒擾。白國炭礦少女の奇禍。暹羅の英人大放逐。

「内報――詐欺の流行尚ほ不熄。五十萬弗の使込。ツラスト保證積立金の不備發見。孤兒のおいてけぼり。市俄古奸商の小麥買占。又も珈琲の大値上げ。市俄古官吏の腐敗發見。財界依然不振。…………」

● これは一八八八年、今から三十年前に、エドワアド・ベルラミイ（一八五〇―九〇）が著はした「ハッキング・バックワアド」の大要で、日本では「百年後の社會」として、二種の翻譯が出て居ります。ベルラミイは有名な「ニウヨオク・イヴニング・ポオスト」新聞の主筆で、一種の社會主義者でありましたが、自己の主義を社會主義とよりは、寧ろ「國民主義（ナショナリズム）」と呼びました。彼は「國民黨（ナショナリティ）」を組織しましたが、これは失敗に終りました。しかし「ルツキング・バックワアド」は、忽ち江湖の喝采を博し、非常な賣行を示しました。

日本温浴史話

中桐確太郎

私は不図とした事から、此頃、日本温浴の研究を心がけて居るものでありますが、なほ其時日も短く、見聞も狭く、材料もセコンド、ハンド若しくはサード、ハンドにさへ依れるもの多く、且つ此の如き問題の取扱には甚だ不媚であるから、研究などと申しても、ヲ熟柿揉のもので、未だ広く世間に披露すべきものになつて居りませぬ。然かも其の一端を、餘儀なき事情から或新聞に於て御話を爲し、今また本誌の御勧めに從ひ、その寛大なる御思召に甘えて、其時の話を殆んど其儘に再びこゝに揭ぐることを敢てするに到りましたのは、外でもありません、どうか、之を因みに廣く天下同好の諸君に紹辯し、是正と啓蒙とを仰ぎ、且つ材料の教示を願ふのよすがを得んことを希ひてでありま す。唯遺憾なのは、時日の際限上稿を新たにする暇なく、先日の話の折のノートを刷縫したに過ぎず、乃ち未定稿として提出せねばならないことであります。此失禮は本誌及び讀者諸君の御諒恕を偏へに冀ふの外ありません。

（一）日本の温浴

○浴の種類

温浴は浴の一種である。浴（bath）の義を姑く定めて、一定の目的を以て、身體（の全部若くは一部）を特殊の物質中に置くことなりとすれば、浴なるものは種々の方面より分類することが出來る。

先づ浴を取らんとする者の目的といふ上より見れば大凡左の五種に分つことが出來やう。説明を略して項目丈を揭ぐれば

一、衞生保健のためにするもの

二、病氣治療のためにするもの

三、游泳技術のためにするもの

四、趣味享樂のためにするもの

五、宗教儀式のためにするもの

若しまた身體を入れ置く物質の上より見る時は、大要左の如き

ものであらうか。これも說明の煩を省いて項目を列擧すれば

(一)液體。

(イ)冷水。河水、釀水、海水、瀧（自然的、人爲的）、冷鑛泉

(ロ)溫湯。

(a)自然的。諸種の湧出溫泉

(b)人爲的。

白湯　尋常の熱水

藥湯　(鑛物性)所謂湯の花、鹽類、

(植物性)菖蒲蘭等の芳艸。(五木八艸湯)

人蔘、大根葉等の藥艸。柚子の葉

諸種の海藻。桃、桑、松、杉、樫

等の木の葉。酒精。芥子等加工品

(動物性)牛乳等

(ハ)血液。(人、牛)

(ニ)尿。(人尿、牛溲)

(二)氣體。

(イ)蒸氣(蒸風呂、ロシヤ式)

(ロ)熱氣(乾風呂、羅馬式、土耳古式)

(ハ)空氣(山氣、海氣、又は壓搾空氣等)

(三)固體。

(イ)砂。泥土。鑛土。

(ロ)馬糞、鳥糞、

(四)空體。

(イ)日光。

(ロ)電光。

その他場所の上より見、或は浴室又は浴槽の上より見、或は入浴の方法の上より見て、種々に分類することが出來るが、是等は必要なる場合が來た時に陳ぶることにして、今は略することとする。

○溫浴の意義

さて私の溫浴といふのは物質の上より見たる分類中の溫湯に浴することを主とするは云ふまでもないが、之と密接なる關係を有して相共に發達し來れる蒸氣浴、熱氣浴（また冷水浴）をも時として含ましむることがあるのを豫め御斷りして置きたい。而してまた私が溫浴と申す語の中には單獨各個にて入浴することを含むは勿論であるが、多數の人々と共に混浴すること、即ち我國の錢湯風呂、支那でいふ混堂の形式によれるものが主なる要素となつてをる。又目的の上より見て、衞生保健、時としては病氣治療のためなること勿論であるが、日本溫浴といふ語を用ゐる時は此等の目的以外に、趣味享樂のためといふ氣分

が多く含まり、溫浴醇化の宗教的法悅味さへ加はつて來るが如くにも感ずる。是は私一個の解かも知れぬが、日本溫浴といふ語の中には此の如き意味を含めたい氣持がする。溫かき湯の中に多數の人と共に入りひたりて一種言ふにいはれぬ趣致を味はふと云ふは蓋し日本の特有ものであらう。私は此の如き意味にての日本の溫浴を研究して見たいと思つてをるのである。

○日本溫浴の特色

惟ふに日本人くらゐ盛んに溫浴を行ふものは多くあるまい。日本人は誕生の時、産湯をつかひ、死亡の時湯灌を施してもらひ、生後百ケ日間常例の入浴に引つゞき、毎週少くも一二日、人によりては毎日々々行ふものあり、又職業によりては朝夕二度は必ず入浴しつゝある人も尠からず、（或人の調査によれば東京在住人の三分の二は毎日入浴する勘定なり）と云ふとである。古代の斎戒人は生れた時と結婚する時と死亡する時と三度は必ず入浴する定めになつて居つたとか云ふことである。生れ出でたる時、産湯をつかはぬ處はまさかにあるまいと思ふが、日本ほど重々しく此の定めを爲した處も他に類例少いであらう。その一の證據は湯坐の定めである。湯坐とは兒に湯を浴さする役といふことである。日本紀神代の巻、彦火々出見尊の條に『取二婦人一爲二湯母、及飯嚼湯坐一』とあるのが是である。また垂仁天皇の御宇、皇后沙本姫が、其兄沙本彦の謀叛して立てこもれる稻城に逃れ入りたまひ、其處にて産みたまへる皇子を天皇に送り屆けたまふた時、天皇が如何にして此御子を日足し奉らむとのたまへるに對して『御母を取り、大湯坐、若湯坐を定めて日足しまつるべし』とまうしたまひしことがある。古事記に『於レ是、天皇因二其御子一定二鳥取部、鳥甘部、品遲部、大湯坐、若湯坐一』とある即ち是であらう。

其他入浴は種々の形式に於て重要視せられ、皇室の行事として毎日行はれ、重大なる儀式のある時には一層嚴重に行はれたのであるか、追々には或は人民慰撫のために、或は祖先追善のために、或は淨土成佛の業として、若しくは寺院建立の願としてまでも、湯屋を建て、入浴を奨勵するやうにもなり、爲めに溫浴を好むの風はますます助長せられ、その上種々なる原因の加動もありて、他に比類なき發達を見るに至つたのであらう。

尤も溫湯に入いる習慣は日本ばかりに限つたことではない。古代文明諸國に於ても盛んに行はれ、中世紀に於て基督敎會が甚だしく沐浴を惡み斥けたるにも係らず、佛・英・獨等の諸國にては可なりに行はれたやうである。トマス、ライトの傳ふる所によれば、第十三世紀の英國に於ては各種の階級にわたつて溫浴は、

流行し人によりては朝起きぬけに入浴し、中食後入浴し、寝床に入る前に、モ一度入浴するといふ有様で、男女の混浴さへも行はれたといふのであるから、その耽溺ぶりも察せられる。然しながらその頃の浴場風俗の詳細などによりて察するに日本に於ける浴場形式のものではなかつたやうである。また一時に三千余人を入浴せしめたといふ羅馬の大浴場でも、日に七回も入浴するといふ回教徒の大浴場でも、一般の人が最も好んで取るのは蒸氣浴で、汗を流し、垢を落し、好い心持になり、その熱した身體を冷水に投じて洗滌し、或は種々の運動娯楽に耽るのを主とすることになつて、(主もに婦人のためにといふ温湯浴の備も有つたのではあるが)、日本の錢湯風呂に於けるが如くゆつたりと首までつかり、陶然たる心持になるものとは大に其趣きを異にして居つたやうである。日本の錢湯風呂は支那語の「混堂」と同一視せらるゝのを常とするが、支那の混堂は、同國の賤民といはるゝ人の專用であつて、混濁汚穢を極めてをり、日本のとは、似て非なるものである。式亭三馬、其著「浮世風呂」に序して、錢湯の徳を稱へ、其の五常の道を論じ、且つ

賢愚邪正、貧福高賤、湯を浴して裸形になるは天地自然の道理、釋迦も孔子も於三も權助も、産れたまゝの容にて、惜い欲いも西の海にさらりと無欲の形なり。欲垢と煩悩と洗清めて浮湯を浴れば、旦那様も折助も孰れが孰れやら一ツ裸體

と云つてをる。眞にその通りである。

各種の階級のもの此處に入り來りて、凡ての虚飾を脱して天眞爛漫の姿となり、空氣光線などに比較して一層濃密なる温かき液體の中に相共に浸りて渾然融和、陶然たる自他一體の感を味はひ、疲れ散じ、凝り舒び、血和らぎ、臓調ひ、汗垢流れおりて清快和暢の心持ちとなり、相顧みて歡語し快談し、親睦の氣洋々堂に滿つるのである。天眞赤裸を以て一堂に相會するものは殆んど皆、日夕相見え相知れる中なので、浴堂は一種特異の簡單平易なる社交倶樂部と謂うてよい。よく之を指導すれば所謂デモクラシーの眞髄は、健全に此處に養育せらるかも知れない。うまく發達すれば淨土樂園の浴池の眞趣を此世に現することも出來るであらうか。とかくの議論は之を他日に讓るとして、特異なる文化の基調の一面は此の温浴生活にあはれてをるやうに思はれるでないか。要するに、日本の温浴生活は、世界に類例稀れなるものであるが、抑も如何にして此の如き發達をなすに至つたのであるか。私はこれから、其成因と由來と變遷の跡を少しく調べて見ようと思ふ。

（二）禊の思想

○洗浴を好む人種

日本人は由來洗浴を好む人種であつたやうだ。日本書紀崇神天皇の條に左の記事がある。

兄謂レ弟曰、淵水淸冷、願欲ニ共游沐一、弟從ニ兄言一、各解ニ佩刀一置ニ淵邊一、沐ニ於水中一。

また古事記景行天皇の條にも

倭建命……即入ニ坐出雲國一、欲レ殺ニ其出雲建一而到、即結レ友、故竊以ニ赤檮一作ニ詐刀一、爲ニ御佩一共沐ニ肥河一

といふ記事がある。即ち相共に途を行きて、水淸く冷かさうなる河にでもあへば、浴意すずろに動きて、『一つ一所に浴びやうではないか』などいひて、直ちに衣帶を解きて相共に游泳するやうなことが普通であつたものと見える。此等の事は埃及人や猶太人や、又はホーマー詩史中の古代希臘人を想ひ出させるのであるが、また臆測のたどりやうによれば、近き南洋ポリネシヤ群島のサモア人や、ハイチ人のことをも聯想させる。是等の島人は日々再三同海水に浴し、更に淸水にて之を淨め、衣服身體等を極端の程度にまで洗ひ淸めると云ふことである。是等南洋の現住民と我等の祖先とが何等の關係があるかどうかは今斷じ得る限りではないが、濕氣多き炎熱の地に住する人種が洗浴を好むは自然のことで、濕氣多き土地に住んで居た我等の祖先も此點は幾分か類似の習慣を有して居つたやうである。斯くたびたび洗浴して淸潔の習慣を有したる結果であるか、或はまた之とは別途に出でたる宗教思想の結果であるか、或は兩者交互の影響であるか、抑も全く別なる原因より來れるのであるか、未だ明かに知ることは出來ぬが、日本人には穢を忌みきらふ觀念が發達して、殆んど病的傾向を有する潔癖を現はしてをる。

○病的の潔癖

日本人が汚穢を忌みきらふ風習は、今更ながら、甚だ特異である。種々の排泄物や血や膿や死體や腐敗せるものなどに直接に觸るゝことを穢なしと思ふは普通の人情で、此點は世界の如何なる人種と雖(但し印度人の牛糞、北方人種の尿浴等特殊の例外は別として)皆同樣のことであらう。然るに日本人に於ては、是等の汚穢なる事物に直接に觸るゝは勿論、或る場合に於ては單に是等を見たるばかりにても、又見ざるもその事物の在りし家屋内に居りし者にても、又同一家屋内に居らずとも血緣上の關係を有すといふ丈にても多少の穢れを蒙るものとなつて居る。所謂穢れなるものを分類し、又其の間接化の由來などを探索するも面白き研究であらう。今は此等にまで立入るべくもな

いが、彼れの中心、本源ともいふべきは死といふことである。然し死といひても、禽獸魚介の死體は海の幸山の幸などいひて神にも獻じ、人も賞味する所を以て見れば、穢はしきものと思へるは人の死體(及び人に親近なる家畜の死體)である。何故に人(及家畜)の死體をのみ殊に穢しと思ふやうになつたかの理由は別問題として、とにかく、人(及家畜)の死を忌みきらふことは甚だしきものであつて、其の感情の發表の最も著るしき一つは蓋し延喜式に定められたる觸穢の制であらう。曰く

凡甲處有レ穢。乙入二其處一、謂著坐 下亦同 乙及同處人皆爲レ穢。丙入二乙處一、唯丙一身爲レ穢。同處人不レ爲レ穢。乙入二丙處一、人皆爲レ穢。丁入二丙處一不レ爲レ穢。其觸二死葬之人一、雖レ非二神事月一不レ得レ參二著諸司並諸衛陣及侍從所等一。

其實例としては『本朝世紀』に天慶八年八月三日、宣命を伊勢に送らんとせる時、一公卿殿中の家を訪ねて後參內せることと知れわたり、宮中一同穢を蒙ることゝなり、十三日になつても未だ除かれず、遂に宣命使派遣のことを止めらるゝに至つたといふこともある。又『中右記』によれば嘉承二年に京都の人、死人の骨を山張より持來りて家に置きしに、その家の僮僕之を知らずして市中を往來せることわかり、京都中大騷ぎを爲したることともあるさうだ。また『明月記』によれば建永元年八月廿四日女院御所より出火し、殯殿所附近に燒死したるもの一兩人ありたるため、此の火事にたち合ひたる者の參內したる所から、御所また穢を受けたるに非ずやとて大騷ぎをなしたることさへあつたといふことである。

僧侶の如きは、死人に接するを當然のことのやうに今では思はれてをるのであるが、昔しへは矢張り死の穢を甚だしく忌みたるものといふことである。僧侶をして死人に關係せしめ、入棺等に立合はしむる樣になつたのは、徳川時代島原一揆以後の事だと傳へられてをる。

忌服に關する定めの如きは大寶令以來、殊に著るしく支那の影響を思はしむるのであるが、其根本思想はやはり觸穢に現はれたるものと同じものなることは云ふを待たないのである。

○穢と洗浴

穢を忌むの念は此の如く病的に甚しきものとなつてをるが、是等の穢は、神代の初めに於ては、身代を洗浴すること即ち身滌(禊)によりて祓ひ清めらるゝこととなつて居る。古事記に傳ふる所によれば、伊邪那岐命は、神去りましたる伊邪那美命を慕ひて黄泉國に到りまして、其の淺ましき御容を見て、逃れ歸り、「吾は伊那志許米志許米岐穢き國に到りて在りけり。故吾

はたり身の臓せな」と詔りたまひて、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして禊祓給うたといふ。これ即ち禊の初めであるといはれてをる。魏志倭人傳に

其死有レ棺無レ槨、封レ土作レ冢、始死停レ喪十餘日、當時不レ食レ肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒、已葬、擧家詣二水中一澡浴、以如二練沐一。

とある。是れ即ち死の穢に對する身滌ではないか。惟ふに此の如き風は國民一般にも行はれてをつたものと見て差支あるまい。此の文中、擧家とあるは、觸穢の思想も思ひ合はされて、意味深しと謂ふべしだ。

抑も身體を洗浴することが、穢れを取り去ることであるといふのは何故であるか。穢れが物質的に身體に附着して居るといふならば之は當然のことであるが、此の場合の穢はそれではない。然らば死臭を惡むが爲めであらうか。臭氣の中で死體より出づる臭氣は其にほひも烈しく、一般に人の惡む所である。而して熱帶の人の情緒に及ぼす效果は、熱國の住民に於て最も著しとせらるゝが故に、此點よりして解釋の緒をたぐり得るかも知れぬ。然り死を以て主もなる穢れと感ずるに至つた原因は多分之によりて解することを得るであらう。然しながら身體の洗浴は直接に臭氣に關係するものではない。是れがさう思はるゝやうになつたのは、蓋し平素身體を洗浴して常ねに之を清潔に保ちつゝある者が、身體洗浴より得る清潔感を以て、死臭によりて得るた間接的穢感を拂淨するに因るのであらうか。古代の日本人には死を以て惡魔の所爲と感ずることもあり、水に之を祓ふ力があるといふ思想も明かにはなつて居らぬのであるから、以上の如く解するも大なる間違に無かるべしとも思はる。如何あるべきか、なほ之を埃及猶太希臘あたりの身滌思想と比較して見るも面白いことであらう。是等のことに關しても、大方讀者の示教を希ふのである。

○みそぎと大祓

穢の思想は漸々發達して、道德上の規法を犯せる罪をも包括するに至つた。隨つて身體洗浴は是等の罪の穢れをも祓ひ淸むることになる。毎年六月と十二月とに皇城の朱雀門にて行はれたといふ大祓を初めとし、色々の場合に行はるる祓禊は即ち是れである。此二季の大祓はもとは在朝百官有司の犯せる種々の罪を身體を洗ひ淸むることによりて祓ひ除かんとする儀式で、朝廷で現今でもなほ行はせらるゝものであるが、同樣なる儀式は民間にても行つたもので、其の形式は今でも所々の神社に殘つて居るのである。

今、私は大祓を以てもとは在朝百官有司の罪穢を、[illegible]

ひ消むることによりて祓ひ除く儀式であると申したが、是につきて、少しく辯じたいと思ふことが二つある。その一つは大祓の祝詞の中には、單に百官百司等の罪穢を祓ふといふことのみならず、國中に成り出でむ天の益人（即ちます〳〵繁殖し行く日本國民）が犯せる罪穢をも祓はうといふことを述べてある。而して他の一つは、身體を洗滌することが、大祓の儀式の實際には含まれて居らぬといふことである。此大祓詞の制作につきては加茂眞淵や本居宣長などの間に議論もあるのであるが、其詞の內容につきても種々の混雜があるやうである。宣長は大祓詞の序文ともいふべき部分を、『祓の詞にあらず、百官の大祓の時に加へて宣りたりし詞なるべし』となし、『さて高天原系といふより下の祓詞は諸國の大祓の祝詞なるを、朝廷百官の大祓にも兼用ひられたるもの也』と申して居るが、事實上の說明は別に無いやうである。若し之を一の臆說に過ぎずとすれば、私も別の臆說を掲げて見たいと思ふ。惟ふに、此大祓の儀式なるものは、初めは、大祓詞に明記してある通り、天皇が朝廷に仕へまつる諸々の人達を集めて、その人達の罪穢を祓ふの儀式であつて、此等の人々をして實際に河中に入りて、身體を洗滌せしめたのではあるまいか。これ大祓を禊と呼んで、水邊にて行ふを本義とする所以であらう。（みそぎぞ夏のしるしなりけるなといふのに即ち是である）。

然るに思想の變遷と、此儀式に於て、天下萬民の過ち犯しけむ種々の罪事をも祓はふといふことになつたので、其の意味の擴張を加へせしめ、『天皇が朝廷に仕へ奉る官々の人等を始めて、天の下四方には今日より始めて罪といふ罪はあらじ』といふやうになつたのではあるまいか。斯く儀式の意味が擴がつてくれば其形式もまた變つてこなければならぬ。即ち天下の萬民を皆集めて、之を洗滌せしむることは、實際出來ぬことでもあるし、又神道上の思想によれば、實際の洗滌よりも、贖物を供へて罪を祓ふといふことに重きを置くべきであるかも知れぬ。かくて素戔嗚尊が、神やらひにやらはれたまひし時、千位置戸を負はせられ、また鬚を切り、手足の爪を拔かしめられたといふ故事にあらはれてをると傳へらるゝ祓の思想が（禊の思想に對して）普ねく認められ、祓の料を種々供ふることが儀式の主體を占むることゝなり、從て本旨たりし身體の洗滌は人形或は贖物を水に流すとか、若くは潮湯を灑ぎて潮海浴の古しへを偲ぶとかいふ形式が、禊といふ名と共になごりを止めて居るに過ぎぬことゝなつたのであらう。隨ひて是の儀式は水邊にて行ふの必要なく宮城の朱雀門にて行はるゝやうになつた所以であらう。

○其變遷の原因

大祓詞の中に存在する混雜の由來を姑く以上の如くに解すとすれば、次きの問題は、そも〳〵此の如き變遷は如何にして來つたのであるかといふことである。これにつきても私の臆說を申して見れば、其原因の一つは氣候上の不便にあるのであらうか。熱國に住みて身體洗浴に馴れたる身も、比較的寒冷なる所に移りては、禊の意義を重要視しながらも、容易く之を行ふこと能はざるに至る筈である。併し此解釋は祖先住地の變遷に關する大なる假定を前提としてをるのであるから、別途の研究を要するとして、更らに他の原因を求むれは、支那風俗の影響を數へることが出來るやうである。祓といふ字は說文に「除レ惡祭也」とあり玉篇には「除レ災求レ福也」とある。禊は潔也、于二水盥一潔之也」とありて、兩者は必ずしも同一ではないが、古記錄によれば同時に行はれて祓禊と熟し、また實際河水に洗浴したるものであつたが、後には洗浴は廢されたるに係らず之を禊と名けし事があり、而してそれは「拂二除不祥一」といふことが主となつてをつたやうである。支那の文物の輸入が漸く盛んになるにつれて、此の如き儀式の輸入せらるべきは當然のことである。況んや大寶神祇令に、凡六月十二月晦日大祓者中臣上二御祓麻一、東西文部上二祓刀一、讀二祓詞一」とあり、而して東西文部の兩者は孰れも支那及朝鮮よりの歸化者であるから、彼の土の風を傳へたるは殆んど疑を容れざることである。禊とも呼べるものに祓の字を充用して大祓となせるにても明かであらう。支那に於ける此の事に關しては亦、別の機會に詳論することゝする。

○身滌の實施

大祓の實際に身滌を行ふ儀式のなきことは（其原因の如何はとにかくとして、之は）事實である。然しながら、罪の穢を洗浴によりて潔めんとする思想は決して稀らしい事ではない。印度にては百論疏に『恒河吉河入レ中洗者便得二罪滅一』とありて、寶物集に『天竺の后、ひそかに臣下に値ひて、公にうとまれ奉りて、恒河にて水を浴みて身をきよめて懺悔す』と傳へたる個人的實例もあれば、現になほ、數千人して行ふ恒河大禊もある。利末記に定めたるモゼスの淸規もヨルダン河にて約翰が行へる悔改の洗禮に起原せる基督教の儀式も、同教徒がコウランの訓に從ひて殊に重んずる洗塔の潔めの水も、皆洗滌滅罪の著しき例ではないか。されば穢を忌むことに特異の潔僻を有せる日本人にして、大禊に於けるが如く、身滌を閑却し去つて安ずることを得る筈はない。否、此思想は種々の形ちを取つて[illegible]の方面に大に行はれつゝあるのである。伊勢參宮の二見浦の[illegible]

そぎ、熊野詣の潮垢離、七里ヶ濱の潮浴、住吉の潮湯など枚擧に暇がない、神社に參詣するに當りて口漱ぎ手洗ふなどは此簡略化せるものなること云ふまでもない。而して此の禮拜前の手洗は、前述回教徒ら現に行ひつゝあるのであるが、古代に於ては埃及、猶太、希臘、而してこれ等の遺風を受けたる基督教會に於ても行はれて居つたのであるが、我國に於ては、人々の交際上にも用ゐられてをつた。即ち所謂る沐浴はその一例であらう。沐浴は今は便所の手洗に用せらるることゝなつたが、以前は賓客迎送の折、主客の口漱、手洗のために供へたものださうだ。啻にかゝる特殊の折のみならず、毎朝の沐漱さへも、我國に於ては神佛禮拜と結びついて一種の略式身滌である。蓋し身滌（沐浴）を以て罪の穢れをも洗滌するの意に解せば、少くも毎朝之を行ふが當然であらう。かく數へ來り、然らば我國に於ける禊の最も顯著なる典型は何ぞやと求むる時、私は之を我が皇室の行事に發見するのである。

（皇室御禊の恒例）

『江家次第』等に記す所によれば、主上には正月元旦御禊をなして四方拜を行じたまひ、十二月晦日、追儺式の後また御湯を召したまふと云ふことである。而してまた順徳天皇の御作と傳へらるゝ『禁秘御抄』や、後醍醐天皇の御作と傳へらるゝ『日中行事』等によれば、毎朝（辰の時、即ち午前八時頃）[illegible]御次第により清凉殿内の御湯殿に於て入浴せらるゝのである。

『日中行事』には左の如くある

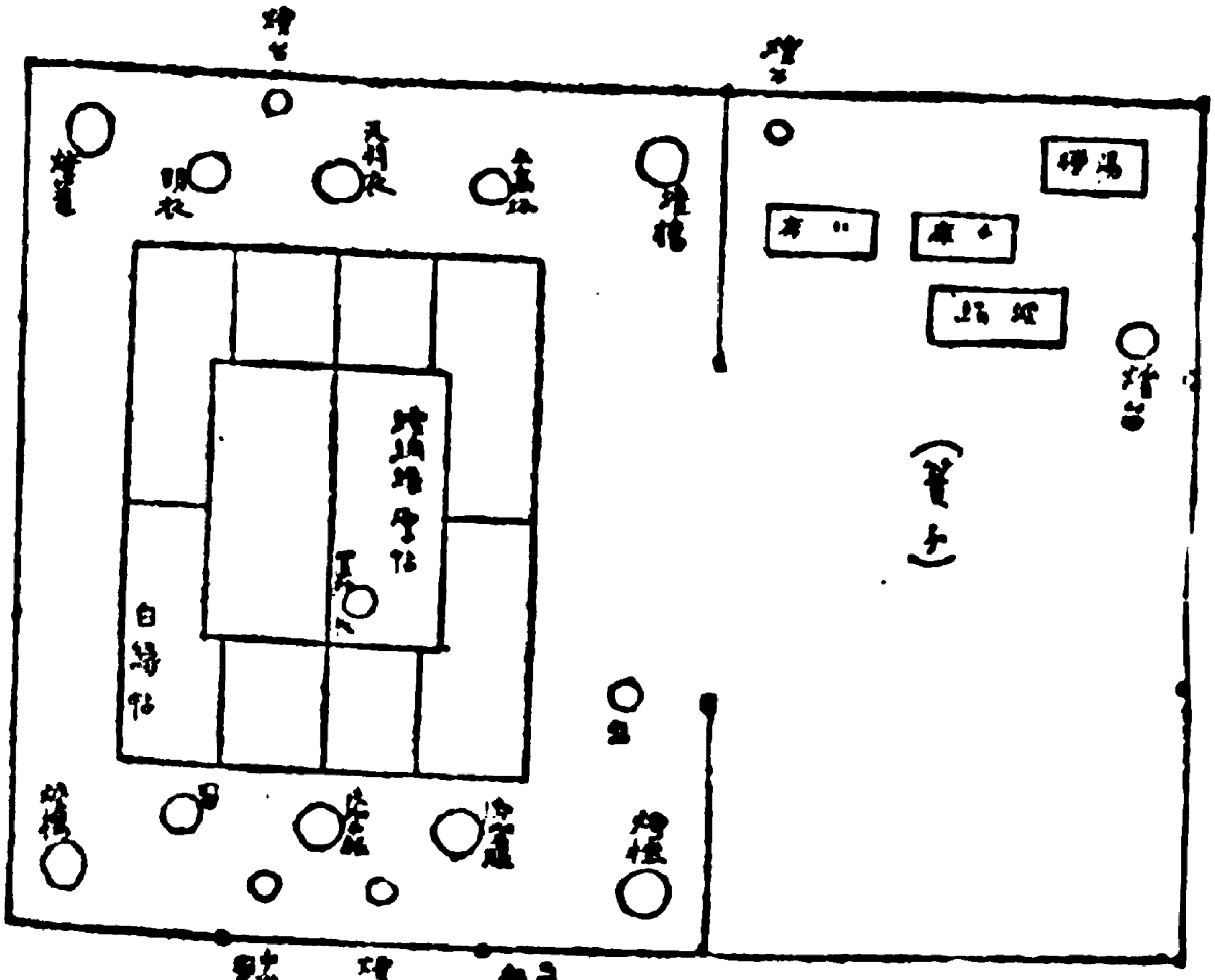
　辰の時に、とのもりのつかさ御湯を供す。すましといふ女官之をとゝのふ。内侍、御湯のあつさぬるさをさぐりて、ことの由を申す。御湯殿つかうまつる内侍、湯卷を着ることもあり、勾當などなり。御湯殿へおりさせたまひて、御湯めしぬれば、典侍若くは上臈の女房、御ゆかたびらを奉る。四足（よつあし）にすゑたる御かな藥をとりて、まゐらせて、なくる時、かはらけの音をきゝて、とのもりの助なる殿人（とのもりならずはいづれにても）弓の弦をうつ、主殿官人（左位）御湯殿のはざまにてなのる。めい弦は常には見えず本儀はあるべき也。

蓋し主上が國政を知しめすは所謂マツリゴトにして即ち祖神に奉仕したまふ所以でもあり、また清明公正の御心を以て臨御せらるべきであるから。當然御禊の意義を存すべきことであらう。埃及古王の『朝の宮』の儀式など興味深き對照であらう。此の如き意味にて御禊は毎日行はせらるゝのみでなく、宮中の諸種の祭祀にも殊に鄭重なる設備を以て行はるゝのであるが、一々之を陳ぶることを略し、今は唯、天皇即位式と共に行はるゝ

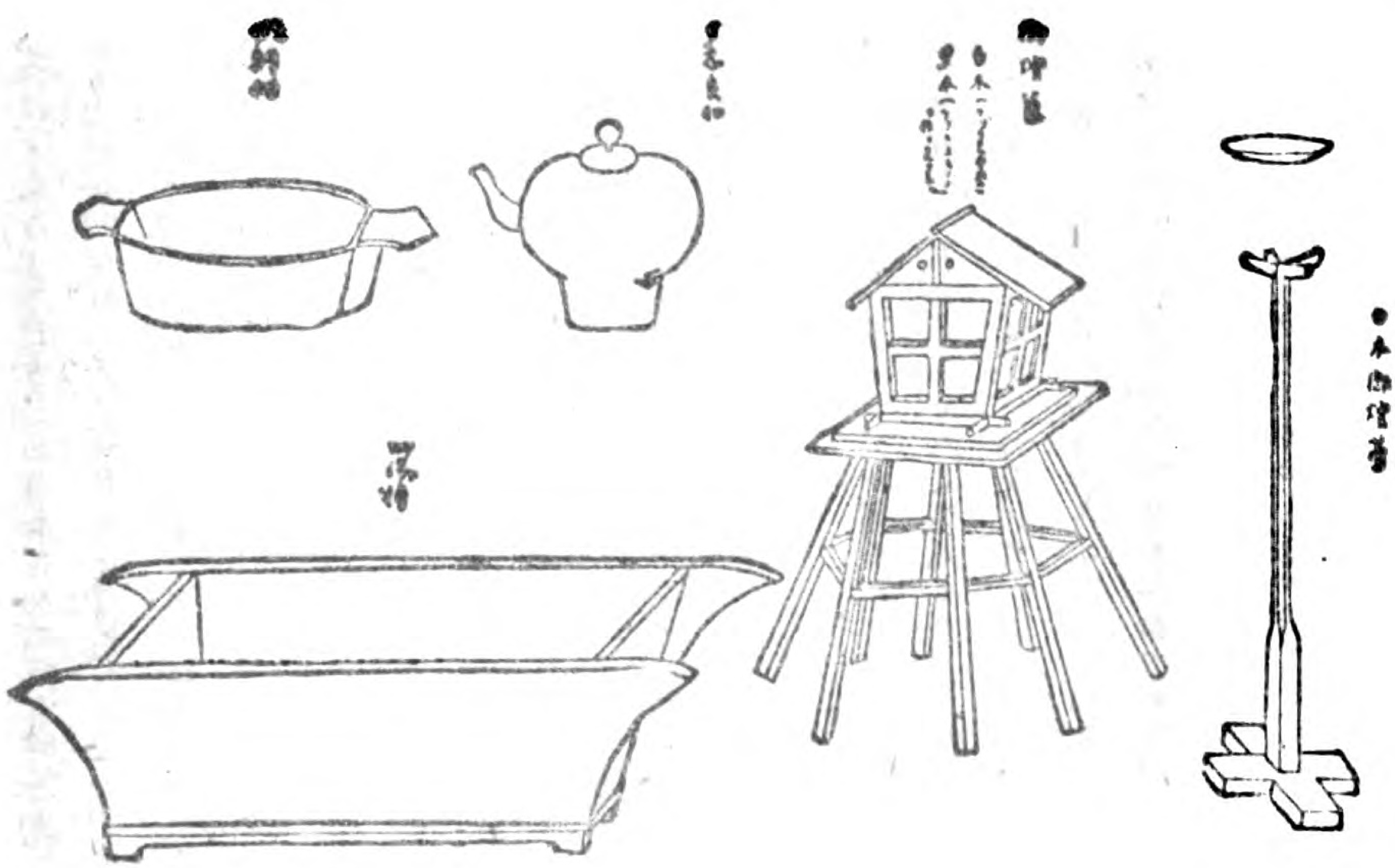
一世一度の大祀たる大嘗祭に於ける御禊につきて述ぶることゝする。但し彼の御禊、或は河原の御祓とも名けて、非常盛大を極めたる所謂御禊は、河邊にて行はれ（近世は宮中にて行はるゝに至り）たるものなるが、大祓の時の式と同樣、身體洗浴のことは無かつたやうである。眞正の御禊と見るべきは、廻立殿の御儀であるかと思はるゝから、以下之につきて述ぶることゝする。

○廻立殿の御儀

廻立殿は悠紀殿、主基殿と共に大嘗宮三要殿の一つであつて、紀基兩殿御親祭前、御湯浴御更衣の所、即ち御禊の浴室なのである。中古の定めによれば、先づその歳の十月に大嘗宮殿造營の材料を採るべく占定せられたる山野から木材萱艸等を伐採り、大嘗祭當日より七日以前に始めて五日間にて造り了はるべき四丈に一丈六尺の簡素なる建物である。現行の登極令によれるものは東西五間、南北三間で、黑木の柱、苫葺なることは同樣である。此殿の紀基兩殿に對する位置は、時代によりて變遷ありたるやうであるが、大正四年京都仙洞御所に於けるものは明治四年東京吹上御苑内に設けられたるものと同樣であつて、兩宮の正北、中間の位に建てられた。異なる所は釜殿の位置だけである。



さて此殿の内部、結構配置は略ゞ上圖の如しと承はる。即ち西方三間四方の一室の中央に白緣り疊八帖をしきつめ、其上に繧繝の厚疊二帖を敷きて御座とし南側に無紋の御冠を納れたる筥、御祭服下襲を添へて二領（紀基兩殿各用）を置き、北側に明衣（御湯上り）と天羽衣（御湯帷子）とを置き四隅に白木の燈臺共間に燈臺を立てて點火し、土高坏、缶（水瓶なり御手水の具）等を置く。



東方の一室は、床を簀子にして、御湯槽（大嘗會繪圖によれば、長三尺八寸五分、手長五寸四分、横二尺四寸五分、換高一尺九分、厚一寸）及床子二脚等を置く、又波絹を床子に備ふ。波絹は御槽の蓋となすものである。

（註、簀子の間の處、江家次第及其抄神今食の記事によれば、御浴船無构、西壁に樋を設け、御湯を之より入る、樋口に斗を居くとあり、是寧坊絢詞の圖參照）

御定めの時となれば主上は先づ此廻立殿に渡御せられて眞の御禊といふべき所謂小忘（をみのなんの）御湯を召さるゝのであるが、匡房卿大嘗會記　記事（天仁元年十一月廿一日）によれば其次第は左の如くであつたといふ。

主殿寮供二御湯一先取二下水一以斗桶　次入二御湯一七度。次御湯殿人類降、以二右手一合二御湯一向二御殿方一撒二遣御湯一七度。次張蓋二幅布也。次奏二御湯取之由一。主上渡御、次撤レ蓋、主上乍レ着二御帷一令二下御槽一給。次奉レ摩二御脊一三度。次脱ヲ捨御帷於槽中一令レ上給。著二他御帷一拭御。次還二御御所一。次着二神態御裝束一給。…………

此の御湯の事は西紀一一〇八年の記述であつていつの御宇も大概同樣のことと相察せらるゝが、永和大嘗紀（西紀一三七五）の記者は此の如き有樣を見て『天の羽衣めされて御槽におりる

せたまふ。いとかう〴〵しく、めづらしき御行水のさま也」と稱へてをる。如何にもその通りであつたであらう。

但し後代になり、此廻立殿内に於ては實際に浴を取りたまふ事はなく、御帷、御袴の上に天羽衣をはをりて湯槽におり玉ひ天羽衣を脱ぎ明衣を召して西の室に御還御といふことになつたと承はるが、これは冬のもなかの寒夜苫葺一重の御宮所にてものしたまふことであるから御健康上や種々の御都合上かくなされたものと拜察せらるゝのである。然かも廻立殿渡御の以前に御本殿に於て主殿の供する大忌湯（小忌湯に比して稍略式のもの）を召さるゝのであるから、事實上の御禊は矢張り遊ばされる例になつてをる。廻立殿の御儀は古式を尊重せられたる所より出でたものと拜察せらる。

惟ふに禊の思想は此最重最大の大嘗祭にて行はせらるゝ廻立殿御小忌湯に於て最高調の表現を得たものと謂ひつべきであらう。而して此莊嚴なる禊が温湯を以て行はれたといふ事は最も特異なる點であらう。これがまた日本温浴に特殊の關係を有し來る所以であるから特に注意を拂ひたいのである。

（禊と温浴

凡そ禊といへば河（又は海）を聯想し、而して清冽の水を聯想し來るのが自然でもあり、普通でもあらう。基督教の洗禮當に於ては施浸の後、受洗者の身體を温めんがために、火爐の設備をなし置ける所もあつたといふことである。然るに我が宮廷に於ける事實上の御禊は湯を用ゐられてをるのである。延喜式に掲げてある主殿寮所管、一年間所用の御薪の費目を見るに左の如しとある。

湯殿料	一百八十荷
御厠殿御洗料	七十二荷
御沐料	一百八十荷
御脚水料	二百四十荷（脚古本服とある）
御炊料	七百八荷
儲料	二百荷（中宮准此）
御贄殿料	五荷

これによりて見れば湯殿料丈で既に御炊料の四分の一に達してをる。御沐料丈加へても御炊料以上に達してをる。此等の大部分は毎朝供御の御禊の用途と見てよいのである。

抑も御禊のために湯を用ゐられたのは何時頃からであるか。冷水を改めて温湯とせられたのは如何なる事情によるのであらうか。是等に關しては、何等斷定を下すべき材料を有してをらぬが。惟ふに其事情の一は、前にも申したる氣候の寒冷といふことであらうか。六月十二月節季の祓禊のうち、十二月の方は實

時しか廢絶に歸し、祓の意義を追儺に專行せしめ、六月に限られたる禊も漸く名所相作はぬやうに至らしめたる事情は、冷水を廢して、御湯を採用するにも至らしめたるものではあるまいか。而してモ一つの事情は我國に豐富なる溫泉が之を啓示したといふことではあるまいか。出雲風土記、意宇郡忌戸の條に曰く

忌部神戸、郡家正西、廿一里、二百六十步。國造、神吉詞奏參二向朝廷一時、御沐之忌里、故云忌部。卽川邊出湯。出湯所在兼海陸。……一濯則形容端正、再浴則萬病悉除、自レ古至レ今無レ不レ得レ驗。故俗人曰二神湯一

淸冽なる川の畔に自然に湧き出でし、神の賜者とも考へらるべき溫かき淸き靈泉がある。之に御沐して、すがすがしき身心を以て朝廷に參向するを得ば、是程結構なる御禊はあらずとは容易に心附く事であらう。而して此の如き溫泉は全國各地に散在して溫浴の氣分を味はせてをる。國造中にても特殊の地位を占めたる、由緒正しき出雲國造の此溫禊の模範は皇室の御禊の上にも多少の啓示を與へたるに相違なしといふは必ずしも無理なる臆測のみではあるまい。蓋し禊は河水（または海潮）を以て行ふを自然とするのはそれ等が天然のものたるが故であらう。人工を以てせる湯の如きは、始めよりしては禊たるの[illegible]きを失せるが如く感ぜらるのであらう。然るにこゝに天然に湧出せる溫泉ありとする。啻に天然なるのみならず、不思議の力を有して靈異神秘の感を與ふとする。此中に入りて禊をなすに憚ることがないであらう。旣に一たび禊となし之に浴す。溫浴の與ふる氣分は禊の思想をして、玆に新生面を開かしめたのであらう。これ皇室行事に於て溫湯を禊に用ゐるに至りたる所以の一つであらう歟。

但し人或は言ふであらう、南洋サモア島にても、死體を取扱へる者は其後五日間は自から炊事をなすこと及び食器に手を觸るゝことを爲さず、第五日目に顏と手を溫湯にて洗ひ、始めて淸まるといふ例もあることであれば、禊に溫湯を用ゐるに至つた理由を溫泉の啓示に歸するのは牽强附會の甚きものであると。本當の由來の何であるかにつきては、なほ識者の示敎を仰ぎたいのであるが、其由來は何れにしても禊の意味にて溫湯を用ゐることは、類例を玆に得たのであるから、皇室の毎朝の御湯浴も、大小祭祀の御浴湯もたゞの御入浴ではなくて、一の禊であると謂つて差支ないであらう。

要するに、國民の心に深く根ざせる禊の思想は溫湯入浴によりて新生命を得、更に外來佛敎の潔齋思想と結びつきて相共に

發達し、遂に日本特殊の溫浴生活を開展せしめたのであらう。而して私は溫泉を以て此の發達源の一つと謂ふのであるが、よしや此の臆說に當らずとするも、溫泉は他の種々なる關係よりして日本溫浴の發達を促すに與りて尠からぬ力があつたやうに思はる。次官にこれ等につきて少しく述べて見ようと思ふ。

(三) 溫泉趣味

○日本は世界第一の溫泉國

日本は世界有數の火山國であつて、溫泉は到る處に湧出してをる。或は高山、或は山腹、或は平原、或は峽地、或は溪谷、或は湖畔、或は河岸、或に河や湖や海の底にさへも湧いてをるのである。其の質の種類は世界に知られたるあらゆるものを包含してをるし、また其數よりいふても世界に比類ないであらう。日本風俗史には三百三十八箇所とし、溫泉起原考略(竹中邦香氏著)には明治の初年迄に發見せられたるもの四百十七といひ、日本鑛泉誌には九百〇七箇所を數へてをる。また石津博士の英文日本鑛泉誌には分析を了せしもの既に千五百に及べりと云つてをる。尤も冷溫の區分點は或は攝氏二十度とするものあり、或は華氏の六十六度とするものもあり、又は攝氏卅七度とするものもありて一樣でなく、從ひて冷泉と區分せる溫泉の數にも彼此相違を來してをる。亦曾ては溫泉として認められたるものも漸次溫度減じ行き冷泉の列に入れるもあり、また有名なる溫泉として知られたるものも、何時しか涸渇し去れるもあり。また數へ方にも泉源を各別にするものもあり、或は數多の泉源を合せ一地方の名に括りて呼べるもあり。實際の湧出あるも浴場旅館の設備不十分なるものは之を數へざることとあり、或は此の如きをも數に加ふることもあり。而してまた北海道、樺太、もしくは內地にても深山幽谷には未だ調査の行き屆かざる處もありて、統計の精確は殆んど期すべからざる有樣であるから、之を他國に比較して、その多寡を論ずることは出來ぬのである。併しながら、明治十三年の發行にかゝるベルツ博士の『日本鑛泉論』に『日本の天然鑛泉を有する其數甚だ多く、獨逸墺國を除くの外、他國の及ばざる所なり』と記されてをるに係らず、獨逸、墺國、若しくは伊太利等よりも遙かに多かるべきは、何人も否まざる所であつて、日本は實に世界第一の溫泉國と謂ひつべきであらう。

○盛んなる利用

此の如く豐富なる溫泉の或ものは、日本の神代に於て、既に知れてをつたやうである。上記抄譯の記述は姑く之を措くとするも、釋日本紀に掲げられてをる『伊豫國風土記』に左の記事がある。

大穴持命見二悔耻一、而宿奈毗古那命欲レ活、而大分速見湯自二下樋一持度來、以二宿奈毗古那命一而浴濱者、蹔間有二活起居一然詠曰、眞蹔寢哉。踐健跡處今在二湯中石上一也云々。

これは伊豫の溫泉の來歷を述ぶるものであるが、此記事によれば少くも大分速見湯といふ溫泉もあつたことが察せらる。

その後の有樣は今明かにたどり得る文獻もないが、前記『伊豫風土記』によれば、此の溫泉には、景行天皇が皇后八坂入姬命と共に御幸せられ、其後仲哀天皇も神功皇后と共に亦此處に御幸せられたといふし、また聖德太子も高麗僧惠慈及葛城臣等と共に此處に遊ばれて、所謂湯岡の碑を建立せられたる由にて其碑文をも明記して居る。溫泉への行幸は、此處ばかりではない、『日本書紀』に見えたるものを抄錄すればさの如きものがある。

舒明天皇三年（西紀六三一）九月、幸二于攝津國有馬溫泉一冬十二月、天皇至レ自二溫泉一。

同　十年（西紀六三八）十月、幸二有馬溫泉宮一、十一年正月、車駕還レ自二溫湯一。

同　十一年（西紀六三九）十二月十二日、幸二于伊豫溫湯宮一。十二年夏四月、天皇至レ自二伊豫一。

孝德天皇、大化三年（西紀六四七）十月、天皇幸二有馬溫湯一、十二月晦還レ自二溫湯一。

齊明天皇四年（西紀六五八）十月、幸二紀溫湯一。

同　七年（西紀六六一）正月、御船泊二于伊豫熟田津石湯行宮一。

また『續日本紀』にも

文武天皇大寶元年（西紀七〇一）九月、車駕至二武漏溫泉一。

といふを始めとして、中々に多い。天皇既に溫泉に御幸したまふ程であるから、士庶の此處に浴したるものあることは疑を容れぬことであらう。以上の記錄に見えたるものは伊豫の道後、攝津の有馬、紀伊の牟婁等であるが、聖武天皇の朝（西紀七二四——七四八）に仕へたるといはるゝ山部の赤人の『至二伊豫溫泉一作歌』に

すめろぎの、神のみことの、しきます國のこと〴〵、湯はしもさはにあれども、島山のよろしき國と、こゞしかも伊豫の高嶺の、いさにはの岡に立たして、歌しぬび、辭しぬびせし、御湯の上の、樹むらを見れば、臣の木も生繼きにけり、鳴く鳥の音もかはらず、遠き代に神さび行かむ、行幸處

反歌

百敷の大宮人の飽田津に船のりしけむ年のしらなく

とあるによりて見れば、天皇の始しめす國の鹽、湯（即ち溫泉）

は澤山にあつたことが察せらるゝのである。私の調べ得たる處丈にても、奈良朝の終までに、北は奥羽より南は九州に至るまで、の間に四十箇所、平安朝丈にては更に三十五箇所の温泉が、發見せられてをる。此の如く澤山發見せられたといふことの知られてをるのは、即ち澤山利用せられたといふことをあらはしてをるのである。出雲風土記は天平五年（西紀七三三）の編纂であるが、其の仁多郡の條に

（漆仁）川邊有藥湯……男女老少、晝夜不息、駱驛往來無不得驗。

とあるを見れば、少くも或温泉には老若男女晝夜をわかたず隨分盛んに入浴したものとも察せらる。之よりは後代に屬することと思はるゝが、『宇治拾遺物語』に

今は昔、信濃國筑摩の湯といふ所に萬の人のあみける藥湯あり……

といつてあるのを見れば、此等に限らず各地に於て、日本國民が如何に盛んに之を利用したかが察せらるゝのである。

○病氣治療のため

此の豐富なる温泉は何の爲に利用せられたかといふに其初めは病氣治療のためであつたことは疑もない。

先づ其の發見の由來がさうである。温泉發見の由來には或は神佛の夢告によるといはれたり、或は積雪早く融け、草などが他の土地より早く繁茂する等の事情によりて心附きたりなどしたものも少なからざるが、最も多く傳へらるゝのは、鳥獸が其負傷を治療せるのを見て氣附きたりといふにある。温泉の名に鷺の湯とか、鹿の湯といふのが頗る多いのは、此事實を示してをる。即ち人間は禽獸によりて温泉に創傷を癒すの効能あることを教へられ、遂に種々の病氣をも治療することを考ふるに到つたのであらう。

また其の縁起などを見てもさうである。即ち伊豫に於ける大穴持命と宿奈毗古那命との口碑を見ても、有馬の湯を再興せる行基菩薩の逸話を聞きても、また信濃筑摩の湯の觀音木像の傳説に徴しても、皆病氣治療の意味を含んでをるのである（これは日本許ではなく、秦始皇帝の驪山温泉の故事を見ても、印度王舍城外の温泉の有様を見ても同樣である）而してまた其の祭神を見ても醫藥に關係ある宿奈毗古那命か、若しくは藥師如來である（是は後に述ぶる寺院内の浴堂に祀らるゝ毗陀婆菩薩と比較すれば面白き對照を見るであらう）而して有馬には施藥院をさへ附設してあるのを見ても、温泉入浴の意味は病氣の治療に存してあつた事が明かである。

されば温泉に浴する者の目的も常に病氣の治療であつた。日

本書記に

齊明天皇三年（西紀六五七）、有間皇子往牟漏溫湯、僞療病。來讚國體勢曰、纔觀彼地病自蠲消。天皇聞悅、思欲往觀、四年幸紀溫湯。

とある。溫泉療病は詐僞の材料にさへなつた程である。また正倉院文書、駿河國天平九年（西紀七三七）正稅帳に

依病下下野國那須湯、從四位下小野朝臣 上一口 從十二口 六郡別一日食爲罷漆拾捌日 上六口 從十二口

とあり。少くも溫泉に行くのは病を治するが爲であつて、病の狀が下がつたのである。故にこそ堂々と請暇することも出來、朝廷よりも公けに此免許が下がつたのである。湯治といふ語は少し後の時代の語であるやうだが、卽ち溫泉治療のことを意味してをる。溫泉利用の主なる目的は始めは病氣治療であつた事は、いづれより見ても明かなことである。

○保養遊興のため

然るに溫泉入浴の目的が病氣の治癒といふことに止まらずして養生保健といふことにも遷りゆき、遂には湯治といふ語は保養遊興といふ義にも轉じて來たのであるが、是は決して新しい事ではない。前にも引用した、日本書紀の記錄にある、孝德天皇の大化三年（西紀六四七）の有馬溫泉への御幸には、左右大臣群卿大夫從馬とある。有馬に行宮はあつたのであるが（風土記に行宮造營の材木を攻地山に採られたことが載つてをる）この行宮にて政事をみそなはした由も見えず、また群卿大夫が皆治病のために陪從したのでないことは云ふまでもないから、多少保養遊興の趣きがあつたと察せらるゝ。（聖德太子の伊豫溫湯の逍遙も事實とすればこれは正しく病氣治療の爲では無つたといつてよい（其湯岡の碑文にてさう察せらるゝ）。またたびたび引用する『出雲風土記』意宇郡忌部の條に

川邊出湯、出湯所在、兼海陸、仍男女老少、或道路駱驛、或海中沿洲、日集成市、繽紛燕樂

とある。これは西紀七三三年頃の記事である。而してまた稱德天皇の天平神護二年（西紀七六七）には、大神田麿、豐後郡領となり、大に（別府）溫泉を修理して遊浴に資すとある。溫泉入浴は單に疾病治療のためのみでなくて、保養のため、若しくは遊興のためとなり來りつゝあるを察することが出來る。

就中、有馬は古への都に最も近かつた（攝津名所圖會には京都より十四里、大阪より九里としてある）から、貴顯縉紳の來遊も漸く繁く、前記皇室の行宮に副うて、別莊の如きものも追々に建てられたやうである。但し聖武天皇神龜元年（西紀七二四）に行基菩薩が衰微に歸せしを復興し、後また後鳥羽天皇

の建久二年（西紀一一九一）に仁西上人が更に再興したといふことであるから此有馬にも盛衰があつたに相違なく、「とまるべきりやいつこに有馬山、宿なき野邊の夕ぐれの雨」といふ御製にもある通り宿るべき旅館だになき迄に荒みはてた事もあつたと見ゆる。併しながら流石に都近き場所柄とて、復興さるゝや間もなく榮えゆいたのである。今、仁西上人再興後間もなき時代の

○有馬に於ける溫泉生活

の光景を想像せしむる材料として、藤原定家の日記（明月記）から、之に關する二三の文句を左に抄出する。

建仁三年（西紀一二〇三）七月七日、天晴、自ニ季夏一在ニ有馬湯屋一。今朝遷ニ坐此山上人湯屋一。此處地形尤幽也。對ニ高山一望ニ瀉水一。

此の山といふのは今の落葉山であらうか、また湯屋といふのは別莊の事であらう。

同八日、天陰、初雨灑、午時許、乘レ輿攀ニ巖徑一見ニ山奥飛瀧一其高三丈許、如レ出ニ雲涯一相次參ニ女體權現一聞ニ和漢於社一退レ廬。

此の飛瀧は今いふ鼓ケ瀧であらう、女體權現はその嚴島神社であらう歟。

承元二年（西紀一二〇八）十月六日、天晴風烈、曉退出、辰時出レ京乘レ船。日短風吹、今夜宿ニ水田宿一

同七日、天晴　拂曉出路、申時始着ニ湯山一即浴レ之。晩又浴。

湯口屋故平大納言（親宗卿）後家宿レ之、上人法師居ニ播州材林居住、有ニ鷹犬之遊一云々。

同八日、雨降、曉更入道左府（兼大納言）出レ京云々、日來坐ニ件閑屋一水湯記被レ出云々、不レ得レ除夕浴、又夜半浴。

同九日、天晴、平三位下向、云々、送レ使有ニ返事一依ニ老耳病不レ來ニ來之由也。播州材林送山菜、深仕、又源中將（清信）庄等賚信、申時夜半浴。

同十日、天晴、酉時夜中浴。

同十一日、天晴、曉更材林出レ京、侍十五人童調度懸皆騎馬云々、又八條後家輿（具三位）出了云々、山中忽寂、寥寥臨遊放、入ニ湯屋一任レ意浴之。

曉頭在京大夫送ニ使者一只今下着、可レ訪由示送、于時志、深庄（成朝臣）送ニ垸飯一即送レ之、又被レ尋ニ獸炭一求而送之。

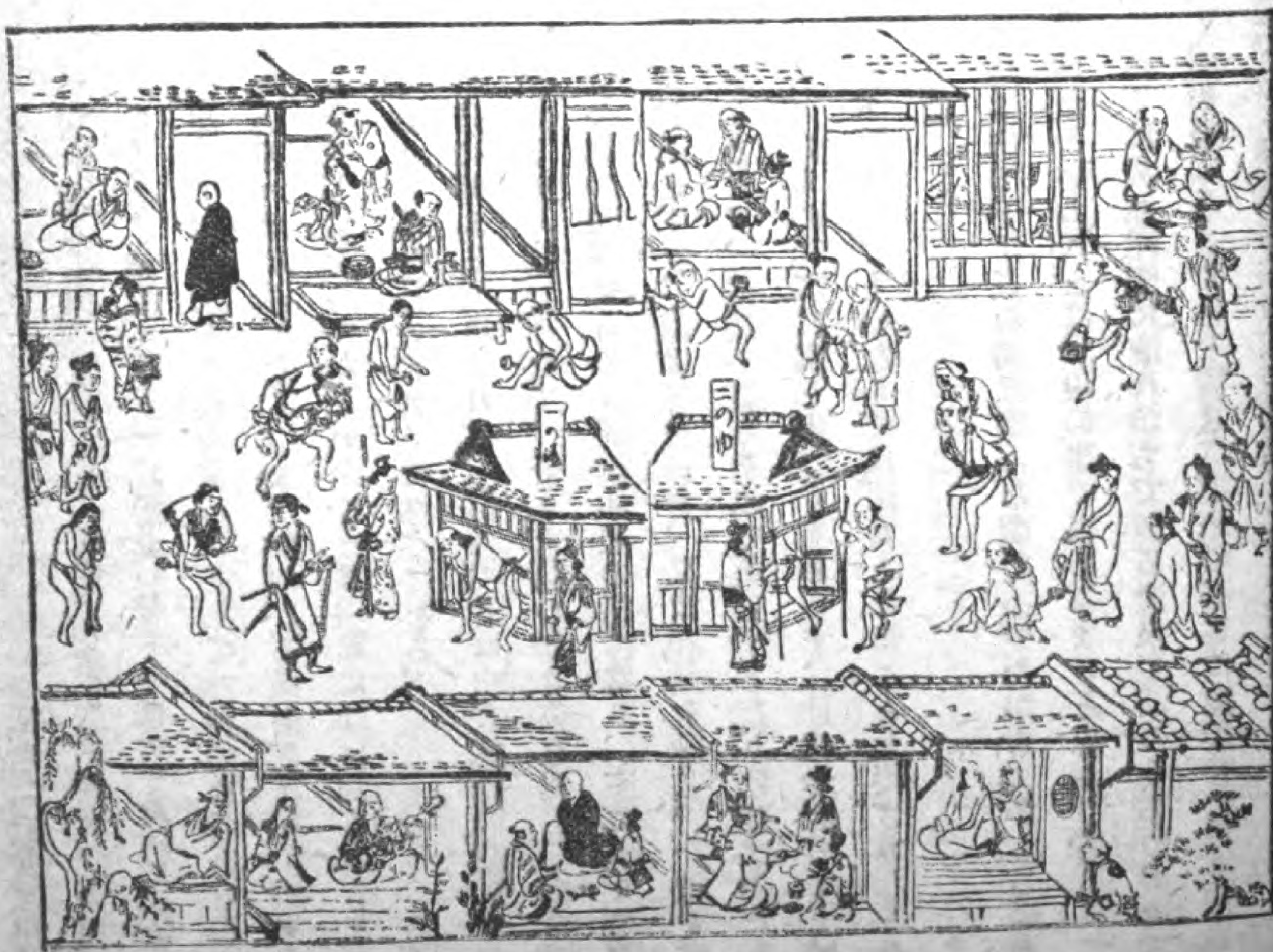
同十二日、天晴、寅午子時三度浴、未時七條院堀川殿少將相具下着云々、無ニ前行者一俄來臨、喧々又以滿レ耳、京洗女房主君共言談、所從相論似ニ闘諍一

同十三日、天晴、申時亥時浴。
同十四日、天晴、七日過了、無其隙强不㆑浴。
同十五日、天晴風烈、曉更取㆓松明㆒出㆑山、夜過㆓三里㆒出山之後日出、渡㆓武庫河㆒依㆓乘船有㆑煩㆒、向㆓陸地之路㆒(斯くてあちこちの別莊等に立寄り、櫻井を過ぎて山崎に着せる頃は漸く昏黑に及びしが) 於㆓鳥羽南門㆒月出無㆓片雲㆒、亥時歸㆓冷泉㆒小浴。

餘り面白いので、此時の日記をつひ皆抄錄した。定家はまだ四十七歲ではあるが持病日に惱ましく所勞更に平減無く例によつて有馬湯治を爲し、入浴諷詠、登臨遊放を事として居つたのであらうが、あちこちの別莊に公卿やその未亡人等などが保養に來り居り、そこに京洛より時々同族同僚などが來往し相音問し又鷹犬の遊びなどを催して喧々紛諍を極めてをるなど、温泉場の光景見るが如しではないか。而して、また

○湯女の起原

も仁西上人有馬再興の時にあると云はれてをる。仁西は大和國吉野郡河上、高原寺の住職であつたが、熊野権現の御夢告によりて此の有馬に來り、温泉を再修し、吉野河上の民を率ひ來りて湯を守らしめ、藥師如來の十二神將を像とりて十二の坊舍を設け、坊毎に老若の二婢置きて諸國より來集する浴客の世話



をなさせたのだといふ。二婢のうち老いたるを大湯女と稱し、各坊に通じ、總て之を『カカ』と呼び、若き方は(十三四歳位より十七八歳位迄にて)之を小湯女といひ、各々所謂る通り名を定めて代々之を襲くことゝしてあるさうである。

但し十二坊舍は溫泉地の發達するにつれて增加して二十坊となりしこともあつたが、興廢常ならず、又浴室の如きも種々に變更し、少くも貞享元祿の頃より明治十五年頃までは浴宇は二つにして湯槽は一つ(貞享二年板の有馬山溫泉小鑑によれば、深さ三尺八九寸、横一丈二尺五寸、奥行一丈五寸なるを板一枚にて仕切り、下三寸あけて一所なり)、之を二つに分ち其南を一の湯、北を二の湯と云ひて、擔任の坊舍を定めたといふ事である。隨ひて湯女の數や、名前などにも種々變遷はあつたらうと思はるるが、今、元祿十四年頃の『攝陽群談』によりて、坊の名と小湯女の通り名とを左に揭ぐることゝする。

一之湯

御所坊(檜女)、奥之坊(小鑑ニハ掃部)(夏女)、伊勢屋(竹女)

中之坊(常女)、尼崎坊(杉女)、彌宜屋(杉女)大門(初女)、角之坊(蘿女)、上大坊(栗女)、若狭屋(市女)、

二之湯

池之坊(松女)、下大坊(鍋女 しげ女トモ云)休所(武女)川崎屋(彌々女)、萱之坊(紀以女)川野屋(滿女)大黑屋(竿女)素麵屋(藤女)兵衛北の坊(小夜女)水船(辻女)

湯女が果して仁西上人再興の當時よりして此の如き名を有してをつたか否かは明らでなく、また如何なる風俗をなし、如何なる生活を爲してをつたかどいふことは、(私には)知る由もないが、『有馬溫泉誌』は左の如くに述べてをる。

『口碑に傳ふる所によれば、湯女は、昔は白衣紅袴の裝束を着け齒を染め黛を描きて、恰も上﨟の如き姿を爲し、專ら高位公卿の澡浴せらるゝ前後休憩の折に當り、座に侍りて、或は棊を圍み、或は琴を彈き、又は和歌を詠じ、今樣を謠ひなどして、徒然を慰るを以て業とするなりければ、なみ〳〵のものにては爲し得べくもあらず、且此土地の產土神の下に生れしものならでは湯女となることを得ざりしとなり。』

當時は白拍子などの尙ほ盛んな頃であつたから、かゝる湯女を置いたといふことは無根の事ではあるまいと思ふ。さるにてもとかくに放逸淫靡に流れがちである溫泉生活のうちに、或べく高尙優雅なる女性を置きて遠來の浴客に應接せしめたことはまことに心ある宗敎家の計畫として意味深く、また親切なる

用意、世にも雖有きことと謂つべきであらう。

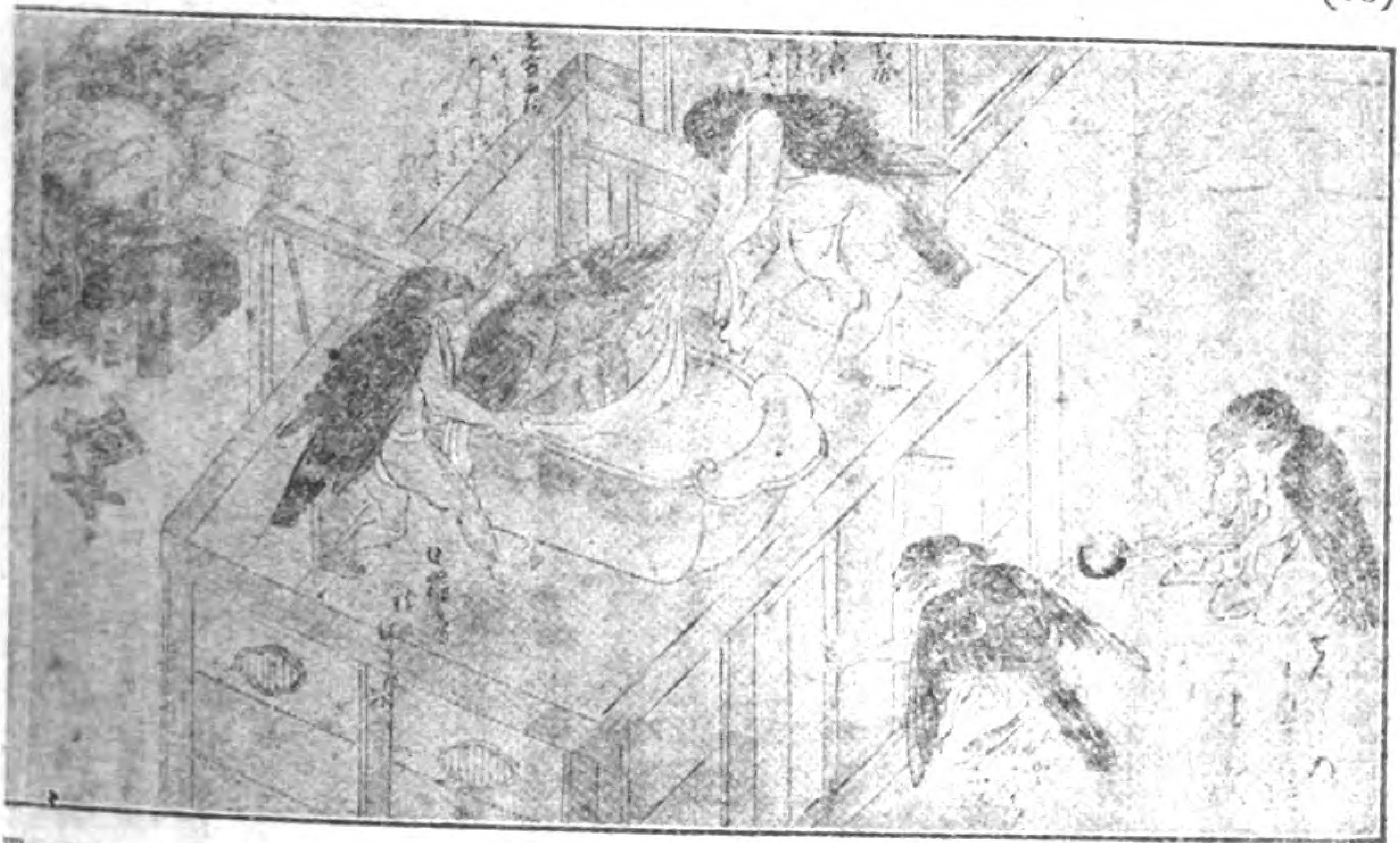
とにもかくにも温泉は、上述の如くにして病氣治療の處から漸く轉じて保養遊興の地となり、所謂、温泉趣味なるものが此中に養成せらるゝに至つたのであるが、その因由は何處に存するのであらうか。試みに

○温泉趣味の成因

ともいふべきものを數ふれば、先づ

(其一)病氣治療上の効果　を擧げねばなるまい。温泉と冷泉との區別を華攝何度に定むるかといふことは、前にも申した通り、種々であるが、概して温泉といはるゝものは地熱の煮沸を經て、無菌のものとなつてをる。而して分類上、含有物の如何によりて特殊の名目を有するものは云ふまでもないが、比較的含有物の少ない單純泉といはるゝものにても、多少の礦物質や瓦斯を含有して、皮膚に刺戟を與へ、快適の感を與ふるのである。前きにも掲げたる出雲風土記にも、或は『一濯則形容端正、再浴則萬病悉除、自ㇾ古至ㇾ今、無ㇾ不ㇾ得ㇾ驗、故俗人曰ニ神湯ニ』とあり、或は『浴則身體穆平、再濯則萬病消除、……故俗人號云ニ藥湯ニ』とある。單に皮膚に快適の感を與ふるのみでなく、含有物の如何によりては種々の創傷病痾を治療することを得るのである。而して常ねに平等の温度を維持して、混々として湧出して來る靈異は、神佛の恩惠といふ感を與へたに相違ない。此の雖有しといふ感謝の念は治療の上に一層の效果を發せしめたのみならず、常に温泉趣味の背景を作り、基調となつて居つた事は、見のかすべからざることであらう。次ぎには

(其二)氣候療養上の作用　をも數へねばなるまい。蓋し我國に於ける温泉湧出の地點は山間谿谷に多く、河や海のあたりにあるといふものも、必ず山に沿うてをるのを常としてをる。故に大體は山水の風景に富んでをる。最も古きものゝ一たる、伊豫の温泉は、山邊赤人の歌にも『國のこと〴〵、湯はしも澤にあれども、島山のよろしき國』としてある。紀州牟婁の温泉は有間皇子が國の體勢を讃して、纔かに彼地を視たばかりでも病自から蠲消せん』と申したのであるが、仁井田好古(天保年間)此地を考證して今の湯の崎温泉となし、碑を立て、『温ㇾ泉ㇾ高望之悅如ニ入ニ仙都ニ……誠海南之壯觀也、有馬王蠲病之言不ㇾ虛矣』と褒嘗をしてをる。有馬の如きでも、定家の明月記に此處地、形尤幽也、對ニ高山ニ望ニ遠水ニなどあり、登臨遊放に適せる地なりしことを知ることが出來る。その他温泉といふ温泉はいづれも山緣りに水淸く、風神幽邃の地にあらぬはないと謂つてもよいのである。殊に我が國には水蒸氣甚だ多く、蒼翠森潤なる植物到る處に繁茂してをり、氣候の偏差多様であつて寒熱兩帶の



花卉相交はり、節に應じて亂開し、互に美を競ふのである。加之、日本には殊に豐富なる『松柏科（針葉樹）より發する揮發性物質の芳香性刺激は、知らず〳〵の間に深呼吸運動を促すなど』是等物質的作用と風光の美とは相待ちて、所謂氣候療養上の效果を養しつゝあるのである。而してまた溫泉が概して（其三）山間幽僻の地に偏在してをるといふことが、溫泉氣分を作る主もなる要素であらう。即ち面倒なる浮世の繫累から、しばしのがれて自由の境に遊び、虛飾の煩縟を脫して天眞爛漫の身となり、赤裸々、以て天然に接し、淨洒々、以て諸國未知の人々と相親しむのである。風光うるはしき地に、日に快復しゆく身神を天の惠みにひたしつつ、天眞自由の交際に、陶然恍然、諷詠遊神の興を恣にす。かくて此世は宛然、一の淨土樂園と化し去るの趣きがある。これ溫泉に浴遊せるものゝおしなべて經驗し得らるべき直感であつて、實に溫泉趣味の神髓を形つくるものであらう。但し此の聖き自由法悅の感興も、之を肉欲的樂快の習慣を有し若しくは其の憧憬を有する者の生活に實現する時は、肉欲的遊興と化し、所謂る溫泉場生活の通弊を伴ひ性欲史上の一大題目となり來るのであるのであるが、然かもなほ、此內に味ひ得べき精神の保養と、清快なる感興とは人をして忘るゝこと能はざらしむるものがあるのである。これ溫泉が單に治療のためのみでなく、永く人に歡ばれ、ますます盛んに愛用せられつゝ榮え行く所以であらう。

○溫泉の延長

然しながら、此の如き溫泉氣分を實地に味はふには、日本の如く天惠豐かなる國に於てさへ容易のことでない。香川太沖の所



謂る『或官途嚴令、不レ能レ告レ暇。或貧家空囊不レ能レ償レ費。或婦人小兒、單身不レ易レ到。或老者患人、輿馬不レ堪レ乘、及、祁寒酷暑、病人不レ能レ犯レ觸。』（一本堂藥選續編）であるから、せめては之れに類似せるものを手近の處に設置したいと思ふのは自然の人情であらう。是に於て私が假りに名けて『溫泉の延長』と申したる現象があらはれ來るのである。醫家の所謂『造泉』なるものは、其試みの一つである、併しながら、これは、或る醫家が申すほど、新しいものではない。本稿の初めの方に揭げた浴の分類中の『藥湯』と名けたものを皆此のうちに包含せしむることが出來るとすれば、既に此等は日本の神代より行はれたといふ言傳へもある。即ち天食穗美命の時、眞榮八耳命が大藥湯．石凝戸女命が草花湯を獻じたといふことが、それであらう。また支那の文物が盛んに輸入せられてから此方、頻りに行はれたと見ゆる(『大同類聚方』などに揭げてある）諸種の藥湯を始めとし、上巳の蘭湯、端午の菖蒲湯など皆是なりともいへやう。此等の藥湯が皆、果して溫泉より啓示（サッゼッション）を得たのであるかどうかは今明かにする由も（私には）無いし、また其の發達沿革なども別途の研究に讓ることゝするが、少くも『是害坊繪詞』の文句は、溫泉思想の延長を說明して、面白いものと思はるゝから、之を左に抄出する。

○加茂河畔の浴室

私が見た『是害坊繪詞』は東京帝室博物館の所藏で、（詞書は冷泉爲重で、繪師は永春とのことで）あるが、少くも上下二巻以上のものであらう。殘念ながら、其上巻ともいふべき部分が缺けてをるので見ることが出來ぬ。その後文によりて察

よるに、唐土の天狗、是害坊といへるが日本に來てゐるうち何等かの事情によりて病に罹つた。此度こそは回復の望みなかるべしといふので、日本の天狗、日羅坊といへるが、親切に介抱し、加茂河畔に浴室をしつらへて湯治せしむる爲に、是害坊を簀の子のやうな竹架に乘せて舁き行くのであるが、帝室博物館所藏の繪詞はこの處から始まつてをる。

「是害坊かゝれながら申しに云、おなじくは藥湯を浴み候はゞや、近きほどに出湯などは候はぬやらむ。

日羅房云、我朝の出湯その數侍へり。しかれども熊野の湯の峯の箱根の湯本なんど申侍るは遠く候へば、其まで病體をかき奉らむことといたはしく侍り、その上かの處々には、和光の月ほがらかにして煩惱のやみを破し、垂迹の風はげしくして魔障の雲をはらふ。その外、みやこに近き程には、有馬の出湯出て諸人療治をいたすといへども、彼所は又賢王善逝應化の靈場にて、行基菩薩利生の砌なり。藥師の靈像を此地にうつみて、佛身より藥湯をいだし、地獄の東門を此所にしめして罪人を苦泉にいましむ。我等彼所にのぞまば、十二神將、怒をなして、七千夜叉氣を加ふべし。されば、ただ加茂河の邊にて、忍て湯治をし給ふべし。此河は加茂大明神のみたらゐより流れたり。彼明神は愛宕郡の地主、平安城の鎭守たり、且流れを浴せば無始の罪障きえ滅しなんとて、ひかるゝ河原に浴室をかまへて、溫浴をぞはじめける。」

× × × ×

かくて一七日にもなりぬれば心もやうやうなをり、自治すこしたはやきけり。是害坊申樣、いまだ、かいがいしくは侍らねども、さのみ久しく逗留せば、なほも憂き目にあひぬべし、いそぎ本國へ歸り侍らん、さても今度の此恩こそ生々世々にも謝しかたくは覺え侍べれ、若し渡唐などしたまはゞ必ず尋ねたまふべし、我國の靈地ともこまかに先達申さんと云けり……」

（此の繪と同樣なるものが、神戸川崎家の「長存閣鑑賞」第一集第三十二に掲げられてをる。この浴槽等に關しては後に私見を述べやうと思ふ）

併しながらこれ等は純粹の湯治で、病氣治療を主としてをる。謂はば溫泉思想の半面に過ぎぬ。且つまた一時的の試みであるが此の一時的溫泉の考へを恒久的のものと爲し、幾分か溫泉思想の他の半面をも加味して山間不便の地にある溫泉を手近の處に持來らうとしたのは蓋し、

○しほゆ

であらう。但し古來しほゆと呼ばれてをるもののうちには

（其一）藥浴　を意味してをるものがある。即ち又藥浴治な

潮湯浴



どゝもいひて海水浴のことである。

諾尊が日向の橘の小門の檍原にてなしたまひしものや、源實朝が由井ケ濱にて行ひし潮浴などは、禊。といふべきであらうが、六月十四日攝津住吉の浦にて行はれた御輿洗(みこしあらひ)に諸國より來集せる人

々のみ浴たるものは潮。湯。と呼ばれてをつた。又尾張國知多郡大野村に盛に行はれて來たといふ潮。湯。治は、應保年間（西紀一一六二）鴨の長明が來浴して、『生魚の御あへも清し酒もよし、大野の湯。あ。み。日數かさねん』と詠みたりと傳へられてをる。歌は少し怪しいが、此海水浴も『しほゆあみ』といひ傳へられたることあるは確かであらう。

海水浴發達史の記錄によれば、『時の愛知縣令國貞廉平、縣下巡視の途次、此處に來り、海浴の沿革を聞き、當時の愛知縣病院長後。藤。新。平。と謀りて海浴の功を說き、二宮庄藏なるものをして小屋をかけ、更衣所を設けたるが、明治維新後におけるわが國海水浴の嚆矢なり』といふ事である。

なほ鎌倉時代あたりの歌の詞書などにて察するに、あちこちに同様なる海水浴があつて、之をし。ほ。ゆ。あ。みと呼んでをつたやうであるが、今は一々例證を略すとする。而してまた、此等海水浴の外に

（其二）有馬の溫泉のことをも鹽。湯。と云つてをつたやうである。源兼昌の歌に（夫木抄未考）『渡つ海のはるけきものを、いかにして、有馬の山に鹽湯出づらむ』といふのを始めとして折々見當るのである。

然しながら私が『溫泉の延長』として特に揭げたいと思ふの

は此等ではない。名目の起原の前後は未だ知り得ないが、當時此等と並んで、別に

　其三の鹽湯　と呼ばれてをるものがあつた。源經頼の日記たる左經記に左の記事がある。

　長元八年（西紀一〇三五）二月九日、天晴、己刻、參二關白殿一、今日爲レ沐二鹽湯一、北方相具、令レ渡二宇治殿一給、可レ然上達部殿上人諸大夫等追縱、公卿或烏帽直衣、或布衣、但僕並左大亟宿衣、諸大夫布衣、女房車二兩、見物之車馬夾レ路連々、及二晩景一到着給、人々退歸レ京云々、

　即ち時の關白頼通が鹽湯に浴せんが爲めに、夫人同伴にて宇治殿に行きたりといふのであるが、宇治に温泉のあつた事もなく、勿論海岸でもないのであるから、此の鹽湯なるものは、海水を煮て、温泉にかたどりたるものと思らるゝ。藤原忠實の日記たる『殿暦』にも

　長治元年（西紀一一〇四）九月十六日、丙戌、右大將自二昨日一候二宇治一、爲二鹽湯一也。

　永久四年（西紀一一一六）九月三日、癸巳、此兩三日依二一禁一止二鹽湯一。

　同　五日、乙未、自二今日一不二方違一、今夜又始鹽湯一。

などの記事がある。いづれも同樣のものであらう。

『詞花集』に載せたる平の忠盛（西紀一一〇〇――一一五三）の歌に

　播磨の守に侍りける時、三月計に都よりのぼり侍りけるに、津の國山路と云ふ所に參議爲通朝臣潮湯あみて侍るときゝてつかはしける。

　ながゐすな都の花も咲ぬらむ我も何故いそぐ船出ぞ

とあり。『兵庫名所記』（寶永七年）に、『此村々を山路の庄と云ふ、此邊海ちかく潮を汲て湯となす』とある、即ち宇治に於けるものも之と同樣なるものであらう。

　また泉州堺の新家に、行基菩薩の穿ちたりと傳ふる井戸がある、それより汲みたる水にて立てたる湯がある、治療の功驗著るく、世々榮え行はれ來つたのであるが、權中納言定頼集（平安朝時代）に「九月ばかり、堺といふ所にしほゆあみにおはしたりけるに」とあり、また守覺法親王（西紀一一四九――一二〇二）の歌の詞書に『和泉國新家といふ所にてしほゆあみしけるに』云々とあるのを以て察すれば、宇治の鹽湯といふのも、海水を沸かしてたてたるものなることが、いよ／＼明かであらう。但し此の守覺法親王の歌に

　しほゆはてゝ都へ歸るとてよめる

日數へし鄙の住居を思ひ出では戀しかるべき旅の空哉

とあり、また、前掲忠盛の歌にても察せらるゝ通り、堺や山路等の鹽湯なるものは湯泉の模擬若しくは其の延長には相違ないが尚ほ何等かの因緣により一遊部の處にあるのであるから、前に申した溫泉を手近の處に持たんとする要求に、全く當てはまつて居ると云ふ事は出來ぬ。此等に比ぶれは宇治の鹽湯は、此の要求に一層よく叶つてをると云ふことが出來るであらう。併し溫泉延長の要求はこれだけに止まるべくもない。更に種々の變遷を經て、現今東京を始め各地に行はれてをる樣な、溫泉式錢湯風呂となり、日本溫浴の實義を最もよく發揮するに至つたのである。今此の沿革をたどるにつきて、どうしても閑却することの出來ぬのは佛敎傳來の溫室思想である。是は日本溫浴の發達に至大の關係を有するものであつて、私に取ては最も面白き研究題目である。次きに少しく之を述べて見よう。

自由伯と吐雲博士の印象

田中貢太郎

臨終の日の板垣伯邸

大正八年夏七月十九日には、終日意味のありさうな驟雨があつた。越へて二十日及び二十一日には、驕陽が大地を照らし。その二十日と二十一日の兩日にかけて、私の崇敬措かざる二人の先輩は、その遺骸を冷な黄土に委したのであつた。

その二十一日は和田垣博士で、前日は板垣伯であつた。板垣伯の方は、芝の青松寺で葬儀を營んで、北品川東海寺内の高源院の塋域へ埋葬した。その日、青松寺に參集した數千の會葬者の多くは、自由伯に隨從して社會革新の運動に奔命した人々であつた。鬆々と垂れた髭髯の奥に、未だ銷し盡さざる當年の意氣があつた。會葬者の中には、相別れて數十年になる政友と邂逅したが、双方ともその容貌があまりに變つてゐるので、暫らくは聲もかけずにゐて、やつと見定めて久濶を叙する者が、其所にも此所にも見受けられた。私も數年前に死亡したと云ふ事を聞いて、年賀狀も出さずにゐた老志士に邂逅して恐縮した。盲人や廢兵なども、會葬者の中にあつた。

皆暗然たる眼をしてゐた。郷黨の後輩なるが故に、私の胸に

は接待委員の徽章が著いてゐた。私は十時過ぎの暑い陽の光を本堂の前の樹蔭に避けて立つてゐた。故伯の歸依淺からざりし青松寺の先住北野元峰師の引導を渡す聲が微かに聞えて來た。やがて當年の大策士と云はれた林有造翁が親族總代として、會葬者に挨拶すると、それで式が終つて、人々は本堂から溢れ出た。大隈侯が人の手に縋つて淋しさうに出て來た後から、李鴻章の狙撃で有名な小山六之助君が莞爾々々しながらやつて來た。

『大隈を狙ふにや、こんな時ですね、』と、私は冗談を云つて笑つた。

板垣伯の死は十六日の午前八時三十分であつたが、某新聞などには四時として傳へられた。私はその新聞を見てから板垣邸へ駈けつけた。御成門で電車をおり、山門の前に續からうとする松並木の取付を左に折れて、廣い泥溝に沿うて行くと、あめ色の自働車が路の上に置いてある。見舞客の乘つて來た物だらうと思つて行つた。板垣邸はその右の奥深く引込んだ家で、入口の廣場には三臺の自働車があつた。警官が一人、その廣場の口に立つてゐた。古い狹い家の玄關が洋館擬になつてゐた。庭前には圓形に支切つた形ばかりの植込みがあつた。見舞客はその植込みの緣を曲つて玄關へと行つた。本玄關の左に寄つて内玄關があつて、其所に小さな格子戸があつた。室の中に坐つてゐる五六人の顔がその間から見えてゐる。私はその方へと行つた。背後に庭を控へた狹い室には、私の知つた二つの顔があつた。伯の秘書で自由黨史の筆者の和田三郎君と、萱野長知君の顔だ。二人とも扇を使ひながら暑くるしさうに坐つてゐた。

『ちよとお見舞にあがりました。』と云ふと、二人が、『まあおあがり給へ、』と云ふ。

右側の格子の内になつた所に受付がゐる。私はその方へ行つて名刺を出した。受付は樋口と云ふ土陽新聞の支局員だ。私は樋口君の傍へ坐つた。

玄關の應接係の方から、見舞客の名刺が五枚三枚と來る。香奠を持つて來る者がある。香奠は廊下を通つて左の方になつた奥へ持つて行つた。玄關先へは自働車が來る。人力車が來る。現首相の原君と、宮相の波多野君とが、奥まつた應接室で何か打合せをしてゐると云ふ者がある。應接間は二つあつた。内玄關からは鍵の手になつてゐた。應接間の先の軒には、朱の色をした柘榴の花が咲いてゐた。その傍に色が褪めて灰色に見える山梔の花があつた

宮内省から呼び出しが來て、齋藤宗介君が出頭した。中野寅

次郎君と龍野周一郎君とが彼方此方する。竹内綱君と宮地茂君とが、應接室と奥との間を往來するのが見られる。自働車からおりた淺黄の單衣を著た大きな男は野田卯太郎君らしい。板垣邸の玄關に轉がつて灸點などをやつてゐる老壯士の上田茂馬君と、その野田君とが容貌から體格から殆んど酷似であると思つてゐると、野田君が應接室から來て、廊下から奥の方へ行きかけた所で、上田君が玄關の方からやつて來た。後頭部へ禿げさがつた禿げ具合まで好く似てゐる。違つてゐるのは色澤の加減で、上田君の蒼黄ろになつたのに對して、野田君のは銅色を帶びて艶に光つてゐる。

樋口君が何時の間にかゐなくなつたので、私が筆を持つた。田健次郎君が來る。日本三ハイカラの一人松本君平君が車で來る。その玉蜀黍の毛のやうな赤茶けた長い口髭に特色が見える。大隈重信君が白い洋袴を見せて、右の腕を信常君に取られ、左の腕を久松家從に取られて、門口から自働車をおりて來る。門の横手の室に詰めてゐた新聞記者が、大隈君の見舞の言葉を聞きにとやつて來る。大隈君は玄關口から直ぐ引返した。『奥様にと……』云ふ事は好く聞えたが、なんと云つたんでせうね、』と、私の知つた若い記者が聞きに來る。玄關で聞いて貰ふと、『奥様にお目にかゝりませんから宜しく、』と云つたと云ふ事が分る。電話架設の工夫がやつて來る。一つの電話では不便であるから增設を申込んだらしい。工夫が壁に穴を開ける間、私は帳面を持つて机の傍を離れてゐた。

宮内省に出頭してゐた齋藤君が歸つて來たが、勝手が分らない爲めに位階陞叙の御沙汰を受けずに歸つたので、又宮内省から呼び出しが來る。で、齋藤君が又出かける。そして、十二時頃に歸つて來ると、はじめて伯の薨去を公表した。

新聞記者は葬儀委員長を聞きに來はじめた。この委員長は、何人云ふとなしに野田君だと云ひ出した。天幕の材料が二匹の馬で來た。晝飯の辨當が來た。その辨當の一部は玄關の次の應接室へ持ち込まれた。私も應接室へと入つた。私の左側では、河野廣中君が籐椅子に腰をかけて辨當を開けてゐた。其所はもう卓の端になつてゐて、横斜になつた所に竹内綱君が、これも矢張り腰をかけて箸を動かしてゐたが、手の動作の自由でない竹内君は、傍の茶碗に手を當てゝひつくり返した。茶碗の茶は斜に流れて、河野君の飯の入つた方の辨當箱を濡らした。河野君はお茶の箱を引寄せてゐた、竹内君は氣の毒がつて、その辨當箱を蓋の上にあげて、流れた茶を拭はうとしたが、何もないのでまごまごしてゐた。

『好いよ、好いよ、』と、河野君はお茶の卵燒をむしやむしや喫

ひながら云つたが、顔はあげなかつた。私はつくづく老を呪つた。

辨當を喫つてゐる間に、受付の席には人が出來てゐた。新聞記者が伯の寢室の周圍の模樣を書く爲めであらう、『母屋の庭に何か花がありますか、』と聞く。私は樋口君を呼んで、その記者を内庭へ伴れて行かした。始終板垣家に出入してゐる西内君の姿がちらちらする。黑紋付の背の高い婦人が出入する。仙石貢君らしい男が自働車からおりる。

新聞記者が葬儀委員長の名を頻りに聞く。二時頃になつて中野君が奥から出て來て『伯の靈前で發表しますから、皆來て下さい。』と云ふ。

十人ばかりゐた新聞記者の一團が内庭から草履を穿いて行きかけたので、私もそれに交つて行く。でこぼこの飛石を傳うて袖垣に付いた小門を潜ると、母屋の二階下の室へ來る。其所には床の方に寄つて、覺めざる眠に落ちた伯の黑衣を被た遺骸が横はつてゐた。その前には二つの經机を据えて、それに線香を立て、燈明を點けてあつた。枕頭には黑い机を置いて、それには枕團子のやうな物を供へてあつた。その經机と黑机との間には、未だ老ひきらぬ伯の未亡人がいかつい體を見せてゐた。その未亡人は何か唱へてゐた。未亡人と斜に向き合つて、椽側の方を背にして、三人ばかりの者が坐つてゐた。その上坐にゐるのが土佐から出て來たばかりの伯の子息の鉾太郎君であつた。室の下手の向ふ側には、龍野君、奥野君、小泉君、中野君など四五人の者がゐた。私達はそれに向つて椽側を背にしてゐた。

奥野君の手には、紺卦の入つた二枚ばかりの卦紙があつた。細野君は横からその卦紙を覗くやうにして、『これから皆樣に一所に御發表して置きますから、後れて來た記者があれば、どうか皆樣から話して下さい。』と云つた。龍野君は小さな顏の横に長ひ小綺麗な老人であつた。

『さて、伯爵は今朝八時三十分に御薨去なされました。』と、奥野君が云ひ出した。『伯爵は生前に三ケ條の御遺言がありました。第一は、伯爵平生の持論たる一代華族制の意見を貫徹する爲めに、襲爵の屆け出でをしないと云ふ事であります。それは屆け出でがなければ、襲爵が出來ない事になつて居りますからであります。第二は、これは板垣家の私事に渉る事でありますが、嗣子鉾太郎氏は病弱の故を以て、板垣家を相續せずに、板垣家は鉾太郎氏の嫡子守正氏が相續する事になりました。そして、三は、明治以後皇室から御下賜になつた寶物及び板垣家の系圖は、近親の間で保存して、守正氏の成年を以て引き渡すことゝであります。』と、伯の遺言を發表した後で、葬儀委員長を聞

君、副委員長を野田君。それから常務委員として龍野奥野齋藤中野小泉など、十人ばかりの名をあげた。奥野君の言葉の足りない所は、龍野君と中野君とが補ひ足した。

導師の名をあげた時、記者の一人は、『伯爵と元峰とは、生前から關係がありましたか。』と云ふと、未亡人は斜に此方を見て、『それはもう數十年來の關係であります。』と云つた。

龍野君はやがて未亡人に向つて、『奥樣、おあかし、』と云ひ、それから私達の方へ向つて『何人でも代理で御燒香を願ひます。』と云つた。年長の記者が一人經机の前に出て燒香する。

燒香が終ると、龍野は又未亡人の方へ向いて、『奥樣これでは伯の……』と云つた。未亡人は伯の顔に被せてあつた黒衣を除つた。兩眼を閉じで安らかに眠つた黄ろな大きな顔があらはれた。頭髮は銀の色をしてゐた。兩手の手首には珠數をかけて組み合はしてゐたが、その上には白い紗のやうな衣をかけてあつた。私達はそれに向つて拜をした。

和田垣博士音容記

和田垣博士の葬儀は、二十一日午前十時、青山齋場で基督教式に行はれた。黒い喪の幕を張り渡した式場の正面には、上に大禮服を被にして、博士の遺骸を斂めた棺が置かれ、その左右には花輪や花籠の花が冷香を放つてゐた。

『いつくしみ深き』の讃美歌で式が始まつた。當代の學者教育者が會葬者の大半を占めてゐた。讃美歌の歌へない我等の連中は、眼をぱちくりさして立つてゐた。故博士に見られたなら洒落の材料にせられる所だ。

博士の亡くなられたのは、十八日午后八時四十五分であつた。その日から十日ばかり前の事、博士が病氣で大學の入澤内科に入院してゐられると云ふ事を聞いた私は、本郷方面の用事を片づけて見舞に行つてみると、受附にゐた下足番の老人が、『和田垣さんは、とうから退院したようですよ、』と云ふ。少し變だとは思つたが、まさか嘘も云はないだらうと思つて、そのまゝ歸つて來た。所で五六日すると博士危篤の報が新聞に傳へられた。私は輕卒な下足番に對する怒に燃えた。で、その翌日、大學へ行つて、下足番の顔を見るなり、『おい、君は、この四五日前にゐた下足番か、』と云つてみた。下足番は不思議さうに私の顔を見ながら、『私です。』と云ふ。『おや君だ。君はこの間、和田垣博士は退院したと云つたが、退院してゐやしないか、』と、きめつける。下足番は私の顔色を見て取つたのか、『どうもすみません、退院して居ると思つて居りましたが、後で聞くと退院しないと云ふ事でした。』と、語尾を曖昧にする。腹は立つが危

篤な病人を見舞に來て、何時までもねだ込んでゐる譯に行かない。で、博士の入院室へと行つてみる。廊下に卓を置いて、三人の者が見舞客に應接してゐた。『意識は明瞭ですが、非常に亢奮して居りますから、』と、その一人が云つた。私はとても病床に行く事は出來ないと思つたので、名刺を出して歸つて出た。

最近は『ひぼこり吟社』と云ふ俳句の會が出來て、博士もその會へ折々出席されたので、度々面會の機會を得た。昨年の初秋には、雜司ケ谷の鬼子母神の境内で句會を催した時にも、博士は私達と一所になつて、月の句や、蟲の句を作つた。『三人よれば姦しきものを蟲の聲』と云ふやうな博士一流のおかしみのある句が出來た。俳號では吐雲と云ふ雅號を用ゐられた。それは『吐雲錄』と云ふ著書の題目を用ゐられたものであらう。

最後に面會したのは、本年三月一日の夜、江戸川畔の清風亭の句會の席にであつた。そして、私一人で、しみじみと博士に面會した最後はと云ふと、昨年の秋の末であつた。博士は未だ小日向臺町の舊宅に居られた。桂月翁が滿韓の遊行をした時、博士が發起人の一人となつて送別會をして下されたので、そのお禮に行つた時であつた。雨の降る薄ら寒い日であつた。博士は私の惡文を讀んでゐて下されたのか、『君の隨筆は面白い。論文も名文ならば非常に結構だが、まア名文でない限りは、隨筆の方に意味があるね。』など話された。博士は又私が煙草を貪り飲むのを見て、手づからマドロスパイプに舶來の煙草を詰めて下された。

私が博士の謦咳に接するやうになつてから、もう十餘年になる。それは桂月翁をはじめ、博士と郷里を同じうする書肆などとの關係からであつた。私は博士が『[illegible]錄』を著はした時に、幾分の力をそれに致した事を光榮に思ふ者であるが、私は當時の記憶を辿つて、博士の音容を忍ぶのよすがとしよう。

高尾山へ登つたのが、博士に從遊したはじめであらう。それはもう、七八年も前の事である。新宿停車場に待ち合はす事にして集まつてみると、桂月翁がやつて來ない。仕方なく一と汽車後らす事にして、驛前の旅亭に入つて酒を飮んでゐた。間もなく、桂月翁がやつて來た。博士は毛筆仕掛の萬年筆で、半紙に、『豈不肉乎』の四字を書いて、『これが讀めるかね、』と聞く。皆怪しい肉の字に眼を着けたが、何人も讀んだ者がない。ある人は、『豈肉ならずや』と云つた。博士は微笑して、『豈に肉(憎)らしからずや、』と云つた。

博士は又近作の俗謠があるからと云つた。『我が嫌ひ、なま意氣、なま醉、なま物識、なまで好いのは、たまご、生貝、たま

松魚、何より好いのは現なまぢや、』の文句を口にして、それを紙に書いた。

　千駄ヶ谷町に河村清雄畫伯が住んでゐた。博士と畫伯とは非常に親しい仲である。博士は畫伯を呼びにやつて、高尾山へ一所に伴れ出さうとした。江戸つ子の運動嫌ひな畫伯は、『高尾山はよつぽとありませう、』と云ふ。『九段坂の五倍位ですよ、』と、桂月翁が云つたので、畫伯もうつかりその氣になつて同行する事になつた。

　夏の初めで麥が黄熟してゐた。淺川驛で汽車をおり、山の麓まで人力車に乘つて、頂上まで十四五町の山を登りはじめた。麓から伴れて行つた一人の車夫の背に酒や辨當があつた。山の中程に愛宕山と云ふ所があつた。河村畫伯は桂月翁を顧みて、『これが九段坂の五倍ですかね、はい、はい、』と云ふ。

　不動堂から飯綱權現への急勾配な石段を登り、其所から山の絶頂へと行つた。もう夕方で、暑い陽は高尾と峰續きになつた草山の上に落ちかゝつて、僅に薄赤く見えてゐた。東の方を見ると、雪の富士が大山の連山を踏んで、曇つた夕暮の空に屹立してゐる。南の方を見ると、白く茫とした陸地の果に、相摸灘の水が薄鼠地を織つてゐた。陸に近い海の中に粟粒のやうに見えるのは江の島であつた。

　頂上には長いテーブルのやうな木の臺があつた。酒や辨當のの荷物は其所で開かれた。ふと見ると、空の雲は、夕陽の光を反射して、赤、黄、朱、金茶、樺色と云ふやうに變幻した。

　陽が落ちてしまつて、暮色が四邊に迫つて來ると、一行は歸りかけた。博士の衣兜からウヰスキーの小ビンがあらはれた。桂月翁と道別君と、私との三人は、あげかけてゐた腰をおろした。

　博士が何時の間にかゐなくなつた。酒に醉つた桂月翁は、『博士は夜道を恐れて逃げた逃げた、』と云つた。と、『かやうに候ふ者は、鞍馬の奥……』と云ふ博士の謠が直ぐ向ふに起つた。三人は博士に追ひ付いたが、眞暗で路が分らない。飯綱權現の社務所の方へおりて行く小路が右手にあつた。高尾通の桂月翁は、その方角を取り違へて、二度も三度も後戻りして、路の無い右の方へおりやうとした。博士もはじめには、『違つてゐる、違つて居る、』と云つたが、桂月翁があまり確信があるやうに、『こつちだ、こつちだ、』と云ふので、『路は大町君が精しいから、大町君の云ふ通りにしよう、』と、云ふ通になつたが、左の方に路のあらう筈がない。博士は諦めてはじめに來た路を探り探りおりやうとした。『僕が大町さんに縋いて行くから、君は和田垣さんと賴む、』と、道別君が云つた。私は博士に縋いて行かうとした。

桂月翁と道別君とは、右の方の暗い岸をおりかけたが、おりられないので引返して來た。

と、下の方から火の光が見えた。先へおりた一行が、社務所の前の茶店で提灯を借りて、車夫に持たして迎へによこした所であつた。

淺草橋から荷足船に乘つて、荒川堤の櫻を觀に行つた日は、雨が降つてゐた。船にはズックの屋根をしてあつた。風が冷たいので、河村諾伯は膝掛を被り、桂月翁は席を被つてゐた。

花見客を滿載した大小の傳馬船や大荷足は、小蒸汽に曳かれて、幾艘となく上流へ登つて行つた。その中で、たゞ一艘櫓を押してゐる私逹の小船は、取り殘されたやうな風で、雨に煙つた川の面を漕いで行つた。それに折柄の退潮で船は進まなかつた。朝の十時から船に乘つて、四時頃にやつと豐島の渡しに着いた。

茶店の酒は飮めないから、』と、季樂君が船の中の酒を瓢簞に詰めて持つた。『サイダーはどうです。』と、何人かが云つた。博士の口から、『サイダー櫻に何故騷ぐ。』

堤の上は花見の人に埋められてゐた。その間を變裝の男女が縫うて行つた　一行は一軒の掛茶屋へ入つて、蠑螺と茹卵とを注文して瓢簞の酒を飮んだ。蠑螺は古かつた。博士は一寸つけてから、『これは腐つてゐる、』と云つて、中止した。桂月翁は一口喫つて吐き出した。

瓢簞の酒が無くなつたので、其所のビン詰の酒を一本注文したが、思つた通り臭くて飮めなかつた。で、引上げる事にして勘定を聞くと、一圓八十錢と云つた。七人前の榮螺に十個の卵、あまり高いので、『蠑螺は一つ幾等だ』と聞くと、二十五錢だと云ふ。『蠑螺(些細)ぢやない』と博士が笑つた。

池上の曙樓へ行つた時には、博士を先へやつて置いて、桂月翁はじめ私逹は、蒲田の梅屋敷前から京濱電車をおりて歩いた。一行の爲めに持つて來た一升の酒と、澤庵の折とが季樂君の手にあつた。『季樂に可愛相だから、女持ちにせうぢやないか、』と、桂月翁が發議した。

『葛洲園の前へ行くと自働車が來てゐて、二人の西婦人が乘つてゐた。女持ちの順になつてゐる私は、仕方なく季樂君の手から酒德利を取つた。

女を見る度に、德利は次から次へと移つた。女塚神社へ行つた時、『これは新田義興の妾の少將を祭つてある所だ』と云つて、桂月翁は自分の手にしてゐる德利を、道別君に渡さうとすると

「白骨となつて居る者は女の内に入らない、それに、これは千年以上の古墳だ。少將などの墓ぢやありません。」と、道別君はなかなか承知しない。

眼鏡をかけて袴を穿いた女が、自轉車に乘つて向ふから來て擦れ違つた。『あの女は何だらう。』と云ふ者がある、『あれは産婆らしい。』と云ふ者もあれば、『小學校の女教師らしい。』と云ふ者がある。女の素性に夢中になつて桂月翁は手にしてゐる德利を渡す事を忘れてゐる。『先生、德利は』と、私が注意すると、桂月翁が氣が付いて、道別君に渡さうとする。『もう行つてしまつたから無效だ。』と云つて受け取らない。桂月翁は仕方なく德利をぶらさげて行つた。

池上の本門寺に着いて、その裏手にある星亭の墓前へ行つた。一行は北所にある休憩所に腰をかけて、酒を飲んだ。そして、池上宗仲の邸宅の跡と云ふ大坊へ行き、その邊を彷徨うて狩野探幽の墓などを見てゐる内に日が暮れた。

暖な月の晩であつた。曙樓の庭前には梅が微白く咲いてゐた。博士と曙樓の主人とは、一行を待ちかねてゐた。「星亭の墓前で酒を飲んでゐて遲くなりました。」と、道別君が云ふと、『德利を飲み乾（星）して通（亨）つたか。』と博士が云つた。

大正五年七月二十二日の夜には、博士に隨從して兩國の川開を見た。一行は高尾山へ登つた連中であつた。先づ日本橋の曙樓の二階に集まつて、北所から一所になつて淺草橋まで電車で行つた。季樂君が一行の辨當を持つてゐた。

川の中は川開の船で一杯になつてゐた、若い女の赤い衣裳、踊のお師匠の一行の乘つてゐる船は、弟子の女が三味線につれて踊つてゐる。醉つて千鳥足になつた若衆が大傳馬の船緣を歩いてゐる。爆發の音に驚いて見上げると、二つばかりの小旗の付いた輕氣球が、花火の中から出て、空にふはりと浮ぶ。小旗には屋號がある。『何時も廣告の花火だから、今年からそれをやらないと云ふ事になつてゐたが、矢張り廣告だ』と道別君が云ふ。

五時を過ぎてゐた。空には鼠色の雲がだんだらにかゝつてゐた。兩岸の空地も、附近の二階も物干も人で埋まつて見えた。淺草橋を渡つて船に乘つた所で、一行から一足先に出てゐた曙樓の主人がやつて來た。主人の後から、十七八の、小柄な、眼の大きな藝妓がやつて來た。

兩國橋を中心にして、上流は廐橋、下流は新大橋にかけて數千艘の船が川一杯に浮んでゐた。私達の船もその間を縫うて日本橋の方へと行つた。水上警察の警官は、喇叭のやうな[illegible]

ラで、『その船を、さう持つて行つてはならん。』『そつちへ行つてはならん、』などと指揮してゐた。花火船には、高張提燈を點けたり、ほうづき提燈を點けたりしてゐた。

花火の揚げ場は、神田川の出口にあつた。空の雲はだんだらが無くなつて、一面に黑い幕となつてゐた。花火は二三分間を置いて揚げられた。星の散らばるやうになつたり、天蓋などのやうにもなつた。『玉屋、玉屋』と共所でも此所でも聲をかける。日が暮れて、空が暗くなるに從うて、花火は鮮になつて來る。船と船との間の水の色も黑くなつたのに、物の色が映つて、薄白く綾をつくつてみえた。川村畫伯は、その水の色と空の色とを見て、『好い色だ、好い色だ』と云つた。

隣に大荷足船がゐて、二三十人ばかりの男女の一團がゐたが、その内のお神さんらしい女が、五つ位の男の子を抱きあげて船緣にすがり、『すこし御免なさいよ』と云ふ。博士が鷹揚に、『さあ、さあ』と云ふ。子供のお尻に花火の音がして暗い水の上に落ちる物がある。ビール、の空箱を三つばかり重ねた上に立つて、花火の方を見てゐた醤肆の主人が、『や、これは』と云つた。博士は苦笑してゐた。

昔は船と船との間を縫うて物を賣つてゐたウロウロ船も、今はウロウロする事が出來ない。手籠にビールやサイダー菓子などを入れて、船から船を傳つて賣りに來る。博士はウロウロ船のお神さんに、『お前は岡山だね』と云つた。お神さんは、『え、』と云ふ。岡山の音があつたと見える。

花火は續けさまに揚つた。狂ひ花火の音がして、火の玉がシユーシユーと前の船に立つてゐる人の頭の上に飛んだが、花火は見えない。川村畫伯は提燈を釣した木につかまつて延びあがつたが、直ぐ坐に歸る。その船には胴の間に三つの提燈を釣してあつた。私は辨當を喫つた後で、枝豆でビールを飮んでゐた。藝妓もよく枝豆に手をやつた。

眞暗い空が次第に白くなつて、花火の火の玉が空に燒き付いたやうになり、星が三つ四つ薄ぼんやりと見えそめた。花火の中では、登り大龍と云ふのが雄大であつた。大きな龍のやうな二筋三筋の火が悠々と空に登ると共に、頭の先がぐるりと下に曲り、そして又あがつて、それから消えて行つた。十時に近くなつた。花火も終りかけたので、もやひを解いて船を返した。提燈の火は川一杯に亂れて見えた。船頭の爭ふ聲も聞えた。そして、岸へ着いて、一行で車を日本橋の方へと駈けさしたが、ふと見ると、『滿開の木菊花壇』と云ふ花火が鮮かに揚つてゐた。私の車は博士の車の背後にゐた。

巴里の娘

小野賢一郎

それは巴里見物に疲れた日の夕暮であつた。
オペラも寄席も酒場も何も彼も一切の欲を去つて、けふは一人夕飯を食べ、ひとり散歩し、ひとり宿に籠つて靜かに巴里のひと夜を送らうと思つた日の夕方のことであつた。
ホテル、サン、ジャムに宿つてゐながら一度もソコの食事をしたことがなかつた。言葉が通じなくとも一人でやれるだらうと思つて、ホテル、ミラボーの一室でT氏から赤、白の葡萄酒、ブランデーなどのフランス名を教はつて紙片にかきつけた。食事はメニウを見てもドウセ分らないが、そこは人の氣ごゝろを讀むのに敏いフランス人のことだから、何とかなるであらうと宿へかへるなり食堂に出たのであつた。
怪しげな發音でも通じたのか葡萄の美酒が卓子の上にをかれた。埃がかゝつたまゝ出すのが此國の習慣で、斯くの如く古く醸された酒であるといふことが酒を賣る人の誇であり又呑む人の誇である。この夜の卓子にも埃を被つた瓶が瓶を支える組み物の舟に斜にのせられて滴らぬやうに靜かに置かれたのであつた。
しづかに瓶のまゝ酒をつぐ。琥珀色の酒は持もせずにグラスに滿つる、舌の苔は先刻洗つておいたから美酒の味を素直に受ける、舌は滑かに歡ぶ、氣も心も和む——一本の瓶を空しうして又一本を命じた。給仕人は私の顏色を窺ふやうにして今度は小さな瓶を埃のまゝ持つてきた。かうも多量の酒を飲むフランス人はゐないのであらうか、食事の時に——然し私はそんな事を遠慮してゐる閑はなかつた。おいしい酒は私の舌が歡びに醉ふて吸ひ盡した。
ホテルの裏はループルの博物館に近く、あの彫刻ばかりの公園、それから子供が玩具のヨットを飛ばしてゐる池のほとり、そゞろ歩きするには恰好のところである。私はいゝ氣持でどこをどう歩かうといふでなく、彫刻の立つてゐるあたりを逍遥した。

いづれも夕餉の後と見へて犬をつれて散歩する人が多かつた。私は犬が好きだから人の後に前に犬の影が見へるとすぐ近づいた。コリーの目ざむるばかりいゝのが通つてゐるから立止つて見てゐると老人が近づいて來て英語まぢりのフランス語で話しかけた。『自分のコリーはカラーが殊に美くしいので評判であるムシウは如何に思ひなすか』といふ意味に聞きとれた。私ははいゝ實に美くしいといふ意味で答へたつもりだつた、老人は得意さうに『左様ならムシウ』と件のコリーを曳き去つた。

また一人の年増婦人が可愛いゝテリヤを伴れて來た。ふら〳〵と又私はそれの方に足が向いた。テリヤは私の靴の先を嗅いで急ぎ足に歩き出した。婦人はニヤリと笑つて行き過ぎた。

青い芝は濡れてゐた。公園の芝の上に水を撒く美くしさを私は見たことがある、ゴムの管が蛇の這ふやうに芝の上に置かれると管のそこゝから噴水のやうに水が吹きあげられる、その水は青い芝の上に霧のやうに降る、太陽が眩い位照つてゐると共霧に七彩の虹が湧く――その美くしい珠の雫が此青芝を濡らしてゐるのであらう、日は暮れなんとして暮れかねてゐる夕間暮、美酒の醉まだ醒めがての、私の足はそゞろに芝の色を戀ひ歩いた。

公園を出てマロニエの花が散りかけてゐるシアンゼリゼーの方へ志したのは夫れから間もなくであつた。往來は散策の人ばかりで、街路樹の蔭にはモウ夜がしめやかに忍び寄つてゐた。

私はホテルの裏口になつてゐる通りを、左に公園の柵を見つゝ歩いた。急ぐともなく急がぬともなく――一丁も來た頃不圖私と同じ位の足並で歩いてゐる婦人を見かけた。いつたい私は歩くのは下手な方でスカートを切つてスッ〳〵と急ぎ足にゆく西洋の婦人には及びもつかない、十歩もせぬうちに後れてしまふのがいつもの事である。この婦人が私の目についたといふのは珍らしく急ぎ足でなく私と同じ位の早さに歩みを運ぶからであつた。その婦人は二十歳になるかならぬかと思はれる年頃であつた。巴里の娘、巴里の女とし言へば男に媚びるもののやうに見做されてならぬ私の目にも、此娘は何か職業をもつてゐて卑しい行ひをしないといふことが讀とれた。何故かといふに此娘の服装は巴里の色彩にそぐはぬ黒味がちの服を着てゐた。此娘の靴にはぴか〳〵と光る艶がなかつた。踵も今花やかな街に見る女のやうに高くなかつた。――巴里に來て日の淺い私にも之れだけのことは看て取ることが出來たのである。

辻に出て私は立とまつた、左せんか、オペラの通りに來る、右せんか、遠く凱旋門の通りに出られるのであらう――もう夜の帳は地べたに下りて來た、どちらの道を執らうかと思つて立

ち佇つた。すると聲をかけるものがあつた、見ると此娘であつた。下手な英語を交へて『ムシウは道が分らないのではないか、失禮だが……』といふ意味らしかつた。私は否といつた、散歩してゐる、どつちへ行つたら面白いかと迷つてゐると答へた。娘は『失禮しました』と笑つて『ムシウはアメリカ人か』と問いた。私はたぢろいだ、是まで馬來半島では黒ン坊と英國人の混血兒である王樣に似てゐると言はれ、埃及では土耳古帽がよく似ると笑はれたのに、アメリカ人か、とは意外の鑑定である。

私は笑つた。否、日本人だ、夜だから分らないでせうが――といつたつもりだつたが、娘はドウとつたのか、アメリカ人だと言はれたのを私が不快に思つたとでもとつたのか。

『ジャポネー、おゝジャポネー』と幾度もくりかへして、私と御同樣な斷片的の英語をまぜて日本人はいゝと言つた。そしてはフランス語を早口に話す――その時は二人とも歩くとはなしに歩いてゐた。

クレマンソー。ウキルソン。サイオンジ。何だか私に分らぬ人の名を幾つも交へて話した。分らぬながら言葉の意味を酌みとると斯うである。

『クレマンソーを私どもは神樣だと思つてゐる、フランスの救ひ主である。ウキルソンは何と思ふか、ムシウ。私は好かない、彼はフランスに不利益な或物を與へた』

『アメリカの人かと言つたことを許せ。私は巴里にアメリカの人が多いから、さうかと思つた』

『日本の全權大使サイオンジの名を知つてゐる』

私はどこにゆかうといふアテもなくなつたが、人なつこく此黄色い日本人を捉へて話してくれる巴里娘のあることが嬉しく、も少し話してゐたいやうな氣持になつた。『私はタクシーでボア公園へゆかうと思ふ。そなたは散歩せぬか』と言つた、娘は『私は自働車が甚だ好きである、乘せて下さい』と答へた。

前日T氏につれられて雨あがりのボア公園を飽きるほど自働車で見て廻つたことが心にこびりついてゐる。大森林の公園、平坦な道は青葉若葉の蔭をうねり〳〵突ぬけてゐる、池にはボートが浮いてゐる、巴里へ來て先づ此森林の美くしさと廣さと大きさに驚いたのであつた。巴里の一角が此森林に圍まれてゐるといふことに於て。

『けふは何處を見物したか』と娘は私に問いた。私はタクシーでベルサイユ宮殿を見にいつたと答へた。

おゝ、ベルサイユ、ベルサイユには私の妹がゐる――』と娘はいつた、それから何か切りに話すけれども、私には通じなかつた。夜の公園は黄昏ほどの人通りはないが、冷々する風に外

套がほしい位でさつきの美酒の醉ひもこゝではもう醒めてゐたのであつた。

娘は切りに私へ話しかけたが私には分らない。もどかしさうに彼女が焦れば焦るほど分らない、私にフランスの滑らかな言葉が通じやう譯がない、私は困つて了つた。

『ホテル、ミラボーに來てはドウです。私の友人がゐる、私の友人はフランス語を話す。そしたらそなたの話も分るであらう』斯う私がいふと彼女も喜んで『日本人と初めて言葉を交したことは嬉しい、私はムシウの友人に會ひたいと思ふ。』と承諾した。

ミラボーの應接間に彼女を待たして置いて私は友人K氏の室を叩いた。そして斯樣な婦人を同行してゐる、何者か分らぬが失禮なことがあつてはイケない、話してみてはくれまいか、と賴んだ。

電燈の花やかな下で三人圓になつて話した。彼女は明るくなつたので始めて晴れ〲しく笑つた。そして雄辯にフランス言葉で話した。

タクシーの上でベルサイユに妹がゐるといつたのに就ては斯ういつた。

『私の兄は今度の戰爭で死にました。私の妹は六ツになる。兄が今まで養つてゐたけれども戰死したので、今はベルサイユの親戚に預けてあります。』彼女の指輪には死んだ兄なる人の寫眞が嵌めこんであつた。彼女は私どもに見せて兄の寫眞に接吻した。

『私は巴里の或る裁縫店に毎日通つてゐますが妹の身の上が案じられてなりません、今も妹のことを想ひ〲歩いてゐたのでした――』とも言つた。

『フランス人はウヰルソンの遣り口について飽き足らず思つてゐます。日本もフランスと同じ立場ではありませんか』とも言つた。K氏は其考へ方は間違つてゐると言つて聞かせたが、彼女はなか〲聞き入れなかつた。どこまでもウヰルソンはフランスの要求通りに盡力してくれないと言ひ張つてゐた。

私は之れを面白いことに聞いてゐた。フランス人は此度の戰爭、今度の講和談判に對して必死となつてゐる。こんな娘まで政治問題を咀嚼して間違ひなりにも自分の意見をもつてゐる。そしてどこまでもフランスの幸福を冀つてゐる、フランス人は一生懸命になつてゐる、血眼になつてゐるといふことが此二十歲ばかりの娘の言葉、顏色から窺ひ得られるのは頗に興味ある事柄である。

三十分間も話してゐたらう。娘の下宿してゐるのはルーブル博物館の裏で私のホテルの近所だといふ。さらば近づきや

ることにして此處を出た。丁度出たころでタクシーを見つけた。『私は自働車が好きです』といつた娘の言葉を思ひ出して、好きな自働車で送つてやらうと氣がついたからであつた。

自働車の上で彼女は快活に笑つた。『よい晩でした』と喜ばしさうであつた。

『私は一日に七法(フラン)しか稼がない――』こんな事をいふ時には心細さうであつた。

『妹の誕生日に何を贈物しやうかと樂しんでゐる』と妹おもひの姉らしさを目色に現はして言つた。

娘の下宿といふのは小さなホテルであつた。その門口で私は握手して別れた。別れる時に聊かであつたが私は紙幣を彼女に贈つた、彼女は怪訝さうに私の顏を見た。

私は言つた。『あなたの妹さんの誕生日に私からの贈物です。小さな靴でも買つておやんなさい……』

彼女は自働車の窓口まで來て私の名を聞かせてくれ妹を喜ばせるからと言つた。

『無名の日本人といつて下さい……』

タクシーは動き出した。

（一九・六・九・太西洋航海中セレベス丸にて）



會遊山水の涼趣

北米の獨木舟生活

田村松魚

市俄古から乘り更へて、西北の原野を數時間走つて行くと、汽車はインデアナ州へ這入つて行く。さうして首都インデアナポリスのモニユメントの女神像が遙かに雲の中に見えて來る。

首都の郊外を「ホワイトリヴア」と云ふ河が流れてゐる。私達はそれを「白河」と呼んでゐた。河畔の平野と丘陵とは古ながらの俤を殘してゐて、白樺や「シカモア」の森が黑い影を緩やかな流の中に浸してゐる。インデアンが鳥の毛の冠を冠つて出て來さうな小さな小家が偶に森蔭から見えたりする。斯うした荒廢した儘の平野と丘陵とが夏になると自然の公園となつて、其所に「リヴアサイドパーク」と呼ばれるサンマープレースが開かれるのである。夏の數ケ月を都會の人達は此河に遊び暮らす。公園には有らゆる遊戲場があつて、一時に花の咲いたやうな歡樂が晝夜となく續くのである。

其頃私は首都から僅か離れたブルミントンといふ田舍町にある州立大學にゐた。夏中休暇が來たので、次の學期の學費を得べく勞働くことを考へてゐた。丁度他の大學にゐた二人の友人が、「リヴアサイドパーク」に遊戲場を開く計劃をしたから、私にも仲間の一人にならないかといふ手紙が來た。私は直ぐにそれに應じた。

私達の最初の計劃は大弓場を開くことだつた。市俄古から十張程の大弓を取寄せた。九谷燒の珈琲セツト、岐阜提灯、寄木細工や麥藁細工の手箱、不倒翁のやうな滑稽な玩具などをゴチヤ／＼棚の上に並べてそれを當りの懸賞にする工夫にした。

店頭に鯨幕を張つたり日章旗を叉に掛けたり、客を招ぶ趣向も大概出來た。客はゾロ／＼推しかけて來た。併し、大弓の勝手が客に分らぬので、說明をしたり、練習させたりするのに骨が折れて割合に此の計劃は當らなかつた。それで別に「球投げ」の店を出した。すると此の方が意外に客の賞讚を博し、見は中

々繁昌して來た。

私達は、最初小さなホテルに住んでゐた。併し、それでは餘り費用が高むし、興味もなかつた。それで、私達は市の人が誰でもやつてゐる天幕生活をすることに相談した。

ホワイトリヴアの河畔の公園に近間の場所にはヅラリと天幕が張られてゐる。圓錐形の白い木綿の家根が木立の中に隠れこゐるのもあり、水の際へ張り出されてゐるのもあり、其所にも此所にも天幕生活の妙な家族の群が住んでゐる。彼等は一家を挙げて暑を此の河畔に避けてゐるのである。

私達は成るべく公園に近い方へ場所を見つけやうと思つた。併し、公園に近い好い場所は彼等が総て占領してゐるのである。私達は、もつと靜かで、もつと好い場所を選定するには幾分か河上の方へ遡つて行かねばならなかつた。で、天幕生活の群から大分離れた一つの森――私達が「シカモア、ウッド」と呼んだ森に天幕を張ることにした。其所には一本の素敵に高いシカモアの樹が榮えてゐた。コロンバスが此の國を發見したことも、此の木にはまだ新らしい記憶であると思はれる程年を經た喬木だつた。その楓に似たやうな形の軟らかな緑色の葉は高い大空を拔いて日光を遮つてゐた。滑らかに灰色をした幹の肌は風にも雨にも朽ちることを知らぬやうに、まるで、今生へた若木のやうな清新な氣持だつた。

「斯んなに古い喬木でゐて、何んとマア若い氣持のする樹だらう。」と私は他の友人に話した位だつた。此の木が皆に氣に入つたので其根方から水際に近く天幕を張つたのである。さうして、私達は一挺づゝ手斧を提げ、森の雜木を切り倒して二台の寢臺を天幕の中に作つた。寢臺の四ツの脚は青苔の蒸した地べたの中へ荒木の儘ゝで、力任かせにドン／＼と打ち込んだやうな、そんな無雜作なものだつたが、天幕の中の装飾には出來る丈け贅澤をした。私達は、彼等には時代遅れになつた面白い意匠の布片を古道具屋から澤山買ひ込んで來て、これを旨い工合に装飾づけた。テントの入口の扉になる布片には古代埃及の模様を銀絲で織り出したものなどを用ひたりした。枕の掩には少し汚れてゐたけれども、紺の刺繍の花やかなものなどが掩はれたりした。何とも云へぬ古雅な匂ひが其所等一帶に漂ふやうな氣分になつた。それから私達は、唐紙を交る／＼しては、炊事場を建てた。私達は日本の食料品を市俄古から取り寄せた。醤油も一樽あるし、日本酒も幾壜かあつた。私達は久方振りで日本飯を炊いて米の味や醤油の味に故國を思ひ出した。

斯んな風に萬事が整頓したけれども、私達は所有た中に、一番必要なものが一つ缺けてゐた。殆んど水上生活と同じやうな

河畔の天幕生活にはどうしても無くてはならないもの——何處の天幕でも少なくとも一個は持つてゐるもの——それが無くては我々の此の天幕生活も意味を爲さなかつた。それ程必要なものが準備されないと云ふことは私達に取つては心細いことだつた。「どうしても、獨木刳舟(カヌー)が一艘必要だ」

三人の腦は此の欲求で一杯になつた。とう／＼私達は一週間の店の利益を投じて中古の獨木刳舟を一艘買ひ入れた。三人はそれを漕いで天幕に歸つた。三人は水際に繋いだ舟を撫でたり叩いたりした。店傭つてある二人の若い女に任かしたなりで、三人は獨木舟の爲に有頂天になつてしまつた。

舟は私達三人の共有的な戀人だつた。三人は同じ熱度でそれを酷愛した。舟は我々の愛を素直に受けて居るやうに見えた。そのセピア色に塗つた、灣曲したキールが青い水の底に浸りながら透き通つてゐた。さうして、グレーハウンド胸のやうに、助骨のカーヴを持つた舟の胴がヒタ／＼と小波に打れてゐた。舟は生命のあるもののやうに私達には見えた。

私達はその舟の命名式を擧げた。舟の名は「さくら」と命けた。

その夕方から私達は天幕に居ることも、店に居ることも嫌ひ出した。併し私達には職業があつた。それで店番を交代にしては「さくら」を乘り廻した。彼に妙な工合に擢を當てがつて、僅かなコツによつて操る練習が私達には此上もなく面白かつた。呼吸が直ぐに分つて來た。舟は意の儘に走り出した。天幕から店へ通ふ時、店から夜更けて歸つて來る時、私達はその「さくら」の輕快な乘をほゝえまずには居られなかつた。

一夏一杯の間、私達の水上生活はこの「さくら」によつていろ／＼なローマンスを作つた。

店を仕舞つた後、私達は時々店の女を舟に乘せて遊んだ。私達の店に傭つた女は何れも美しかつた。美しいといふことが第一の條件で傭入れた。私達、青春の血は金錢よりも美しい女を好いた。餘分の給金を拂つて美人々々と撰り拔いては傭つた。彼女等は私達を好いた。喜んで舟に乘つた。或時はマガレットが來た。或晩はブランチが來た。或時はパールが來た。一緒に乘つて乘り切れぬ時もあつた。彼女等は自由な生活をしてゐた。私達は異邦の學生で、放浪の旅から旅を歩いた果、暫らくインデアナの學窓に脚を止めてゐるのである。私達の自由は彼女等よりもより以上であつた。

舟の胴の横木に腰かけたり、擢を操つたりしてゐる女達は、夜目には特に美しかつた。女優のやうだ、女詩人のやうだと私達は褒めそやした。彼女等はそれを喜び受けて騷ぎ廻つた。

ゝがホヰットマンの「オ、キャプテン、マイ、キャプテン」の暗誦をやつたりした。女達が其頃流行つた「バンブー、トリー」を合唱したりした。水は渺々と兩岸に溢れる位、底深くイルミネーションの光彩を浸して波と一緒に搖曳してゐた。遠くの舞踏場から緩い調子の音樂が聞えて來て、女達はそれにまた調子を合はせたりした。舟は流を行つたり來たりした。岸から岸へと樹々の梢が鈍い線を劃し、空の青さの線內には高く月が浮でゐた。月は夜の空氣に呼吸しながら銀の光を水の上に溶き流してゐた。

夜は更けても更けても舟は何處からか忽然と現はれて來た。不意に我々の舟を掠めて去るのもあつた。楊柳の木の陰へ乘り入れて姿を陰してしまふのもあつた。

私語の聲、キスの音などがその薄暗い水の上かち聞えたりした。彼等は刹那の歡樂を追つて波から波へと漂ひあるいた。私達もまた全くさうした興味に唆られてふわ〳〵してゐたのであつた。

私達は天幕に歸つて來ても、夜明け頃まで起きてゐた。女達に、いろ〳〵お酒をのませたり、日本料理をこしらへて食べさせたりした。或者はマンドリンを抱えて椅子に倚つた。或者は寢臺の上に寢そべつてゐた。或男は或る女と一緒に、酒と食物をのせてまた舟に乘つて何處かへ出かけて行つた。その兩人づれの舟は殘つてゐるものから揄揶はれたり、拍手されたりした。女の笑聲が水から甲高に響いて來た。

大幕の中にはランプが瞬いてゐる。夜の濕潤を吸ひ込んだ幕は夜と明け方との界目の空氣を冷々とさせて、醉から眠りに落ちる男と女達をシーツの中に包み込んだ。さうして黎明が河の上の方から霧と一緒に開け放れて來ると、其所には舟の中に誰かど誰かと一緒に紅や緑や黄のストライプのある布片を身體に捲き附けて寢込んでゐるのが見るのである。私はさういふ時に我々の生活の餘りボヘミアン的なのに驚くことさへあつた。

私達の生活はアダムとイヴのやうた素裸な生活だつた。太陽の光の燦々と輝き出す頃には、各自に河の中に飛び込んだ。小寒むさうに寢卷のピンク色を風に吹かせて立つて居た女達も、男に負けずに水に躍り込んだ。私達から距離を置いた天幕の方でも矢張り同じやうな解放された朝の水浴が始つてゐた。けれども、私達の一組のやうな、そんな大膽な自由はなかつた。私達は全く自由の子だつた。

十二時近くまでに私達はいろ〳〵な事をして遊んだ。朝の簡單な料理が出來て、荒木を組み合せた卓上で朝餐を終ると或者は釣魚を始めた。大きな鱒が容易く鈎に引つかかつて來た。或者

はまた獨木刳舟に乘つて他の天幕を訪問したりした。私はスケツチブツクを提げて其所等を寫生したりした。拙づい繪が拙いなりに面白く出來ることがあると、それを天幕へピンで挿したりした。

斯うして正午近くなると、また飮んだり食つたりした。さうして女達を乘せて店へ行くものは店へ行つた。私には店の責任が少なかつた。大概キヤヌーに乘つて釣魚をしたり、讀書したりした。獨木刳舟は私に取つて唯一の戀人だつた。

暑中休暇が終る頃になつた。リヴアサイド公園にも人の影が少なくなつた。私達の天幕は取り去られた。獨木刳舟は乘賣りに賣つてしまつた。私達の夢のやうな歡樂は夏と一緒に消えて行つた。容易な勞力によつて得た金錢は容易に消費された。私達に多くの快樂を與へてくれた女達は、私達から多くの金錢を持ち去つた。次のタームの學費さへも私達は手元に殘りはしなかつた。併し我々の「白河」は私達に水上生活の樂しい印象を殘してくれたのだつた。

吉野川の溪間

田中貢太郎

二箇年の間溪川の音を聞いて暮らした。それは四國三郎と呼ばれた吉野川の溪間であつた。吉野川は土佐の吾川郡にその源を發して、德島で海に入つてゐる。全長五十餘里。土佐の間だけでも十八里ある。其所は川口と云ふ土佐長岡郡の北部の地で、四國脊梁山脈の餘脈になつた高い峰が兩岸に攢り立つて、青い空は、流れの上でないと見られなかつた。丁度藥研の底のやうになつた所で、私のゐた部落の人家は川の北岸にあつた。立川川と云ふ可成の溪川が、その裾で本流に合してゐた。其所はもと藩主が參覲の街道筋となつてゐた。部落に一軒しかない、立川川に臨んだ宿屋の隣に、その行列の晝食をした御殿跡と云ふ空地があつた。立川川の溪間を三里ばかり行くと、立川の部落が來る。其所から有名な笹ケ峰を越すと、伊豫の馬立

に行く事が出來る。笹ケ峰は標高五千尺、頂上には熊笹が生ひ茂つて、馬立へくだる十八町の路は、俗に腹庖丁（はらばうてう）と云ふ難路で、參覲の供をした老人から好く笹ケ峰庖丁と云ふ詞を聞かされたものだ。藩主山内容堂の詩に、『雨來覓水水生レ聲。山路何違術留石。（ノ）（ヽ）欲レ窮猶（ノ）（ヽ）。徐々跑攬二白雲一行。』と云ふのがある。この路は、奈良平安朝時代に開通したもので、延喜式にも『土佐國驛馬頭驛五椅丹治川各五疋云々』とある。丹治川の立川であるのは云ふまでもない。

私は川口で小學校の教員をしてゐた。その學校は部落の人家の上になつた、傾斜の激しい山の腰にあつた。小さな平家建の學校で、教員は校長と私との二人であつた。休憩の時間などに、體操場の柵に凭れて見ると、吉野川の流れは直く眼の下にあつて、水の澄んだ時には、川底の小石まで數へられる。其所から下手の方へ眼をやると、立川川の吉野川に落ち込んでゐる瀬があつて、大きな巖の群が水の中に横はつてゐる。巖にぶつつかる水の音が、何時も波の音のやうに聞えてゐる。初夏の頃は、その邊の巖の上で河鹿が朗らかに鳴いた。瀬の前斜に樹木の鬱蒼と茂つた日浦ケ峰と云ふのが聳えて、その頂の杉の梢から秋の月が昇つた。川の上手の學校の門の下になつた方を見ると、渡船場があつて、手前の方は畑地の畝りの爲めに隠れて見えないが、前岸の方は見えて、渡船が著いたり、引返したりする。船には馬が乗つてゐる事もある。其所には一軒の農家があつた。その渡船は水の減つた時には、猿渡しにしてあつた。川の中に大綱を張つて、それに船から出した環をとほし、別に小さな綱をおいて、それを船の中から手繰つて兩岸を往來する仕掛けである。水蒸氣の多いその土地では、春から秋にかけて、天氣の好い日には屹と朝霧がかかつた。朝でも猿渡しの綱を手繰つて渡つてゐると、中流あたりで風が出て、四邊を罩めてゐた霧が切れ切れになり、それが漂ひかけた所へ、綺麗な朝陽がぱつと射して來る。

その渡船の船頭は南の村から來てゐた。肥つた老人で、冬の朝などは、渡頭の大きな巖の下で焼火をしてゐた。その船頭は、その部落の爲めには村長よりも重要な仕事をしてゐた。その部落では、麥や粟稗などの雜穀はあつたが、田がすくないので、米は足りなかつた。で、その米をはじめ、鹽、石油、反物、煙草、その他生活に必要な物品は、全部その渡船に賴つて輸入せられた。それには、その土地から行く駄賃馬が、その渡船を渡り、きつい山坂を一里ばかりも行つて、國道に沿うた小驛から運ばねばならなかつた。今はその小驛に行くに平坦な新道が出來、又川下一里の所に國道と連絡した橋が出來て、立川川の彼

方まで郵道が通じてゐるから 物資の缺乏する事もすくなくなつたらしいが、その當時はすこし雨が降ると、直ぐ出水して川が止まり、米も石油もなくなつた。その日雇ひの郵便配達は、峠の上から水色を見て、渡船が通つてゐるにも係はらず引返した。川支へと云ふ附箋の五六枚も附いた數日間の郵便物が、何時も一所になつて配達せられた。

其所では雨ほど厄介な物はなかつた、私は二箇年ゐる間に、氾濫した水が、川緣の雜木林を吞み、桑畑を吞み、芋畑を吞み盡して、凄じい勢で山腹を見かけて突進して來た光景を三度ばかり見せられた。水の上には大きな材木が矢を射るやうに流れくだつてゐた。出水の前後には、かげらふのやうな蟲が夥く洋燈の火に飛んで來た。それはセイタと云ふ蜉の形をした小さな蟲の蛾になつたもので、河中の石に附著して生息してゐた。私等はそれで魚を釣つた。私の許へ夜々漢文を教はりに來た少年は、それを見ると、

『セイタがあがつて來た。又水が出る。』

又、その土地に雨が降らなくても、川上の方に降ると、突如として出水した。夏のある日、隣に住む醫師の家へ遊びに行つてゐると、醫師は軒越に前岸の峰をすれすれに川上の方へ飛んでゐる灰色の雲に眼をつけて、

『先生、こゝは降らいでも、こち雲が上へ上へと行く時には、奥は大雨ですぜよ。』

その夕方、夕飯を終つた所で、河原の方で『水ぢや、』『水ぢや、』と云ふ者がある。不思議に思ふて庭先へ出てみると、今まで乾あがつて赤い斜陽の射してゐた河原の礫が、滔々と流れる濁流の底になつてゐた。

前に吉野川の本流があり、下手に立川川があり、上手の方に繞山谷と云ふ溪川を控へたその土地では、出水かあると孤島のやうになつて、他部落との交通がぱつたり止まつた。それが爲めに夕立もで來ると、學校では授業中でも直ぐ生徒を歸した。若し歸さないで置かうものなら、谷々に水が出て、子供が徒渉して來た石は水の底になる。そんな時には、小さな子供を持つた父兄達は、簑笠を著て學校へやつて來た。

『先生、俺(おる)んくの子供にお暇をやつてくれ。』

そして、一人一人我が子や弟を連れて歸つて行くさまは、寺小屋の芝居に見るやうな光景があつた。懶け者の私は、後にはその夕立の來る事を待つたものだ。

出水でなくとも同地の父兄達の子供の爲めに恐れるのは、水であつた。又實際、學校に往來する生徒は夥く水に落ちた。私も體操の時間に生徒を連れて、立川川に架けた一枚板の假橋を

通つてゐて生徒の一人を水の中に落した事がある。私は驚いて、そのまゝ水の中へ飛び込んで行つて、瀬の巖に流れかゝつてゐるのを引上げたものだ。その時分、すこし白痴性を帶びた入學して間もない春樹と云ふ少年があつた。それは私の受け持ちでなかつたが、私の所で、生徒から貰つた虎杖をバケツに漬けて椽側へ置いてあると、その少年が學校の歸りにそつと持つて行つたので、それから私の記憶に殘つてゐた。瞼のただれた口の開いた少年であつた。その少年が學校からの歸りに立川川に落ちた。

『春樹が溪を泳いで行たが、しやり面白かつたぜや、』

春樹と一所に歸つてゐた隣の生徒が、歸つて家の者に云つたので、大騒ぎとなつて探してみると、少年はもう死體となつて淵の巖にひつかゝつてゐた。

雪も可成降つたが、主に暖な國であるから、ね雪になる程は降らなかつた。その雪が降つたり消えたりしてゐる内に、段だらの山畑に麥が青み、肥料草山に蕨が萌えて、春がやゝ深くなると三椏(みつまた)畑の三椏の枝に黄ろな花をつける。山櫻もぼつぼつあつたが、溪間の色彩にはならなかつた。暖かな雨がやつて來る。その雨の中では雉子が鳴いた。雨が晴れて出揃ふた麥の穗が微熱を帶びた風に揺れ出すと、吉野川の川縁は、一面に紫色の躑躅の花に包まれる。その時分村では、蠶に忙殺せられる。畑には麻が延び、馬鈴薯に白い花が咲き、里芋の葉が領付き、玉蜀黍の背が高くなつて、麥が刈られるやうになる。麥と里芋と蜀黍とは、その土地では主要な食料であつた。その前後から若鮎が瀬を登つて來る。吉野川の魚では、鮎の他に、鰍、鮠、雨魚、きぎう。鰻は別けて味が好かつた。落鮎は川に網を張つて取つた。別子あたりの工夫が賣りに來る鑛山用のダイナマイトを買つて、それを淵に入れて漁をする亂暴者もあつた。

繭が煮られ、玉蜀黍の坊子に赤い毛が垂れ、麻が刈られるやうになる。胡瓜や茄子の花は、その中で眼をぱちくりやつてゐる。日中は燃えるやうに暑いが、日が暮れると晩秋のやうに涼しい。蚊帳も釣つだが、蚊はそんなに煩さくはない。瀬の鳴る音に交つて、蟲の聲が雨の降るやうに聞えて來る。すゐつちよが壁へ來て長い髯を動かして鳴く。芋の葉の露に射す月の光が冴えて來る。陰暦のお盆が來ると、學校から上になつたヒヂヤ河原と云ふ所で施餓鬼がある。附近の若衆が各自に持つて來た麻殻を束ねて、直徑六七尺もある環を作り、それに十文字の骨木を入れ、束の周圍に笹の付いた青竹を立て、それに繩を張つて、火の點いた酸漿挑燈をつける。出來あがると、集つて來た

村の人は男も女も娘も子供も、手にした洗米を投げて南無阿彌陀佛を口々に唱へる。七八人の若衆がそれに乘つて水棹を張る。施餓鬼舟は水際を離れて中流に出て下へ下へと流れ出す。提灯の火が赤く動く。若衆の一人が唱ひ出す。聲が兩方の山に木魂をかへす。一人が濟むと、別の一人が歌ひ出す。施餓鬼舟は間斷なしに流れくだる。皆の歌が終つた時分に、施餓鬼舟は立川川の口にある大瀬に近くなつた。村の人は施餓鬼舟に從いて、川緣を下へ下へと行く。大瀬の巖に當ると施餓鬼舟は碎ける事になつてゐるので、乘つてゐる者は、用意してゐる小舟に乘り移る。同時に施餓鬼舟は大瀬に入つたのか、挑燈が激しく搖れたが、間もなく火がばたばたと消えた。

『これで、來年まで河流れをする人がない。』と、私の傍を歩いてゐた老婆が云つた。

溪間の色彩が黄濁色に變つて、石高路の通りの上に赤い蜻蛉がついついと飛ぶ。實をもがれた玉蜀黍の葉が飴色をした風にさざざと鳴り、里芋が掘り取られる。畑には大根や蕪の葉が妙に人眼をひく。三椏の刈られる期節になる。三椏は唯一の財産になる。金のすくない同地方では、子供の學校用品まで商人の店から取つて置き、三椏が出來ると、それを商人の手に渡して差引の勘定をする。性質の悪いのは、散々買ひがかりをして置いて、三椏が出來ると、他の商人の手に賣つてしまふ。村で物言ひ事の起るのは三椏の時である。

三椏は五六尺に切り揃へた枝を大釜に入れて蒸し、綺麗にその皮を剝がして後に、河原に浸して澁皮を除け、それから洒らして市場へと送る。皮を剝く頃から溪間に時雨が來る。河原で澁皮を取つてゐると霙が降つて通る。三椏の時分、若い男が女の家の傍へ行つて、その寢るのを待つとする。女の家では蒸した三椏を入口へ置いて、悠々と皮を剝く。待ちかねた若い男は、暗い方から這ひ出して行つて、その三椏を二本三本と拔き取つて、それを崖の下へ捨てる。若い男に捨てられたと知らぬ家の人は、思つたより早く三椏の仕事が終つたのを喜んでもう寢やうとする。『よつぽと有ると思ふちよつたが、存外早うすんだ。』と、爺親は平和な顔をして、女房や娘の方を見る。

部落部落では氏神の祭が行はれる。溪間の村がざはめき立つ。寒い風が吹き、凍雲が飛び、霙が雪に變る。軒には寄龍力のやうな長い氷柱が垂れる。村の人は日夜圍爐裏の傍に坐る。吉野川の水が鼠色に見える。——これが、溪間の村に於ける四季の變遷だ。

一箇年間の私の生活は、呑氣な自由の生活であつた。口やか

ましい郡視學は年に一度來るか來ないかであるし、頭を押へる筈の校長は無害の長者であつたし、私はその時ほど幸福であつた事はなかつた。

私は其所で、行李に入れた貧弱な藏書の中から氣に入つた書を引き出して讀み、文を作り、酒を飲んだ。酒を飲むことは、飲酒の習慣の深い土地の人々と理解を深くする媒となつた。醉餘の狂態は微笑を持つて受け納れられた。晝飯の時、教員室で校長と二人で飲み出した酒に興が湧いて、生徒を忘れてしまつた事もあつた。正月、天長節、證書授與式などには、土地の人々は、各自に酒と肴とを持つて學校に集まり、校長と私とを主賓にして酒を飲んだ。その當時の日記の一節を引いてみやう。

『元日―山村に來りしより二度目の正月を迎ふ。兩度とも淋しき正月也。初めは農家の隱居所に迎へ、今度は學校の一室に迎ふ。共に餅も搗かず、屠蘇は年玉に貰ひたる濁酒にて濟ます。

學校の式は、正午よりはじむ。空には凍雲、ちぎれ〳〵に飛びて、吹く風氷の如し。來賓は在郷軍人五六人也。白色桐葉章をつけたるもあれば、從軍徽章をつけたるもあり。生徒は男女合せて百二十餘人也。唱歌のなき學校なれば、式は簡單也。一時に至りて終る。

式終る頃、來賓は二十餘人となる。各々重箱と德利を携へたり。新年宴會の料也。生徒の歸りたる後にて、式場を宴會場に直す。校長と我とは宴會場の主賓也。

宴會に移る。酒の燗には生徒用の大釜を用ゆ。重箱開かる。豆腐の煮しめあり、大根の鱠あり、鰊の煮浸あり。里芋あり、鹽鯖の酢あり。皆、小皿三つ四つと盃二つ三つを用意す。我等二人に肴挾み、酒を勸むる爲め也。酒の多くは濁酒なれど、村人の眞心あらはれて嬉し。

夕方に至りて終る。それより六七人にて、萬屋に行きて飲む。この土地に一軒しかなき旅館也。我のはじめて來りし時も、此所に宿れり。春の夕暮也。ズックの鞄を前後に振り別けて、萬屋の敷居を跨ぎたる我は、二階より見る立川川の谷に對して、云ひ知らぬ寂寥を感じたる也。

亭主は顏の恐ろしき大男なれど、外見によらず親切也。呼びて共に飲む。かくして淋しき元日の夜は、寂寞として更け行く也。』

そのあたりの酒は大半は濁酒であつた。それは國道沿の小驛にある濁酒釀造店から送つて來た品であるが、その中には養老の瀧から汲んで來た物もある。溪間の村には至る所に養老の瀧があつた。溪間の村の人となつた年の秋、ある日體操の時間に、

三四年の男の生徒を連れて、學校の背後から山の上へとあがつて行つた。晴れた日で、秋風が黄ろになつた木の葉をばらばらと云はしてゐた。生徒は皆私を取り卷いて喋りながら歩いてゐた。路が折れ曲つて、今まで見えてゐた學校の屋根が見えないやうになつた所で、黒い土が岩のやうに盛りあがつてゐる所があつた。二三人の生徒は何か云ひながらその土の横手へ行つたが、やがて笑ひながら歸つて來た。

『先生、酒がありますよ、』とその一人が云つた。

私は校長から聞かされて、さうした所に酒のあるのを知つてゐたから、直ぐ傍へ行つてみた。土の横手へ洞穴のやうに穴を鑿つて、入口に藁薦を一枚垂れてあつた。

『先生、飲んでも構ひませんよ、』と、私の後から來た生徒の一人が笑つて云つた。

私は酒の味よりも好奇心に驅られてゐた。私はその藁薦を揚つて中へ入つた。四斗樽位ある桶を据ゑて、その上に大きな片口と茶碗とが載せてあつた。私はその桶の蓋をずらしてみた。中には醗酵した酒のもろみが白く一杯になつてゐた。私は茶碗を取つて、もろみの交らないやうにそれをしやくうて、一呼吸に飲んだ。二三人の生徒の顔が藁の間から見えてゐた。

さうした養老の酒は、秋口になると何處からともなく私の所へ屆いた。税務署でもこの酒の取締には、非常に困つて、毎年毎年、その時期が來ると、署員を密派して檢擧をやつてゐたが、天井の上へ造つたり山の中へ造つたりして、手近の所へ證據になるやうな物を置いてないので、どうする事も出來なかつた。で、收税吏の巧妙な者は、學校がへりの小さな子供に近付いて行つて、

『お前の家には酒がなからう、』と、みくびつたやうに云ふと、子供は釣られると知らないから、昂然として、

『あるとも、天井に一杯あるよ、』と云ふ。

收税吏はしすましたと思つて、その子供を跟けて行つて檢擧したが、併し、その手段は、親達が直ぐ知つて、子供に注意するやうになると、もう功力はなかつた。

收税吏の襲擊には、一村一地方が協力して防いでゐると思はれる所もあつた。ある時、二人連の收税吏は、家内の者が畑へ出て老婆が一人留守居をしてゐる家へ不意に踏み込んだ。其家には山の中から汲んで來た酒を小さな瓶に入れて勝手の戸棚の中へしまつてあつた。圍爐裏の傍に坐つて、麻を紡んでゐた老婆は、それと見ると勝手へ走つて行つて、その瓶を引出すや否や裏口から庭先へ飛び出て行つて、その瓶を崖下の溪へ投げおろし、そして、向ふの溪間に五六軒並んでゐる家の方へ向いて、

『收稅が來たぞ……』と云つて叫んだ。

老婆を追かけた收稅吏の一人は、老婆の口へ手をやつて云はせまいとした。老婆はその手を振り拂つて、又、收稅を口にした。

『收稅が來たぞ……』

すると、向ふの人家の方でも、老婆の云つたと同じやうに、收稅が來たぞと二三度續けて叫んだ。それは、次の溪へ警告する爲めの叫であつた。と、又奥の方でも收稅を叫ぶ聲がした。

ある所では、檢擧せられて收稅吏に封印せられると、その桶へ横から穴を穿つて、中へ醬油を注入して『酒でない、醬油である。』と云ふやうな無智な遣り方をして、檢事局へ送られた者もある。

私の知つてゐた老女の一人は、若い收稅吏が來て、密造してある奥の室を檢査しかけたので、一策を案じて、押入から懸蒲團を出して行つて『おやすみなされ、』といふと、收稅吏は顔の色を變へて逃げ出したと云ふ事であつた。

その地方に收稅吏の入り込むのは、酒の密造ばかりではなかつた。他に煙草の密植もあつた。煙草の檢擧には、煙管をくはへて煙草飲み行く人の傍へ寄つて、巻煙草の火を借りながら、その匂と火の具合とを見て、ひらき直つて詮議をした。

煙草の檢擧には、又畑へと行つた。酒の密造なれば、自分の所有地であつても、住宅より數町と云ふ規定の距離を保つてゐる物は、監視が行き屆きかねると云ふ理由から、無名の人の所業とする事が出來たが、煙草はさうは行かなかつた。で、煙草の密植者は人の氣の付かない畑を選んで植えた。出來ると急いで刈て、その株は燒いてしまつた。葉を乾すには氏神の社などでやつた。私の知つてゐた杣は、葉は旨く刈つて隱したが、刈株が畑にあつた爲めに檢擧せられた。その時、杣は私の所へ相談にやつて來た。

『先生、收稅に煙草をおさへられたが、どうしたらよかろう、』

『他にしやうがないな、諦めて罰金を出すが好い。』

『何か好い考へがあるまいか、』

『おさへられては、しやうがないぢやないか』

『さうぢやろうか、』

『諦めるさ、いろいろやつて居るから、一度位は稅金を收めても好いだらう、』

と、私が笑ふと、杣も笑つて、

『今月おさへられた時に、何人も傍に人が居らさつたけに、收稅を溪の中へほり込んで置いて、株を引いてしまふと思つた、』

ある雨の日、生徒の歸る時、一人の生徒の洋傘が無くなつ

た。評議をしてゐると、その杣の子が朝傘を持つて來ないに係はらず傘を差して歸つて行つたと云ふ者があつた。で、足の早い上級生に命じて追つかけさせると、杣の子に立川川の橋の上で追ひ付いて、その傘を取り戻して來たが、果してその傘は、無くした生徒の物であつた。所で、その日の夕方私と、校長とが旅宿へ行つて酒を飲んでゐると、その父親の杣が來たので、校長はそれに注意した。剛腹な彼は、傘は確に持たしてやつたと云つて、承知しなかつた。そして、翌日になつて私は平生のやうに學校へ行つた。小使もない學校であるから、戸がそのまゝ締つて、入口に三四人の生徒が待つてゐた。私は生徒を入れやうと思つて急いで入口の戸を明けやうとしてゐると、裏の方から杣が出て來た。

『家の子の傘があるか無いか檢べてくれ。』

私は領付いて戸を開け、土間へ入つて、傘棚の方を見た。昨日まで無かつた古ぼけた洋傘がちやんとある。

『先生、それや有るぢやないか、』と、後から來た杣が云つた。

私は直ぐ杣が非を遂げる爲めに、昨夜か今朝か、そつと持つて來て置いた物だと覺つたで、私は默つて、風呂敷包を置き、その傘を取つて開けてみた。中に張つてゐた蜘蛛の網がひろけると共に切れた。骨の付け本から一疋の油蟲が出て來た。

『君、昨日の朝、この傘を差して來る所を君は見てゐたかね、』

と聞くと、杣は澄して、

『私が差して出したよ、』

『君、この傘には蜘蛛が網を張つたり、油蟲がをつたりする、それや昨日今日差したもんぢやないよ、』

と云ふと、杣はぐつとつまつた。で、私は詞を變へて、

『君、もうこんな事に好いぢやないか。僕にまかしたらどうだ。』

杣は背の高い、頬髯のむしやむしや生へた、みるから野性を帶びてゐた。杣と私とはその時から知り合ひになつてゐた。

その杣は、その冬、雪の時分、禁じられてゐる針金わなをかけて、兎を一疋捕つて歸る所を、巡廻に來た駐在巡査に見られて、兎を押收せられた上に告發せられた。

『先生しまふたけに喩し、この兎は、罠でくゝつたと云ふても、とりあげられた。又罰金取られませうか、』杣は私の所へ來て、こんな事を云つた。

私が溪間の村にゐた時は、明治三十八年の四月から、四十年の四月にかけてであつた。昨年土佐へ歸つた時は、阿波の方から吉野川の線になつた國道を通つたが、時間がなかつたので、其所へは行く事が出來なかつたのは殘念であつた。

古新羅の山川

大町桂月

一　新羅の石斧

前の高麗の平壌や、後の高麗の開城や、百濟の扶餘や、任那の金海や、朝鮮には故都多きが中に、最も故都らしく感ぜらるゝは、新羅の慶州也。本線の大邱より輕便鐵道に乘換へて、西岳驛に下りたるは、夜の十時半にして、天に明月ありき。慶州府内の旅館へとて車を走らするに、樓閣よりも大なる古墳、纍々として相連る。墳上の老木、寒風に激して、古墳自ら語を發するかと覺ゆ。いづれも王者の陵なるべけれども、一々何王の陵たるを知るに由なし。唯新羅の前の六村時代の遺跡には相違なしとかや。

翌朝、慶州古蹟保存會陳列館を訪ふ。曲玉や、瓦や、土器や、碑や、銅佛や、石佛や、石獅子や、釉藥を施せる骨壺や、石斧や、石棺や、古新羅の昔を語る。奉德寺の古鐘、殊に偉大也。口の厚さ九寸、口徑七尺五寸、重量十二萬斤、これは大正八年より千百四十九年の前、新羅恭惠王六年の鑄造に係れるが、寺廢れて鐘のみ存する也。佛教犧牲碑は、六角の石塔にして、文字磨滅し盡したるが、唯坐れる人の首落ち、胴より鮮血迸散するかと思はるゝ樣だけ、漸く認むるを得たり。今より千四百三年の昔、法興王の時、佛教始めて新羅に入りけるに、王の舍人なる異次頓、佛教を信じたるが爲めに、罪に問はれて斬首に處せられたるが、血にはあらで、白乳迸り出でたりとかや。石斧は多く兩方を殺ぎて刄にしたるものなるが、こゝには、一方のみを殺ぎたるものを見る。案内せる大坂金太郎氏の言に、『内地にては、出雲地方より出ず』と云へり。又『曲玉は秋風嶺以北には見出されず』と云へり。石斧と曲玉とのみにても、日鮮の關係の古きを見る也。

二　曲水の跡

南に汶川の土橋を渡り、二三町にして右の松林に入れば、土墻に圍まれて、五墳相接す。いづれも草を帶びたる土饅頭也。南端の最も大なるは、新羅の始祖朴赫居世の墓なりと稱せらる。

その妃閼英、第二世南解王、第三世儒理王、第五世婆々王の墓もこゝにありとのみにて、いづれをそれと判すべからざるも憐れ也。

なほ南を指して行くに、今日は慶州府の市日とて、府をさして行く者引きもきらず。いづれも黒冠白服なるが、多くは長き烟管を口にして煙草を吹かす。牛を牽けるあり。『チゲ』を脊にするあり。柿、薪、藁、板などを運ぶ。その中に、朝鮮草鞋を頭に戴きて、素足にて歩くものあるを見る。京城より余を導ける加藤灌覺氏、『冠履轉倒の實例なり』といふに、一同覺えず失笑す。

始祖の生れ出でたりと稱する蘿井の、木立を帶びて、山麓の畑にあるを左に見て進み行けば、南山近く面に當る。峯頭に二巖突起して蟹の目に似たればとて一に蟹目山と稱す。小川に沿うて左折す。珍らしくも竹籔を見る。『朝鮮もこのあたりまでは竹ありて、これより北には無し。梅も然り、柿も然り』と、加藤氏の説明を聞きつゝ右に小川を渡りて、鮑石亭の跡を訪ふ。景王こゝに妃嬪百官を集めて、曲水の宴を催し給ひけるに、甄萱の軍俄に殺到して、水上の杯いまだ流れ盡さざるに、王の運命は早や盡きたりけむ。石の水路そのまゝに殘りて、屈曲しながら、ほゞ楕圓形を成す。水を引かば、今も杯を流さるべき也。

三　王城の跡

轉じて王城の跡に至る。南北數町、東西十數町の丘陵、半月の形を成して汶川に接す。形に因みて、半月城とも稱す。南山を仰ぎ、汶川に俯しつゝいろ〳〵加藤氏の説明を聞く。加藤氏は佛家に生長して佛教の素養あり。考古學をも學べり。英語にも通ずるが、露語を能くして露國に赴きしことあり。支那語を能くして支那にも赴きしことあり。殊に朝鮮にあること十數年足跡朝鮮に遍く、朝鮮の歴史をも窮めたり。今や總督府學務局編纂課にありて、李朝の記錄七千卷を調査しつゝありと聞く。一代の珍也。談、神功皇后の事に及びけるに、加藤氏は、『神功皇后は迎日灣に上陸し給ひたりとの説あれど、蔚山灣に上陸し給へり。後世加藤清正も、この路を取れるなり』といふ新羅の王神功皇后に降りて、『ありなれの水倒に流るとも此誓を渝へじ』と云ひけるが、そのありなれに就きても、加藤氏は、『ありなれを鴨綠江とするは誤れり。鴨綠江は支那にてやあるう、朝鮮にてあむのくがんと云ひて、ありなれとは云はず。殊に鴨綠江は新羅の領地以外に遠く離れたり。ありなれは朝鮮語のあれなるの轉じたるものなるべく、あれなるは下の流にて、この王城の下を流るゝ汶川をさすなり』といふに、余始めてありなれ

の何たるを知るのみならず、現にその川を目のあたり見て、いとゞ感に堪へず。城址の中央に崇信殿あり。新羅第四世の脫解王を祀る。王は日本の多婆那國より渡りたりと傳へらる。多婆那は何處かは知らざるが、殿前に跪拜して、感殊に深し。王、一夜城西の林に雞の鳴くを聞き給ひ、大輔瓠公をして往いて視せしむるに、金色の小櫃樹枝に掛り、雞その下にありて之を守るもの﹅如し。王其櫃を開き給へば、一男兒出づ。喜んで、子として養ひ給ひその林を雞林と稱し、更に雞林を國號とし給へり。加藤氏曰く、『雞林を朝鮮語にて訓讀すれば、たくすま也。新羅の枕詞のたくぶすまは之より出でたるなるべし』と。在來國學者は新羅のしらを白に掛けて、たくぶすまを栲衾と解したり。余も斯く信じたりしが、今加藤氏の說を聞きて、忽ち夢の覺めたる心地す。その雞林、今もなほ存す。往いて見たるに、凡そ一町四方もありて、樺、槻、槐などの古木生ひ茂れり。

雞林より北に少し離れて、瞻星臺あり。高さ三丈、石を積み重ねて、堈德利の形を成す。善德女王の築造に係る。東洋最古の天文臺なりとかや。善德女王は芬皇寺の境內に九層塔を造り給へり。それも今なほ存す。されど、上の六層失せて、今は三層塔也。而かも修理を加へて、古色を失へり。

四　武烈王の陵

次の日、西に西川を渡り、山を攀ぢて金庾信の墓を訪ふ。庾信は新羅が朝鮮を統一したる時の大功臣也。墓は土饅頭なるが、下部は花崗石にて取卷きて十二面を爲し、十二支を刻み出せり。その首だけ十二支にして、體は人也。慶州一帶の地、眼下にあり。人口千三百五十八、中百五十人は內地人なる慶州府を中心として、數十町四方ばかり平地なるが、その平地は更に四方に細く延びて、街道を通ず。西に近く仙桃峯あり。東に吐含山あり。南に含月山あり。北に金剛山あり。之を慶州の四岳と稱す。この金剛山は何の奇もなき小山にて、世界的名山となれる金剛山には非ず。西川南北に貫通して末は兄山江となる。汶川之に注ぐ。其他支流も少なからず。神功皇后は一擧して王城に入り給ひけむ、加藤清正も戰はずして過ぎけむ、調伊企儺は、『新羅王我臀を啗へ』と罵つて斬られけむ、新羅千年の興亡を別にしても、內地人には思出の多き處也。諸鹿央雄氏、上田榮吉氏と共に案內を爲しけるが、『春は慶州人の行厨を携へてこゝに遊ぶもの多し』と云へり。

去つて、西岳驛に近き武烈王の墓に詣す。山の傾斜面盡きて、街道に接する處にあり。なほ上方にかけて、二つばかり墓あり。いづれも大なる土饅頭也。王は新羅統一時代に君臨しけるが、その墓は其臣の庾信の墓よりも見劣りせらる。唯龜趺が

見事也。碑文を刻せる部分は失せて、螭首殘れり。龜趺は凡そ四疊半の大さありて、而かも一つの花崗石也。

驛長の家に午食して後、輕鐵にて浦項に赴く。西川の末兄山江となりて水の分量多く、兄山と弟山と間を劈いて流る、弟山少し小にして兄山と並びて、關門を成す。この關門を出づれば、天地忽ち別樣の觀を呈して、波浪天を打つ迎日灣の漁利は、浦項の小市街を現出し、なほ輕鐵をも通じける也。

余は浦項に一宿しぬ。日月池を訪はむと思ひたれど、之を果すこと能はざりき。新羅の世に、迎烏郎といふものあり。或日一岩の上に上りしに、其岩動いて日本の一島に漂着す。而して王となれり。其妻夫を尋ね來りて一岩に上りしに、又も其岩に載せられて夫の住める處に漂着し、王妃となる。新羅爲に日月暗くなりぬ。新羅王、使をやりて呼び戻さしめ給ふ。折角人民がなつき居ることなればとて應ぜず。妃の製したる織物を贈る。新羅王之をこの日月池にて祭りしに、日月再び明かになれりとかや。新羅にも快男子ありける也。

五　佛國寺

慶州へ引返したるは、夕方なりき。車にて佛國寺に向ふ。途中にて日暮れたり。一天澄み切つて、十四日の月いとゞ明か也。朝陽里といふ處に至り、車夫車を卸し、村店に就いて酒を飲む。案内の岩永頂華氏、側の一屋を指し、『夫は鮮人、妻は内地人、近く結婚して仲よく暮す』といふ。就いて煙草を買ふ。夫も、妻も、岩永氏を知り居ることゝて、愛想よく、『入りて茶を飲め』といふ。辭して車に乘る。加藤氏曰く、『日鮮眞に相合せむとせば、相婚せざるべからず。在來日鮮間、及び日支間に結婚なしとせざるが、すべてみな夫が鮮支人にして妻が日人也。未だ夫の日人なるを聞かず』と。夜八時、佛國寺に着き、門前の一軒屋に投ず。語調にて、宿の主の土佐人なるを知る。名を問へば杉山藤三郎といへり。

あくる日、杉山氏に伴はれて寺後の山を攀づること二十三町、峠を彼方に越えて、石窟菴に至る。窟の中央に石の釋迦佛の座像を安置す。周圍に梵天、帝釋、觀音、十六羅漢、入口の左右に四天王、仁王を刻み出せり。いづれも精妙を極む。釋迦像殊に端麗也。これ景德王十年の建立に係る。唯近年窟を修築して雅致を失へるは惜しむべき也。

歸り來りて佛國寺を訪ふ。盧舍那佛最も優れて美也。多寶塔、釋迦塔、青雲、白雲の二橋、いづれも石造の妙を盡せり。法興王の創造に係る。石窟の塔や、橋や、門や、樓や、崩りかゝりたるも石窟の修築に懲りけむ、その儘になり居りて、古趣掬すべし。新羅の故都の佛は、この佛國寺に至りて、畫龍に睛を點した

るを觀ゆ。

南山の西に當りて高峯あり。鵄述嶺と稱す。加藤氏曰く、『昔新羅の王子、日本に人質となり居りけるが、大臣朴堤上、往いて日本を欺いて王子を還し、身自ら犧牲となりて死せり。その妻この山に上りて慟哭し、化して石となれり。朝鮮の松浦佐世姫なり』と。其石遠くまでも見ゆ。新羅の故都重ね／＼昔の憐れをとゞめける也。



九月一日發行

中央公論

定價八拾錢
郵税三錢五厘

秋期大附錄號說苑豫告

左の八大讀物は何れも五十枚前後の長篇なり

藝術論一篇……山本鼎
關東と關西……黑頭巾
對話「有識無產階級」……生方敏郎
ユウトオピア物語(下)……井箆節三
日本溫浴史話(續篇)……中桐確太郎
續發音遊戲……菅原敎造
狂女の話……氏家信
情話一篇……村松梢風

趣味と智識とに充てる本誌獨得の好讀物

(秋期號論文の豫告は公論欄最後に、小說の豫告は本號の最後にあり)

時論

勞働運動に於ける政治否認説を排す

法學博士　吉野作造

去年の暮から本年の春に懸けて我國政界の大問題であつた普通選擧論は、昨今跡形も無く消え去つて、今や天下の耳目は國民の生活といふ實質問題に集中して居る。物價騰貴の底止する所無き趨勢に連れて、國民が現實に生活上の壓迫を痛感するに至つた結果とは謂へ、形式的問題より實質的問題に耳目を鋭敏にするやうになつたのは、兎に角喜ぶべき現象と云はさるを得ない。

併し乍ら如何に實質問題の解決を急要とするからとて、形式的問題を全然等閑に附するのは又た決して喜ぶべき事ではない。尤も段々政治季節に近づからうと云ふので、其準備の爲めにや再び普通選擧の運動を盛返さうとする企てもあるやうだが、併し生活問題乃至勞働問題の非常な勢を以て勃興するに就て、論壇の一部には所謂政治は閑問題だ、それよりも經濟問題が先きである、普通選擧がどうの彼うのと云ふのは時勢後れの甚だしきもので、我々は一擧に經濟的正義の獲得乃至實現の爲めに奮鬪せなければならないと云ふやうな說が相當に根强く信ぜられて居るやうに見える。我々は之に對して政治否認説といふ名稱を與へて居るが、若し之が今後永く多くの人々に信奉せらるるやうになるならば、此間に我々は憂ふべき一抹の陰翳を認めざるを得ない。何故なれば政治を否認するものの實行方法は、先づ革命に依るの外無いからである。

所謂政治否認論の流行し出したに就ては、予が之まで種々の機會に於て述べた通り、一つの原因は西洋の反動的學説の無批判的信奉であり、又も一つの原因は資本家的支配階級の頑迷によつて作られたる、而して誤つた此西洋の思想を十分に裏書きするに足る社會の事實である。

西洋で勞働運動を起さんと努めたものが、其運動に對する勞働者の興味と熱を挑發する爲めに、故らに資本家階級に對する不信反感を誇張した事は予が已に之まで度々說いた。畢竟極端なる資本主義の頑迷橫暴に對する他の極端な對應劑に外ならない。而して此說は事實資本家的支配階級が頗る頑迷橫暴を極めて居つた所から、如何にも尤の說のやうに受取られたのであるが、之と同じやうな事實は今日正に我國に於ても亦顯はれて居る。詳しい說明は聰明なる讀者に向つて其必要を見ないのであるが、唯一二の例を擧ぐるなら、今日の政黨は此重大な勞働問題や或は朝鮮問題等に就いて何れ丈け國民の良心に觸るゝ意見を發表して居るか。先月初め以來政友會も憲政會もそろ〳〵動き出して、將に來るべき政戰の準備に怠りないやうであるが、彼等の最も力瘤を入れる所の政戰が何れ丈け國民の生活と國家の進運とに關係あるかを思ふ時に、常に深き失望の感を催うさざるを得ない。憲政會では政友會の高知支部が誤つて幸德秋水に感謝狀を送つたと云ふ失態を捉へて、鬼の首でも取つたやうに喜んで居る。政友會としては驚くべき重大の失態に相違ないが、之を公然政界の問題とする事が我々の生活と理想とに何の係はりがあるか。もう一つの例を擧ぐるならば、青森縣弘前に市長の教員毆打事件がある。此事自身教育界の爲めに決して輕々に看過し得べからざる問題と思ふが、更に暴行を加へた當の市長某が社會の擯斥を受くる一匹夫の身を以て唯政友會員なるが故を以て代議士となり、市長となり、地方の風教を擾つて耻ぢざるの一事は、決して不問に附する事は出來ない。今の政友會內閣が從來の政府に比し何れ丈け善い事をして居るか知らないが、彼が今日の勢力を贏ち得んが爲め有ゆる手段を盡して地方的黨勢擴張を計り、所謂黨の功勞者であれば不逞悖德の徒と雖も傲然顯要の地位を占めしむるが如きは、之れ許すべからざる罪惡にあらずして何ぞや。政友會といひ憲政會といひ、今日の政黨の態たらくは皆斯くの如きものであるとするならば、此等が政權の爭奪の爲めに東奔西走するも、少しく心あるものの何等の感興を惹き能はざるは怪しむに足りない。政治とは畢竟此等の連中の運動によつて取扱はるる仕事であるとすれば、即ち政治を否認し國政の運用は須らく此等の連中の手より奪還せざるべからずと考ふるに至るも亦怪むに足らない。

更にもう一つ最近の政治否認說の起因は、國際問題に對する現代政治家の態度である。例へば今度の講和會議の始まる頃、一部の世界主義者乃至人道主義者はウイルソンやロイド・ジョーヂの人格に信頼して、會議の前途に多大の光明を投じて居つた。然るに出來上つた結果は彼等の豫想とは甚だ遠いものである。

是に於て彼等はウイルソン、ロイド・ジョーヂの徒を以て矢張資本主義的衝動に動くものとなし、彼等の所謂正義公道は結局に於て我々の信頼に値するものではない、といふ見地から所謂現代の政治家といふものには全然信頼する事が出來ないといふ結論を爲すに至つた。啻に之ればかりではない。我國政治家の言論に就いて見ても、事一度び涉外の問題になると、直ちに理否を辨へず對手方を憎み且つ罵る。今度の寛城子事件に就いてもさうだが、前の鄭家屯事件に就いても、或は朝鮮の問題にしても、最初の電報に接して我が政治家論客の先づ發する所の言葉は、曲彼に在りと云ふ斷定である。さればと云うて予は寛城子事件に就いて支那を辯護する意味は無い。理否を明かにして爭ふべくんば大いに爭ふを主張するに躊躇しないが、兎に角外國關係の問題になると、直ぐに盲目的に昂憤するの態度は人道主義者平和主義者をして著しく顰蹙せしむるものである。斯う云ふ方面からも政治否認說の出て來て居ることは、最近特に注目すべき現象である。

最近の所謂政治否認說の出つて起る所右の如しとすれば、それは從來の政治、更に詳しく云ふならば從來の政治家によりて取扱はれたる政治を否認するといふたら分るけれども、一般に政治といふものに失望するといふのは些か早計ではあるまいか。

若し右述べたやうな事實から政治否認說といふ絶對的結論を導き出す爲めには、次の二點を許容しなければならない。一つは今日の政治學は到底資本家的政治學であるといふ事、も一つは今日の政治は到底資本家のものであるといふ事である。彼等は曰ふ、政治とは畢竟資本家階級內の遊戲に過ぎない。又或者は曰ふ、政治の起原は掠奪である、資本家階級が勞働階級の掠奪を如何にして永續し得べきかを考ふる所に政治の起原があると。從つて彼等が此目的を達するが爲めにいろ〳〵研究考察した結果が今日の政治學であるといふのである。果して然らば今日の政治學の教ゆる普通選擧論とか責任內閣論とかは、彼等に取つて何等の福音でないのみならず、之を支持する事が却つて敵の勢力を强むる所以であると。彼等の所謂一般國民全體の利益幸福の爲めには、是非共資本家階級を撲滅しなければならない、階級鬭爭其事を直接の目的として奮起しなければならないといふ事になる。

併し乍ら今日の政治學は果して資本家階級の爲めの學問であらうか。今日の政治學は政治上の根本主義としてデモクラシーといふ事を唱へる。政治否認說を取るものは、デモクラシーとは資本家階級が昔の貴族階級から政權を奪ふ事であると云

ふ。併し乍ら之はデモクラシー發展の一の階段であつて、決して本質ではない。故にアリストクラシーから實權をブールジョアジーに收め得しめた其デモクラシーの趨勢は、今日更にブールジョアジーの手から之を一般國民に引渡さんことを要求して居る。今日の政治學の教ふるデモクラシーは所謂天下を以て天下の天下とするの全人の國家の理想に立ち、總ての人に完全なる精神的並びに物質的の生活の保障を與へる、又完全に總ての人に合理的な自由を與へんことを主眼として居る。即ち一方には國内の總ての人の生活上の實質問題の要點を明かにし、更に之が徹底的實現を可能ならしむべき形式的組織を吟味して行く。兩々竝び行く所に政治の本領がある。斯の如き政治學は之れ一般國民と何等の交渉なき資本家階級の學問なりと罵倒する事が出來るか。今より六七十年前の政治學ならいざ知らず、時勢の進歩と共に學問にも亦進歩發達がある。之を唱へ之を研究するものが資本家階級の出だとしても、今日の政治學は決して一部階級の御用學ではない。

今日の政治が殆んど資本家的支配階級の玩弄物に過ぎないと云ふ批難は遺憾乍ら大いに當つて居る。從つて此上何時までも國家の政治を彼等に托するに堪へざるは我々も亦其感を同じうする所である。然らば之を彼等から奪つて政治否認論者の言ふが如く、プロリタリアートの手に奪還すべきやと云ふに、我々は其意味と其方法に就いて大いに彼等と其觀る所を異にせざるを得ない。

予輩は今日の政治が今日の資本家階級の手に依つて運用せらるゝを痛苦となし、一日も早く之を一般民衆の手に回收せんことを熱望する一人である。併しながら一般民衆の手に回收すると云ふ事は資本家と云ふ階級から移して、之を例へば勞働者と云ふ階級の手に收むることではない。政友會が失敗したから憲政會が政府を乘つ取ると云ふ具合に更迭すると云ふ意味なら、之は政權の國民的回收にあらずして依然として階級間の爭奪に過ぎない。我々は全人國家の理想に立つが故に資本家階級も勞働者階級も自由なる發言權を有する有機體其物に最高の權能を認めたい。されぱと言つて予輩は近頃流行の勞働資本協調主義に贊同するものではない。具體的の問題としては、多數を占むる勞働者が有機體に於て特に優勝の地位を占むべきは言ふまでもなく、唯少數なる資本家階級も十分なる發言の機會を有する其有機的組織に最高の權能を認めようとするのである。斯う云ふ仕組を作り上げる順序として今の資本家の勢力を挫く事が先決の急務であるが、然し乍らその資本家の勢力を挫くと云ふ

事が何處までも勞働階級の利己的動機に出でゝは不可ない。此意味に於て我々は資本家に對抗し、資本家と鬪ふの必要を認むるものであるけれども、彼等を撲滅するが如きは寧ろ努めて避けんとする所である。否、寧ろ資本家階級を征服して更に其上に彼等の能力を十分に全體の進歩の爲めに利用したい。

斯う云ふ立場を取るの自然の結果として、我々が資本家と鬪はんが爲めに取る所の手段も亦自ら彼の政治否認說論者等と異ならざるを得ない。政治否認論者は資本家の撲滅に依つて實權の奪還を企てる以上、目的の成功の爲めには手段を選ぶの遑がない。我々は資本家勞働者協力の有機的關係に於て兩者當然の地位を明確にせんと欲するものなるが故に、鬪爭の武器は一つは說得であり、一つは政治である、前者は純然たる道義問題であるから今姑く詳說しない。後者は即ち例へば所謂勞働問題等に依つて今日の法律並びに道德意識の許す範圍に於て正々堂々の歩武を進め、一歩一歩踏み固めつゝ、勞働階級の地歩を確立して行くのである。而して斯くする事が即ち自家階級の爲めであると同時に、亦社會全體の爲である事を忘るべからざるは言ふを俟たない。

唯玆に一つ問題となるのはこんな微溫い方法で果して我々は資本家階級の濠を啓き其金城鐵壁を突破する事が出來るかと云ふ事である。成程過去に於て資本家階級は頗る頑迷であつた。彼等は已に險要の地位を占め、之を利用して勞働者階級の抵抗を苦もなく撃破する。尋常一樣の手段で彼等を屈服する事は殆んど不可能の觀がある。併し乍ら過去の短かき經驗に立脚する不可能は決して本質上の不可能とは限らない。資本家階級が過去に於て頑迷度すべからざりしとするも、人は一に共物質的境遇によつて支配さるとの唯物論的立場を取らざる以上、我々は結局に於て說いて彼等と共通の感情に立ち、人生經營の途に提携し得るを信ぜざるを得ない。勞働問題は階級的利害に即して觀れば勞働者のみの問題である。人道的立場より觀れば明かにまた資本家の問題でもある。

今日我國の資本家階級の頑迷貪慾は不幸にして隱れもない事實である。之を背景として政治否認說に隱くるゝ革命的勞働運動の起るは止むを得ざるの惰勢なるべしとするも、我々は深く之を國家の將來の爲めに憂ふるが故に、一方には資本家の反省と共に他方には勞働運動に關係するものゝ愼重なる考慮を促すを繰返さざるを得ない。幸にして政治否認說に對しては已に論壇の一角に反對の聲も擧つて居る。けれども從來の資本家階級に失望し、又勞働者を率いて革命的運動をなすに贊同するを得

ないからとて、一轉して官僚と提携し以て豫ての理想の實現を計らんとする所謂國家社會主義の一派にも贊同することは出來ない。我々は厭く迄勞働運動の盛ならん事を希望するが故に、從つて又之に與るものゝ成功を急いで中正の途を踏み誤らさらんことを希望して已まない。

現政府に對する憲政會挑戰の第一聲

七月六日の憲政會關東大會は或意味に於ては過去半年の現政府の成績に對する野黨の批判であり、又或意味に於ては來るべき政治期節の前驅としての偵察的挑戰と見るべきものであつた。其「宣言」に據つて見るに彼等の現政府に對する武器は（一）講和會議の失敗（二）對支外交の失敗（三）人心動搖に對する無方策（四）經國濟民の對策の缺如（五）國家の公器を上げて黨略の具に供せるの罪の五項に分かれて居る。加藤總裁の演說は更に此趣意を布衍したものであるが、併し彼は外交方面に稍々詳しくして內政上の問題には案外に粗漫の譏を免れ得ない。現下人心の動搖は物價の奔騰と外來思潮の影響との相交錯して起れる所とするは姑く可なりとして、通貨縮少に依つて物價を調節し、外米輸入によつて食糧の豐富を計り、更に過激なる社會革命を排斥して穩健なる社會政策の必要を主張するの外、特に此等の問題に就いて適切なる說明を試みなかつたのは甚だ物足りない。日本の產業狀態が列國と異るとの俗說を排斥する點に彼の一隻眼を認め得るも、「決議」には麗々しく之を書いて居るに拘らず、現下最も緊急なる勞働問題について殆ど何等言及する所無かりしは甚だ遺憾である。若し夫れ思想問題に就いては殆んど之を等閑に附したのは何故であらうか。斯くては政友會に向つて「何等適切の方策を行はず」と批難するの資格ありや否やが疑はれる。現內閣の攻擊丈けなら陋巷の匹夫の口からも之を聞くことが出來る。我々が堂々たる政黨の言論に於て期待する所は何の方策を以て代り立たんとするかの點である。

政友會が黨の擴張に汲々たるの結果總ゆる內政問題に之を利用するの事實は、憲政會諸君の叱責を俟つ迄もなく我々の他年苦々しく思ふ所であつた。併し乍ら同じやうな罪惡を憲政會が爲さなかつた、又將來においても斷じてなさないと云ふ丈けの信賴を置くる能はざるは、又我々の遺憾とする所である。そ

れはそれとして、加藤總裁は更に內政上の問題として海軍擴張の必要を說いて居るのはいいが、陸軍に就いては何とも云つてない。國防問題に就いて我々が最も聽かんとする所は陸軍を何うするかの點ではないか。而して此問題は單に國防問題ばかりでなく、我國政治の凡ゆる方面にいろ〳〵關係あることは加藤總裁は無論の事、憲政會諸君の熟知する所であらう。夫れにも拘らず之に言及せざるは、或は惧る、故らに之を避けたるの譏を招がんことを。是に於て我々は我國政界の今日の一大弊害に對すに憲政會の鬪志の甚だ熱烈を缺くを惜まずには居られない。次に朝鮮問題に就いても總督政治の失敗を說かれて居るが、此事に就いては事實の眞相を公表せざるの罪を數ふる外特に積極的の改革意見を示して居ない。之れ亦最も我々の遺憾とする所である。其他文官任用令に關しても、或は特に「決議」に一項をなす所の稅制の整理に就いても、最も重大なる當面の問題たるに拘らず皆省略に附せられて居る。こんな風では彼等が政友會に向くる所の「經國濟民の對策の缺如」は偶々取つて自ら殺すの武器となるの怖れはないか。講和會議に關聯して人種問題、南洋問題、山東問題等に關する加藤總裁の批評は流石外交家丈けに俗流を擢んでた卓拔の見識を示して居る。併しながら講和會議に於ける各般の所謂「失態」を全然政府の無能によるとする「宣言」の所見に就いては一言異議を唱へざるを得ない。講和會議に於ける總ての失敗の原因は一に人選を誤つた事に歸する。而して斯くの如き場合に於ける人選の標準が元老一味の氣に入りさうな人とか、貫目がどうとか云ふやうな事によつて、眞に世界の檜舞臺に出てヒケを取らない丈けの手腕見識ありや否やでない事は、政界一般の通弊であつて獨り政友會內閣を責むべきではない。加藤氏が內閣を組織しても、支那政府が王正廷や顧維鈞の如き青年を拔擢したやうな眞似が出來たかどうか疑はしい。假令加藤氏に夫れ丈けの考があつたとしても、夫れが滯りなく通らないと云ふ所に深刻なる批判を加ふべき國民的大問題があるのではないか。一國の大政黨の首領としては、何も彼も反對黨攻擊の材料にするやうな陋態を避けて、一つ位は敵黨と提携して根本的解決に協力するの雅量を示してもいゝではないか。

之と同じ事は對支問題の批評に就いても言へる。支那に對して原內閣の執つた政策は決して誤つたものでない事は、政友會其物に餘多くの好意を有ち能はざる吾輩と雖も之を認むるに躊躇しない。それにも拘らず內閣の對支政策の屢々支那から誤解されたのは果して誰の罪かは憲政會の諸君にして之を知らざるの道理はない。何故なれば憲政會內閣其物はまた實に此同じ原因に依つて苦き經驗を甞めた事があつたからである。若しそれ

最近の猛烈なる排日風潮に至つては、我國多年の軍閥的外交の總勘定であつて、斷じて政友會内閣の責任ではない。而して此問題を如何に處分すべきかは朝野兩黨共通の宿題であつて、斷じて政爭の具に供するを許さない。若し他日憲政會諸氏が此點を以て政府と戰はんとするならば我々は斷じて之に與しない。

尚終りに加藤總裁が支那に對して嚴重なる手段に出で、帝國威信の維持を計るべしとするの見解に就いては、其表面の文字に表はれたる所に何の異議を挾むべき理由を見ないけれども、當今支那問題が如何に取扱はるべきかを考慮に置きつゝ此言に接する時、如何にも軍閥の代辯たるが如き不快なる響きを我々の耳朶に傳へる。少くとも人種問題、移民問題に就いて比較的公明なる意見を吐いた其同じ頭腦から出て來べき言葉ではない。

之を要するに現政府に對する憲政會の態度は之を其「宣言」に見ても「決議」に見ても、將た又之を布衍せる總裁の演說に徵しても、堂々の陣を張れるが如くにして而かも攻擊の矢は一々肯綮を外れて居るの感がある。生活問題に就いても、思想問題に就いても、將た又外交内政の問題に就いても、今日の國民はモツト〳〵先を考へて居る。而かも尙實際政界の樞機に與り乍ら、我々より觀てずつと後れて居る彼等でなくてはならないとするのが今日の政界の仕組であるとするならば、所謂政治否認說の起るのも亦已むを得ないではないか。

小題小言

◉富豪の公益的寄附

三菱が公益事業の設備の爲めに百萬圓を東京市に寄附したのを手初めとして、大倉、山下の兩氏之に次ぎ、恐らく更に之に倣ふもの續出を見るだらう。何れも奇特の擧と言はなければならない。大倉翁が祭場の建設を故らに條件としたのは惡くはないが、死者よりも生者の爲めに何とかして貰ひたかつたと云ふ感なきを得ない。乞食のやうな生活を續けて居つては葬式丈け立派に擧げ得ても何にもならない。餘程考へた積りで、下らない理屈に落ちるのはその狂歌にも見る通り、よく〳〵此の翁の癖と思はれる、併し何にも爲ないよりはいゝ。兎に角富豪が競つて公共事業の爲めに出資するのは近頃の美擧と言つていゝ。只彼等が此の位の事で富豪としての社會的責任が終つと考へるならば之れ大いなる誤りである。何となれば彼等は元來社會に負ふ所極めて大にして彼等の莫大の富も、畢竟大部分は社會の賜物と謂はなければならないからである。若し彼等にして社會に對する責任を自覺するならば、百萬

二百萬の寄附は何等人に誇るに足るものは無い。とは謂へ、予輩はクロポトキンの顰に倣うて彼等の富の社會的歸屬を說くものでは無いけれども、私財の一部を割いて公共の爲めに盡すと云ふ佛け心の些かでもあるならば、少くとも先づ今日の社會的常識が要求する所の法律上並びに道德上の義務を十分に果たして貰ひたい。今日の富豪が法律上並びに道德上脫税を試みて國家に多大の損害を與へて居ることは隱れも無い事實である。之を平然知らざる眞似して一方巨額の寄附の提供によつて公共心を誇示するが如きは、所謂耳を掩うて鈴を盜むの類ひに外ならない。我々は切に天下の富豪に向つて社會に對する責任奉仕の念を銳敏ならしめん事を望まざるを得ない。

◉**温情主義者に與ふ**　何時如何なる時代にも若干の頑迷者流はある。頑迷者流の最も多い時、又其頑迷の程度の最も激しい時に、革命又は之に類する社會の禍が起る。併し近世歐米の社會的革命の歷史を通覽して、其何れの時の頑迷者流も我國今日の資本家階級ほど頑迷なるものは無かつた。而して彼等の頑迷を最も明白に語るものは、勞働運動に對する彼等の態度である。一つの例を謂はんか、彼等は動もすれば溫情主義を唱へる。溫情主義は資本家の執るべき態度として誠に結構であるが、之を以て勞働者の要求を拒絕する理由とはならない。況んや資本家の中には事實に於て溫情の何たるを解せざるもの極めて多きのみならず、假令(よし)又之を解するものありとするも、總ての資本家が悉く溫情主義を取るを必し難いからである。偶々溫情主義を取るものがあつたとしても、其溫情たるや何うせ碌なもので無い。勞働者に公正にして十分なる地位を保障する底のものは、之が實行は他の同業者との競爭を不可能ならしむるが故に實際に之を行ふ筈は無い。畢竟勞働問題解決の方針としての溫情主義は、之を資本家個々の行動に任かす以上は到底駄目だ。勞働問題解決の方針としてはどうしても此溫情主義を法制の形に具體化しなければならない。社會の制度に固定する所まで行かなければならない。斯うなれば最早溫情は溫情ならずして一個公けの義務である。之を主張するは哀願に非ずして一個公けの權利である。故に眞面目に勞働問題を考へて先づ資本家の溫情に眼を開いた人は、必ずや遂に我々の主張する勞働問題の忠實なる味方とならなければならない。然らざる以上我々は彼等の誠意を疑ひ、且つ其頑迷と鬪はねばならない。

◉**食糧問題の敎訓**　底止する所なき物價の暴騰にも增して、國民の生活を今更らながら痛切に威嚇して居るものは、食糧缺乏の流說である。ナニ田舍にはまだ米があると云ふ人もあり、又今日のやうに物價を變動するに任かして置いては買占

め、賣惜みの事實を防ぎ得ない事情もある。併しそれでも決して今日の食糧の有り高は皆吐き出しても、優に需要を充たし得る程度のものでない事は疑ひないらしい。而して昨今最早や疑ふの餘地の無い不作の豫想は益々人心を不安ならしめて居るが、それよりももつと我々を嚇かすものは外國米輸入の殆んど絕望に近いと云ふ事實である。外國米は何故に輸入困難であるか。從來は日本米の保護の爲めに殊更に外國米の自由な輸入を妨げて居つた。今は大いに歡迎するの手段を講じてもなか／＼入つて來ないのは、歐羅巴方面へどん／＼吸收されるからである。歐羅巴では戰時中非常に食糧の缺乏に困んだ事は言ふまでも無い。今や平和克復してやつと愁眉を開き、漸を以て平常の生活狀態に恢復せんとしつゝあるのであるが、完全な恢復を見るまでは尚數年の歲月を要するのであらうから、差し當り必要の物資は之を東洋諸國の供給に仰ぐの外に途は無い。從つて戰時中餘りに樂をし過ぎた我々が、今に至つて多少の難境に遭遇するのは、考へ樣に依つては已を得ない現象である。戰時中の我々の上つ調子な好景氣と、又歐洲諸國の嘗ひ難なき辛苦艱難が今や亂治つて平均を得んとしつゝあるものと見れば、我々は戰時中餘りに放漫に失し、官民共に緊張の覺悟を怠つたことを悔ひざるを得ない。食糧缺乏の趨勢は今後尚一層激しくなるだらう。之が對策を講究するは固より緊要の仕事ではあるが、我々は尚之を歐洲諸國民が戰時に嘗めた苦き經驗を、今頃遲れ馳せながら我々にも嘗めさせんとする皮肉の教訓として、極めて嚴肅なる態度を以て之に對することを忘れてはならない。

◎所謂有識無產階級の動搖　昨今天下の注目を獨占して居る生活問題は、先づ勞働運動によつて代表されて居り、ストライキの頻繁なると、そが常に勞働者側の勝利に畢つて居る事は、少なからず所謂識者階級を惱まして居る。成程之も懸念すべき事實には相違ないが、之よりも尚一層適切に我々の頭腦を刺戟するものは所謂有識無產階級の動搖である。或は洋服細民と稱する連中がS・M・Uの運動を全國に開始したとか、今迄金錢問題などは言ひ度くとも言ひ得なかつた小學教員が、到る處公然增俸の要求を絕叫すると云が如きは、已に最も雄辯に時代の新風潮を語るものである。彼等の收入が實際勞働者よりも遙かに少き事、而かも彼等の生活程度は勞働者よりも遙かに高き事、而して彼等は人としての地位に餘程開發して居る事の事實を思ふ時、彼等の叫びは本當の腹の底よりの悲鳴にして、從來の社會運動者流のやうな附燒刃ではない。眞に苦んで居るものが本當に叫んだ時に玆に本當の永續的の力が發はるゝ。當局者は果して如何に之を處分するだらうか。唯此際一つ言ふべき事

現象は田舍の農民の案外に好景氣な事である。思想上の動搖は都鄙を分たざるが如きも、現實の苦痛に惱むものは主として都市的貧民に限る。此處に早きに臨んで何とかすべき餘地がある。今日の政治家に果して此好機を逸せざるの用意有りや否や。但し田舍の農民の景氣のいゝと云ふのも昨今一時の現象であつて、一兩年以前に遡れば實は彼等が最も慘憺たる境遇にあつたのである。故に若し今日の狀態を以て一時の變態と認むべくんば、一旦思想的に動き初めた田舍の農民は、洋服細民に續いて又現實の痛苦を訴へると云ふ事にならないとも限らない。今や正に政治家にとつては一刻の油斷を許さない時が來た。

◉**下層階級の責任**　此秋に方つて下層階級のものゝ奮起して社會各方面の惰眠を破らんとしつゝあるのは、我々の喜び且つ痛快とする所である。併しながら下層階級の奮起に伴つて常に起る所の弊害は唯徒らに上に反抗して社會に對する自家の責任を忽諸ろにすることである。上のものが何等のメリツトを有せずして威張るのに憤慨するはいゝ。けれども下のものが、下のものであると云ふ理由丈けで上のものに取つて代らんとするのは無責任である。上のものが不都合だといつて之を押し除けようといふならば、自分が之に代つて立派に社會を經營して行く丈けの責任を負擔しなければならない。勞働運動が單に勞働者の權利の主張丈けなら文句は無いが、社會の圓滿健全なる發達進步の一方を分擔すべきものである以上、勞働者の權利の主張をして國家社會の目的と步調を一にせしめなければならない。今日の勞働者に未だ此點を誤らざる丈けの考が十分發達して居ないならば、彼等を善導するは又識者の任務である。而して今日所謂勞働者の友を以て任ずるものが徒らに勞働者の煽動を事とし、彼等を專ら反抗的に、破壞的に狂奔せしめんとするが如きものあるは我々の甚だ遺憾とする所である。予輩は高尙なる教養の人が身を挺して下層階級に飛び入つて、讓り下つて彼等の友となり彼等の役使に甘ずるものゝ多く輩出せんことを希望する。

◉**對支借款團加入の是非**　米國の發議により支那の借款を一手に引受くべき新銀行團を組織すべきの案は巴里に於て問題となつてから、我國に於ても之に加入するを可とするや否やの問題が矢釜しく論ぜられて居る。政府の意見としては已に加入することに決心したやうだが、民間には反對論がまだ／＼相當に強いやうだ。併し如何に反對論が強いとしても、一體日本一國の力で其成立を妨げ得るや否や、又已に出來たものに我國獨り加入せざるを得るや否や、と云ふ問題になると、加入の是非を論ずる丈けが野暮だと云ふ感がないでは無い。要す

るに之が成立するものと決まれば、之に對する我國の態度に就いては最早論が無い。唯若し茲に此問題に就いて我々に兎や角講究するの餘地ありとすれば、斯う云ふ團體が果して出來るか何うかの問題である。換言すれば斯う云ふ團體は今日の支那の爲めに必要であるか否やの點である。と云ふたら人或は斯ういふ團體の成立すると否とは支那が眞に之を必要とするか否かに依つて定まらないと云ふだらう。併しながら支那の利害を第二にして、各國の利害が第一であると云ふなら、今日あゝ云ふ團體の新たに發生すべき理由はない。各國が銘々自國の立場のみを考へて居るのなら、現に我國でも我國のみの立場を考ふるものが此企てに反對であるが如く、支那に特殊の利害關係を有する各國が固より其成立を希望する筈がないからである。然らば今度の新らしい企ての動機は、寧ろ主として支那の利益を計つてやらうと云ふ事にありとしなければならない。其處で問題は一轉して支那の爲めに新借欵團は必要か否かと云ふ事になる。單純な普通の理論から云へば固より無い方がいゝ。各國の自由競爭に任かした方が、支那にとつて一番有利な條件で借欵の途が開かるゝ道理である。併しながら之は近代國家の狀態に於て初めて云ふ可き事であつて、今日の支那の如く二三少數の野心家が陰謀を以て巧みに政界を攪亂し得るやうな所にあつては、本當の自由競爭は行はれない。或一國が或一派と結托し、利益の交換によつて互に助け合うと云ふ腐れ緣を結ぶといふ事は、之まで餘りに多く且つ餘りに明白な經驗を積んで居る。我日本が斯くの如き變態的政情を利用して得をしたか損をしたかの實際問題は暫く之を措き、公平冷靜に支那の爲めを思ふ以上、借欵上の形式的自由競爭主義は斷じて之を採用すべきではない。斯く考へれば對支新借欵團は一時の便宜として今日の支那に必要である。從來の自由競爭主義に特殊の利害關係を有するものは、支那でも外國でも新計畫に反對して居るやうだが、我々は隣邦の健全なる發達の爲めに新借欵團の成立を歡迎し、而して此明るみの中に於て正々堂々と日本の利權を支那に擴張するの途を講じたい。

◉北京政界の暗流

北京の政界は昨今國務總理選任問題を中心として紛糾して居る。大總統派は周樹謨を立てんとし、段祺瑞派は田文烈を立てんとして居る。元來北京に於ける實際の勢力は段祺瑞、徐樹錚、王揖唐を連絡する所謂安福倶樂部の一派にあることはいふまでもない。而して彼等が表面政界に立たざるは、去年段祺瑞が失敗して南方や外國に對する關係上一時引つ込まねばならなかつた結果である。大總統徐世昌はもと〳〵段派と稱せられたけれども、擧げられて大總統となつた

以上、南北妥協に成功して統一の功を以て居りたいと云ふ野心がある。併しながら妥協統一に成功するが爲めには、どうしても段派の勢力を抑へなければならない。段派は世間に對する面目上妥協に反對だとは言はないけれども、自家の勢力の減縮は秋毫の微も之を肯ぜない。徐世昌は起つには起つたが、一筋縄では時局の收拾の成し遂げ難きを見て、遂に前總理錢能訓と深く結んで、一つには總統たり總理たるの地位を利用して自家の勢力の伸張を計り、漸を以て段派に對する一敵國たらんとするの準備をなした。斯くして上海には南北妥協の折衝あるに對して、北方には又前記兩派の暗鬪があつた。併し乍ら北方に於ける段派の勢力は牢として拔くべからざるものがあつた。一時廢止の噂があつた參戰軍は徐樹錚の西北籌邊使の任命と共に、衣を換へて依然として北方勢力の動かすべからざる源泉である。安福倶樂部の一派が北方に於ても一般反感の標目となつて居ることは、最近の學生騷動に就いても明かに之を見ることが出來るが、兎に角其擁する所の實勢力に對しては如何ともすることが出來ない。さり乍ら徐世昌派が此上長く政界の中心に坐つて居ることは安福派の堪へ能はざる所である。最近の電報が前總理錢能訓が辭職と共に財政部の剩餘金六百萬圓を持ち去つたことを報じてあつたが、假令之は虚報であつたとしても、支那で政界の要地を占めると云ふ事が單にそれ丈けで實力を握る所以になる事は略ぼ想像されよう。之れ一時止むを得ずして表面から引つ込んだ安福派が、今度こそはと意義込んで總理の地位を自派の掌中に壟斷せんと狂奔しつゝある所以である。

南北の統一は支那民衆の一般の熱望である。而して之が實現は段一派の讓歩によるの外成功の見込は無い。北方徐世昌と南方諸勢力との間には恐らく何等かの脈絡はあらう。而かも北方の施設が南方代表と折衝して思ふ通りの結果を擧げ得ざる所以のものは、主として段派の掣肘によるものである。表面の形式は何であるにしろ、南北の統一を妨げて居る唯一の原因は段派の北方に於ける拔くべからざる勢力にある。然らば段派は何故に斯く拔くべからざる優勢を擁して居るか。之に對する支那民衆一般の解釋は、異口同音に日本の軍閥が之を援けて居るからと云ふ。支那に於て最も強い人を援けて南北の統一に成功せしめ、茲に事實上の有力なる政府を造つてやるがいゝと云ふ謬想の我國先輩の間に根強く信ぜられて居る事は隱れもない事實である。けれども少しばかり金を貸して居つた商家にお家騷動が起つて滅茶苦茶になつて居つた時、剛慾な叔父さんが少しばかり物が分りさうだからとて、之を援けて無理矢理に一時亂脈を治めしめ、更に之を當の責任者として一層多額の貸金に暴利を貪

らんとするやうな態度を日本の軍閥が取つたのかどうかは姑く別問題として、支那の民衆が誤解かは知らぬが剛慾な叔父さんの罪惡が看破されて、親類一家の猛烈な排斥を受けて居るに拘らず、日本の軍閥が飽くまで其横暴を擅けて、多數の正當なる要求を脅迫して居ると云ふ風に見て居るのは事實疑ひも無い。支那民衆の言ふ所が正しいか正しくないかは別問題として、兎に角こんな場合に叔父さんをして何處までも無理を押し通させるのがいゝと云ふのが軍閥一流の考へ方である。我々が之を最も拙劣なる策となすのは多言を要せずして讀者の知らるゝ所であらう。支那の排日的行動の表面には實に憎むべきもの甚だ多いけれども、其根本の趣意に到つては大いに之を諒とすべきものなきを得ない。事の詳細は尚未だ明かならざれども、最近の寛城子事件は或は延ひて兩國の不祥なる關係を起さないとも限らない。我々は日本國民の一人として、爭ふべきは大いに之を爭ふの國民的義務に忠ならんことを欲するも、只常に事の眞相を正視するの態度を忘れてはならない。

◉支那に於ける外國宣教師

曩頃或新聞に南支那の某港よりの通信が載つて居つたが、其中に或米國宣教師の教會での說教の事が出て居る。日曜の禮拜に宣教師は盛んに阿片の害を說き、悔改まつて此頃盛んに賣出して居る米國製の何とか云ふ煙草にも若干のモルヒネが入つて居るからあれも飲まない方が好いと云つた。併し之は實は米國煙草の廣告をしたので、それを聞いてから其煙草は非常に賣れたと書いてある。又此間永く支那に居られた軍人の方が來ての話に、外國の宣教師は支那の內地の到る所に廣大な教會と邸宅とを構へて居る。彼自ら頻りに其地方の地理風物を研究するのみならず、又本國政府の命を帶びて調査にでも來る者があると其便宜を計ること到れり盡せるものがある。以上二つの例は外國の宣教師などゝ云ふ者は、口實を宗教の宣傳に藉り、實は自國の政治上並びに商賣上の利益の爲に相當惡辣の手段を弄するものと普通の日本人は見て居るの事實を語るものである。日本でも今より二三十年前迄は矢張外國宣教師を以て、巧みに國人を誑かして結局國を奪るものと解て居り、現に我々などは學校の先生やお上の役人に公然斯く教はつたのであるが、併し今日では餘程頑迷な一部の軍閥の外は斯んな馬鹿な考を有つて居る者はあるまい。宣教師が皆々立派な人と云ふのではない。支那に於ける宣教師が特に日本に對して反感を有つて居るの事實にも疑ないけれども、彼等が何の動機で て居るかに就いてはもう少し善意を以て、否少くとももう少し僻見を去つ見てやるの必要はあらう。前記の例に於ても宣教師が教會の說教で煙草屋の提灯を持つたと云

ふことは斷じてあり得ない。何かの誤解であらう。內地に堂々たる邸宅を構へて居るものに至つては、支那では外國人のための適當な宿屋がないから、人の求むるがまゝに喜んで一夜の宿を貸すと云ふのが一般の例になつて居る。獨り自國人のみならず、我々日本人でも淡泊に尋ねて一夜の宿を求むるなら、彼等は喜んで之に應じ且ついろ／＼便宜を計つて吳れるに違ひない。

●米國上院に於ける條約批准問題　米國上院に於て講和條約の其儘の批准を拒まんとするの氣勢の盛なことは今更言ふまでもない。山東問題に關して頗る日本に不利益な議論の行はれて居ることも我々の注目に値するが、唯玆に米國の特色を觀るに就いてどうしても注目を怠ることの出來ないのは大統領ウイルソンが佛蘭西より歸るや條約批准の事業に成功する爲に執つた所の第一の方法が、先づ自家の政見を民衆に訴へたと云ふことである。上院議員中にも反對論者が多い。外交委員會內にも隨分反對が多い。此等にも各々折衝は試みるだらう。けれども此等を第二として、先づ民衆の輿論を動かさんとする所にウイルソンの意氣があり、又輿論を動かせば結局上院の政見をも左右することが出來ると云ふ仕組に米國の政治の特色がある。日本なら講和委員が歸つて先づ訪問するのは元老で、次には樞密院顧問官とか云ふ順序であらうが、ウイルソンは其等を擱いて直ちに全國遊說の途に上らんとして居る。上院が果してウイルソンの意見に從ふや否やを知らんと欲せば、我々は上院內部の昨今の形勢よりも、遊說の效果として米國の民心がどう動くかを特に注意するの必要を訴へて置く。

最新刊

早稲田大學教授 片上伸先生著

ロシヤの現實

（山本鼎畫伯装幀）

現在のロシヤは世界最大の不安也、驚異也。此の不安と驚異とのロシヤの實相を各方面より精細的確に觀察し批評せるものは本書也。即ち最近革命のロシヤより歸朝せる著者が留學中にかける見聞感想の記錄にして革命を中心とせる政治上社會上の觀察は勿論都會生活農村生活の實狀思想上文數々の傾向文壇劇壇の近狀トルストイの事、ロシヤの自然ロシヤの年中行事等に到るまで自然と人事とに亘つて廣く深く內面的思想的觀察を下せるもの、尋常一樣の漫遊客視察者の皮相的觀察紀述とは自ら全く其の選を異にす。殊に所謂過激派の思想的根據を論じ革命前の反動時代を說き或は日本居留民引揚に關聯して露西亞人の對日感情に論及したるが如き著者の識見と用意との深く切なるを見るべし。本書の著者片上先生は方今吾が文藝批評壇の權威にして其の思想と文章とは普く世人の熟知する所本書が新露國印象記として如何に文學的價値に富めるかは言を俟たざるべきなり惟ふに將來世界の運命を支配するものはロシヤ也。世界の大勢に留意するものは須く先づ現在のロシヤを知らざるべからず。而して混沌たるロシヤの現在を知らんとせば徒に表面の紛糾に心を囚はれず其の根底を流るゝ精神的思想的意義に着眼して一大有機體たる國民生活の奧秘に徹底することを要す。本書は實に斯の徹底究明の道を照らすもの。經世實務に携るの人も思想文藝に志すの人もこれによつてスラヴ民族の思想生活を解し現在世界の不安の根源を究むることを得ん。

挿畫數葉
函入美本
定價壹圓八拾五錢
送料十錢

發行所 東京市芝區三田功運町（振替東京二九五〇七番） 至文堂

大和法隆寺藏版 東京美術學校編輯

法隆寺壁畫

法隆寺壁畫は東洋第一の古名畫にして實に世界無比の靈寶なり

豫約募集

而して本書はその完備なる大圖錄にて美術界空前の出版物なり

豫約申込期限は來る八月十日迄とす希望の方には御照會次第細則を呈す

東京上野公園內 東京美術學校文庫

法隆寺大鏡編輯掛

◎蘆花 德富健次郎著

縮刷 八十五版

みゝずのたはこと

定價壹圓參拾錢 郵税八錢

『みみずのたはこと』は、著者が田舍に引込み、みみずの眞似して土ほじくりする間に、折にふれて吐き出したるたは言共をかき集めたるものなり。其內容には村落生活の卽興寫生あり、鍬とるひまの偶感偶想あり、短篇小說あり、日記の斷片あり、長短の手紙あり、稀に村より這ひ出してのろ〳〵と旅しまわりたる紀行あり著者居村の風物を撮影したる印畫數葉挿みて、趣を助く

◎蘆花 德富健次郎著

小說 黑い眼と茶色の眼

第廿三版

定價壹圓五拾錢 郵税拾貳錢

十九の夏から二十の冬まで著者青春の生活を如實に現出す。夢の如く起り而して著者の半生に大打擊を與へた初戀挿話が大部分を占む懺悔の一片また「新思出の記」の一部。從來さま〳〵の形を以て著者を愛してくれた四圍四周の生命に對しこれ迄の水臭い態度をよして更に露骨に而して深刻に愛を酬ひたい心から著者は新しい企畫の手始めに先づ此れを書いた『著者曰』

◎長田幹彥著

自殺者の手記

第四版

定價七拾五錢 郵税六錢

發賣元 東京市銀座通新橋際 新橋堂小賣部 電話銀座五一九一番 振替東京四三六四二番

體力養成叢書

定價各冊金參拾錢 郵税各冊金四錢

- 大澤醫學博士述 冷水浴と冷水摩擦
- 二木醫學博士述 腹式呼吸
- 栗本醫學博士述 海水浴
- 樫田醫學士述 滋養物の攝取(上卷)(下卷)
- 遠山醫學博士述 深呼吸
- 伊藤衛生新報主筆述 呼吸靜座法

健康法研究叢書

定價各冊金參拾五錢 郵税各冊金四錢

- 森醫學士述 健腦法
- 深瀬ドクトル述 胃腸健康法
- 菊地醫學士述 運動競技に依る健康法
- 竹內ドクトル述 强肺法
- 宮原ドクトル述 食養健康法

以下順次刊行

組合せ本箱

東久邇宮、梨本宮、朝香宮を始め奉り九條公爵家、鍋島侯爵家、德川公爵家、伊藤公爵家、大隈侯爵家、蜂須賀侯爵家、淺野侯爵家、阿部伯爵家其他諸名家へ御上納御好評を蒙りたる組合本箱



- 室內の構造に應じて適宜に配置し得る 本箱
- 物を入れたるまゝ手輕に運搬し得る 本箱
- 藏書の增減に隨ひ自由に大さを伸縮し得る 本箱
- 硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有する 本箱
- 書物を分類するに至極便利なる 本箱
- 其他多くの優れたる特徵を有する 本箱

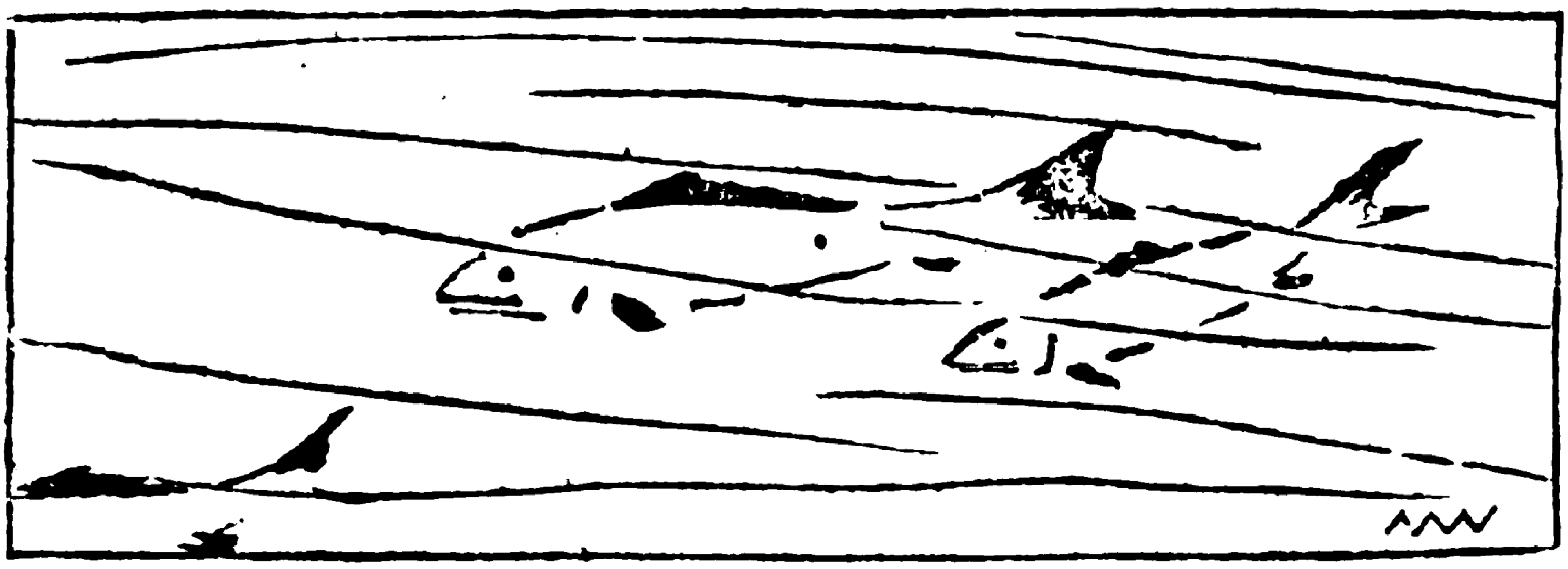
之を要するに

最善最良の本箱

東京市芝區二葉町九番地 新橋堂出版部 電話新橋一九一九番 振替東京二〇〇番

幼年時代

室生犀星



一

私はよく實家へ遊びに行つた。實家はすぐ裏町の奥まつた廣い果樹園にとり圍まれた小じんまりした家であつた。そこは玄關に槍が懸けてあつて槍の重い四枚の戸があつた。父はもう六十を越えてゐたが、母は眉の痕の青々した四十代の色の白い人であつた。私は茶の間へ飛び込むと、

「なにか下さいな。」

と、すぐお菓子をねだつた。その茶の間には、いつも時計の音ばかりが聞えるほど靜かで、非常にきれいに整頓された清潔な室であつた。

「またお前來たのかえ。たつた今歸つたばかりなのに。」

と、言つて茶棚から菓子皿を出して、客にでもするやうに、よくようかんや最中を盛つて出してくれるのであつた。母は、どういふ時も菓子は器物に容れて、いつも特別な客にでもするやうに、お茶と添えてくれるのであつた。茶棚や戸障

子はみなよく拭かれてゐた。私は長火鉢を隔つて座つて、母と向ひ合せに話すことが好であつた。

母は小柄なきりつとした、色白なといふより幾分蒼白い顏をしてゐた。私は貰はれて行つた家の母より、實の母がやはり嚴しかつたけれど、樂な氣がして話されるのであつた。

「お前おとなしくおゐでかね。そんな一日に二度も來ちやいけませんよ。」

「だつて來たけりや仕樣がないぢやないの。」

「一日に一ぺん位におしよ。そうしないとあたしがお前を可愛がりすぎるやうに思はれるし、お前のうちのお母さんにすまないぢやないかね。え。判つて——。」

「そりや判つてゐる。ぢや、一日に一ぺんづつ來ちや惡いの。」

「一日に一ぺんよ。」

私は母とあふごとに、こんな話をしてゐたが、實家と一町と離れてゐなかつたせいもあるが、約束はいつも破られるのであつた。

私は母の顏をみると、すぐに腹のなかで「これが本當のお母さん。自分を生んだおつかさん。」といつも呟いた。

「おつかさんは何故僕を今のおうちにやつたの。」

「お約束したからさ。まだそんなことを判らなくてもいいの。」

と、母はいつも答へてゐたが、私は、なぜ僕を母があれほど愛してゐるに關はらず他家へやつたのか、なぜ自分で育てなかつたかといふことを疑つてゐた。それに私がたつた一粒種だつたことも私には母の心が解らなかつた。

父は、すぐ次の間に居た。しかし晝間はたいがい畠に出てゐた。私はよくそこへ行つてみた。

父は、葡萄棚や梨畠の手入をいつも一人で、默つてやつてゐた。なりの高い武士らしい人であつた。

「坊やかい。ちよいと其處を持つてくれ。うん。さうだ。なかなかお前は悧巧だ。」

と、父はときどき手傳はせた。

畠は廣かつたが、林檎、柿、すもも等が、あちこちに作つてあつた。ことに、杏の若木が多かつた。若葉のかげによく熟れた美しい茜と紅とを交ぜたこの果實が、葉漏の日光に柔らかくおいしさうに輝いてゐた。あまりに熟れすぎたのは、ひとりで温かい音を立てて地上におちるのであつた。

「おとうさん。僕あんずがほしいの。採つてもいいの。」

「あ。いいとも。」

私は、まるで猿のやうに高い木を上つた。若葉はたえず風にさらさら鳴つて、あの美しいこがね色の果實は私の懷中にも手にも一杯に握られた。それに、木に登つてゐると、氣が清々して地上にゐるよりも、何とも云へない特別な高いやうな、自由で偉くなつたやうな氣がするのであつた。たとへば、そういふとき、道路の方に私と同じい年輩の友だちの姿を見たりすると、私は、その友達に何かしら聲をかけずには居られないのであつた。自分のいま味つてゐる幸福を人に知らさずに居られない美しい子供心は、いつも私をして樹の梢にもたれながら輕い小踊りをさせるのであつた。

畠は、一樣に規則正しい畝や圍ひに據つて、たとへば玉菜の次に豌豆があり、そのうしろに胡瓜の棚竹が一と圍ひ、といふ順序に總てが整然とした父の潔癖な性格と、むかし二本の大小を腰にした嚴格さの表はれでないものはなかつた。父の野良犬を追ふとき、小柄でも投げるやうに、小石は犬にあたつた。または烏などを趁ふ手つきが、やはり一種の形式的な道場癖をもつてゐて、妙に私をして感心させるやうな劍術を思はせるのであつた。

父の居間には、その襖の奥や戸棚には、驚くべき澤山の刀劍が納められてあつた。私はめつたに見たことがなかつたが、ぴかぴか漆塗の光つた鞘や、手柄の鮫のぼつぼつした表面や、×に結んだ柄糸の強い紺の高まりなどを、よく父の顔を見てゐると、なにかしら關聯されて思ひ浮ぶのであつた。

それに父は非常に健康であつた。へいぜいは俳句をかいてゐた。父は葡萄棚から射す青い光線のはいる窓さきに、習字机を持ち出して、よく短册をかいてゐた。幾枚も幾枚も書きそこなつて、

「どうも良く書けん。」

などと言つて、うつちやることがあつた。母はそういふ日は、次の間で縫仕事をしてゐた。れいの音一つない家の中には八角時計が、カタ・コトと鳴つてゐるばかりであつた。父も母も茶がすきであつた。二人で茶をのんでゐるとき、私も遊び友達に飽きてしまつて、よく其處へ訪ねてゆくことがあつた。

私はよく母の膝に凭れて眠ることがあつた。

「お前ねむつてはいかん。おうちで心配するから早くおかへり。」

と父がよく言つた。

「しばらく眠らせませうね。かあいそうにねむいんですよ。」

と、母のいふ言葉を私はゆめうつつに、うつとりと遠いところに聞いて、幾時間かをぐつすりと睡り込むことがあつた。そういふとき、ふと眼をさますと、わずか暫らく睡つてゐた間に、十日も二十日も經つてしまふやうな氣がするのであつた。何も彼も忘れ洗ひさらした甘美な一瞬の樂しさ、その幽遠さは、あたかも午前に遊んだ友達が、十日もさきのことのやうに思はれるのであつた。

母は私のかへるときは、いつも養家の母の氣を氣にして、襟元や帶をしめなほしたり、顏のよごれや手足の泥などをきれいに拭きとつて、

「さあ、道草をしないでおかへり。そして此處へ來たつて言ふんぢやありませんよ。」

「え。」

と私はいつも感じるやうな一種の胸のせまるやうな氣で、わざとそれを心で紛らすために玄關を馳け出すのであつた。

「おとなしくしてね。」

「え。おつかさん。さよなら。」

母は、いつも永く門のところに佇つてゐた。

二

私は養家へかへると、母はいつも、

「またおつかさんところへ行つたのか。」

とたづねる毎に、私はそしらぬ振りをして、

「いいえ。表で遊んでゐました。」

母は、私の顏を見詰めてゐて、私の言つたことが嘘だと言ふことを讀み分けると、きびしい顏をした。私は私で、知れたといふことが直覺されると非常な反感的なむらむらした氣が起つた。そして「どこまでも行かなかつたと言はなければならない。」といふ決心に、しらずしらず體躯が顫ふのであつた。

「だつてお前が實家へ行つてゐたつて、お友達がみな然う言つてゐましたよ。それにお前は行かないなんて、うそを吐く

もんぢやありませんよ。」

「でも僕は裏町で遊んでゐたんです。みんなと遊んでゐたんです。」

と、私は強情を張つた。「誰が言ひ附けたんだらう。」「もし言ひ附けたやつが分つたらひどい目に遭はしてやらなければならない。」と思つて、あれかこれかと友達を心で物色してゐた。

「お前が行かないつて言ふならいいとしてね。お前もすこし考へてごらん。此家へ來たら此處の家のものですよ。そんなにしげしげ實家へゆくと世間の人が變に思ひますからね。」

と、こんどは優しく言つた。優しく言はれると、あんなに強情を云ふんぢやなかつたと、すまない氣がした。

「え。もう行きません。」

「時々行くならいいけれどね。なるべくは、ちやんと家においでよ。」

「え。」

「これを持つておへやへゐらしやい。」

母は私に一と包みの菓子をくれた。私はそれを持つて自分と姉との室へ行つた。

母は叱るときは非常にやかましい人であつたが、可愛がるときも可愛がつてくれてゐた。しかし私はなぜだか親しみにくいものが、母と私との言葉と言葉との間に、平常の行爲の隅々に挾まれてゐるやうな氣がするのであつた。

姉は嫁入さきから戻つてゐた。そして一人でいつも寂しさうに針仕事をしてゐた。私は机の前に坐つて默つておさらひをしてゐた。

「姉さん。これをおあがり。」

と私はふとことから杏をとり出した。美しい果實はまだ青い葉をつけたまま其處邊に幾つも轉がつて出た。

「まあ。おさとから採つていらしつたの。」

「ええ。たいへん甘いの。」

「では母さんには秘密ね。」

「さう。いまおさとへ行つたつて叱られちやつたと…ろさ。」

姉はだまつて一つ食べた。姉は一日何も言はないでゐた。わづか一年も嫁入つて歸つて來た彼女は、生れかはつたやうに、陰氣な、考へ深い人になつてゐた。

「ねえさんはお嫁に行つてひどい目に會つたんでせう。きつと。」

「なんでもないのよ。」

姉はあとは默つてゐた。私達は杏の種をそつと窓から隣の寺の境内にすてた。

姉はいろいろな布類や小さな美しい箱や、目の青い人形や、絹でこしらへた財布や、嫁入さきが海岸だつたといふのでそこで集めた櫻貝姫貝ちようちん貝などを澤山に持つてゐた。それは小さな手提簞笥の中にしまつてあつた。私はそれを少しづつ頒けてもらつてゐた。

「これもすこし上げやう。」

と、一つ一つ少しづつ分けてくれた。私はことに美麗な透明な貝などを綿にくるんで、やはり貰つた箱にしまつておいた。姉は、ことに小布片が好であつた。樣々な色彩の絹るゐを大切に持つてゐた。どうしたはづみだつたか、姉の名あての手紙の束を見たことがあつた。

「それ何に。おてがみ！見せて下さい。」

と、私は何心なく奪ふやうにて取しらうとすると、姉は慌てゝそれを背後に隠して、そして赧い顔をした。

「何んでもないものですよ。あなたに見せても讀めはしないものよ。」

私は姉が赤くなつたので、見てはわるいものだといふことを感じた。きつと、姉の友達から來たので、私どもに知らしてはならないことを書いてあるのだと思つて、私は二度それを見やうとはしなかつた。

「かあさんにね。ねえさんが手紙をもつてゐるつていふことを言はないでせうね。」

と、姉は心配さうに言つた。

「言はないとも。」

「きつと。」

「きつとだ。」

私は小さな拇の言ために指切りをした。姉はお嫁前とは瘠せてゐたが、それでよく肥えてがつしりした手をしてゐた。私はさういふ風に、だんだん姉と深い親しみをもつてゐた。

晩は姉とならんで寝た。

「姉さん。はいつていい？」

などと私はよく姉と一しよの床にはいつて寝るのであつた。姉はいろいろな話をした。醫王山の話や、堀武三郎などといふ、加賀藩の河師の話などをした。

加賀藩では河師といふものがあつて、鮎の季節や、鱒の季節には、目の下一尺以上あるものを捕るための、特別た河川

の漁師であつて、帯刀を許されてゐた。ことに堀武三郎といふのは、加賀では大川である手取川でも、お城下さきを流れる犀川でも、至るところの有名な淵や瀬頭を泳ぎ捜ることが上手であつた。膳部職から下命があると堀はいつも四十八時間以内には、立派な鮎や鱒を生け捕つてくるのであつた。かれは、好んで、ぬしの棲んでゐるといふ噂のある淵を泳ぎ入るのであつた。そのころ、犀川の上流の大桑の淵に、ぬしがゐてよく馬までも捕られるといふことがあつた。

堀はその淵の底をさぐつて見た。夜のやうな深い靜寂な底は、からだも痺れるほど冷却つた清水が湧いてゐて、まるで氷が張つてゐるやうな冷たさであつた。その底に一つの人取鼈がぴつたりと腹這ふてゐた。で、堀は鼈の足の脇の下を探ると、鼈は二三尺動いた。まるで不思議な大きな石が動くやうに。――その鼈の動いた下に暗い穴があつた。かれは此處をくぐつた。内部は、三四間もあらうと思はれる廣さで、非常に澤山の鮒がこもつてゐた。堀はそれを手取りに必要なだけ（かれは必要以外の魚はとらなかつた。）つかまへて、穴を這ひ出やうとすると、れいの人取鼈がぴつたりと入口を蓋してゐた。

堀はまた脇腹をくすぐつて、動き出したすきに穴を出た。堀は、この話をしたが誰もそこへ入つて見るものがなかつた。それからといふものは堀はそこを唯一の「鮒の御料場」にしてゐた。

その堀が生涯で一番恐ろしかつたといふ話は、鞍が岳の池を潜つた時であつた。この鞍が岳は、加賀の白山々脈もやがて東方に盡きやうとしたところに、こんもりと盛り上つた山があつて、そこは昔佐々成政に攻め立てられて逃げ場を失つた富樫政親が馬上から城砦の池に飛び込んだ古戦場であつた。毎年かれが馬とともに飛び込んだといふうら盆の七月十五日に、いつもその定紋のついた鞍が浮き上つた。なかには鞍の浮き上つたのを見たといふ村の人もあり、その日

はべつにかはりはないけれど、何ともいへぬ池の底鳴りがするといふ人もあつた。ふしぎなことには、馬と一しよに飛び込んだ富樫政親の姿が、その折とうたう浮いてこなかつたことであつた。

その池は深く青藍色の沈んだ色を見せて、さざ波一つ立たない日は、いかにも其底に深い怨恨に燃え沈んだ野武士の靈魂が沈潜して居さうに思はれるほど、靜寂な、神秘的な褻い支配力をもつて人々の神經を震はせてくるといふことであつた。堀はこの傳説をきいて嗤つた。そして、彼れがこの池の底を探險するといふことが、お城下町に鳴りひびいて噂されたのであつた。

その日、堀は得物一つ有たずに池にもぐり込んだ。しづかな午後であつた。かれはかなり永い間水面に浮かなかつたが、しばらくして浮き上つてきた彼は、非常な蒼白な、恐怖の爲めに絶えず筋肉をぴくぴくさせてゐた。そして何人にもその底の秘密を話さなかつた。何者がゐたかといふことや、どう云ふぬしが棲んでゐたかといふことなど、一つも話らなかつた。唯かれは河師としての生涯に、一番恐ろしい驚きをしたといふことのみを、あとで人人に話してゐた。それと同時にかれは河師の職をやめてしまつた。

姉は話上手であつた。これを話し終へても私はまだ睡れなかつた。そして色々な質問して姉をこまらした。

「いつたい池の底に何者(なに)がゐたんでせう。」

「そりや判らないけれど、やつぱり何か恐ろしいものが居たんでせうね。」

「では今でも鞍が浮くんでせうか。」

「人がそう言ひつたへてゐるけれど、どうだか分らないわ。しかし恐(こは)い池だつて。」

私は話最中にその鞍が岳を目にうかべた。それは鶴來(つるぎ)街道を抱き込んだ非常に寛やかな高峯で、この峯つづきでは一

番さきに、冬は、雪が來た。

「高樫つて武士(さむらひ)はまだ池の中に生きてゐるの。それとも死んでしまつたの。」

「それが分らないの。生きてゐるかもしれないわ。」

と、姉は脅かすやうに言つて、

「もうお寢み。」と言つた。

私は輕い恐怖をかんじて姉にぴつたりと抱かれてゐた。姉の胸は廣く温かつた。やがて私は姉のあたたかい呼吸を自分の頰にやさしく感じながら眠つた。

三

私どもの市街(まち)の裏町のどんな小さな家々の庭にも、果實のならない木とてはなかつた。青梅の頃になると卵色した圓いやつが、梢一杯に撓み零れるほど實つたり、美しい眞赤なぐみの玉が塀のそとへ枝垂れ出したのや、青いけれど甘みのある林檎、杏、雪國特有のすもも、毛桃などが實つた。

私どもは殆んど公然とそれらの果實を石をもつて叩き落したり、塀に上つて採つたりした。ちやうど七つ位ゐの子供であつた私どもは、さうした優しい果實を掠奪してあるくためには、七八人づつ隊を組んで裏町へでかけるのであつた。それを「ガリマ」と言つてゐた。

「ガリマをしやうぢやないか。」

と發言するものがあると、みな一隊になつて果樹閑町へでかけた。しかし、それは全然道路の方へ樹の枝がはみ出た分の果實に限られてゐた。まるで南洋の土人のやうな、荒い併し無邪氣な掠奪隊であつた。

だから果實の木をもつ家々の人は、子供らが道路の方へ出た分の果實を採つてゐても、別に咎めも叱りもしなかつた。かへつて、人のよい中年の母らしい人がにこにこ微笑つて見てゐるのであつた。

「ガリマ隊の來ないうちに。」

と言つて、果實を急に採り初める家もあつた。私もよくその「ガリマ」隊に加はつたものであつた。「ガリマ」隊の過んで行つたあとの道路は、ちぎられた青葉若葉が乾いた路の上に、烈しい子供の惡戯のあとをのこして散らばつて居た。

私だちは空地の草場に輪をつくつて、「ガリマ」に據つて得た果實をみなに頒けつこをするのであつた。そして、みな子供らしい白い足を投げ出して、わいわい言ひながら、極めて自然らしい遊びにふけるのだ。いろいろな家の果實がそれぞれ異なつた味覺をもつてゐて、子供らはそれらを味ひ分けることが上手であつた。

私もやはり裏町を歩くと、何處の杏がうまくて、あそこの林檎が不味いといふことを良く知つてゐた。「ガリマ」隊が陣取つてゐると、そこらに遊んでゐた女の子供らも、みな言ひ合したやうに集つてくるのであつた。

「君らにも分けるよ。みな二つづゝだよ。」

などと言つて、にこにこしてゐる少女達にみな平等に分け與へることも、いつもの例になつてゐた。女の子らはやゝはにかみながらも、「ガリマ隊」のなかに兄さんなどもゐるので、みな親しく分けてもらつて、隊をはなれて遊ぶのであつた。いつごろからそういふ風習があつたのか知らないが、それが決して不自然なところがなく、また非常に惡びれたところが、見えなかつた。

「少し殘して行つておくれ。みな採られるとおぢさんの分がなくなるぢやないか。」

といふ家もあつた。そんな家にいい加減にして引あげた。どちらも微笑してゐる間に、自然とり交はされた禮儀が、

子供らの鋭感な心を柔らげるのであつた。

私は礫を打つことが好きであつた。非常に高い樹のてつぺんに、ことに杏などは、立派な大きなやつがあるかぎりの日光に肥り太つて、こがね色によく輝いてゐた。そんなときは、礫を打つて、不意に梢に非常な震動を與へた途端にその杏をおとすより外に方法はなかつた。

私は手頃な小石をもつと、ぴゆうと風を切つて梢を目がけて投げるのであつた。礫は青葉の間をくぐつたり、觸れた青葉を切つたりして、はつしと梢にあたるのであつた。たいがい能く熟れ切つた杏の蔕は弱くなつてゐて、美しい圓形をえがいて花火のやうに落ちてくるのであつた。さういふときは、子供らは一切に歡喜に燃えた聲をあげた。

私はまたよく河岸へ出て、礫を打つたりしたものであつた。ともかく、私の礫は、遊び友達の中でも非常な腕利として相應な尊敬を拂はれてゐた。たとへば、Aの町の「ガリマ」隊と、Bの町の「ガリマ」隊とが、よく靜かな裏町で出會すことがあつた。そんなときは、すぐに喧嘩になつた。そんな時は、たいがい石を投げ合ふので、私が一番役に立つた。

私はいつも敵の頭を越す位ゐに打つた。一個から二個、三個といふ順序に、矢つぎ早に打つのが得意でそれが敵をして一番恐怖がらせるのであつた。私はたいがい脅かしにやつてゐたが、礫打ちの名人として、私が隊にゐると敵はいいかげんにして引上げるのであつた。

喧嘩が白兵戰になると、隨分ひどい撲り合ひになるのであつた。竿やステツキで敵も味方も滅茶苦茶になるまで、やり續けるのであつた。私は組打ちが甘かつた。そのかはり四五人に組敷かれて頭をがんがん張られることもすくなくなかつた。私はどういふときにも合つて泣かなかつたために、仲間から勇敢なもののやうに思はれてゐたが、心ではいつも泣いてゐたのだ。

四

小學校ではいちばん唱歌がうまかつた。作文も圖畫もまづかつた。私はいつの間にか家でおとなしかつたが學校では恐れものになつてゐた。私はよく喧嘩をした。喧嘩をするたびごとに私が加はつてゐても居なくても、私が發頭人にさせられた。そして「おのこり」によく會つた。

私はたえず不安な、胸の酸くなるやうな氣で學課のはてるのを待つた。それは先生が私の讀み方一つが異つてゐても、他のものが間違つてゐては然うではなかつたが、私だけはいつも居殘りを命ぜられたからであつた。「今日もやられるかなあ。」と考へてゐると、きつと、

「室生、かへつてはいけない。」

と居殘りにあつた。

私のちよいとした讀みちがひでも然うだ。ことに喧嘩から疑はれて一週間も教室に殘されたことは、殆んどいつものことであつた。私の犯さない罪はいつも私の辯解する暇なく私の上に加はつてゐた。私は誰にも言ひたいだけの辯解ができなんだ。

私は教室の寂しいがらんとした室内に、一時間も二時間も先生がやつて來て「かへれ」といふまで立つて居なければならなかつた。學友の歸つて行く勇ましい群が、そこの窓から町の一角まで眺められた。みな愉快な、喜ばしげな、温かい家庭をさして行つた。かれらの歸つて行くところに彼等の一日の勉學を酬ゆるための美しい幸福と慰藉とが、その廣い温かい翅をひろげてゐるやうにさへ思はれた。私はそとの綠樹や、家にゐる姉の優しい針仕事のそばで話する愉快を考へて、たへず兎のやうに耳を立て、今も先生が來てかへしてくれるかと、それを一心に待つてゐた。

私は教室の硝子が何枚あるかといふこと、いつも私の立たされる柱の円めがいくつあるかといふこと、ボールドにいくつの節穴があるかといふことを知つてゐた。私はしまひには窓から見える人家の屋根瓦が何十枚あつて、はすかひに何枚ならんでゐるかといふこと、はすかひの起點から下の方の起點が決して枚數を同じくしない點からして、殆んど四角な屋根が、決して四角でないことなどを諳んじてゐた。

澤山の生徒の前で

「お前は居殘りだ。」

と先生から宣言されると、澤山の生徒らにたいして私はわざと「居殘りなんぞは決して恐くない。」といふことを示すために、いつも寂しく微笑した。心はあの禁足的な絶望に齎せられてゐるに係はらず、私はいつも微笑せずにはゐられなかつた。

「なにがおかしいのだ。馬鹿。」

と、私はよく怒鳴られた。そんなとき、私は私自らの心がどれだけ酷く揺れ悲しんだかといふことを知つてゐた。をさない私の心にあの酷い荒れやうが、ひびの入つた甕のやうに深く刻まれてゐた。私はときどき、あの先生は私のやうに子供の時代がなかつたのか、あの先生のいまの心と、私のをさない心とがどうして合ふものかとさへ思つた。

しかし私は先生に憎まれてゐるといふ、心理上の根本を見るほど私はおとなではなかつた。私は憎まれてゐた。――私は、先生のためならば何んでもしてあげたいと思つてゐた。私の所有品、私の凡てのものを捧げていいから、この苦しい居殘りから逃れたいと思つてゐた。その半面に私はときどき、とても子供が感じられない深い慘酷さの仕返しとして、あの先生がこの學校へ出られないやうにする方法がないものかとも考へてゐた。そういふ考へはとうてい實現で

きなかつたし、また、そういふ考へをもつことも恐ろしいことに思つてゐた。

家庭では毎日居殘りを喰ふために、母の氣嫌が惡かつた。珍らしく居殘りをされなかつた日は、こんどは母がやはり居殘りにされたんだらうと言つて責めた。私はどうすればよいか分らなかつた。

私は人氣のない寂然とした教室で、ひとりで涙をながしてゐた。

「ね。早くかへつてゐらしやい。あなたさへ溫和しくして居りや先生だつてきつと居殘りはしなくなつてよ。あなたが惡いのよ。みな自分が惡いと思つて我慢するのよ。えらい人はみな然うなんだわ。」

と言つてくれた姉のことばが頻りに思ひ出されてゐた。私はしらずしらず教壇の方へ行つて、ボールドに姉さんといふ字をかいてゐた。私はその字をいくつも書いては消し、消しては書いてゐた。その文字が含む優しさはせめても私の慰さめであつた。姉の室の內部が目に浮んだ。姉の寂しさうに座つてゐる姿が目に入つた。私は泣いた。

その時、突然教室の戶が開いた。そして先生のあばた面が出た。私は目がくらやむほど喫驚して、指定された柱のところへ行つて棒立ちになつた。私の空想してゐた花のやうな天國的な空想が、まるで形もないほど破壞されたのであつた。

「何をしてゐるんだ。なぜ命令けたところに立つてゐないんだ。」

と、私は眉さきを酷く小衝かれた。私はよろよろとした。私は非常な烈しい怒りのために膝がガタガタ顫へた。私は默つて俯向いてゐた。何を言つても駄目だ。何も言ふまいと心で誓つた。姉もさう言つてくれたのだ。

「なぜ先生の言ひつけ通りをしないのだ。」

このとき、私は横顏を撲られた。私は左の頰がしびれたやうな氣がした。それでも私は默つてゐた。私はここで教る

れてもものを言ふまいといふ深い懸命な忍耐と努力とのために、私は私の唇を噛んだ。私はこの全世界のうちで一番不幸者で、一番ひどい苦しみを負つてゐるもののやうに感じた。

「よし貴様が默つてゐるなら、いつまでも其處に立つて居れ。」

から彼は言つて荒々しく教室を出て行つた。私はやつと顔をあげると、いままで耐へてゐたものが一度に胸をかき上つた。顔が火のやうに逆上した。私は痛い頬に手をやつて見て、そこが腫れてゐることに氣がついた。私は撲られたとき、もうすこしで先生に組付くところであつた。けれども耐へた。

私はもう午後五時ごろのやうに思つた。そして窓から見てゐると先生方はみな歸つて行つた。そのなかに私の先生もゐた。然うだ。先生がかへつては、もうとても歸してくれるものが居ないのだ。

私はすぐに自分の席からカバンを取ると、さつさと歸つた。そとは樂しかつた。うちへかへると母は小言を言つた。

「また居殘りでせう。」

と言つた。

私は姉の室へはいると、もう眼に一杯の涙がたまつた。姉はすぐに直覺した。私は姉に縋りついて心ゆくまで泣いた。

「あなたの先生もひどい方ね。ちよいとお見せ。まあ可哀想にね。」

と、姉は私の頬を撫でて、涙をためた目で私を見つめた。私は胸が一杯でものが言へなかつた。言ひたいことが澤山あつた。しかしどうしても口へ出なかつた。

「あたし先生に會つてあんまり酷いつて言つてやらうかしら。」

と姉は昂奮して言つた。

「いけない。いけない。そんなことを言つたらどんな目に會ふかしれないの。」

と、私は姉をゆかせまいとした。

翌日起きると私は躊躇りながら登校の道を行つた。私は昨日逃げて歸つたのを咎められる不安や、またあの永い居殘りを思ふだけでも氣が滅入り込むのであつた。雨は兩側の深い庇からも流れてゐた。ほかの同級生はみな元氣に歩いて行つた。私は學校の「野町尋常小學校」と太い墨でかいた門のところで、極度の嫌惡のために牢獄よりも忌はしく呪ふべき建築全體を見た。「私はなぜこんなところで物を教はらなければならないか」といふ心にさへなつた。あの商家の小僧さんのやうに何故自由な生活ができないのかとさへ思つた。

先生はそしらぬ振りしてゐた。私はよろこんだ。私がいつまでも昨日殘つてゐたものだと思つてゐるのだと、心を安んじてゐた。五限がすむと生徒が行列をつくつて下駄箱の方へ行くのであつた。私も「けふこそ早く歸れるのだ。」とひそかに心を躍らせた。そして、先生の前を通らうとすると、

「お前は居殘るんだ。」

と、いきなり襟首をつかんで、行列から引ずり出された。まるで雀のやうにだ。私はかつとした。腸がしぼられたやうに縮み上つた。眞赤になつた。ものの二分も經つと私はよく馴らされた厚顔さに、その圖々しい氣持ちがすつかり自分の心を支配し出したことを感じた。「どうにでもなれ。」といふ氣になつた。私の目はいつものやうにじつと動かなくなつた。頭から足まで一本の棒を刺し徹されたやうな、しつかりした心に立ち還つてゐた。

私は昨日のやうに教室に立つてゐた。

「一枚二枚三枚……。」

と、人家の屋根瓦を讀みはじめた。何度も何度も讀みはじめた。氣が落ちつくと、だんだん瓦の數が不明なくなつた。眼が一杯な涙をためてゐた。

私は、先生のみにくいぼつぼつに穴のあいた天然痘の痕のある顏を思ひうかべた。それが怒り出すと、一つ二つの穴が一つ一つに赤く染つて行つた。そんなとき、私はいつも撲られた。チョオクの粉のついた大きな手が、いつも俯向いて宿命的な苛責に震へなゐる私の目からは、いつもそれが人間の手でなくて一本の棍棒であつた。その棍棒が動くたびごとに、私の全身の注意力と警戒と憤怒とがどつと頭にあつまるのであつた。私の怒りはまるで私の腹の底をぐらぐらさせた。

その日は私の外に、貧しいボロを着た貧民町の同級生が私と同じやうに殘されてゐた。かれは默つてゐた。かれは面白さうに外を見てゐた。私はかれが立つてゐると、さぞ私のやうに足がだるいだらうと思つて言つた。

「君は腰掛にゐたまへ。先生が來たら言つてやるから。」

「さうか。」

と、言つてかれは腰掛に座つてゐた。かれは室の奥の方にゐたのだ。私は入口にゐたので、先生が來れば見えるのであつた。

先生が來た。私はすぐかれに注意した。

先生は、私の方へ來ないでかれの方へ行つて何か小聲で叱つてゐた。かれは泣いて謝まつてゐた。汚ない顏ぢうを涙で洗ふにまかせた二目と見られない顏であつた。

「では歸んなさい。」

と、かれは許されて出て行つた。こんどは私の方へ來た。

「何故昨日許しもしないのに歸つたのだ。きさまくらゐ強情な奴はない。」

私は「また何故が初まつた。」と心でつぶやいた。

「何とか言はないか。言はんか。」

私はその聲の大きなのにびつくりして目をあげた。私は極度の怨恨と屈辱とにならされた目をしてゐたにちがひない。

「何故先生を睨むのだ。」

私は怒りのやり場がなくなつてゐた。私はカバンの底にしまつてあるナイフがちらと頭の中に浮んだ。突然天井が墜落したやうな、目をふさがれたやうな氣がして、私は卒倒した。とても小供の私には背負ひきれない荷物を負つたやうにだ。

私は間もなく先生に起された。私は氣絶したのであつた。私は夢からさめたやうに、ぼんやり頭の中の考へる機械をそつくり持つて行かれたやうな氣がしてゐた。

先生は急にやさしく。

「おかへりなさい。今日はこれでいいから。」

と、私は表へ出ることができた。私は「大きくなつたら……」と深い決心をしてゐた。「もつと大きくなつたら……」と地べたを踏んだ。私の心はまるできちきちな石ころが一杯つまつてゐるやうであつた。私はこの日のことを心にち始

にも言はなかつた。唯心の底深く私が正しいか正しくないかといふことを決定する時期を待つてゐた。

五

九歳の冬、父が死んだ。

朝から降りつもつた烈しい雪は、もう私がかけつけたころは尺餘に達してゐた。父のからだは白絹の布で覆はれてゐた。その上に立派な一と腰がどつしりと惡魔除けにのせられてあつた。父は老衰で二三日の臥床で眠るやうに逝つた。

お葬式の日は、やはり雪がちらちら降つてゐた。母と一しよに抱かれるやうに車に乘つた。途中雪がたいへんで、行列が遅れがちであつた。

私はそれからは非常な陰氣な日を送つてゐた。父の愛してゐた白といふ犬が、いつも私のそばへふらふらやつて來た。毛並のつやつやしい純白な犬であつた。

ある日、私は實家へゆくとゴタゴタしてゐて、大勢の人が出たり入つたりしてゐた。母は私にお父さんの弟さんが越中から來たのだと言つてゐた。四五日すると母がゐなくなつて、見知らない人ばかりゐた。母は追ひ出されたのであつた。

母は私にも別れの言葉もいふひまもなかつたのか、それきり私は會へなかつた。母は父の小間使だつたので、父の弟が追ひ出したことが分つた。私はあの廣い庭や畠を二度と見ることができなかつた。いつも茶の間で長火鉢で向ひ合つて話した上品なおとなしい母はどこへ行つたのだらう。私は母にも姉にも默つてゐた。母はそのことを口へも出さなかつた。私はひまさへあれば、白をつれて町を歩いてゐた。

「シロ！　來い。」

といふと、父が亡くなつてから、ねむるところもないこの哀れな生きものは、何人よりも私を好いてゐたらしかつた。私はこの生きものと一緒にゐると、何かしら父や母について、引き續いた感情や、言葉の端々を感じ得られるのであつた。私はどこかで母にあひはせぬかと、小さい心をいためながら、あるときはずつと遠くの町まで歩きまはるのであつた。母と同じい年頃の女にあふと、私は走つて行つて顏をのぞき込むのであつた。私のこの空しい努力はいつも果されなかつた。

姉はよく私のこの心持を知つてゐた。姉はもう嫁には行かなかつた。いつも家事のひまひまには室にゐて靜かに針仕事で日をくらしてゐた。そして私がひつそりと奧庭へ入れてをいたシロに、御飯をやつたりしてくれた。シロはもう私の家を離れなかつた。私はよく庭へ出てシロと座つて、深い考事をしてゐたりしてゐた。私はだんだん子供らしくない、むつちりとした、默つた子供であつた。

シロのことでよく母から小言が出た。

「そんな犬なぞどうするの。あつちい放してゐらしやい。」

とよく言はれたものだ。私は、わざと放しに行くやうに見せて磧へなど行つて遊んでゐた。

「シロ！　行け。」

と、けしかけるとシロはたいがいの犬を負かせた。私はそうして時間を潰してかへつて來て、

「放して來ました。」

と報告しておいた。そのときはもうシロは奧庭にはいつて圓々とねてゐた。母は困つてゐたが、私があゝした嘘をつ

くことをしらなかつた。しまひには、出入の大工にたのんで母は放させたが、やつぱり歸つて來た。そんなとき、私は嬉しかつた。

「道を忘れないで歸つて來い。きつと來い。」

と、私は大工が持つてゆくときに、心の中でつぶやくのであつた。

姉は

「あんなになついたんだから置いてをいたらどうでせう。」

と母に言つたりした。

「でもお實家(さと)の犬だし、何だか氣味がわるくてね。」

と言つてゐた。そして私には、

「あんまりシロシロつて可愛がるから家から外へ行かないんだよ。」

と、小言をいつてゐた。

けれども私はシロを愛してゐた。

ある寒い雪の晩方のことであつた。私はだんだん暮れ沈んで雪が青くなつて見える門の前で、いつまでも歇むことのない北國の永い降雪期を心で厭ひながら、あの何ともいへない寂しい音響(おと)といふ音響(おと)のはたと止んだ靜かな町を、背けに腰をまげて縮んだやうに行く往來の人を眺めてゐた。近在の人であらう。みな急がしげに、しかも音のない雪道を行くのを得もいはれず淋しく見送つてゐた。どの人を見ても痩せて寒げであつた。

私はふと氣がつくと、白(シロ)がぐつたり首垂れて、しかも耳から鮮血が白い毛並のあたりに、痛々しく流しながら歸つて

來るのを見た。私はかつとなつた。

「シロ！　誰にやられたのだ。」

と、私はこの哀れな動物に殆んど想像することのできないほどの深い愛を感じた。そしてこの耳を嚙んだ對手の犬に復讐ひなければならなかつた。

「シロ！　行け。何處でやられたのだ。」

と、私はシロとともに無暗に昂奮して、シロの來た方の道を走つた。シロは高く吠えて私よりさきに走つた。

シロは裏町のある家の門のところで、急に唸り出した。門の中から黑白の斑點のある大きな犬が飛び出した。シロは私といふ加勢に元氣づけられたために、いきなり飛びついた。けれどもシロは小さかつたために仰向けに組み敷かれた。シロは悲鳴を擧げた。私はもう我慢ができなかつた。いきなり下駄を脫ぐと雪の中を素足になつて、上に乘りかかつてゐるシロの敵をめちやくちやにひつぱたいた。敵は悲鳴をあげた。シロはその隙に起き上つて完全に敵を組みしいて嚙みついた。

「シロ。しつかりやれ。僕がついてゐる。」

と、私は冷たさもしらないで雪の上をとんとん踏んだ。シロは勝つた。

と、そこへ門の中から私とは二級上の少年が出て來た。そしてこんどは自分の犬を私の犬にけしかけた。

「生意氣言ふな。きさまの犬より僕のやつは強いんだ。」

と、私は彼の前へ飛びかかるやうに進んだ。

「そんな汚ない犬が强いもんか。」

と、彼は眞蒼になつて言つた。
「犬より君の方があぶないよ。家へはいつてゐた方がいいよ。」
「小さなくせに生意氣をいふな。」
「もう一度言へ。」
と、かう私はいつておいて、いきなり得意の組打ちをやつた。私はかれの脊を兩手でしつかり抱いて、くるりと、腰にかけて雪の上に投げつけた。そして私は馬乘りになつて自分でどれだけ撲つたか覺えないほど撲つた。私は喧嘩は早かつた。そして非常な敏活な、稻妻のやうにやつて了ふのが得意であつた。

私は下駄をはいてシロとかへりかけた。やつと起き上つた彼は、「覺えてゐろ。」と言つた。私は冷笑してかへつた。私はそれから道で白をなでてやつた。そして「負けたら歸へるな。」と言つてきかせた。

ある日、學校からの歸途(かへりみち)のことであつた。裏町の塀のところに上級生らしい私とは大きい少年が三人かたまつて、私の方を向いて囁き合つてゐた。氣がつくと、此間の犬の喧嘩のときの上級生が交つてゐた。私は直覺的に待伏を食つてゐることを知つた。私はすぐカバンの革紐を解いて、さきの方を固く結んだ。私の用意は、かれらの前にまで歩いてゆくうちに整つてゐた。

れいの少年はいきなり私の前に立ち塞がつた。
「この間のことを覺えてゐるか！」
と、かれは一歩前へすすんだ。
「覺えてゐる。それがどうしたのだ。仕返しをする氣か。」

かれはいきなり飛びつからうとした。私は革紐をひゆうと風を切つて、かれの後腦を叩いた。かれは蹌踉とした。その時まで默つてゐた彼の友達が右と左とから飛びつからうとした。私はまた革紐を鳴した。そのすきに私は足を蹴り上げられた。膝皿がしびれた。私は倒れた。そして私はめちやくちやに叩かれた。私は彼らが去つたあとで目まひがして、やつと家へかへつた。しかし翌日はもう元氣になつてゐた。

學校の便所で昨日の仲間の一人に會つた。私は聲をもかけずに其上級生をうしろから擲りつけてをいて、コンクリートの上へ投げ飛ばした。

かへりに例の上級生が五六間さきへ行くのを呼びとめるとかれは逃げ出した。私はすぐさま手頃な小石を拾つた。礫はかれの踝にあたつた。かれは倒れた。私はかれをそのさきの日のやうに擲つた。澤山の學友らは私らをとり捲いてゐたが、誰も手出しをしなかつた。それほど私はみなから敬遠されてゐた。私はかれを尻目にかけた去つた。

私はしかしそういふ喧嘩をした日は淋しかつた。勝つて對手を酷い目にあはせばあはすほど私は自分の中の亂暴な性分を後悔した。してはならないと考へてゐても、いつも外部から私の危險性が誘ひ出されるごとに、私は抵抗しがたい自分の性分のために、いつも淋しい後悔の心になるのであつた。

私の然うした亂雜な、たへず復讐心に燃えた根強い一面は、多くの學友から危險がられてゐたのみならず、非常に怖られてゐたので、親しい友達とてはなかつた。私はひとりでゐる時、外部から私を動かすもののゐない時、私は弱い感情的な少年になつて、いつも姉にまつはりついて居た。

「お前がまあ喧嘩なんかして強いの。おかしいわね。」

と姉は、よく近所の少年らの親元から、私にひどい日にあつた苦情を持ち込まれたときに、笑つて信じなかつた。

姉の前では、優しい姉の性情の反射作用のやうに温和しく、むしろ泣蟲の方であつた。私が學友から一人離れて歸途をいそぐときは、いつも姉の顏や言葉を求めながら家につくのであつた。姉なしに私の少年としての生活は續けられなかつたかもしれない。

六

うしろの犀川は水の美しい、東京の隅田川ほどの川幅のある川であつた。私はよく磧へ出て行つて、鮎釣りなどをしたものであつた。毎年六月の若葉がやや暗みを帶び、山々の姿が草木の繁茂するにしたがつて何處となく茫々として膨れてくるころ、近くの村落から胡瓜殼のやつてくるころには、小さな瀬や、砂利でひたした瀬がしらに、背中に黒いほくろのある若鮎が上つてきた。

若鮎はあの秋の雁のやうに正しい、可愛げな行列をつくつて上つてくるのが例になつてゐた。わづかな人聲が水の上に落ちても、この敏感な慓悍な魚は、花の散るやうに列を亂すのであつた。

私はこの岡の少年がみなやるやうに、小さな尾籠を腰に結んで、幾本も結びつけた毛針を上流から下流へと、たへまなく流したりしてゐた。鮎はよく釣れた。小さな奴がかかつても竿の尖端が神經的にぴりぴり震へた。その震へが手まきまで傳はると、こんどは餘りの歡ばしさに心が躍るのであつた。

瀬はたへずさあさあーと流れて、美しい瀬波の高まりを私達釣人の目に注がす。そこへ毛針を流すと、あの小さい奴が水面にまで飛び上つて、毛針に銜るのであつた。ことに日の暮になるとよく釣れた。水の上が暮れ殘つた空の明りにやつと見わけることのできるころ、私は殆んど尾籠を一杯にするまで、よく釣りあげるのであつた。

川について私は一つの話をもつてゐた。

それは私が釣をしに出た日は、雨つゞきの擧句増水したあとであつた。あの増水の時によく見るやうに、上流から流された汚物が一杯蛇籠にかかつてゐた。私はそこで一體の地藏を見つけた。それは一尺ほどもある、かなり重い石の蒼く水苔の生えた地藏尊であつた。私はそれを庭に運んだ。そして杏の木の蔭に、よく町端れの路傍で見るやうな小石の蓮座を拵えて其上に鎭座させた。

私はその蓮座のまはりにいろいろな草花を植えたり、花筒を作つたり、庭の果實を供へたりした。毎月二十四日の緣日を姉から教へられてから、その日は、自分の小使からいろいろな供物を買つて來て供えてゐた。

「まあお前は信心家ね。」

と、姉もまた赤い布片(きれ)で衣(ころも)を縫つて、地藏の肩にまきつけたり、小さな頭巾をつくつたりして、石の頭に冠せたりした。私はいつも此拾つて來た地藏さんに、いろいろな事をしてあげると云ふことが、決して悪いことでないことを知つてゐた。ことに、地藏さんは石の橋にされても人間を救ふものだといふことをも知つてゐた。私はこの平凡な、石ころ同様なものの中に、何かしら疑ふことのできない宗教的感覺が存在してゐるやうに信じてゐた。

「きつといいことがあるわ。お前のやうに親切にしてあげるとね。」

と、姉は毎日のやうに花をかへたり、掃除をしたりしてゐる私を褒めてくれてゐた。私は嬉しかつた。然うした木の蔭に、自分の自由に作りあげた小さな寺院が、だんだんに日を經る(へ)に從つて、小屋がけが出來たり、小さな提灯が提げられたりするのは、何とも云へない、唯それはいい心持であつた。何かしら自分の生涯を賭して報ひられてくるやうな、ある豫言的なるものを感じるのであつた。私は毎朝、洗面してしまふと禮拜しに行つた。ときとすると、あぐらを掻いたお膝のところに大きな夜露がしつとりと玉をつゞてゐたりしてゐた。そのつぎに姉がきつとやはりお詣りをしに來た。

ことに夜は森厳な氣がした。木の葉のささやきや、空の星の光りなどの一切をとり纏めた感覺が、直接地藏を崇拜する私の心を極めて高く嚴粛にした。私はそこで、大きくなつたら偉い人になるやうに熱禱するのであつた。

不思議なことは、この地藏さんを大切にしてからは、よく蟻などが地藏さんのからだを這つてゐるのを見ると、これまでとは別樣な特に地藏さんの意志を繼いでゐるやうなものにさへ思はれた。蝸牛にしてもやつぱり此の神佛の氣を受けてゐるやうに感じた。私はだんだん地藏さんの附近に存在する昆蟲を殺すことをしなくなつた。それがだんだん長じて街路でも生きものを踏むことがなく、無益に生命をとらなくなつてゐた。

「お前くらゐ變な人はない。しかしお前は別なところがある人だ。」

と、母も私の仕事に贊成してゐた。

「しばらくなら誰でもやるものだが、あの子のやうに熱心にする子はない。」

と言つてゐた。

私はそれらの贊嘆にかかはらず、ときとして怠慢にしてこれが何になるとか、いますぐ自分に酬ひられるとかといふことを考へなかつた。私はこの小さな寺院の建立に、いろいろな器物の增してゆくところに、自分の心がだんだん離れないことを知つてゐた。ことに私が川から拾つて來たことが、母などが直ぐ大工を呼んで立派なお堂を建てたらと言ひ出すごとに、ひどく反對させた。いまさら母の力を借りなくとも、私は私一個の力でこれを祭りたいと思つてゐた。私は私の神佛としてこれを庭の一隅に置きたかつた。誰人の指のふれるのを好まなかつた。

隣家に飴屋があつた。そこの米ちやんといふ子は庭がなかつた。私はその少年をよく庭へ入れて遊んだ。私はこの友達と磧から石を運んだり、砂を持ち込んだりした。私はだんだん大仕掛けに建てて行つた。一つのものが殖えれば、も

つと別な御馳走なものが欲くなつて來た。私は町へ出て三寶や器物や花筒や燭臺を購つて來た。

姉は毎日ごはんのお供物をした。私は長い庭の敷石をつたはりながら、朝のすずしい木のかげに白い湯氣のあがるお供米を捧げてきてくれるのを見ると、私は涙ぐみたいほど嬉しく神々しくさへ感じた。

「姉さん。ありがとう。」

と私はあつく感謝した。私のいろいろな仕事を見てゐる姉は、いつも清い美しい目をしてゐた。「姉さんの目はなんて今朝はきれいなんだらう。」と心でかんじながら、私は花をかへたりしてゐた。

私は益々ひどく一人ぼつちになつた。學校へ行つてゐても、みんなが馬鹿のやうになつて見えた。「あいつらは私のやうな仕事をしてゐない。信仰をしらない。」と、私はみんなとは特別な世界にもつと別様な空氣を吸つてゐるもののやうに思つてゐた。先生を尊敬する心には元よりなつてゐなかつた。あの酷い生涯忘れることのできない日にあつてからの私は、いつも冷然とした高慢の内に、絶え間もない忍辱に虐げられたあの日を目の前にして、心を砕いて勉强してゐた。私が成人した後に私が受けたよりも數倍な大きい苦しみを彼らに與へてやらう。かれらの現在とはもつと上に位した總ての點に優越した勝利者になつて見かへしてやらうと考へてゐた。

私はあの意地のわるい學友らは、もはや私の問題ではなくなつてゐた。全然、あの喧嘩や小競合が馬鹿々々しいのみならず、その對手としてゐることが最早私に不愉快であつた。

明治三十三年の夏、私は十一歳になつてゐた。

七

私の母が父の死後、なぜ慌しい逍放のために行衛不明になつたのか。しかも誰一人として其行衛を知るものがなかつ

たのかと云ふことは、私には三年後にはもう解つてゐた。あの越中から起して來た父の弟なる人が、私の母が單に小間使であつたといふ理由から、殆んど一枚の着物も持ちものも與へずに追放してしまつたのであつた。この慘めな心でどうして私に會ふことができたらうか。彼女はもはや最愛の私にもあはないで、しかも誰人にも知らさずに、しかもその生死さへも解らなかつたのである。

私は母を求めた。私があの小さな寺院建立の實行や決心や仕事のひまひまには、いつも行衞のしれない母のために、「どうか幸福で健康でゐらしやいますやうに。」と祈つたのであつた。この全世界にとつては宿のなかつたあの悲しい母の昨日にくらべて變り果てた姿は、どんなに苦しかつただらうと、私はじつと空をみつめては泣いてゐた。私がもつと成人して全世界を向ふに廻しても、私の母の悲しみ苦しみを弔ふためには、私は身を粉にしても係はないとさへ思つてゐた。私は母を追ひ出したといふ父の弟らしい人を裏町であつたとき、私は一種の狂氣的な深い怨恨のために跳りかからうとさへ思つたのであつた。私があのとき、その弟の人を殺さう」さへ日夜空想したことは、決して嘘ではなかつた。私はただ彼れを睨んだ。その中に私は凡ての複雜な感情の激昂によつて、呪はるべく値せられた下卑な人間を憎惡した。

私があのいたみ易い目をして、どんなに母の容貌を描いてそれと語ることと空想することを樂しみにしてゐたか！私は人のない庭や町中で、小聲で母の名を呼ぶことさへあつた。しかも永久に會ふことのできない母の名を――。

私は「然うだ。人間は決して二人の母を持つ理由はない。」と考へてゐた。そんなとき、現在の母を忌々しく冷たく憎んだ。私は一方には濟まないと思ひながら、それらの思念に領されるとき、私は理由なく母に冷たい瞳を交したのであつた。

「姉さん。僕の母は――。」

と私は時々言つたものだ。姉は思ひやりの深い目で、そんなとき、いつもするやうに私を優しく抱きながら。

「どこかで仕合せになつてゐらしやいますよ。そんなことをこれから言はないで頂戴。」

と言つてくれた。

「何處なんだ。」

と、私はすぐに烈しく昂奮した。何者にもたえがたい激怒は、母のことになると最も信頼してゐた姉にまで及んだ。

「そんなこはい顔をしては厭。」

「僕の顔はコワいんだ。」

と、私は姉から離れた。こんなときは、姉でも私の心を知つてくれないやうに、生ぬるい感じのもとに怒りをかんじた。もう姉さんぞはゐても居なくても、また、愛してくれても呉れなくてもいいとさへ思つてゐた。世界ぢうが私を不幸にするやうに思つて、私は益々深く怒るのであつた。

「姉さんに僕の心がわかるものか。」

と、私はすぐ表へ驅け出すのであつた。たつた一人の友であるものから離れて、ひとり裏町や空地などを歩いてゐた私には、木も共みどりも人家も別なものに思はれた。何も彼も冷たく悲しかつた。

そんなときは、何にも言はない白が尾いて來た。そして彼がみな解つてゐるやうな悲しい顔をしてゐた。——姉は母とあの廣い庭へ出て茶摘みをしたり、庭で父と三人でお菓子をたべたりしたことが思ひ出された。初夏の風はいつも若葉の匂ひをまぜて吹いてゐた。私は小さな頸をかしげるやうにして、父と母の顔を半分づつに眺めてゐた。隔たりのない親密さが私達親子の上にあつた。そんなとき、シロも傍の草のなかに平和にねむつてゐた。

「お前はいつたい成人して何になるのか。」

と父はよく笑顔でたづねた。

私はだまつてにこにこしてゐた。

「さあ、この子は考へることが上手だから必然(きつと)先生にでもなるかもしれない。——ね。お前そう思はないかい。」

と母は言つた。

「僕なにになるか分らないんだ。何かこう偉い人になりたいなあ。」

と私は本當に何になつていいか分らなかつた。

「然うだ。ともかくも偉い人間になれ。その心掛けが一番いいんだ。」

「そうね。それがいい。」

と母も言つた。

私も目的のない漠然とした意志のもとに、ともかくも「偉い人」になりたいと思つてた。しかし軍人のきらひだつた私は、これ以外に偉い人になりたいと思つてゐた。

「さあ。もうすこしで摘んでしまへるんだから、やつて仕舞う。」

「ええ。」

かうして父と母とは茶畑の中へ、あの美しい芳しい若芽をつみに行つた。私はひとりで木の蔭にシロと巫山戯てゐた。——。

私はこの平和な心を今歩きながら感じた。そして、今總てがなくなつてゐた。私は何も彼も無くなつてゐた。私は元

氣づいて前方を馳つてゆく犬を悲しさうに見た。「あれだけが生きてゐる。あれがみな知つてゐる。」と思つた。「あれが若し話ができたら、よく私を慰さめてくれるに違ひない。」とも思つた。

私は廻り歩いて郊外の慈惠院の前にでた。そこには、親のない子が澤山に集まつてゐた。ちやうど、内の仕事の時らしく、一人の監督に連れられて、燐寸の棒を葭簀にならべて日光に乾してゐた。私と同じ年頃の少年らは、みな規則正しい手なれた運び方をして、一と摑づつ簀の上に棒をならべてゐた。棒のさきには藥品がくろく塗られてあつた。

私は靜かに眺めてゐた。みな血色がわるくて蒼いむくんだやうな顔をしてゐた。「私と同じい親のない少年だ。私もああして働かなければならなかつたのだ。私にああいふことが出來るだらうか。」と考へた。あの冷たそうな監督の顔が私には不快であつた。そして、この院内から匂ふてくる一種の嘔き氣を催す臭氣はたまらないほど、私の胸をむかむかさせた。「私がここへ來ても駄目だ。私は追放されるに決つてゐる。」そして私のゆくところは矢張り今の家庭より外にはないのだ。

この哀れな少年のなかに目の大きな青い顔をした、しかし何處かに品のある美しい顔が目についた。私は何心なくこの少年に惹きつけられた。私はぢつと見詰めた。かれもぢつと見てゐた。私はあの少年の惱んでゐるのが分るやうな氣がした。弱いけれど絶えず淋しそうに大きく瞠る瞳のある目！ 私はこの少年と遊んで慰さめてやりたい氣がした。きつとこの少年は私と遊ぶことを喜ぶにちがひないと思つた。あの目の光はいま私を求めてゐるのだ。私と話しすることに憧れてゐるのだ。私は目で微笑した。かれも燐寸をならべながら微笑した。私の微笑が冷笑にとられはすまいかと不安に思つたが、かれは、そう惡くはとらなかつたのが嬉しかつた。

八

私の地藏堂は日を經るに順つて立派になつた。私は何處へ遊びに行くといふこともせずに、いつも庭へ出てゐた。垣越しに隣の寺に、年老つた和尚さんが庭掃除をしてゐられるが見えた。私はていねいに挨拶をした。和尚さんは垣のそばへやつて來て、

「中々立派なお堂が出來ましたね。」

と言つたので、私は裏木戸をあけて、

「這入つて御覽なすつて下さいまし。」

といふと、

「では拜見致しませうか。」

と、和尚さんが這入つて來た。そして堂のところを見まはして、

「中々お上手だ。」

と言つた。

それから和尚さんは袂から珠數を出して、合掌したがら小聲で、地藏經をよみはじめた。まるで枯れきつた澁い聲でうつとりするやうな美しいリズムを持つた聲であつた。私はあとで、この地藏さんを川から拾ひ上げて來たことなどを話した。

お和尚さんは、地藏さんの緣起について色々話してくれた。堂のところに、この小柄な坊さんは蹲んで、いろいろな話をしてくれた。

「人間は何でも自分で善いと思つたことはした方がよい。よいと思つたことに決して惡いことはない。」

と言つてゐた。

お和尚さんが歸へると、私はふとこの地藏さんを寺の方へあげたいと思つた。私は姉に相談した。

姉はすぐ贊成した。

「そりやいいわ。あのお和尚さんはきつとお喜びになるわ。」

「ぢや姉さんからお母さんに言つて下さい。」

「え。今から言つてあげる。」

と、姉は母に相談した。母もそれがよいと言つてくれた。かへつて、俗家に置くよりも、もとは川の中にあつたのだから、お寺へあげた方がよいといふことになつた。

お和尚さんも喜んでくれた。

お寺では吉日を撰んで供養をしてくれた。私が施主であつた。川の中に棄てられてあつた地藏さんは、いまは立派な御堂のなかに、しかも鐸鈴まで添えられて祠り込まれた。私は嬉しかつた。

私はそれを機會としてお寺へ遊びに行くやうになつた。お和尚さんは子供がなかつたので、私をむやみに可愛がつてくれた。私が學校からの歸へりが遲いと、よく私の家へ來られた。

「まだ歸へりませんかね。」

などと姉にたづねてゐた。

そういふとき、私はすぐにお寺へ、學校の道具を投げ出すと飛んで行つた。

「お和尚さん唯今。」

と、私はお和尙さんの爐のよこへ座つた。

「よく來たの。いまちよいと迎へに行つたところだつた。」

と言つて、いろいろ菓子などをくれた。それから古い假名のついた弘法大師の紫色の表紙をした傳記などを貰つた。

お和尙さんは優しい人であつた。いつも善良な頰笑をうかべてお茶をのんだり、曆を操つたりしてゐた。

私はだんだん慣れると、奧の院の涼しい書院へ行つて、學校の書物をよんだり、または、つい淋しいまぎれにうとうとと少年らしい短かい詩を立てたりしてゐた。お和尙さんは私の我儘を許すばかりではなく、心から私を愛してゐるらしかつた。

ある日のことであつた。

「あんたはここのお寺のものになるのは厭か。」と言つた。

「來たつていいけれど、坊さんになるはいやです。お和尙さんの子になるのならいいけれど。」

「坊さんにならなくともよろしい。では厭ではないんだね。」

「え。喜んで來ます。お母さんがどう言ふか知りませんが。」

「わしからお母さんにはお話する。」

此話があつてから、私は母に呼はれた。そしてお寺に行く氣かとたづねられた。私はぜひ行きたいと思つてゐると言つた。お寺にゆけば何も彼も私は心から淸い、そして、あの不幸な母のためにも心ひそかに祈れると思つたからである。私がお寺に起居するといふことだけでも、私は母に孝をつくしてゐるやうな氣がするのであつた。

坊さんにはしない條件で私はいよいよ寺の方へ養子にゆくことになつた。姉は悲しんだが、すぐ隣家だつたので、い

つでも貰へると言つて諦めた。

私の漬物や書物はお寺に運ばれた。式も濟んだ。そして私は涼しいお寺の奥の院で生活をするやうになつた。私は寺から學校へ通つてゐた。

私の目にふれた色々な佛像や佛畫、朝夕に鳴る鐸鈴の嚴そかな音色、それから何處此處に點れたお燈明などに、これまでとは別な清まつた心になることを感じるのであつた。靜かに私は時々姉にもあつた。

「まあおとなしくなつたのね。」

と姉は言つてゐた。

「あたしお地藏樣にお詣りに來たの。あなたもゆかない。」

「行きませう。」

と、私達姉弟は境内の、私の地藏さんにおまゐりをした。いつも新しい供物があがつてゐて、清潔ですがすがしかつた。

「どこか坊さんみたいね。だんだん其麼氣がするの。」

と姉は言つて笑つた。

「然うかなあ。やつぱりお寺にゐるからなんだね。」

私達は書院へかへると、父が出て來た。新しい父は、茶と菓子とを運ばせた。

書院はすぐ本堂の裏になつてゐた。

「さうして二人揃つてゐると、わしも子供のときを想ひ出す。子供のときは何を見ても樂しいものぢや。」

と父は言つて、お菓子をとつて
「さあ一つあがりなさい。」
と、姉にすすめた。
私達三人は、うしろの川の上を亘る風に吹かれながらお茶をのんだ。
「お父さんはお茶がたいへん好きなの。」
と私は姉に言つた。父はにこにこしてゐた。

九

私のお寺の生活がだんだん慣れるにしたがつて、私は心からのびやかに幸福にくらしてゐた。
私は本堂へ行つて見たり、本堂を圍ふ廊下の繪馬を見たり、いろいろな起誓文を封じ込んだ額を見あげたりしてゐた。私の室は、私の靜かさと清潔とを好む性癖によく適つてゐて、庭には葉蘭がたくさんに繁つてゐた。庭裏には大きな暗い榎の大樹があつて、秋も深くなると、小粒な實が屋根の上を叩いておちた。
お寺には絶えずお客があつた。客はたいがい信者であつた。同年輩の子供をつれて來た人は、いつも私に紹介した。
父は、私を自慢してゐた。その信者の一人で、下町の方に商ひしてゐる家の娘でお孝さんといふのがあつた。その子はおばあさんに連れられてくると、いきなり父にとりすがつて
「照さんがゐらしつて――。」
と言ふのであつた。
「ゐます。さあ行つてゐらしやい。」

その、お孝さんはいつも私の室へ飛び込むやうに入つて來た。九つになつたばかりの娘であつた。

私はいつも繪をかかされてゐた。

「も一枚かいて下さいな。」

とせがまれると、私はいつも拙い繪をかかなければならなかつた。

「姉さんを呼んでゐらしやいな。一しよに行きませうか。」

「さうしやう。」

私達は庭の木戸から、三ツ葉や苺の下の生えてゐる敷石づたひに、よく隣の姉さんを呼びに行つた。姉さんと二人でいつも庭で遊ぶのであつた。

柿の若葉のかげは涼しい風を通してゐて、その根元へしやがんで話すのであつた。私は姉とお孝さんとに挟まれてゐた。姉はいつも私の手をいじくる癖があつた。

「お寺がいい？　お家がいい？」

なとと姉がたづねた。

「お寺もおうちも何方もいいの。でも、兩方にゐるやうな氣がするの。」

私は實際そんな氣がしてゐた。一日に幾度も行つたり來たりしてゐたから。

「さうでせうね。」

と姉も同感した。

「でもね姉さん。晩はコワくてこまるの。誰も起きてゐないのに本堂で鐘が鳴るんだもの。お父さんにきくと、鼠が

さけて尾で鐶を叩くんだつて——。」

「まあ。そう。」

とお孝さんがコワそうにいふ。

お孝さんは、ときどき面白いことを言つた。

「あのね。姉さんがお好き。あたしをお好き。どつちなの。」

などと姉を笑はせることがあつた。

「みんな好き。」

などと三人は、本堂裏の方へ遊びに行つた。そこはすぐ石垣の下が犀川になつてゐて、楓の老木や茨が繁つてゐた。

姉さんは、大きかつたので、その細い危い本堂裏へは行けなかつた。

「あぶないからお止しなさい。」

と姉は言つた。けれども私はそこは行かれる自信があつた。

「わたしも行くわ。行かれてよ。」

と、お孝さんが茨を分けて行かうとした。姉はびつくりした。

「いけませんよ。落ちたら大變だからおよしなさい。」

と言つても勝氣なお孝さんはきかなかつた。

「大丈夫なのよ姉さん。」

石垣の下は蒼い淵になつて、その渦巻いた水面は永く見てゐると、目まひを感じるほど氣味惡くどんよりと、まるで

底から何者かがゐて引入れそうであつた。

私も危ないと思つた。

「いけない。此處へ來ちや。」

と言つてゐるうち、彼女は楓の根元をつたつて、とうとう本堂の側面の裏へ出た。

「あたし平氣だわ。あんなところは。」

私はからだが冷たくなるほど驚いたが、案外なので安心をした。

ここから姉のゐるところは見えなかつた。此堂裏にはいろいろな繪馬額のコワれたのや、提灯の破れたのや、土製の天狗(てんぐ)の面や、お花の束や、古い埃で白くなつた材木などが積まれてあつた。

冷たい腐つたやうな落葉の匂ひがこもつてゐた。

「あのね。さつきのね。あたしがすきか、おねえさんが好きかどつちが好きか、はつきり言つて頂戴。どつちも好きちややいやよ。」

私はびつくりしてお孝さんの顔を見た。お孝さんは泣き出しさうなほど眞面目な顔をしてゐた。小さい額に小まちやくれた皺をよせて、私の顔を仰ぎ見てゐた。

「お孝さんが好きだ。ねえさんには内しよだよ。」

「ほんとう。」

「本當なの。」

「まあ嬉しい。あたし氣にかかつてしようがなかつたの。」

と神經的に言ふ。

私はお孝さんと姉とは別々に考へてゐた。お孝さんには、姉さんと異つたものがあつた。つまり「可愛さ」があつて姉さんには却つて「可愛がられたさ」があつた。

「あたしね。もうずつとさきから問はうと思つてゐたの。」

「そう。ぢやお孝さんは僕の一番仲よしになつて貰ふんだ。いいの。」

「いいわ。一番仲善しよ。」

そのとき姉の高い聲がしてゐた。呼んでゐるらしかつた。私も大聲で應へた。

私達は助け合つて、姉のゐるところへ行つた。

「まあ私ほんとに心配したよ。何してゐたの」

「繪馬の古いのや、天狗の面などどつさりあつたの。おもしろかつたわ。」

と、お孝さんが言つた。

私はすこし氣まりがわるかつた。姉が何も彼も知つてはゐはすまいかといふ不安が、ともすれば私の顏を赧めやうとした、けれども姉は何もしらなかつた。

「私どうしやうかと思つてゐたの。これからあんた恐いとこへ行かないでゐて頂戴。」と姉は私にいつた。

「これからは行かない。」

と答つた。

「お孝さんもよ。」

と姉は注意した。
「わたしも行きませんわ。」
と答つた。
私達はそれから三ツ葉を摘みはじめた。あの芳はしい春から二番芽の三ツ葉は、庭一面に生えてゐた。
姉が籠をもつて來た。
庭は廣く色々な植込みの日南の柔らかい地には、こんもりと太く肥えた三ツ葉がしげつてゐた。
「これを照さんの父さんに上げませうね」と姉はお孝さんに相談した。
「そりやいいわ。きつとお喜びなさるわ。」
三人は一時間ばかりして、大きな籠に一杯三ツ葉を摘んだ。
寺の椽側では、お孝さんのおばあさんと父とがお茶をのんでゐた。
「今日は。」
と私はあいさつをした。おばあさんもあいさつをした。
「これをね。みんなして摘みましたの。で持つて來ました。」
「どうもありがとう。たいへんよい三ツ葉ですね。」
と父が言つた。おばあさんも褒めた。
私達は椽側で休んだ。
おばあさんが、

「ご姉弟ですね。たいへんよく似てゐらしやる。」

と言つた。父は、

「そうです。」

と言つた。私は姉と顔を見合せて微笑した。實際は私は姉とは似てゐなかつた。別々な母をもつてゐる二人は、似てゐる道理はなかつた。私はこんなとき、いつも人知れず寂しい心になるのであつた。普通の姉弟よりも仲の睦じい私どもにも異つた血が流れてゐるかと思ふと、姉との間を斷ち切られたやうな氣がするのであつた。

おばあさん等もかへつたあとで、私は一人で室にこもつて、ひどく陰氣になつてゐた。父は、

「顏のいろがよくないが、どうかしたのかな。」

「いえ。何でもないんです。」

と、私はやはり「ほんとの姉弟でない」ことを考へ込んでゐた。一つ一つの話の端にも、私はいつも心を刺されるものを感じる弱さを持つてゐたために、ときどき酷く滅入り込むのであつた。心はまたあの行衛不明になつた母を捜りはじめた。「いつ會へるだらうか。」「とても會へないだらうか。」といふ心は、いつも「きつと會ふときがあるにちがひない。」といふはかない望みを持つやうになるのであつた。

この寺にきてから、私は自分の心が次第に父の愛や、寺院といふ全精神の清淨さによつて、寂しかつたけれど、私の本當の心に觸れ慰さめてくれるものがあつた。

私はよく深く考へ込んだ擧句、人の見ない時、父にかくれて本堂に上つてゆくのであつた。暗い内陣は金や銀にちりばめた佛像が暗い内部のあかりに、またはかすかなお燈明の光に厳そかに照られてあるのを見た。そして私は永い間

合掌して祈願してゐた。「もし母が生きてゐるならば幸福」で居るやうにと祈つてゐた。がらんとして大きな壓しつけて來るやうな本堂の一隅に、私はまるで一疋の蛾のやうに小さく座つて合掌してゐた。私は人々の遊びさかりの少年期を然うした悲しみに閉されながら、一日一日と送つてゐた。

十

秋になると栂の實が、まるで松笠のやうに枝の間に挾まれて出來た。だんだん熟れると恰度鳥の立つてゐるやうになつて、一枚一枚風に吹かれるのであつた。遠くは四五町も飛び吹かれた。

それを拾ふとまるで蔦の形した、乾いた茜いろした面白いものであつた。私もよく庭へ出て拾つたものだ。秋になるとすぐに解るのは、上流の磧の草むらが茜に焦げ出して、北方の白山々脈がすぐに白くなつて見えた。

寺の庭には湧くやうなこほろぎが、どうかすると午後にでも啼いてゐた。ある日、私は本堂の階段に腰かけてぼんやり蟲をきいてゐた。門から姉がはいつてきた。

「なにしてゐるの。ぼんやりして。」

姉はいそいそしてゐた。何か昂奮してゐるらしかつた。

「何だか寂しくなつてぼんやりしてゐるんだ。ほら、ひいひいと蟲がないてゐるだらう。」

「そうね。蟲はおひるまでも啼くんだね。」

と姉も階段にこしをかけた。

ふいとおしろひの匂ひがした。いつも、おしろいなどつけない姉には珍らしいことだと思つた。

「あたしね。またおよめにゆくかもしれないの。」

私はびつくりした。

「どこへゆくんです。」

「よく分らないんだけれど、お母さんがきめてしまつたんだから、行かなければならないわ。」

「その人を知つてゐるの。」

「知らない――。」

「知らないひとのとこへ行くなんておかしいなあ。いつか姉さんがもつてゐた手紙の人だらう。」

「いゝえ。」

姉は赤い顔をした。そして急に聲までが變つた。

「あたし嫁きたくないんだけれど……。」

と姉は默つて涙ぐんだ。氣の弱い優柔な姉のことだから、きつと、母のいふところならどういふ處へでもゆくにちがひない。そして私ひとりになつてしまふのは何といふ寂しいことだらう。

「いやだつたらお母さんに斷つたらいいでせう。いやだつて――。」

「そんなことあたしには言へないの。どうでもいいわ。」

と姉は投げるやうにいふ。

私は姉が可哀想になつた。

「僕が言つてあげやうか。姉さんは嫁くことがいやだつて――」

「そんなこと言つちやいやよ。本當にいはないで下さい。あたし却つて叱られるから。」

「ぢややつぱり嫁きたいんだらう。」

と、私は妬ましいやうな、腹立たしく性短(きみじか)に云ふと、姉さんはいやな顔をした。

「あなたまでいぢめるのね。あたし、ゆきたくないつてあんなに言つてゐるぢやないの。」

「だつていやなんでせう。」

と、斬り込むと、

「しかたがないわ。みな運命(うん)だわ。」

私は默つた。いやだけれど行くといふ、はつきりしない姉の心をどうすることもできなかつた。

「ぢやゆくのね。」

「たいがいね。」

私は寺の廊下屋根越しにお神明さんの欅の森を眺めてゐた。姉が行つてしまつては、友だちのない私はどんなに話對手に不自由するのみではなく、どんなにがつかりして毎日塞ぎ込んだ淋しい日を送らなければならないだらう。姉は私にとつて母であり父でもあつた。私の魂をなぐさめてくれる一人の肉身でもあつたのだ。

私はそつと姉の横顔をみた。ほつれ毛のなびいた白い頸——私が七つのころから毎日實の弟のやうに愛してくれた姉だ。

「でもね。ときどきあなたには會ひにきてよ。」

「僕の方からたといけないかしら。」

「來たつていいわ。行へればいいでせう。きつと會へるわね。」

私達は階段を下りて、庭へでた。姉は隣へかへつた。

私は書院へかへると、父には默つてをいた。私は少年世界をひらいたり讀んだりしてゐたが、姉が今にも行きそうな氣がしてならなかつた。姉は庭へ出た。見るものがみな悲しく、末枯れの下葉をそよがせてゐたばかりではなく、川から吹く風が沁みて寒かつた。

座敷から父が、

「けふは寒いから風邪をひくといけないから家へ這入つてお出。」

と言つた。

親切な父の言葉どほりに家へ入つた。

私はだんだん自分の親しいものが、この世界から奪られてゆくのを感じた。しまひに魂までが裸にされるやうな寒さを今は自分の總ての感覺にさへかんじてゐた。

四五日して姉の嫁くことが決定した。

その日の午后、姉は晴衣を着て母とともに二臺の俥にのつた。

私は玄關でじつと姉の顏を見た。姉は濃い化粧のために見違へるほど美しかつた。そはそはと心も宙にあるやうに昂奮してゐた。

「ちよいと來て――」

と姉は呼んだ。

私は車近くへ行つた。

「そのうちに會ひにきますから待つてゐてくださいな。それからおとなしくしてね。」

と姉は涙ぐんだ。

「では行つてゐらしやい。」

私はやつとこれだけのことが言へた。胸も心も何かしら壓しつけられたやうな一杯な悲しみに迫られてゐた。

「ではさよなら。」

と言ひ交すと、車が動いた。はじめは靜かに動いて、こんどは車の輪が烈しく廻り出した。姉はふりかへつた。車がだんだん小さくなつて、ふいと横町へ曲つた。私はそれを永く永く見つめてゐた。横町へまがつてしまつたのに、まだ車が走つてゐるやうな幻影が、私をして永く佇たせた。私は涙ぐんだ。あの優しい姉もとうとう私から離れて行つてしまつたかと、私はすごすごと寂しい寺の書院へかへりかかつた。

十一

私は姉がゐなくなつてから、短かい冬の日の毎日雪にふりこめらた書院で、父のそばへ行つたり縁側に上げてやつたシロを對手に淋しくくらしてゐた。二週間もたつたあとにも姉は訪ねて來てくれなかつた。短かい葉書が一枚きたきりであつた。

別にお變りもないことと思ひます。姉さんは毎日忙しくて外へなど未だ一度も出たことがありませんので、あなたのところへも當分行けさうにも思はれません。姉さんはやはりいつまでも、おうちに居ればよかつたと毎日さう思つて、母さんのことをかんがへます。照さんは男でしやはせです。そのうち會つたときいろいろお話しします。

と書いてあつた。私はこの葉書を大切によごれないやうに、机の曳出しの奥にしまつておいた。姉のことを考へたり

會ひたくなつたりしたとき、私はこれを出して凝然と姉のやさしい顏や言葉に觸れるやうな思ひをして樂しんでゐた。

私はときどき隣の母の家へ行くと、きつと姉の室へ這入つて見なければ氣が濟まなかつた。いつも默つて、靜かにお針をしてゐる傍に寢そべつてゐた私自身の姿をも、其處では姉の姿と一しよに思ひ浮べることが出來るのであつた。その室には、いつも姉のそばへよると一種の匂ひがしたやうに、何かしら懷かしい優しい溫かな姉のからだから泌みでるやうな匂ひが、姉のゐなくなつた此頃でも、室の中にふわりと花の香のやうに漂ふてゐた。私は室ぢうを見廻したり、ときには、小簞笥の上にある色々な菓子折のからに收つてある布類や、香水のから壜などを取り出して眺めてゐた。何故かしれない不思議な、悪い事をしたときのやうな胸さわぎが、姉の文庫の中を搜つたりするときに、ドキドキとしてくるのであつた。

姉はさんごの玉や、かんざしや、耳かき、こはれたピンなどを入れておいた箱を忘れて行つたのか、これだけがちやんと置いてあつた。私はそういふ姉の使川物をみるごとに、姉戀ひしさを募らせた。

私はある日、雪晴れのした道路をシロをつれて、いそいで行つだ。私はひそかに姉の嫁つた家の前を通りたいためでもあつた。川べりの前栽に植え込みのある、役員の住みそうな家であた。

二階は障子がしまつてあつた。家ぢうがしづかでしんみりしてゐて、姉の聲すらしながつた。私は、わざと犬にワンワン吠えさせたりした。それでも姉が留守なのか、一向人の出てくるけはひがしなかつた。私は、なほ強く犬を啼かせた。二階の障子が開いた。そして姉の顏があらはれた。

姉は「まあ！」」と口籠るやうに吃驚して、手まねで今そこへゆくからと言つた。シロは永く見なかつた姉の顏を見ると、急に元氣づいて前足を折つて巫山戯るやうにして高く高く吠えた。

姉は出てきた。

「まあ、よく來たのね。すつかり忙しくてね。ごめんなさいよ。」

私は姉の顔を見ると、もう涙ぐんでぢつと見詰めた。姉はすこし痩せて靑ざめたやうな、乾いた顏をしてゐた。

「僕、來てはわるかつたかしら。」

「いゝえ。わるくないけど、お母さんから又つまらないことを言はれるといけないから、こんどから來るんぢやないのよ。きつとそのうち姉さんが行くからね。」

「きつとね。」

「え。きつと行きますとも。シロはまあ嬉しさうにして――」

シロは姉の裾をくはへて、久しく見なかつた主人にじやれついてゐた。

「ぢや僕かへらう。」

私はこんなところで姉と話してゐるのを家の人に見られると、姉があとで困るだらうと思つて、歸りかかつた。

「そうお歸へり？　また今度姉さんが行きますからね。それまでおとなしくして待つてゐて下さいな。」

「いつころ來てくれるの。」

「そりやまだ分らないけれど、もきつと行きますわ。誓つてよ。指切をしませうね。」

と、姉は私の手をとつた。

私はにつこりしてあたりを見廻した。誰か見てはゐはしないだらうかと、しきりに懸念された。

姉は、ずつとむかし小供の時にやつたやうに、小指と小指とをお互ひに輪につくつて、兩方で引き合ふのであつた。

この小供らしい戯談のやうな些事ではあつたが、何かしら私ら姉弟にとつて神聖な信ずべき誓ひのやうに思はれてゐた。

「ぢや、さよなら。」

と私は姉のそばをはなれた。

「道草をしないでおかへりなさいな。」

「ええ。」

と私は言つて、川岸のはだらに消えかかつた道を行つた。片側町なので誰も通らなかつた。私は「いまから姉にどうして晩までくらすのだらう。何か面白いことでもあるのだらうか。」などゝ考へてゐた。家にゐるときよりいくらか拆せたのも少年の私にはよく感じられた。私は嫁といふものは單に生活を食事の方にのみ勤むべきものであらうかなどゝ、惱ましく考へ歩いてゐた。

北國の冬の日沒ごろは、油賣の鈴や、雪が泥まみれにぬかつた道や、忙しげに往き交ふ人人の間に、いつもものの底まで徹る冷たさ寒さをもつた風が吹いて、一つとして溫かみのない間に暮れてゆくのであつた。

私は寺へかへると、夜は父と、茶の湯の爐に強い火を起して對ひ合つて座つてゐた。父は何をするといふことなしに、茶をのんだり暦をくつたりして一ト晩を送るのであつた。

父はよく柚味噌をつくつたりした。柚釜の中を沸々と煮える味噌の匂ひを懐かしがりながら、私はいつも父の手傳などをしてゐた。境内の大きな樹に寒い風が皓々と鳴るやうな晩や、さらさらと障子をなでてゆく粉雪のふる夜など、ことに父と二人で靜かにいろいろな話をしてもらふことが好であつた

もはや姉にしたしもうとしても、遠くへ行つてしまつた後は、この父のそばで、父と寂しい話などをきくより外はし

かたがなかつた。

父が初めてこの寺へきたときは、この寺が小さな辻堂にすぎなかつたことや、夜、よく獺がうしろの川で鮭をとりそこなつたりして夜中に水音を立てたといふことなどを聞いた。

父はよく言つた。

「姉さんがゐなくなつてから、お前はたいへん寂しさうにしてゐるね。」

「ええ。」

父はよく私の心を見ぬいだやうに、そんなときは一層やさしく撫でるやうに慰さめてくれるのであつた。

「さあ、休みなさい。かなり遅いから。」

と、いつも床へつかすのであつた。

私は佗しい行燈のしたで、姉のことを考へたり、母のことを思ひ出したりしながら、いつまでも大きな目をあけてゐることがあつた。うしろの川の瀬の音と夜風とが、しづかに私の枕のそばまで聞えた。

私の十三の冬はもう暮れかかつてゐた。

—（完）—



笛吹きと王との話

佐藤春夫

或るところに一人の笛吹きがあつた。それはごく息の短い笛吹きであつた。彼は或る晩水邊に出て、そのほとりに、手近かにあつた葦をとつて細い笛をつくつた。さうしてひとりの自分自身を慰めようと、丘から登つてくる月に對して吹いた。短い息をかぎりに吹いた。笛の音は悲しくひびいてそよかな風と月の光とのなかへ縒糸(よりいと)になつて織り込まれて行つた。偶々きらびやかに星のやうに着飾つた貴人があつて、象牙の長倚子に横はりながら、風のなかにある笛の音を感じて涙を流した。併し、だからと言つて彼の聞いた笛の音がそれほど妙(たへ)であつたとばかりは言へない。何故かといふのに、氣紛れな貴人はこの夜の最も氣紛れた心で、その夜にはどんな際にでも――蛇の聲にでも泣いて見ようと用意してゐたからである。

貴人といふのはその國をしろしめす王であつた。王は布令を出して昨夜の笛吹きを搜し出させた。貧しい笛吹きが彼の面前に出て來た時に、彼に向つて王は、もう一度吹けと命じた。笛吹きは命ぜられるがまゝに吹かなければならなかつた。毎日

毎日。息のきれてゐる笛吹きは氣の毒にもあとから幾度も幾度も吹いた、吹かなければならなかつた――最も喘ぎ喘ぎで。それらの彼の笛の音が全く聞き苦しいものであることを知つた者は、當の笛吹き自身であつた。

或る時、ひとり人にかくれて彼の唇が悲しさうにひとり言を言つた、

「耳よ、私の耳よ、お前はどうして聾ではなかつたのだ。」

すると耳が悲しさうに答へた。

「若しも私が聾であつたら、私の唇よ、お前は笛を吹くことが學べなかつたらう。併し、今日となつては私も私の聾でないのが悲しい。お前は拙く吹く、然も人々は賞める。私の辛らさは二倍になる！」

かくて、或る晩、それは月も星もない晩であつたが、笛吹きは宮廷樂人の最も美しい青い服を脱ぎ捨て、彫りのある銀の笛を遺し置いて、素裸(すはだか)で王宮の城壁から飛び下りた――其處から逃げ出さう、さうして再び自由に自分自身のためにのみ吹かう、ふるへる蘆の笛を吹かうと思ひつめながら。

併し、王の城を逃げそこねた笛吹きは、夜明けに王の鎧をつけた家來に見出された、傷いて倒れて。

彼は最も手厚い王の志にも未だ滿足しない欲深い増長した男として、王の怒のためにもう死ななければならなかつた。

「身の程を知らぬ奴の別別になつた首と胴體とを、物見の塔に曝せ。禿鷹(はげたか)に食はせよ。今早く！」

と、王が言つた時、最後のただ一つの願だけはやつと許されて、裸で土の上に坐つた笛吹きは、不運なめぐり合せの自分を泣き、また彼の唇は彼の耳に永の別れをしようと、もう一度息をかぎりに吹いた、嘲弄のうちに彼に與へられた麥藁の笛を。

「おゝ！　ほんとうにそれをおれの唇が吹いてゐるのか！」

悲しさはかぎりなくそれ故美しさかぎりのない最後の細い一ふしが心に沁みた時、笛吹きの耳は感に堪え、笛吹きの目は涙をながした。彼をとり圍んだ人々の目もそれに同じかつた。さうして人々は、この哀れな笛吹きを王は多分もう殺すことから恕(ゆる)すであらうと考へた。何故かといふに彼等が王の顏色を偸み見た時、王の目も涙で光つてゐたから。併し王は叫んだ。

『早く！　早く殺せ！　何故ためらふ？』

これから王はいら立つて言ひ足した、

『己が喜びの節を聞きたい時に、そ奴は最も悲しい節で己の心に謀反をした』、と。

強氣弱氣

里見弴

ほんの慰の骨牌遊びに、彼等は僅かばかりの金を賭けることにしてゐた。月に三四度は、いつも大抵きまつた顔が寄り合つて、花を引いたが、單位が小さいので、負けても勝つても、五圓以上の金の出入になることはめつたになかつた。

或る時仲間の一人が、トランプでする遊びを、どこかで教はつて來た。それは「パッツ」と云ふ、ごく簡單な遊びだつたが、それに金を賭けるとなると、花のやうに技術を要しないだけに、その場の機會次第で、大きくならない時には、どうしても大きくならない代りに、一つ二つやまかんの外れる者が出て來ると、どんなに單位を低くきめて置いても、倍に〳〵と殖えて、忽ち「場」が可なりの額になつて來る。それとても、勿論、氣持をしめて、小さく張つてゐさへすれば、取るにしても出すにしても、それだけのことで濟むのだが、場が大きくなつて來ると、人情、誰しもつい誘はれて、大膽なまねをする。パッツと云ふのが、出てゐるだけの場全體に張るぞと云ふ宣誓の合言葉なのだが、場全體で一圓かそこらの小さな時には、却つてそのうちの二十錢とか三十錢とか小切るやうにしてゐる人でも、場が段々に殖

えて來て、六十圓七十圓と上つて來ると、いつの間にか自分まで成金氣分になつて了つて、身分不相應なバッツをしてみたり、小切るにしても、三十圓の五十圓のと、自分が損をしてゐるやうな時には尙更、その損だけ取り返す氣で出て行つて、——冒險をして、うまく取れゝばよし、一つはづれると、その額を二倍にして置いて來なければならない。

ごく簡單なこの遊びの仕方だけを、先づ一同に說明してから、そのK——と云ふ仲間の一人は、うつかりやまかんたやると、とんでもない大きなものになると云ふ、注意をすることを忘れなかつた。仲間のうちには、いつも通りに花だ方がいゝと云ふものと、この新しい遊びをやつてみやうと云ふものと二派あつたが、結局後のものにきまつた。

始めてみると、花のやうに技巧を弄ぶ面白味は少ない代りに、亢奮の度は遙かにたかめられた。それはもう純然たる博奕の興味だつた。自分の手に緒を捻えながら、運命の毬を投げ出してみようと云ふ願望は、たゞ一口に「興味」と云つて了ふことの出來ないやうな、人間性に根ざしたもので、投げた毬から白糸が出るか、黑糸が現はれるか、博奕の常習はたゞ金を得たいばかりの心からつくものではない。沈默家の「運命」から、無理どりに、一言でも返事らしい言葉を手操り出さうと云ふ非望、よく云へば、勇しい、大膽な、少くとも積極的な亢奮の忘れがたさから深入りするのだ。蟻の背に噛附きながら、二人で、どちらが先に食はれて了ふか賭をした水夫の偶話がある位で、一度味を覺えると、阿片のやうにやめられないと云ふのは、全く人間性に根ざしてゐるからだ。

その日は、O——と云ふ男が不思議なくらゐ運が惡かつた。誰がみてもこれなら安心と思ふやうな手がつきながら、僅に一目かそこらの違ひで吐き出し〳〵したのが、やがて三百圓ばかりの場になつて了つた。この仲間の掟としては、懸に取つても取られてもいゝと云ふ程度は、やつと二三十圓どまりだつた。その程度を越すと誰もバッツをする者はなかつた。それは、一つまかり間違へば、それだけの金を、勿論現金ではなく、紙片に金高と署名とを書いたほん、辨具

のやうな手形だが）兎に角それだけの金を吐き出さなければならないと云ふ冒險も恐ろしいには違ひないのだが、一つには、その勝負にうまく勝つたとしても、お互に懐都合を知り合つてゐる友達のO——から、平氣でそれだけの現金を受けとるわけにはいかない、と云ふ遠慮もあつた。中でもK——は、自分が云ひだしたことから、O——にそんな迷惑をかけるやうなことがあつては大變だと思つた。

「當分O——以外の人はパッツは嚴禁だよ」

「そんな規則はあるまい」と反抗する者も、一寸O——をヤキ〳〵させてみたい惡戯からで、その實は、早くO——のパッツが當つて、自分で引いて行かないと大變だが、と案じてゐるのだつた。

「規則はないが、かうなつて來ちやア、そこはお互に考へてくれなくつちアいけないよ」と、眞面目になつてK——が云つた。

「この遊びも面白いが、さう云ふ遠慮をしなければならないとなるとつまらないね」

「パッツしなくつたつて、つまり君のお手に合ふだけいけばいゝちアないか。それがあるから、この遊びは、どんな金持とどんな貧乏人とでも、一緒になつてやれるんでいゝんだよ」

「O——だけがそんな金持なのかい」

「さうでないから遠慮しろと云ふんちアないか」

「然しかう云ふ遊びに、——苟くも勝負ごとに、遠慮なんぞあつちア、實は面白くないね」

初から花をやらうと主張してゐたH——は、自分も「もと」を大分へらしてはゐるし、O——が躍起になつて取り返へさうと焦れば焦慮るほど、場が、自分たちの懐からみて、もの凄いやうな氣がするほどの額になつて來たので、いつ

そ中途で無勘定にして了つたらと云ふ下心で、かう云つた。

「さうだね、これアもうこれでよして、花にしようか」矢張り花黨のT――が、すぐかう云つて贊成した。

「だが折角今まで勝つてる人間はどうなるんだい。こゝへ來て無勘定ぢアつまらないぜ」とY――が云つた。

「一體、どこが碁石がいゝんだらう」

みんな數とりの碁石を算へてみた。Y――が十圓ほど、K――が四圓ほど勝つてゐるきりだつた。

「ぢア、今のところ場が一番金持だ」

場を勘定してみると、O――の書いた手形だけで三百二十何圓となつてゐた。そのほかに碁石が十何圓になつてゐる。それだけの場の始末のつけやうがないと云ふので、結局O――が、自分の手形を取り返すまで、この遊びを續けることに話がきまつた。そんなわけで、O――の手形だけは、場とは云ふじよう、誰も手が出せないもの、やうな態になつて了つた。

「手に一が四枚來ても、この場合ほかのものはパッツするわけにいかないのかね」Y――が冗談半分にかう云つた。

一が一番強い。それが四枚ながら手に來れば、もう絶對に負けつこのない場合だつた。けれども、頭數に一枚づゝまいて廻る札が、四枚とも一だと云ふやうなことは、まづ考へれらないことだつた。同時にまた、絶對にないとも云へないことだつた。

「まア然し、三百二十何圓はちつと困るよ」

仲間のうちで一番無駄な金の使へない自分のK――が、思ひやりから頻りとO――のために心配してゐた。懷に三百圓はないとしても、兎に角O――にしては支拂へない額ではなかつたが、有繋に先刻から言葉少なになつて、顏の色もいく

らか變つてゐた。その上O——は、いつもの花の時でも、一番新米で下手なせいもあつたが、大抵の場合持ち出しになつてゐるので、みんなも肚のなかでは同情して、どうか取戻せるといゝがと思つてゐた。棊石だけの勝負にも、小さいながらいろ〳〵浮沈があつて面白かつた。

「これア素敵な手がついた。パッといきたいな」と、H——がそこへ自分の手を擴げてみせた。一二枚に女王、たゞクラブだけが八で少し心細いけれど、まづ誰にしても氣強く思ふ手だつた。

「成程これア強い」

「俺なら無論パッと行くな」

などゝみんな覗き込んで云つた。

「いかうか一つ」と、H——は氣負つて、場全體と云ふ意味で、棊石や手形の上の空間に、指さきでグル〳〵と圓を描いてみせた。丁度「親」の番に當つてゐたO——の兩掌の間には、「めくり」の札が、堅く抑えつけられてゐた。芝居の老役の皺のやうな具合に、頰には、氷りついて動かない笑が、無意味に描き出され、額には脂汗が浮いてゐた。

「どうする、ほんとにいく氣かい」

O——はドロンした目つきで、H——を見据えながら呟いた。

「よせ〳〵、それはよせよ」と、K——が、H——の鼻のさきで手を振つて制めた。「棊石だけにしとけよ。それア、どうも、面白くないよ」

「いくならいけよ」とO——が再び呟いた。

「だつてこの手でいかれたら、大丈夫君は取られちまふぜ」

「さうは限らないさ」とH――が、「クラブの九以上が出ないとは云へないし、ハアトだつて上に王様と一がある。俺だつてそれだけの危險を冒すんだもの、たゞ取るわけぢアない」

「それアさうだが、まアよせよ。先刻も當分手形だけは殘すつて不文律が出來てるんだし……」Y――もかう云つて制めたので、H――は不承々々棄石だけにした。然しめくつて出たのはハアトの王だつた。

「それ見ろ、云はないこツちアない!」

「俺たちのおかげで、三百二十何圓助かつてるぢアないか」

「驚いたなア。こいつアもうテッキリ俺のもんだとばかり思つてたがなア。分らないもんだア」負けながらも、大きい方の口が助かつたので、H――はさして悔なかつた。「ヤア、大變々々」などゝ滑稽に頭を振り立てながら棄石を數へて、足らない分は紙片に手形を書いたりしてゐた。

その次の回では、O――が自分の振り出した手形だけいつたのがはづれて、六百四十何圓と云ふものにして了つた。さうなると、然し却つて安全だつた。誰ももう決してパッツしようとふものはなかつた。さうして四五回は波瀾もなく廻つたが、もう晩飯の仕度が出來て、主人のT――が頻りとみんなを促し立てながら、それでももう一回と云ふ時になつて、O――は、自棄くそで、手を見ずに、また自分の手形だけいつた。もうかうなつて來ると、大抵の手では恐くて行かれないので、いつそ「不見」の方が強氣に出られるのだつた。「めくり」はスペエトの三と云ふ弱いものだつたが、それでひと息つきながらも、四枚並べてふせてある自分の札を一枚づゝめくつて見る時には、O――の指は顫えてゐた。三枚目にスペエトの五が出ると、思はず彼は場から自分の書いた七八枚の手形、總額六百五十圓ばかりのものを、藁攫みにひッ攫つて袂へ捻込みながら、踊り上つた。

「さア、飯を食はふ」

何んとも名づけられない亢奮にボンヤリしてゐた一同は、その場合の「飯を食はふ」に、ドツとふきだして了つた。それは實に眞面目な滑稽だつた。

食事中も、引き續いた亢奮でみんな眞ツ赤な顔をして、頻りと勝敗の跡を語り合つた。

「H――があんな揃つた手で取られるかと思ふと、O――はスペエトの五で、――たつた五ぐらゐで、六百何十圓引いて行つて了ふんだから、全く分らないもんだね」

「分らないよ。いやな手で、ご愛嬌に黑石一つぐらゐ行つた時に勝つだらう、今俺がパッと一言云つてゐさへすれば、七百圓ほどのものがそつくり自分のものになつたんだ、と思ふと、變な氣がするね。さう云はなかつたばかりに、はいつて來るものが、黑石一つ、十錢だ。大した出入ぢアないか」

「その代り一目負けても七百圓だ。上下で、二七の百四十圓の出入だもの、パッとたつた一言だか、中々どうして容易な一言ぢアありアしないさ」

「兎に角花よりは夢中になれるね」

「H――と來たひにア博奕心が強いからな。やらないうちは、花の方がいゝなんて云つてたが、やり出したら、一番夢中になつちまつたぢアないか」

「ウン、中々面白い。さア始めよう」

「まア、待てよ、親が死んでも食休みつてね、一服しようよ」

「煙草なんさア、やりながらでも喫へるよ。仕事が第一」

「仕事(ビジイネス)か。いよ〳〵常習犯だね」

　食事後は、O――の六百圓で懲てゐるので、みんなしめてやりだしたから、大して大きな場にはならなかつた。せい〳〵が二十圓どまりくらゐで暫く續いた。それでも亢奮の味ひに變りはなかつた。遊びの性質が、自體運否天賦なものだけれど、そのうちにも馴れるに從つて、幾分かやり方に巧がついて來た。巧と云ふほどでなくても、少くも個人性は現はれて來た。手の判斷にも、一(ポイント)とか王(キング)とか云ふ強いものが來なければ行かない者や、弱い札でも四枚印(しるし)が變つてゐれば可なり強氣に出る者や、純然なる運命主義で、多くは「不見(みつ)」でやる者や、見ても、智的な判斷よりも、迷信的な感得(インスピレエシヨン)による者や、種々(いろ〳〵)の特性を表はして來た。

　畫家であるK――は、印象派畫家(インプレシヨニスト)と云ふ言葉をもぢつて、自分は感得主義者(インスピレエシヨニスト)だなどゝ戯れながら、頻りとその感得主義(インスピレエシヨニズム)でやつてゐたが、僅か七圓ほどの負(まけ)を焦慮(あせ)つて取返さうとしたパッツがはづれて、二十圓の手形を書いたのが手初に、二度目の失敗に四十圓になり、三度目には八十圓になると云ふ悲運に陷つて了つた。先刻(さつき)のO――の例もあることだから、この自分の振し出した手形は、誰もパッツはしまい、と獨ぎめに思ひ込んで、いゝ手がついた時に引いて來さへすれば濟(す)むことゝ、さして悲觀はしてゐなかつたが、然し兎も角その額(たか)は、彼としては一月(ひとつき)の生活を支(さゝ)へるに充分なものだつたので、困つたことになつたとは思つてゐた。

　食事後にO――の運が急によくなつて來たことゝ云つたら、また素晴らしいものだつた。手形のほかに碁石(いし)で負(ま)けてゐた二十圓のもとを取返して、尚その上に十五圓ほど勝ち越した時だつた、ダイヤが切れてゐるだけで、あとは一(ポイント)や王(キング)ばかり揃つていゝ手を、ズラリとあけて並べた。

「さア、パッツだ」

K——はドキツトした。前例によつて、當分パッツは嚴禁だらうと思つてゐたところへ、併も先刻他事ながら心配して、自分が一生懸命庇つてやつたO——が、八十圓と云ふ自分の手形を含む場全體をパッツしようと云ふのだ！ あまりのことに、サソクの言葉も出ないでゐるうちに、

「パッツか、よし！」

とばかり、その時の親だつたH——が、先刻ハアトの王を出された意趣返しとでも云ふやうに、「ダイヤ出ろ！」と叫んで打ちつけた札は、クラブの三で、とても同じ印の王の敵ではなかつた。

「へゝア雞を割くに牛刀だね」

O——は悠々と、堆くなつた碁石を自分の膝もとへ掻きよせたが、K——の手形だけは、別に懐中から紙入を出して、すましてそのなかへ藏ひ込んで了つた。

嫉妬もあつて、みんな憎々しげにその動作を眺めてゐたが、別に文句のつけやうもなかつた。尚更K——としては、取られた金を惜む心が見透されさうで、一人で拂ひ出してゐる金高の多い時にはパッツを遠慮すると云ふ、先刻の不文律を持ち出さうとした勇氣も挫けて了つた。それも、まだ「めくり」を出さないうちならばまだしも、今となつては確に卑怯だつた。その上、漠然と「金高が多い」と云つても、いくらからを「多い」と認めるかはきめてなかつた。八十圓は僅かに自分にとつては「多い」、然しO——にとつては「多」くないかも知れない。成程三百圓や六百圓から見れば僅かなものだ。然し自分としては、一月分の生活費を慰ごとでフイにしてはたまつたものではない。何んだ、そつちがそんな氣と知つたら、先刻の三百圓でも六百圓でも、パッツして取つてやる機會はいくらもあつたのだ。それを俺は、自分がしなかつたばかりでなく、他がしようとするのをさへ制めてやつたではないか。いくらなんだつて、あんまり義理を知ら

なすぎる」

から考へて來ると、K——は急に胸のなかゞ熱くなつて、危く目頭に泪がにじみ出さうになつた。

「ひどいことをやりアがるなア」とH——が忌々しさうに云つた。

「だが、あの手ぢや君だつていくだらう」とT——が揶揄つた。

「いくが、俺なら、K——の手形だけ殘しとく。それア不文律に拘束されてぢアない、恩に感じてだ。……ねえオイ、O——」と、突ツ掛かるやうに呼びかけたH——は、いまチラとK——の泣きだしさうな目つきて見てから、O——に對して義憤を發してゐるのだつた。「人間は、自分の苦しかつた時のことを忘れたくないもんさ！」

一寸一座は白け渡つた。

「勝負は勝負、友達は友達だ」と暫してO——がキツパリと答へた。「勝負ごとに交際の遠慮なんぞ考へてゝるたまものか」

「だが、君は自分の場合に遠慮して貰つてるぢアないか。それも、僕はいくと云つてるのを、K——が、君のために、あんなにまで云つて止めさせたぢアないか」

「それア俺の知つたことぢアないさ。現に俺は、いくならいけよ、と云つてあの時君に勸めたくらゐぢアないか。それをよしたのは、君の勝手だ。まア、いつたところで取られたばかりの話だつたが、よしあれがうまくいつて、あの三百圓を君が浚つて行つたとしても、俺は何んとも思やしないよ。場に出した以上は、もう俺の金ぢアないんだもの。その時既に失つてる金なんだもの。何も俺から、パッツしないでくれつて頼む筋のものぢアないんだ。誰でも取れる奴が取つていゝ金なんだ。俺は自分の損だけ取戻して來たと云ふじよう、改めて場の金を取つて來たまでのことで、それが俺

から出たものだらうと、君から出たものだらうと、そんな差別はいらざる詮索なんだ。場にある限りは場の金で、誰のものでもない。その場を取つたからつて、グズ〱云はれるくらゐなら、初からこんな勝負は成り立ちアしない……」

「それほどの考があるのなら、何故あの不文律の相談をした時に云はないんだ、不贊成を稱へないんだ。矢ツ張り、自分の金を守つてくれる、君にとつて都合のいゝ規則だつたからだらう。あの時一言も云はずにゐて、今更、卑怯……ぢアないか！」

「まア、いゝさ〱」とT——が主人だけに、仲にはいつて、「何んと云つても、O——の云ふことが理窟だよ。K——にはちつと氣の毒だけれど、まアまた取返す時もあらアね。……さア、あとをやらう。えゝ、かうつと、今度は誰の親だつたつけかな」

白け返つた空氣のまゝ、再び遊びが始められた。パッツで、場を總浚に浚つて行かれたあとなので、名目は黒石二つづゝ改めてかけなければならなかつたが、五人のかけ石で、たかゞ一圓の場だつた。それまで大きな場で馴れて來た氣持では、そんなものは、取らうと取られやうと一向馬鹿々々しく思はれる上に、今のO——のやり方で氣の立つてゐるH——などは、紛藉腹の無茶出で、矢鱈とパッツをやつたが、それがまた誰のも不思議に當つた。札の廻りが、手に大きなものがついて、「めくり」に小さなものが殘るやうな具合に切れて來た。一圓の場をパッツ〱で取つて廻るので、それ以上の場はめつたに出來なかつた。H——は、いつでも必ず「不見パッツ」でいつてゐた。その時三四十圓勝つてゐたY——も、少しは「罪ほろぼし」と云ふ氣持もあつて、手に構はずドン〱無茶出をやつてゐた。そんな風に粗笨て來た打ち方のなかで、K——がすつかり悄て了つて、弱氣になつたのは仕方がないとして、O——が丹念に手を調べて、惡ければおりるし、餘程よくない限りは、いくにしても、たつた一圓の場をパッツしずに、十錢、二十錢、と刻んでゐ

た。これには、日比O——と兄弟のやうに親しくしてゐるT——さへも腹立たしくされたくらゐだつたから、K——やH——としてはたまらなかつた。悠々と手札を撰げて、右手の親指と食指とをピチリ〱鳴しながら、チツと考へ込んでゐるのを見ると、氣早やH——などはヂリ〱して來て、何か小ツぴどいことを云つてやりたくつてならなかつた。

「オイ、O——、どうするんだい、いくのか、おりるのか」

「あ、俺の番かい？　あゝさうか。俺の番ならね、さうさねえ、ひと手、ふた手か……。ふた手ぢアしやうがないがまア黒石二つといつとくかな、……ト、待つてくれよ。かうつと、あ、よしだ〱。俺アおりるよ」

「いけ〱！　パッツいつたつて知れてらアね。チユウ〱タコカイ……一圓二十錢の場ぢアないか。いけよ」とT——も苛々させられて、口を出した。

「いかなくつちアならないと云ふ規則はないんだらう」とO——は落つき拂つて云つた。

「規則のことを云つてやしないよ。金持ぢアないか。ちつとは寄附的に出たつていゝんだ」

「金持喰嗶せず、か」

さう獨語ちながら、O——は手札をわきへ捨て了つた。

「よせ〱、いかなきアいかなくつてもいゝんだ。さアお次は？」

「不見パッツ！」とY——が潔く答へた。めくりに一が出た。

「文句なしだ」と、非石を數へて出す。

「そオらね、だから俺はいかないんだ」

「さうかよ」とH——が憎さげに、「いつそ仕舞までおツとほしに、まつてたらどうだ。かけ石だけしておりてたつて、

十遍で二圓がものだ。結局大儲だから安心してろよ」

「安心して、仰の通りにしようよ。そこで、負てる奴はいつまでゝもしたがるだらうから、仕舞を時間できめとかう」

と帶の間から金時計を取出して、「今九時四十分だ。十時半までとしとくか」

「もつとやつてたつていゝぢアないか」

「電車がなくなるよ」

「いつもの花の時だつて、よく十一時半過ぎるぢアないか。いやな奴だな」

「ぢア十一時までにしよう」

「金持喧嘩せず」でいゝ加減反感を買つてゐたところへ、取込んだ莊行を減らさないうちに早く仕舞にして了はふと云はんばかりの態度を露骨に示したので、それからは、二言目にはみんなから諷刺られたり、皮肉を云はれたり、H――などにあつては、猶太人の甦生とまで罵られたりしたが、O――は相變らず、「金持喧嘩せず」の獨語を繰返し〱呟いてゐるばかりで、相手にならなかつた。

今の世に生きてゐる人間の一人として、O――は金が好だつた。その程度は、人並以下でもなければ以上でもない、ごく普通なところだつた。他には何んと思はれやうと、罵られやうと、金さへ取れゝばいゝと思ふほどの、ゴウツクバリでは決してなかつた。

三百圓と纏つて、パッツを遂應すると云ふ不文律の相談が出るまでに、それ以下ではあるが、兎に角彼にとつては可なりの大金を危險に晒してゐた。その時弱氣に出て、十圓二十圓づゝ取返す算段をしてゐたなら、誰かのパッツで場をなくなされてゐたかも知れない。それを彼は、一つ間違へば倍に〱と殖えて行く危險を承知で、どこまでも強氣に、

金額々々とはつて行つた。そのためにこそ三百圓にも六百圓にもなつて行つたのだが、然し兎に角そこに彼の苦勞があり、それが同時に強味ともなつたのだ。誰しも少し負がこんで來ると、自棄くそでない限り、弱氣になりたがるのを、彼は一種の精神修養のつもりで强氣で押して行つた。さうしては、幾度も意地の惡い運命の顏を見なければならなかつたが、然したうとう勝つた。この强氣が彼の心に深く殘つた。何んてつたつて、つまり勝つた者が勝だ、勝ちさへすればいゝんだ。かう云ふ氣持には、K——が親切に種々云つてくれたのさへが、くだらない弱々しさに見えたのだから、ましてY——が、勝つてゐるのを耻かしいことのやうに思つて、罪ほろぼしの氣持で無茶用をしてゐるのや、K——が八十圓でカツカとなつてゐるのや、H——がK——に對する同情から、自分を惜つてゐるのや、すべて弱氣から生れて來るものを踏み躙るやうな輕蔑で見やうとした。みんな粗柔くさしてゐるなかに、自分ばかりがしみつたれないき方をしたり、嘲罵を輕く受け流したりしてゐることも辛いには違ひなかつたが、一番氣を締めてかゝらなければならなかつたのは、矢ツ張り自分の裡に起つて來る弱氣だつた。K——の經濟狀態も知つてゐるし、前例によつてパッツされないものと安心して、いゝ手のつくのを待つてゐた氣持も、それをだしぬけに浚つて行かれた時の氣持も、よく解つてゐるが、ちつとでも氣の毒だと思ふやうでは、忽ち勝負の運が傾いて來ると感じてゐたので、一生懸命に、さう云ふ自分自身の裡に起らうとする弱氣を抑えつけてゐた。そのためには、成可く憎々しげに振舞つて、みんなの反感の中心になつてゐるのが、一番安全な方法だつた……。

H——とK——とは、自分は損をしてももう一度場を大きくして、慾張のO——が、うつかり色氣を出して引ツ掛つて來た時に、一度にうんと大きく吐き出させなければ、とても取返す見込がないと思ふので、せつせとパッツをやつてゐるうちに、ふいとまた札の切れが變つて來て、みんなの負がこみ始めると、見るまに場は四五十圓にふくれて了つた。さ

うなると、前に懲りてゐるK——は、もうとてもパッツなどする元氣はなくなつて、すつかり弱氣になり切つて了つた。H——はそれが齒痒くてならなかつたが、今ある場には、O——の負と云ふものは、一二回より含まれてゐないので、どうかして、これを餌に彼を釣り出して置いて、O——から出たものでK——の穴を埋めさせてやりたいものだと思つてゐた。

「どうたい、O——、たまにはパッツといけよ」

「いゝ手さへ來りア、云はれないでもいくさ。それまでにせい〴〵場を大きくしといてくれよ」

そんな憎まれ口を利きながら、O——は欠伸ばかりして、大抵の手では出て來なかつた。仕舞には、懈怠さうに腹ン這になつて了つて、親が廻つて來ても、そのまゝで面倒らしくグズリ〴〵札を切つたりした。

「どうしてももう出て來ない氣だな」

K——はたまりかねて、氣の小さい彼としては稀しく喧嘩を吹かけるやうな調子で云つた。「もう一生涯こんな卑怯な奴と勝負ごとはしない」

「さうかい。さうすれば、今夜の八十圓は永久に俺の儲になるばかりだ。またやれば、その時俺が負けると云ふ機會もあるが……」

「澤山だ。くれてやるよ」

「有難く頂戴するよ」

然し、不思議にO——はだん〴〵不機嫌になつて行つた。「くれてやるが聞いて呆れる」などゝさも憎さげに獨語ちてゐた。

「そんなに勝つてながら、怒ってやがる。馬鹿な奴だア」とH——が云つた。

「金持喧嘩せず」

今度は、さう呟くのが、自身自分の裡に起つて來る腹立たしさに、自分で云ひ聞かせてゞもゐるやうな調子だつた。

十一時が過ぎても、二三十圓の場が片づかなかつた。

「今度これを誰かパッツして取つたら、それでお仕舞にしようか」とT――が云つた。

「よし、ぢア俺がいく」と、O――は俄かに起き上つて「行きがけの駄賃に、これも浚つてつてやらう」

聞くと、みんなの間には、一種の感動が通つた。いきさへすれば必ず勝てると云はんばかりの云ひ草は、それまで重り重つて來た反感を、最後に「憎悪」と云ふ色にまで染めあげた。四人の心のなかでは、祈か咒かの形で、彼が運掴く負けるやうにと念じられてゐた。一方O――には、そこまで強氣で押通して來ると、もう何んとなく自信がついてゐた。きつと勝てるものと云ふ氣持には少しの疑ひもなかつた。

K――が精一杯の悩みをかけてめくり出した札は、O――の手札にかなはなかつた。最後の碁石もたうとう彼の前に攫よせられて了つた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

歸途の方向を同じくするK――とH――とが、人通の杜絶えた往來を歩きながら、かう話し合つた。

「喧嘩ッぱやかつた子供の時分を別とすれば、俺は今夜くらゐ癪にさはつたことはない。あゝ云ふのは『世帯博奕』と云つて、本職の間にだつて、ひどく卑められるやり口なのだ。いや、遊人なら尚更やらないことさ。もと／＼道樂商賣だ。博奕で儲けた金を米鹽のたしにするやうな氣ぢア、初ツからされやアしない。勝つた時の、天にも昇るばかりの有

頂天。負けた時の、地獄にでも捲り込れるやうな絶望落膽、悩を、ヒステリー女の奥歯に狹んで貰つて、ギリ／＼と身を震はせながら噛み縮められるやうな、「痛みの快感」が、博奕本來の目的なので、金は第二義に下つた問題だ。それに何んだ、O——のは。取込んだら、もうあとはおりてばかりゐる。それくらなら、よしてさツさと歸るがいゝんだ。欠伸をしたり、寢轉んだりされちア、はたの者の氣が腐つてやり切れやしない。俺も隨分勝負ごとはしてみたが、まだあんなきたない奴に出ツくわしたことはない。全く癪にさはる奴だ！」とH——が憤慨した。

「僕も、口惜くつてならないのは、金を取られたことぢアなくつて、あと出て來ないことだ。あゝされちア、取返さうにもなんにも、まるで手がゝりがありアしない。ほんとにいやなまねをしやアがる」

同じ時刻に、別な方向の電車のなかで、O——が一人で考へてゐた。

（こんな氣持のいゝ思ひをしたのは、久し振りだ。友情だの、同情だのと云ふ、女學校の寄宿舍臭い、生ツ白い蟲けらを膿汁の出るまで蹂躙つてやつた氣持つたらない！　その上俺は、勝利者が必ず感じる悲哀にさへも打克つたのだ。あとはもう、凱旋將軍が禪寺通ひをするやうな氣持になりさへしなければいゝんだ。なんでも人間は、淫だらが惡だらうが、徹底しちまやアいゝんだ。人世須らく強氣たるべしだ！）

K——が云つた。

「然しね、中々あゝは出來ないぜ。あれだけ義理の惡いことをして、——卑怯な勝ち方をして、みんなにあれだけひどいことを云はれながら、例の『金持喧嘩せず』一點張で、済し込んでゐるなんて、……とても僕等にア眞似も出來ないな」

「出來ないこつたね」とH——が皮肉に答へた。「君はまア出來な過ぎるよ。あの三百圓だつて、默つてゝパッツさせりアいゝんだ。君だのY——だのは、勝負ごとをするには、人が好すぎるよ。一寸でも相手が氣の毒だの、可哀さうだの

と思つたら、もうお仕舞だ、きつとその勝負に負けだよ」

「負てもいゝ。僕はあんなきたないまねをしてまで勝ちたかアない」

「それアさうさ、きたないまねは絶對にいやさ。だけど、勝負ごとにかゝつた以上は、飽まで自分が一番勝になる決心で、遠慮や斟酌を捨てかゝらなきア駄目だよ。相手の負なんぞで氣を揉んでちア駄目だよ」

O――が考へ續けた。

（だけど考へると、K――には氣の毒なことをした。あいつが九十圓稼ぐには、六號カンパスを二三枚も描かなきアおッつくまい。それに、あいつ、俺が負けてる時に、踊りと距つてくれたが……。他の奴から取つたんならいゝけれど、あいつだけに、なんだかちつと氣持がよくない……。然しみんな、揃ひも揃つて上人間だなア、H――は、K――の負をどうかしやうと思つちア、無茶出をして、いゝ加減勝つてたのを、たうとう二三十圓の喰ひ込みにしちまやアがつたし、Y――も、骨を折つて勝を少くしてやがる。T――は丁度「もと」だけの損だと云つてたが、するとまア俺の一人勝みたいなもんだ。然しまた、いつ何時俺が、今日のK――みたいなはめにならないとも限らない。哀んだ奴に、哀まれないとは限らない。勝つときにうんと勝つとくことだ……）

K――が云つた。

「だがね、その點から云ふと、O――はエライと思ふよ。癪にさはりながらも、僕は内心感心してゐた。強者だよ、慥かに強者だよ」

「本統の強者なら、勝つたつきり出て來ないやうな卑怯なまねはしないよ……」

「いや僕は、その出て來ないところが、あいつの強いところだと思ふんだ。大抵な人間なら、あれだけ一人勝をしてゐ

れア、何んだかがきまり惡くなつて、義理にも出ずにアゐられないよ。それをチッとあゝしてゐるのは、けちばかりぢア出來ない仕事だと思ふがな」

「相變らず、ものごとを善意にばかり釋りたがるね。けちさ、『金持喧嘩せず』さ。一體金持と云ふものが、貧乏人とかかり合つたひには、勝つても負けても得のいかないもんだ。『金持の弱味』とでも云ふやうなヒケメが立つんだ。あいつ、有繫にそこを心得てやアがる。『金持喧嘩せず』は實によかつたよ。あいつの心理をこれほど適切に、皮肉に云ひ現はした言葉はないよ」

「だが、その皮肉を、あいつみたいに、自分自身で云つちまふと、もう肝心なその皮肉味が消えて、却つてこつちへ向いて來るやうな氣がするぜ」

O――が考へた。

（然し、K――みたいな善良な氣持でゐる奴が、一番損をする、――そんなことは世間に箒木で掃くほどざらにある皮肉だが、――もう皮肉では通用しなくなつたほど、「運命」が使ひ古し、蒸し返した皮肉だが、一體これでいゝものか知らん。損をして得を取れ、で、あいつは損をしながら、何か得をしてゐるんぢアないかしら、……目に見えないものを、お伽話にあるやうに、何かから珠のやうなものを、どつかから授かるんぢアないかしら。目に見えるもので損をするたんびに、目に見えない珠のやうなものを、一つづゝ授かるんぢアないかしら……）

H――が云つた。

「さう君のやうに、自分をひどいめに遇はせた奴を、有難がつて褒め立てゝゐちア仕様がない。あんな奴を感心する位なら、成金連中はみんな君の崇拜に價するよ。さう勿體をつけずに考へて見たまへ。彼等は、たゞゴウツクバリの、[illegible]

知らずの、恩知らずの、けちン坊の『金持喧嘩せず』野郎さ。それ以下のものであつても、決してそれ以上のものぢアないのさ……。

「然し世の中は」とH――は調子を改めて、大秘密を洩す時のやうに、あたりを見廻しながら、聲を落し、昂然たる氣持を眉宇の間に浮べて、――「然し世の中は、結局あゝ云ふやつが、おちを取ることになるのさ」

O――が考へた。

（金を取るばかりが得ぢアない。ヒョットすると、K――のやうな奴が、人間として、結局おちを取るやつかも知れない）

K――が答へた。

「ほんとにさうだ。僕のやうに氣が弱くつちア仕様がない。強くならう。強くならう」

そのまゝ口を噤んで、K――は、どうしてその晩の損を償はうかと考へ始めた。自分の仕事よりほかに、何一つ金儲の法を知らない彼は、結局一生懸命勉強しさへすればいゝんだ、と思つた。

O――はまた思ひ返した。

（なアに、何があんな奴に出來るもんか、弱蟲め！）

それから、その晩の儲をどうして使はふかと考へ始めた。彼の財布をさへ一々取締る細君に、知らせないでも濟む小遣が百圓以上はいつて來るのだ。……O――は細君に内證で遊ぶことを、――その遊びの方法を、いろ／＼考案してゐた。

――八年七月作――

警告

旅行者よ、オノトを忘るゝ勿れ！

多忙なる活動者は行く處にビジネスが從ふが、オノトを携帶する時は海でも山でも立ちどころに用事を辨ずる。



オノト萬年筆
無飾 金七圓
飾付 金八圓以上

オリオン萬年筆
無飾 金貳圓八十錢

アルビオン萬年筆
飾付 金五圓五十錢

萬年筆用「アテナ」インキ
金參拾五錢
送料各金拾八錢

大阪心齋橋筋
京都三條通

東京市日本橋通
丸善株式會社

福岡上西町
仙臺國分町

九月一日發行

中央公論

定價八拾錢
郵稅三錢五厘

秋期大附錄號創作豫告

左の五創作何れも百枚以上にして中には
貳百枚に近き長篇あり！

小說 ある少年の怯れ……谷崎潤一郎

小說 有り得べからざる事……正宗白鳥

戲曲 移り行く時代……菊池寛

小說 山峽深きところに……佐藤春夫

小說 素盞嗚尊……芥川龍之介

大正八年の秋期文壇を代表すべき第一流
作家の五大傑作を見よ！

（秋期號論文の豫告は本號公論欄末に、說苑の豫告は時論の前にあり）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同 神田區裏神保町 上田屋
同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 京橋區西紺屋町 良明堂
同 日本橋區本石町 至誠堂
同 本郷區本富士町 盛春堂
大阪市北區梅田町 盛文館
同 北區東梅田町 立盛堂
京都市七條停車場前 共盛社
同 四條西洞院 前田大盛社
名古屋市富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

○定價 金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢	以上郵稅共
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一 誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一 振替貯金口座は東京三十四番なり
一 郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一 代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一 集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一金一圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢（集金委託料
一金拾圓迄 金八錢 及送料共）

一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年七月三十一日印刷納本
大正八年八月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 菅谷憲治
印刷人 高木西三

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 中央公論社
電話（長小石川一四四 小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正八年七月三十一日印刷